NEC

WebSAM DeploymentManager Ver5.2
ユーザーズガイド
基本操作編 (Basic Operation)

Rev.5.22.02

目次

目次 2
基本操作編 7
1 ディスク複製OSインストール 7
1.1 ディスク複製によるOSセットアップ（Windows） 7
1.1.1 マスタコンピュータのセットアップ 10
1.1.2 マスタコンピュータのバックアップ 11
1.1.3 マスタコンピュータ用ディスク複製用情報ファイルの準備 11
1.1.4 ディスク複製の準備 26
1.1.5 Sysprepの実行 28
1.1.6 電源OFF 28
1.1.7 マスタコンピュータのHDDバックアップ 29
1.1.8 複製するコンピュータのディスク複製用情報ファイルの用意 29
1.1.9 ディスクイメージの配布 30
1.2 ディスク複製によるOSセットアップ（Linux） 31
1.2.1 マスタコンピュータのセットアップ 32
1.2.2 マスタコンピュータのバックアップ 32
1.2.3 マスタコンピュータのディスク複製用情報ファイル（パラメータファイル）の準備 32
1.2.4 ディスク複製の準備 33
1.2.5 マスタコンピュータのHDDバックアップ 34
1.2.6 複製するコンピュータのディスク複製用パラメータファイルの用意 34
1.2.7 ディスクイメージの配布 35
2 OSクリアインストール 36
2.1 OSクリアインストール（Windows） 36
2.1.1 OSイメージの登録 38
2.1.2 セットアップパラメータの作成 39
2.1.3 シナリオファイルの作成 59
2.1.4 シナリオ実行 61
2.2 OSクリアインストール（Linux） 63
2.2.1 NFSサービスのセットアップ 65
2.2.2 Red Hat Linuxインストールカーネルの準備 67
2.2.3 Red Hat LinuxインストールCDのコピー 68
2.2.4 Linuxインストールパラメータファイルの作成 70
2.2.5 シナリオファイルの作成 100
2.2.6 シナリオ実行 101
2.2.7 注意事項、その他 102
2.3 ポート開放ツール 105
2.3.1 コンピュータごとの適用 105
3 サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール 107
3.1 サービスのインストール 108

3.2 サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル、アプリケーションの登録 108
3.3 シナリオファイルの作成 110
3.3.1 サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル適用のシナリオファイル作成 110
3.3.2 アプリケーションインストールのシナリオファイル作成 113
3.4 シナリオ実行 116
3.5 複数のサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する際の注意点 117
4 サービスパック/HotFix/アプリケーションのインストール（自動更新方式） 119
4.1 自動更新設定 120
4.2 自動更新時間設定 122
4.3 自動更新の実行 124
4.4 自動更新結果一覧 126
4.5 自動更新状態表示ツール 128
4.5.1 クライアント設定ツール 129
4.5.2 DeploymentManagerについて 129
5 バックアップ/リストア 130
5.1 バックアップシナリオファイルの作成 132
5.2 バックアップシナリオ実行 140
5.3 リストアシナリオファイルの作成 142
5.4 リストアシナリオ実行 146
5.5 複数のサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する際の注意点 147
5.6 フルセクタシナリオオプションの設定 148
5.7 バックアップイメージファイル確認ツール 150
6 フロッピーディスクのイメージ作成/ EFIアプリケーションの登録 152
6.1 BIOS/ファームウェアのアップデート 152
6.2 シナリオファイルの作成 157
6.3 シナリオ実行 158
6.4 EFIアプリケーションの登録 159
6.5 シナリオファイルの作成 161
6.6 シナリオ実行 162
7 シナリオファイル 164
7.1 シナリオファイルの作成 164
7.2 シナリオファイルの修正 164
7.3 シナリオファイルの削除 164
7.4 プロパティ 164
8 パッケージWebサーバ 165
8.1 パッケージWebサーバの設定 165
8.2 パッケージWebサーバのご利用について 165
9 管理サーバ 166
9.1 アクセスモード変更 166

9.2 管理サーバへの接続 166
9.3 管理サーバの追加 167
9.4 管理サーバの削除 167
9.5 プロパティ 167
9.6 コンピュータ情報インポート 168
9.7 コンピュータ情報エクスポート 168
9.8 ライセンス登録 168
10 グループ 169
10.1 グループの追加 169
10.2 グループの変更 169
10.3 グループの削除 170
10.4 自動登録モードへの切替 170
10.5 自動登録モードの解除 170
10.6 一括設定 170
10.7 プロパティ 171
11 収納ユニット 172
11.1 収納ユニットの追加 172
11.2 収納ユニットの削除 172
11.3 収納ユニットIDの変更 172
12 コンピュータ 173
12.1 コンピュータの追加 173
12.2 コンピュータの削除 174
12.3 コンピュータ名変更 175
12.4 シナリオ割当て 176
12.5 シナリオ解除 176
12.6 シナリオ実行 176
12.7 シナリオ実行エラー解除 177
12.8 シナリオ実行中断 177
12.9 シナリオ実行中断解除 178
12.10 リモート電源ONエラー解除 179
12.11 電源ON 180
12.12 シャットダウン 181
12.13 強制シャットダウン 182
12.14 プロパティ 182
13 自動ダウンロード 184
13.1 パッケージWebサーバの追加・修正・削除 184
13.2 自動ダウンロード時間設定 191
13.3 自動ダウンロード実行 191
14 ライセンスキー 193
14.1 ライセンスキーの登録 193
14.2 ライセンスキーの削除 193

15 アイコンの説明 194
16 バージョン情報 194
17 イメージビルダー 195
17.1 フロッピーディスクのイメージ作成／EFIアプリケーションの登録 196
17.2 オペレーティングシステムの登録 196
17.3 セットアップパラメータファイルの作成 196
17.4 パッケージの登録/修正 197
17.4.1 Windowsパッケージ作成 199
17.4.2 Windowsパッケージ修正 212
17.4.3 Linuxパッケージ作成 213
17.4.4 Linuxパッケージ修正 217
17.4.5 パッケージ作成/登録の終了 218
17.5 登録データの削除 219
17.6 一括登録 221
17.7 接続設定 221
17.8 使用許諾契約書表示設定 221
18 パッケージビルダ 222
19 パッケージ適用状況 223
19.1 パッケージ適用状況(コンピューター覧) 223
19.2 パッケージ適用状況(パッケージ一覧) 225
20 IPアドレスの変更 226
20.1 管理サーバのIPアドレス変更 226
20.2 データベースサーバのIPアドレス変更 228
20.3 管理対象コンピュータのIPアドレス変更 229
21 DPMのアンインストール 230
21.1 Webサーバ for DPMのアンインストール 230
21.2 管理サーバ for DPMのアンインストール 232
21.3 データベースのアンインストール 234
21.4 Webコンソールのアンインストール 236
21.5 クライアントサービス for DPMのアンインストール 237
21.5.1 クライアントサービス for DPMのアンインストール（Windows） 237
21.5.2 クライアントサービス for DPMのアンインストール（Linux） 240
21.6 イメージビルダー（リモートコンソール）のアンインストール 241
21.7 コマンドライン for DPMのアンインストール 242
21.8 パッケージビルダのアンインストール 243
22 DPMの上書きインストール 244
22.1 Webサーバ for DPMの上書きインストール 244
22.2 データベースの上書きインストール 252
22.3 管理サーバ for DPMの上書きインストール 257
22.3.1 DPM Ver2.0/Ver2.1 からの上書きインストール 257
22.3.2 DPM Ver3.0 以降からの上書きインストール 258

22.4 Webコンソールの上書きインストール 269
22.5 クライアントサービス for DPMの上書きインストール 271
22.5.1 クライアントサービス for DPMの自動アップグレード 272
22.5.2 シナリオによるクライアントサービス for DPMのアップグレード 275
22.5.3 クライアントサービス for DPMの上書きインストール（IA32/EM64T専用） 276
22.5.4 クライアントサービス for DPMの上書きインストール（IPF専用） 278
22.5.5 クライアントサービス for DPMの上書きインストール（NEC US110 専用） 279
22.6 イメージビルダー（リモートコンソール）の上書きインストール 280
22.7 コマンドライン for DPMの上書きインストール 282
22.8 パッケージビルダの上書きインストール 284

基本操作編

■ この章では、DPM の各機能の基本的な使用方法について説明します。

1 ディスク複製OSインストール

■ ディスク複製 OS インストールは、本章で説明する OS イメージとセットアップパラメータファイルを使用して、管理対象コンピュータに OS を自動セットアップします。
OS イメージとセットアップパラメータファイルの組み合わせは、DPM の同一バージョンで作成して使用することを推奨します。
本バージョンで作成した OS イメージと旧バージョン(※)で作成したセットアップパラメータファイルの組み合わせ、または、旧バージョン(※)で作成した OS イメージと、本バージョンで作成したセットアップパラメータファイルの組み合わせを使用する場合は、ご使用の旧バージョンでサポートしている機能の範囲内で使用することが可能です。(DPM のバージョンアップにより追加された機能については、使用できません。)
※DPM Ver4.0 以降が対象となります。

1.1 ディスク複製によるOSセットアップ(Windows)

重要

- ディスク複製 OS インストール機能は、Windows 2000 以降の OS のみをサポートしています。
- 複製元になるマスタコンピュータと、複製先のコンピュータは必ず同じ機種、同じ HW 構成の装置を使用してください。例えば、USB キーボード/マウス未接続の状態でマスタを作成し、複製先に USB キーボード/マウスが接続されているとディスク複製完了後に、新規デバイスとして検出され再起動が必要になる可能性があります。
- Windows OS をインストールした環境のディスク複製 OS インストールを行う場合は、Windows 起動ドライブが C ドライブとなるように構築してください。その他のドライブについても、ドライブの追加/変更を行った場合は、ディスク複製後にドライブ文字が変更となる可能性があります。詳細については、後述の注意事項を参照してください。
- ディスク複製による OS セットアップ後、「ネットワークとダイヤルアップ接続」に登録されている接続名がデフォルトの設定に戻る場合があります。この場合は手動で接続名の変更を行ってください。
- SID(Security Identifier)やコンピュータ名に依存するソフトウェアがインストールされている場合、正常に動作しなくなります。このような場合は、複製元になるコンピュータからそのようなソフトウェアをアンインストールするか、インストールする前にディスク複製による OS のセットアップを行ってください。
- ディスク複製後に自動更新状態表示ツールを使用するには、本バージョンでディスク複製用情報ファイルを作成する必要があります。自動更新状態表示ツールについては、本編「4.5 自動更新状態表示ツール」を参照してください。
- DPM Ver3.8 より前で作成したマスタイメージでは、自動更新状態表示ツールを利用することはできません。

注意

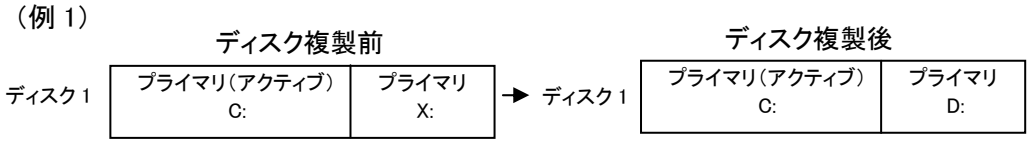
■ ディスク複製を使用してマスタイメージを配布する場合、OS の再セットアップの際にドライブ文字の再割り当てが行われます。Microsoft 社の仕様により、ベーシックディスクでの運用を行っている場合にインストール時に認識される順に再割り当てが行われます。
詳細情報及びその他の注意点については、Microsoft 社の以下のサポート技術情報を参照してください。
KB928386 ― sysprep の機能と既知の問題について

例）Windows XP、Windows Server 2003 の場合は、次の優先順位で C:から順番に割り当てられます。

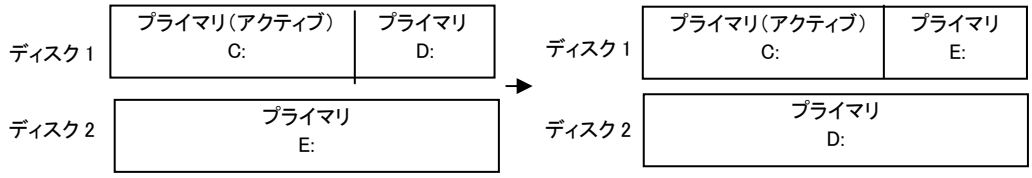
1. 固定ディスクのアクティブなパーティション
2. 複数固定ディスクがある場合、各固定ディスクの最初のプライマリパーティション
3. 固定ディスクの拡張パーティションの論理ドライブ
4. リムーバブルディスク
5. 固定ディスクの残りのプライマリパーティション
6. フロッピーディスク(A:から)
7. CD-ROM

Windows のインストールを行った後にパーティションを追加で作成したり、ドライブ文字を変更している場合は、ディスク複製後に変更される可能性があります。

（例 1）



（例 2）



■ VMware ESX/ESXi の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、ディスク複製インストールのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・VMware ESX Server 2.5.1 の場合
－vmxnet
・VMware ESX 3.0.1/3.0.2/3.5、ESXi 3.5 の場合：
－vmxnet
－拡張 vmxnet
・VMware ESX 4.0、ESXi 4.0 の場合：
－vmxnet 2
－vmxnet 3
－vmware 準仮想化

■ Hyper-V の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、ディスク複製インストールシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・ネットワーク アダプタ
・SCSI コントローラー

■ 複数の LAN ボードを搭載しているコンピュータの LAN ボードの構成を変更した場合は、変更前の LAN ボードの設定データ(ディスク複製パラメータファイル)は、誤動作の原因となりますので削除してください。

＜ディスク複製パラメータファイルの保存場所＞
ディスク複製パラメータファイルは「詳細設定」→「全般」で設定した共有フォルダ下に保存されています。
〈共有フォルダ〉¥AnsFile¥machineinf¥[MAC アドレス(ハイフンなし)].rep
〈共有フォルダ〉¥AnsFile¥Sysprep¥[MAC アドレス(ハイフンつき)].inf

<共有フォルダ>¥AnsFile¥Sysprep¥[MAC アドレス(ハイフンつき)].bat

例）共有フォルダが"C:¥Deploy"、削除するコンピュータの MAC が a0-b1-c2-d3-e4-f5 の場合は、以下のようになります。
C:¥Deploy¥AnsFile¥machineinf¥a0b1c2d3e4f5.rep
C:¥Deploy¥AnsFile¥Sysprep¥a0-b1-c2-d3-e4-f5.inf
C:¥Deploy¥AnsFile¥Sysprep¥a0-b1-c2-d3-e4-f5.bat

ヒント

■ DPM Ver2.04 以前の DPM でディスク複製のマスタイメージを作成している場合、ディスク複製を完了後にリモートシャットダウン、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用やアプリケーションのインストールシナリオを実行すると、コンピュータで表示されるダイアログボックスが不正になる場合があります。動作上問題ありませんが、本バージョンのインストール CD-ROM を用いてマスタを再作成されることを推奨します。

■ LAN 二重化（AFT、SFT、ALB)を構成し LAN の信頼性・可用性を高めている装置をターゲットとする場合、以下に注意してください。

- ディスク複製セットアップでパラメータファイルの TCP/IP 情報を正しく設定できません。
- WEB コンソールの「詳細設定」→「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」の項目にチェックをした場合、シナリオが完了しないことがあります。

回避方法は、作業を行う前に LAN 二重化の構成を解除し、作業完了後手動で LAN の構成を行ってください。

■ DPM のディスク複製 OS インストール機能を使用すれば、大量のコンピュータ導入にかかるコストを大幅に削減できます。この機能を使用するには、まず、マスタとなるコンピュータを 1 台セットアップします。そのディスクをマスタディスクとしてバックアップを取ってイメージファイル化します。このイメージファイルを残りのコンピュータにリストアして複製します。これにより、一台一台セットアップするのと比べ大幅に手間が省けます。
また、コンピュータ毎の OS 設定（ホスト名等）は、あらかじめパラメータファイルを作成しておくことで自動セットアップが可能です。
ディスク複製 OS インストールでは、作成したパラメータファイルと Sysprep を使用することで Windows OS の SID を自動的に再割り当てします。

ヒント

Sysprep とは、Microsoft 社が提供するツールで SID や、OS のパラメータ（コンピュータ名等）を再設定するものです。

注意

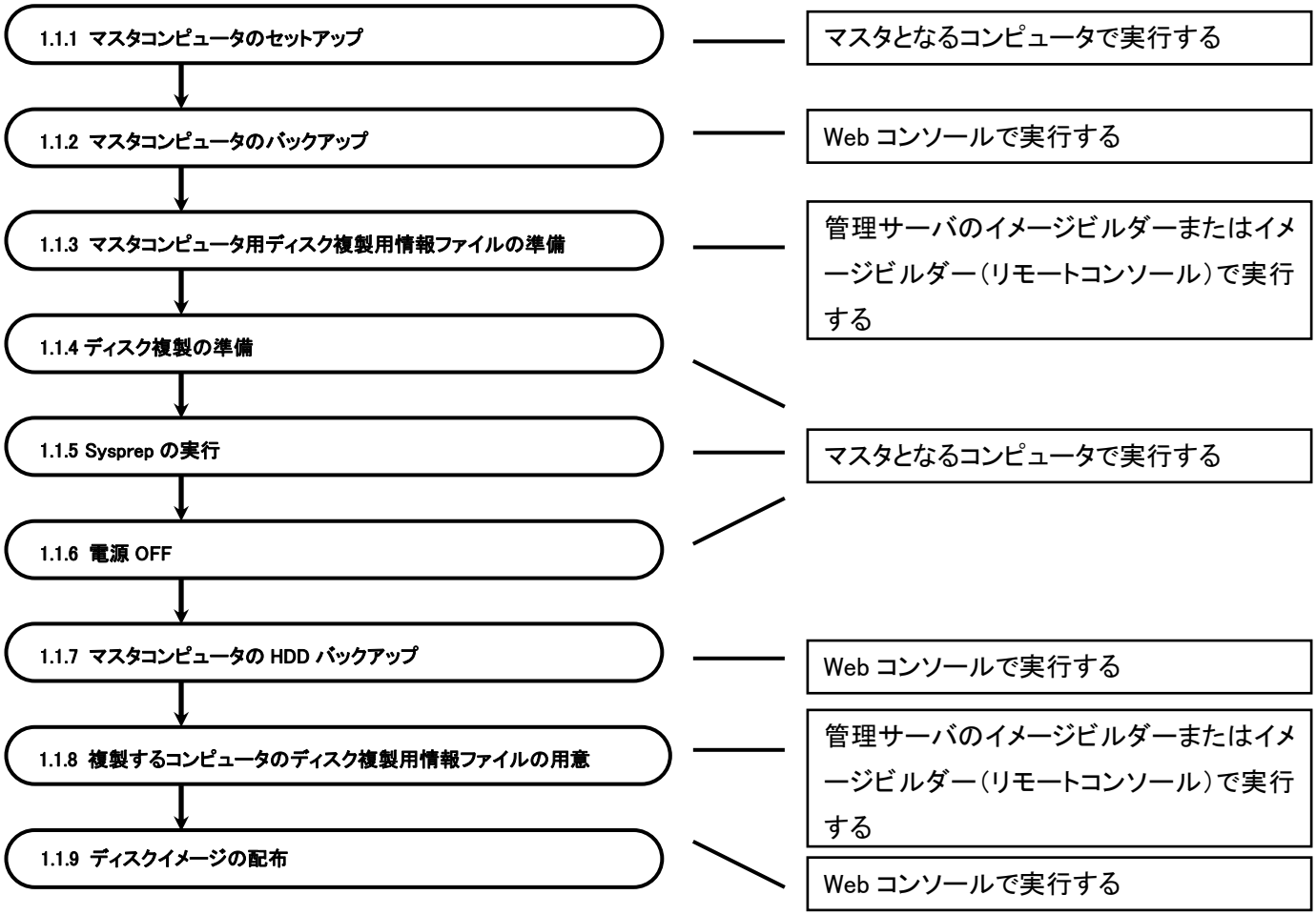
ディスク複製機能によってセットアップした複数台のサーバを使用して、NLB（Network Load Balancing）のクラスタ登録を行うことはできません。
NLB のクラスタ登録の際、識別子としてネットワークアダプタの GUID（Globally Unique Identifier）を使用します。ディスク複製で使用する Sysprep では GUID が変更されないため、複製されたサーバが同じ GUID を持ちます。そのため、NLB マネージャは同一のノードと認識しエラーとなります。
この現象を回避するためには、GUID を再作成し重複させないようにする必要があります。
GUID の再作成は、ネットワークアダプタを一旦削除し、再インストールを行います。
《GUID 再作成の手順》

1) NLB のクラスタに登録するサーバのデバイス マネージャ(「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「コンピュータの管理」)からネットワーク アダプタを削除します。
2) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「ハードウェアの追加」からネットワーク アダプタを再インストールします。
3) ネットワークのプロパティから、IP アドレス、NLB の設定を行います。

■ ディスク複製のシナリオ実行までを以下の流れに沿って説明します。

シナリオ実行までの流れ

操作の概要



1.1.1 マスタコンピュータのセットアップ

ヒント　マスタコンピュータ上で作業を行います。

■ ディスク複製の元となるコンピュータをセットアップします。OS のインストール、各種ドライバ、サービスパック/HotFix の適用やアプリケーションのインストールを行ってください。

重要

- クライアントサービス for DPM のインストールを必ず行ってください。インストール方法については、「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」を参照してください。DPM Ver2.04 以前の DPM を用いてディスク複製 OS インストール用のマスタイメージを作成している場合、ディスク複製完了後にリモートシャットダウン、サービスパック/HotFix の適用やアプリケーションのインストールシナリオを実行すると、コンピュータで表示されるダイアログが不正になる場合がありますが、動作に支障はありません。本バージョンの CD-ROM を用いてクライアントサービス for DPM の再インストールを行ってから、再度マスタコンピュータのバックアップを行うことを推奨します。
- DPM はバックアップした装置と違うサイズの HDD へのリストアは推奨していません。ただし、例外として、バックアップ時よりも大きなサイズのディスクへはリストア可能な場合があります。HDD がマルチベンダサポートされていてバックアップした装置とは違うメーカーの HDD にリストアする必要がある場合や、将来的に保守部品としてサイズが違う HDD が調達されることが予想される場合は、「ユーザーズガイド 応用編 付録 2. HDD のマルチベンダサポートについて」を参照して事前に対策を行ってください。
- 以下のサービスのスタートアップの種類が「手動」または「無効」の場合は、「自動」に変更してください。
  - Remote Registry Service

  「自動」に変更されていない場合は、ディスク複製時の IP/DNS/WINS 等の設定に失敗します。
- Windows 7 をマスタコンピュータとする際には、以下のサービスのスタートアップの種類が「自動」または「手動」の場合は、サービスを停止した後に、スタートアップの種類を「無効」に変更してくだい。
  - Windows Media Player Network Sharing Service

  上記の手順を行わない場合は、ディスク複製時の Sysprep の実行に失敗します。

1.1.2 マスタコンピュータのバックアップ

ヒント

Web コンソール上で作業を行います。

■ DPM のバックアップ/リストア機能でマスタコンピュータの HDD をバックアップします。

注意

ここでのバックアップは、一時的なものです。後述のとおり、ディスク複製では Sysprep を使用しますが、万一 Sysprep 実行中にエラーが起こるとコンピュータ名や SID がクリアされ、OS も起動しなくなる場合があります。そのときのリカバリ用として使用します。
例えば、Sysprep を複数回実行すると致命的なエラーが発生する場合があります。詳細については、Microsoft 社の以下のサポート技術情報を参照してください。
KB929828 ― Windows Vista で "Sysprep /generalize" を実行すると、エラー メッセージ "コンピュータの sysprep を実行中に致命的なエラーが発生しました" が表示される

ヒント

バックアップの実行方法については、本編「5. バックアップ/リストア」を参照してください。

1.1.3 マスタコンピュータ用ディスク複製用情報ファイルの準備

ヒント

管理サーバのイメージビルダー又はイメージビルダー(リモートコンソール)で作業を行います。

■ マスタコンピュータは後述の「Sysprep の実行」の後、起動すると必ず再セットアップ処理が実行されます。再セットアップ処理を正常に終わらせ、マスタコンピュータを通常の Windows が起動する状態に戻すために、マスタコンピュータ用のディスク複製用情報ファイルを以下の手順で作成します。

■ Windows 2000/Windows Server 2003/Windows XP の場合

(1) ディスク複製用情報ファイルを作成する元となる、セットアップパラメータファイルを用意します。

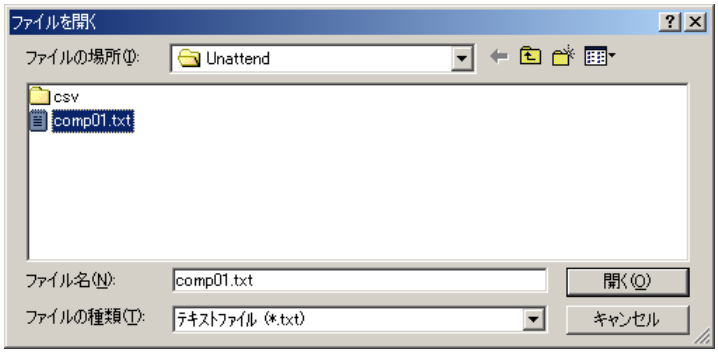
ヒント

- 作成する元となる、セットアップパラメータファイルは、マスタコンピュータに OS クリアインストール時に使用したセットアップパラメータファイルがあれば、それを使用してください。
- セットアップパラメータファイルの作成方法は、本編「2.1.2 セットアップパラメータの作成」を参照してください。
- セットアップパラメータファイルはマスタコンピュータ用にのみ用意してください。ディスク複製を行う全てのコンピュータには必要ありません。

注意

セットアップパラメータファイルは必ず DPM で作成したものを使用してください。
NEC Express5800 シリーズに標準添付されている EXPRESSBUILDER を使ったシームレスセットアップ等の DPM 以外の製品で作成したセットアップパラメータは使用することはできません。

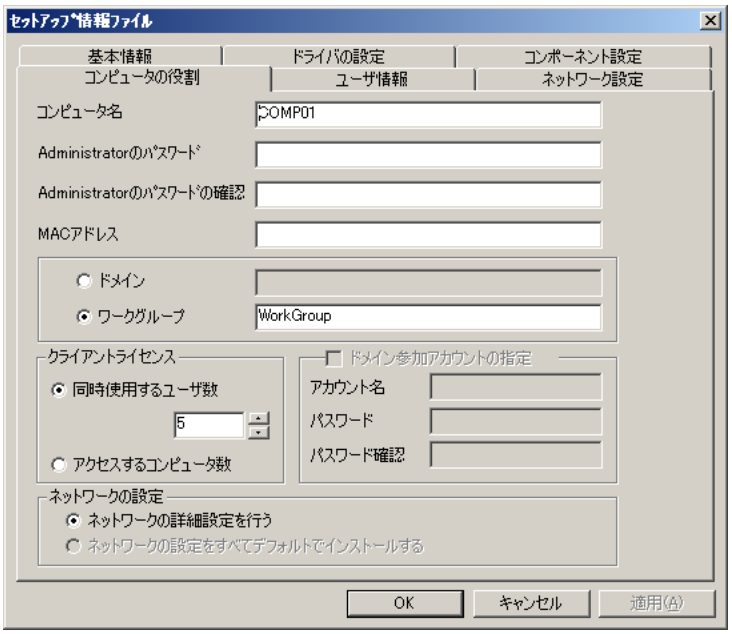
(2) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「ファイル」メニューから、「ディスク複製用情報ファイルの新規作成」を選択します。
「ファイルを開く」画面が表示されます。



ヒント

「セットアップパラメータファイルの作成」画面の表示方法は、本編「2.1.2 セットアップパラメータの作成」を参照してください。

(3) 「ファイルを開く」画面で(1)で用意したセットアップパラメータファイルを指定します。
「セットアップ情報ファイル」画面が表示されます。



■ 「コンピュータの役割」タブ、「ユーザ情報」タブ、「ネットワーク設定」タブの設定を必要に応じて行ってください。

■ 「コンピュータの役割」タブの「MAC アドレス」はディスク複製を行うコンピュータの MAC アドレスを「xx-xx-xx-xx-xx-xx」の形式で入力します。この設定は必須です。

重要

■ 各画面の設定方法は 、本編「2.1.2 セットアップパラメータの作成」 を参照してください。
■ 各項目は用意したセットアップパラメータの内容で設定されていますが、必要に応じて変更してください。
■ 「ユーザ情報」タブの使用者名、「コンピュータの役割」タブのコンピュータ名と MAC アドレスは必ず設定してください。
■ 入力するプロダクトキーは、ディスク複製を行うコンピュータで使用するプロダクトキーを設定してください。

ヒント

DPM に登録されたコンピュータ名を入力して、「MAC アドレス」欄にカーソルを合わせると、自動的に MAC アドレスが入力されます。

注意

DPM に登録している MAC アドレスを持つ LAN ボードには、固定 IP アドレス、DHCP サーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない場合があります。

(4) セットアップする端末に必要な情報を入力し、「OK」をクリックします。

「ファイル指定」画面が表示されます。

注意

作成したセットアップパラメータのファイル名は、自動的に入力した MAC アドレスとなります。ファイル名の変更はできません。

(5) 「OK」をクリックする。

以上で、ディスク複製用情報ファイルの作成は完了です。

重要

マスタコンピュータの再セットアップ時に、作成したマスタコンピュータ用のディスク複製用情報ファイルを使用します。マスタコンピュータの再セットアップが完了するまでは削除しないでください。エラーの原因になります。

■ Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 の場合

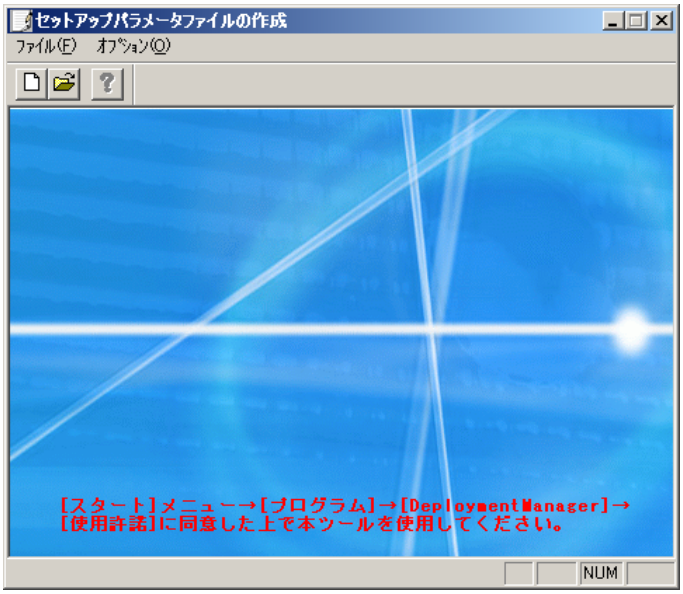
注意

イメージビルダーの画面上で入力不可となっている項目は、ディスク複製の設定では、使用しません。

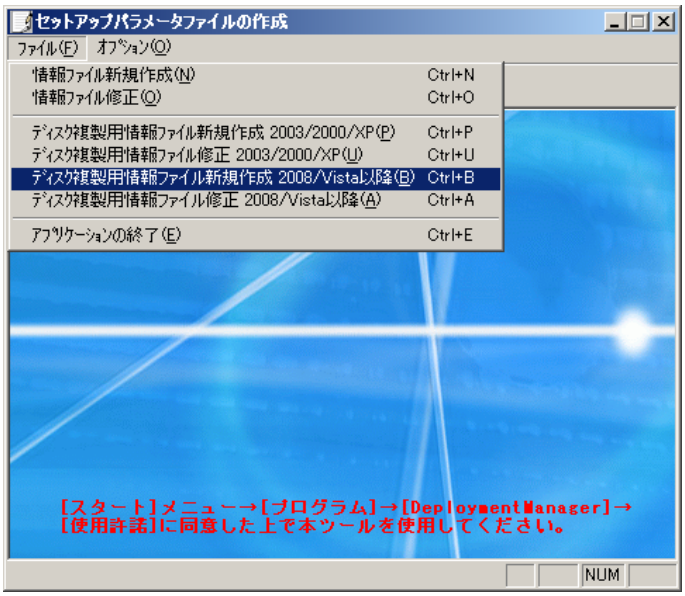
(1) 管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダー」を選択します。

(2) 「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。「作成パラメータ選択」画面が表示されますので「Windows パラメータファイル」を選択し、「OK」をクリックします。

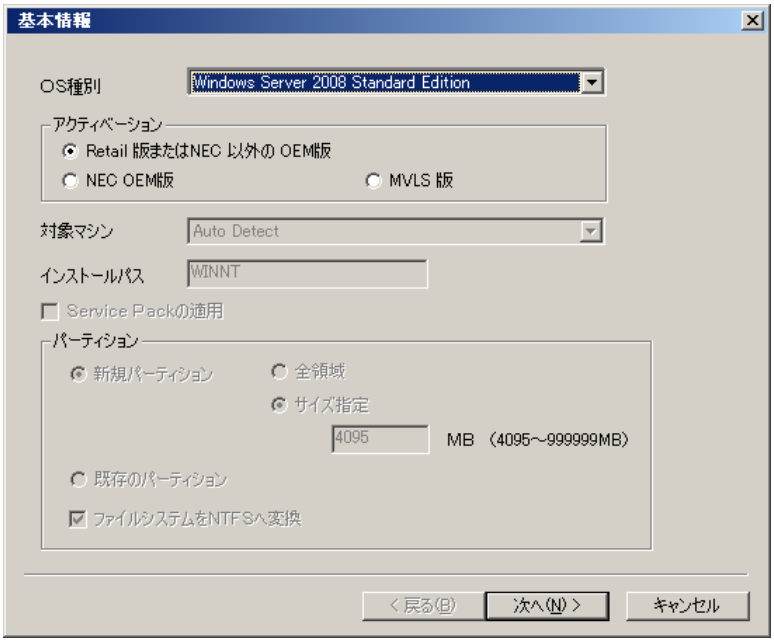
(3) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されます。



(4) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「ファイル」メニューから、「ディスク複製用情報ファイル新規作成 2008/Vista 以降」を選択します。



(5) 「基本情報」画面が表示されます。



■ OS 種別

インストール時の OS 種別を選択します。以下の OS を選択することができます。

・IA32(Intel Architecture 32bit)アーキテクチャ

- Windows Server 2008 Standard
- Windows Server 2008 Enterprise
- Windows Vista Business
- Windows Vista Enterprise
- Windows Vista Ultimate
- Windows 7 Professional
- Windows 7 Ultimate
- Windows 7 Enterprise

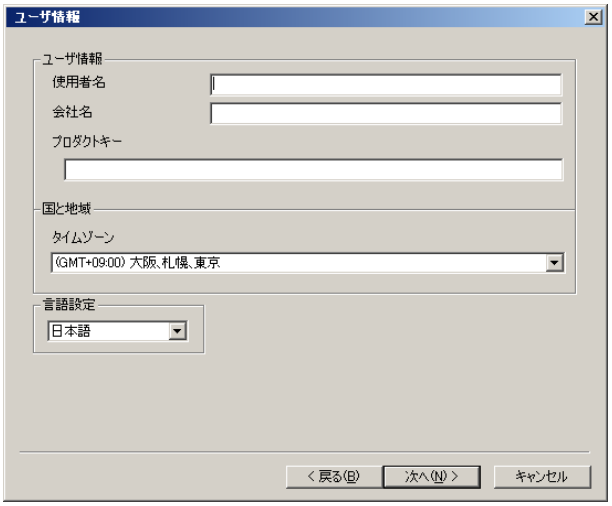
・EM64T（Extended Memory 64-bit Technology）アーキテクチャ
- Windows Server 2008 Standard x64 Edition
- Windows Server 2008 Enterprise x64 Edition
- Windows Server 2008 R2 Standard
- Windows Server 2008 R2 Enterprise
- Windows Server 2008 R2 Datacenter

・IPF（Itanium Processor Family）アーキテクチャ
- Windows Server 2008 IPF Edition

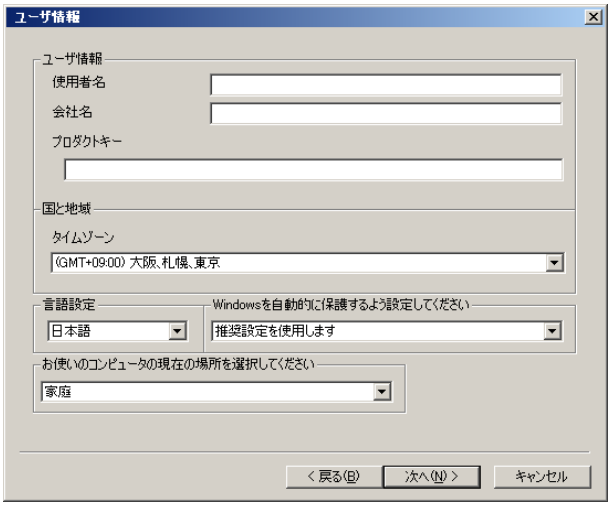
注意

「OS の種別」の変更を行うと設定情報は維持されません。各項目が正しく設定されているかを必ず確認してください。

(6) 「基本情報」画面の設定後、「次へ」をクリックします。「ユーザ情報」画面が表示されます。



Windows Server 2008 選択時



Windows Vista/Windows 7 選択時

■ 使用者名
コンピュータの使用者を 50 バイト以内で入力します。ただし、「,」カンマは使用できません。
入力は必須です。

■ 会社名
会社名を 50 バイト以内で入力します。ただし、「,」カンマは使用できません。

■ プロダクトキー
・ Windows OS のプロダクトキーを入力します。
半角で「XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX」の形式で入力してください。
「NEC OEM 版」 選択時には、入力不要です。
・ プレインストール装置の場合は、コンピュータ本体に貼り付けられているシールのプロダクトキーをご入力ください。マイクロソフト社とボリュームライセンス契約を結ばれ、専用媒体でインストールを行なった場合は、媒体に添付されているプロダクトキーを入力してください。

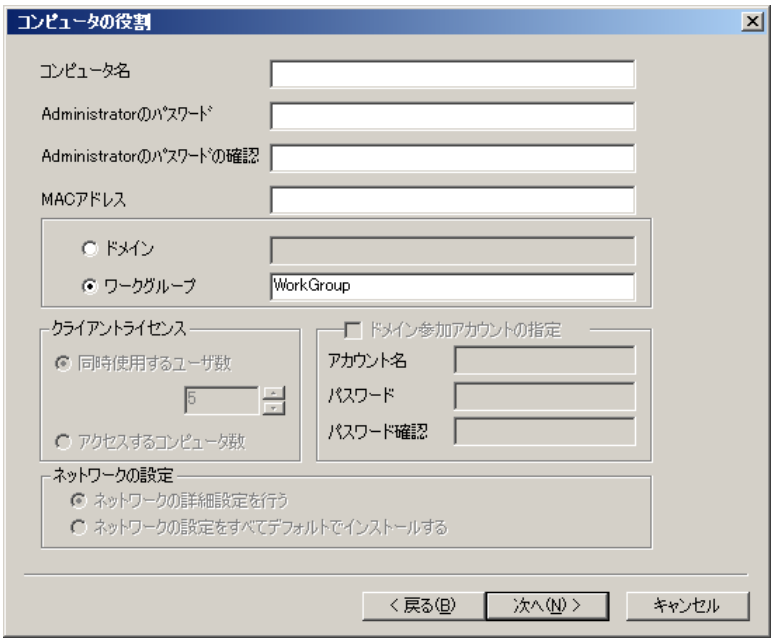
■ タイムゾーン
タイムゾーンを指定します。リストボックスから該当する地域を選択してください。

■ 言語設定
使用する言語をリストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。
「日本語」、「英語」、「仏語」

■ Windows を自動的に保護するよう設定してください(Windows Vista/Windows 7 のみ)
Windows を自動的に保護する設定をリストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。
「推奨設定を使用します」、「重要な更新プログラムのみインストールします」、「後で確認します」

■ お使いのコンピュータの現在の場所を選択してください(Windows Vista/Windows 7 のみ)
お使いのコンピュータの現在の場所をリストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。
「家庭」、「職場」、「公共の場所」

(7) 「ユーザ情報」画面を設定後、「次へ」をクリックします。「コンピュータの役割」画面が表示されます。



■ コンピュータ名

重要 DPM に登録しているコンピュータ名にしてください。

コンピュータ名を 15 バイト以内で入力します。入力は必須です。
名前は、他のコンピュータ名、ドメイン/ワークグループ名と同じにならないようにしてください。

コンピュータ名には以下の文字は指定できません。
「.」ピリオド、「,」カンマ、「`」、「~」、「!」、「@」、「#」、「$」、「&」、「*」、「%」、「=」、「+」、「{」、「}」、「¥」、「|」、「;」、「:」、「'」、「"」、「<」、「>」、「/」、「?」、半角スペース、「[」、「]」、「^」、「(」、「)」
また、コンピュータ名に数字のみの名前は指定できません。

■ 管理者(Administrator)権限のパスワード
・管理者(Administrator)権限のパスワードには以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「"」、半角カナ、全角文字
・14 バイト以内で入力してください。
・管理者(Administrator)権限のパスワードは省略可能です。

注意

「ドメイン」の設定をする場合はドメインコントローラのパスワード設定のポリシーに従って設定してください。従わない場合、OS インストール時、ディスク複製 OS インストール時の途中からログイン毎にログイン画面で止まってしまいます。その場合、手動でログインしてください。

ヒント

パスワードの設定は、各 OS のパスワード設定ポリシーも参照して、OS に設定可能なパスワードにしてください。

■ 管理者(Administrator)権限のパスワードの確認
「管理者(Administrator)権限のパスワード」で設定したパスワードと同じ値を入力してください。同じでない場合は次へ進むことができません。

■ MAC アドレス
MAC アドレスを入力してください。

■ ドメイン/ワークグループ
Windows OS インストール時のドメイン、ワークグループの設定を行います。「ドメイン」または「ワークグループ」を選択後、対応する名称を入力します。
ドメイン名には以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「″」、「¥」、「/」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「 」半角スペース、「[」、「]」
ワークグループ名には以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「″」、「¥」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「+」、「=」

注意

「ドメイン」の設定をする場合は「管理者(Administrator)権限のパスワード」をドメインコントローラのパスワード設定のポリシーに従って設定してください。OS インストール時、ディスク複製 OS インストール時のログイン時に途中で止まってしまいます。その場合、手動でログインしてください。

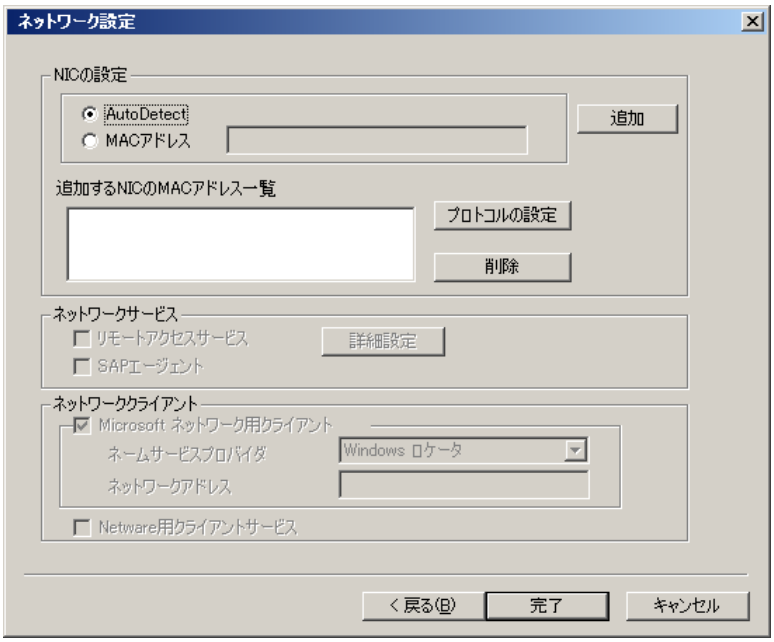
■ ドメイン参加アカウントの指定
「ドメイン」を選択した場合のみ入力が可能です。
ドメイン参加時のアカウント、パスワードの設定を行う場合はチェックを入れてください。
チェックを入れた場合、「アカウント名」、「パスワード」、「パスワード確認」の設定が可能になります。
「アカウント名」には 32 バイト以内で入力します。以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「″」、「/」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「+」、「=」、「[」、「]」
「パスワード」の設定は、以下のとおりとなります。
・14 バイト以内で入力してください。
・パスワードには以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「″」、半角カナ、全角文字

「パスワード確認」は「パスワード」で設定したパスワードと同じ値を入力してください。

注意

「パスワード」は省略しないでください。省略した場合、シナリオ実行エラーとなります。

(8) 「コンピュータの役割」画面を設定後、「次へ」をクリックします。「ネットワーク設定」画面が表示されます。



■ NIC の設定

OS インストール時に LAN ボードに対してプロトコルの設定、IP アドレス、DNS、WINS の設定を行うことができます。これらの設定はコンピュータの LAN ボードを直接指定して行うことができます。ただし LAN ボードを指定する場合には MAC アドレスの入力が必須です。

1. LAN ボードの追加を行います。

   LAN ボードを指定して設定を行うか行わないかで設定が異なります。

   ◆ LAN ボードを指定する場合

   「MAC アドレス」を選択します。選択後、ボックスに MAC アドレスを入力します。MAC アドレスの入力は「XX-XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。入力後、「追加」をクリックします。入力した MAC アドレスが「追加する LAN ボードの MAC アドレス一覧」ボックスに追加されます。

   この設定を行ったパラメータファイルを使用して OS インストールを行うと、指定した MAC アドレスに設定が行われます。

   ◆ LAN ボードを指定しない場合

   「AutoDetect」を選択して「追加」をクリックします。

   この設定を行ったパラメータファイルを使用して OS インストールを行うと、コンピュータに LAN ボードが複数ある場合はどの LAN ボードに対して設定が行われるかはわかりません。

   「AutoDetect x」(x は 1～4 の数字)が「追加する LAN ボードの MAC アドレス一覧」ボックスに追加されます。

重要

- ■ LAN ボードは一つ以上指定してください。
- ■ LAN ボードは MAC アドレスと AutoDetect をあわせて 4 つまで追加することができます。
- ■ ここで設定を行わなかった LAN ボードは自動的に DHCP による IP アドレス取得を行う設定になります。

注意

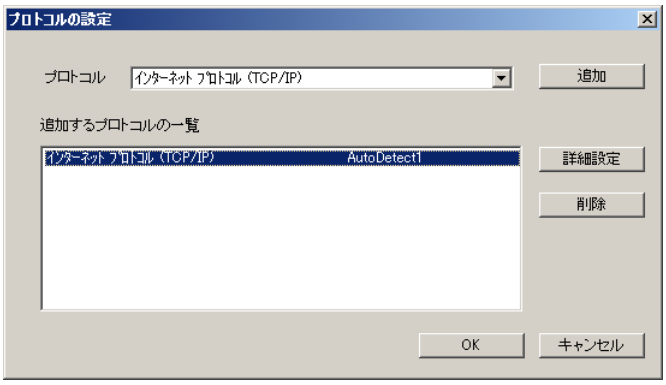
DPM に登録している MAC アドレスを持つ LAN ボードには、固定 IP アドレス、DHCP サーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない場合があります。

ヒント

「追加するNICのMACアドレス一覧」ボックスに追加したMACアドレスまたはAutoDetectを削除する場合は、MACアドレスまたはAutoDetectを選択したあと「削除」をクリックします。

2. LAN ボードに対するプロトコルの設定を行います。

1 の操作のあと「プロトコルの設定」をクリックします。「プロトコルの設定」が表示されます。



プロトコルのリストボックスから LAN ボードに設定するプロトコルを選択して「追加」をクリックします。「追加するプロトコルの一覧」ボックスに追加されます。

追加可能なプロトコルは以下となります。

- インターネット プロトコル(TCP/IP)

重要

■ プロトコルは 4 つまで追加することができます。

■ インターネット プロトコル(TCP/IP)を追加した場合、「追加するプロトコルの一覧」ボックスには 1 で入力した LAN ボードの数だけインターネット プロトコル(TCP/IP)が追加され、その横に LAN ボードが MAC アドレスまたは AutoDetect が追記されます。
1 で LAN ボードを「00-00-00-00-00-00」と「AutoDetect1」の 2 つ追加していた場合は以下のようになります。

追加するプロトコルの一覧

インターネットプロトコル(TCP/IP)	00-00-00-00-00-00
インターネットプロトコル(TCP/IP)	AutoDetect1

ヒント

「追加するプロトコルの一覧」ボックスに追加したプロトコルを削除する場合は、プロトコルを選択したあと「削除」をクリックします。

3. 各 LAN ボードに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定を行います。

2 でインターネット プロトコル(TCP/IP)を追加した場合、IP アドレス、DNS、WINS、スコープ ID の詳細設定を行うことができます。

◆ 設定を行う場合

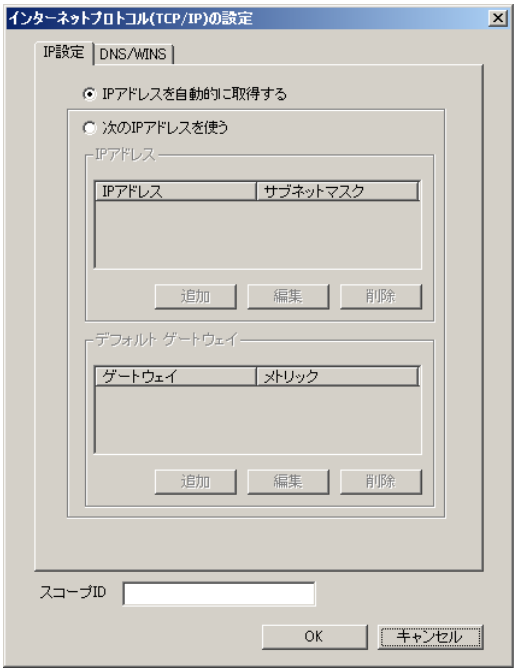
「追加するプロトコルの一覧」ボックスから詳細設定を行うインターネット プロトコル(TCP/IP)の LAN ボードを指定して「詳細設定」をクリックします。「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面が表示されます。設定内容につきましては 4～11 を参照してください。

ヒント

複数の LAN ボードに対して設定を行う場合は 3～11 を繰り返し行ってください。

◆ 設定を行わない場合
行わない場合、IP アドレス、DNS、WINS の設定はすべてデフォルトの「自動的に取得する」となります。スコープ ID の値は反映されません。
以降の設定に関しましては 12 に進んでください。

4. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「IP 設定」タブの設定を行います。



「IP 設定」タブでは IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。

◆ IP アドレスを自動的に取得する場合
「IP アドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。デフォルトはこの設定になっています。

◆ IP アドレスの値を設定する場合
「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れます。この値にチェックを入れると、IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。詳細な内容に関しては 5～6 を参照してください。

注意

Web コンソールの「設定」メニュー→「詳細設定」→「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」にチェックを入れて運用する場合、設定された IP アドレスで管理サーバと通信できないと、シナリオ実行完了と検出されない場合があります。
正しい IP アドレスを設定するか、シナリオを作成するときに「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」を設定してください。
「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」にチェックを入れない場合は IP アドレスに関係なくシナリオ実行の終了を検出することが出来ます。

5. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の IP アドレス、サブネットマスクを指定します。
「IP アドレス」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP アドレス」画面が表示されます。

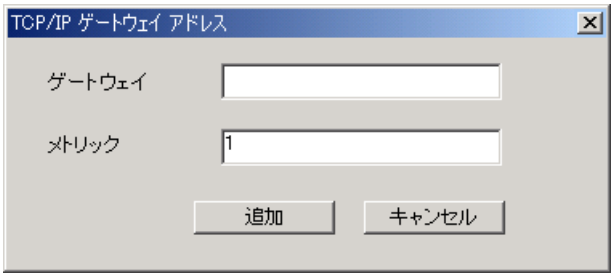
指定する IP アドレス、サブネットマスクを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例)IP アドレス:192.168.0.1
サブネットマスク:255.255.0.0

IP アドレス、サブネットマスクを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「IP アドレス」ボックスに指定した IP アドレスとサブネットマスクが追加されます。

ヒント

- IPアドレス、サブネットマスクは各LANボードに対して最大4つまで追加することができます。
- 「IP アドレス」ボックスに追加された IP アドレス、サブネットマスクを編集する場合は、IP アドレス、サブネットマスクを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP アドレス」画面が表示され、編集することができます。
- 「IP アドレス」ボックスに追加された IP アドレス、サブネットマスクを削除する場合は、IP アドレス、サブネットマスクを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した IP アドレス、サブネットマスクが削除されます。

6. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面のゲートウェイ、メトリックを指定します。
「デフォルト ゲートウェイ」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示されます。



指定するゲートウェイ、メトリックを入力します。

ゲートウェイの入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例) 255.255.0.0

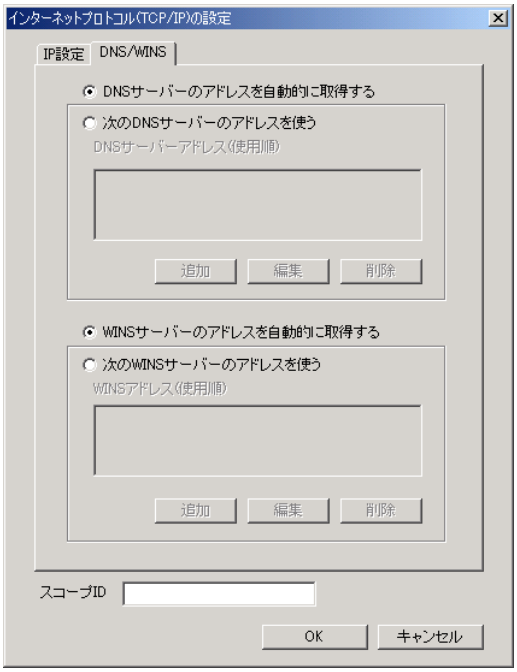
メトリックは数字を入力します。「1」から「9999」の範囲で入力ができます。デフォルトは「1」です。

ゲートウェイ、メトリックを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに指定したゲートウェイとメトリックが追加されます。

ヒント

- ゲートウェイ、メトリックは最大 4 つまで追加することができます。
- 「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに追加されたゲートウェイ、メトリックを編集する場合は、ゲートウェイ、メトリックを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示され、編集することができます。
- 「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに追加されたゲートウェイ、メトリックを削除する場合は、ゲートウェイ、メトリックを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定したゲートウェイ、メトリックが削除されます。

7. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「DNS/WINS」タブの設定を行います。



「DNS/WINS」タブでは DNS、WINS の設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。

◆ DNS サーバ、WINS サーバのアドレスを自動的に取得する場合

DNS サーバの場合は「DNS サーバーのアドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。
WINS サーバの場合は「WINS サーバーのアドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。
DNS、WINS ともにデフォルトはこの設定になっています。

◆ DNS サーバ、WINS サーバの IP アドレスの値を設定する場合

DNS サーバの場合は「次の DNS サーバーのアドレスを使う」にチェックを入れます。WINS サーバの場合は「次の WINS サーバーのアドレスを使う」にチェックを入れます。
この値にチェックを入れると、DNS、WINS アドレスの設定を行うことができます。詳細な内容に関しては DNS の場合は 8 を、WINS の場合は 9 を参照してください。

8. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の DNS サーバのアドレスを指定します。
「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS/WINS」タブを選択し「次の DNS サーバのアドレスを使う」を選択した後、「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP DNS サーバー」画面が表示されます。

指定する DNS サーバーのアドレスを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例)192.168.0.250

DNS サーバーのアドレスを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに指定した DNS サーバーのアドレスが追加されます。

ヒント

- DNS サーバーのアドレスは最大 4 つまで追加することができます。
- 「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに追加された DNS サーバーのアドレスを編集する場合は、DNS サーバーのアドレスを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP DNS サーバー」画面が表示され、編集することができます。
- 「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに追加された DNS サーバーのアドレスを削除する場合は、DNS サーバーのアドレスを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した DNS サーバーのアドレスが削除されます。

9. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の WINS サーバのアドレスを指定します。
「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS/WINS」タブを選択し「次の WINS サーバのアドレスを使う」を選択した後、「WINS アドレス(使用順)」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP WINS サーバー」画面が表示されます。

指定する WINS サーバのアドレスを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例) 192.168.125.30

WINS サーバのアドレスを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「WINS アドレス(使用順)」ボックスに指定した WINS サーバのアドレスが追加されます。

ヒント

- WINS サーバのアドレスは最大 4 つまで追加することができます。
- 「WINS アドレス(使用順)」ボックスに追加された WINS サーバのアドレスを編集する場合は、WINS サーバのアドレスを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP WINS サーバー」画面が表示され、編集することができます。
- 「WINS アドレス(使用順)」ボックスに追加された WINS サーバのアドレスを削除する場合は、WINS サーバのアドレスを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した WINS サーバのアドレスが削除されます。

10. スコープ ID の設定を行います。省略可能です。

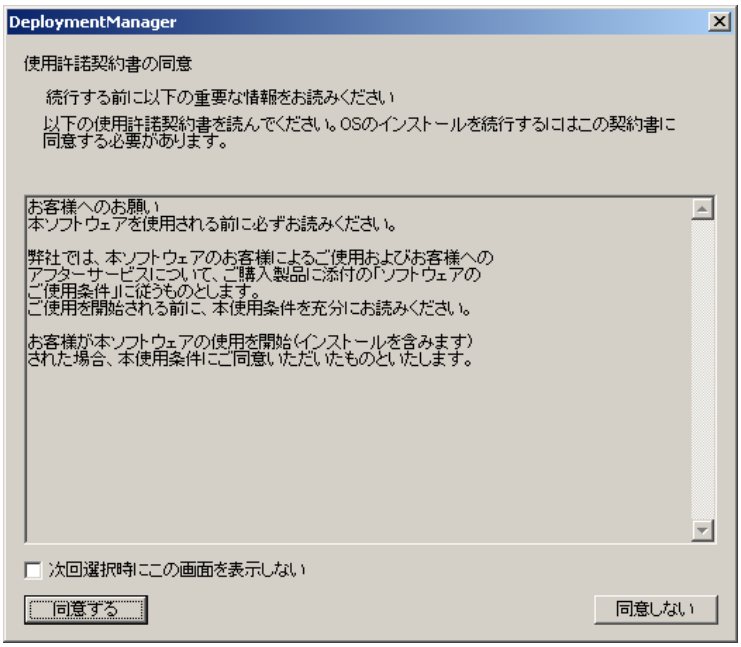
重要

スコープ ID の設定は LAN ボードごとに設定することはできません。
ひとつの LAN ボードに対してインターネット プロトコル(TCP/IP)のスコープ ID を設定した場合、他の LAN ボードに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面を開いても、前に設定を行ったスコープ ID の設定が表示されます。

11. 4～10 の設定を反映する場合は「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面で「OK」をクリックしてください。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。
「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「プロトコルの設定」画面に戻ります。

12. 3～11 の設定を反映する場合は「プロトコルの設定」画面で「OK」をクリックします。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。
「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「ネットワーク設定」画面に戻ります。

(9) 「ネットワーク設定」画面の設定後、「完了」をクリックすると、「使用許諾契約書の同意」画面が表示されます。内容をよくお読みいただき「同意する」をクリックします。



ヒント

「同意しない」を選択すると本機能はご使用いただけません。

(10)「同意する」をクリックすると、次に「ファイル指定」画面が表示されます。「OK」ボタンをクリックしてください。
ファイル名は、自動的に入力した MAC アドレスとなります。

「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されたら、パラメータファイルの作成は完了です。

重要

マスタコンピュータの再セットアップ時に、作成したマスタコンピュータ用のディスク複製用情報ファイルを使用します。マスタコンピュータの再セットアップが完了するまでは削除しないでください。エラーの原因になります。

1.1.4 ディスク複製の準備

ヒント

マスタコンピュータ上で作業を行います。

■ 以下の手順で、ディスク複製の準備を行います。

重要

マスタコンピュータは必ず以下のように設定してください。
- ワークグループに参加
- Windows 2000/Windows Server 2003/Windows XP の場合は、Administrator ユーザのパスワードは設定しない
- Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 の場合は、Administrator アカウントを有効にして、Administrator アカウントにログオンした状態で、以下の作業を管理者権限で実行してください。ディスク複製終了後は、Administrator アカウントのログオン画面となります。

(1) マスタコンピュータで、エクスプローラなどからインストール CD-ROM 内の以下のファイルを実行します。

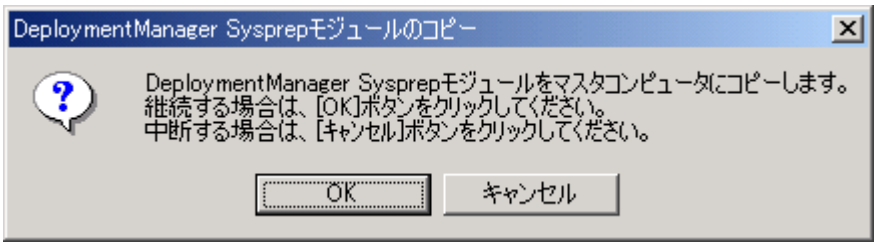
ヒント

SSC 向け製品の場合 :¥DPM¥TOOLS¥SYSPREP¥Windows¥COPYSYSPREP.VBS
EE/SE 製品の場合 :¥TOOLS¥SYSPREP¥Windows¥COPYSYSPREP.VBS

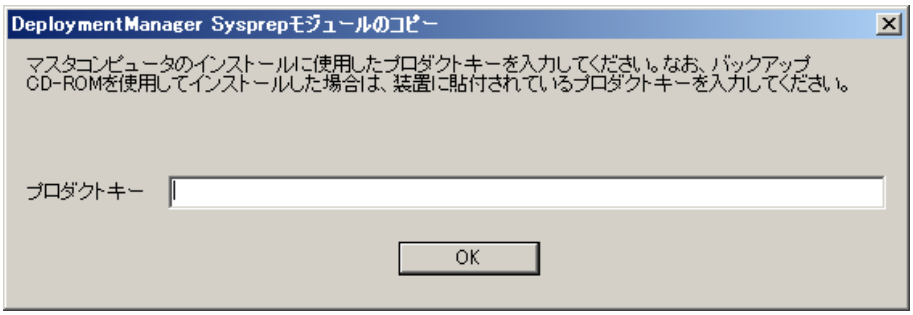
注意

■ ＜OS が起動しているドライブ＞¥Sysprep フォルダが存在する場合は上書きされます。
■ DPM は、ディスク複製する際に＜OS が起動しているドライブ＞￥DPM_DiskCloningTmp フォルダを作成します。同名のフォルダが存在する場合は、ディスク複製が正常に動作しない可能性があります。

(2) 「DeploymentManager Sysprep モジュールのコピー」画面が表示されます。「OK」をクリックします。マスタコンピュータの OS が起動しているドライブに“Sysprep”というフォルダが作成され、ディスク複製に必要なモジュールをコピーします。



(3) 「プロダクトキー」の入力画面が表示されますので、マスタコンピュータのセットアップに使用したプロダクトキーを入力し「OK」をクリックしてください。
Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 の場合は、以下画面は表示されませんので、(4)へ進んでください。



注意 バックアップCD-ROMをご使用の場合は、装置に貼付されているプロダクトキーを入力してください。

(4) 以下の画面が表示されます。インストール CD-ROM からディスク複製に必要なファイルのコピーが完了しました。「OK」をクリックしてください。

(5) Microsoft Sysprep をコピーします。
マスタコンピュータに対応した Windows OS の(CD-ROM)ディスクの¥SUPPORT¥TOOLS¥DEPLOY.CAB から Sysprep.exe と Setupcl.exe を(2)で作成した Sysprep フォルダにコピーしてください。
Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 の場合は、本手順は必要はありませんので、(7)へ進んでください。

重要 必ず、マスタコンピュータにインストールされているOSのCD-ROMディスクからコピーしてください。

注意 Windows2000 の場合、SP(Service Pack)2 以上の CD-ROM または以下の Microsoft のホームページから各言語に対応したモジュールをダウンロードしてご使用ください。
http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=E5A33392-77A2-4D9C-A70E-8EB1369C85ED&displaylang=ja
SP2 以上のモジュールをご使用にならない場合、本編「1.1.5 Sysprep の実行」で自動的に電源が切れません。電源が切れない場合は手動で電源を切ってください。

(6) Microsoft ネットワーク設定コマンドをコピーする。
マスタコンピュータに対応したWindows OS の(CD-ROM)ディスクの¥SUPPORT¥TOOLS¥SUPPORT.CAB から Netdom.exe を、(2)で作成した Sysprep¥i386¥OEM¥$$¥SYSTEM32 にコピーしてください。

重要 必ず、マスタコンピュータにインストールされている OS の CD-ROM ディスクからコピーしてください。

(7) 接続するサーバ情報を編集する。
ご使用の環境に合わせて＜OS が起動しているドライブ＞¥Sysprep¥SERVER.INI を編集します。
以下の下線部のみマスタコンピュータを管理している管理サーバの IP アドレスに変更してください。
ServerIP=192.168.0.1

注意 管理サーバの IP アドレス以外の値は変更しないでください。エラーの原因となります。

1.1.5 Sysprepの実行

ヒント マスタコンピュータ上で作業を行います。

■ 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、「名前」ボックスに以下のコマンドを入力し、Enter キーを押す。
＜OS が起動しているドライブ＞¥Sysprep¥SYSPREP.BAT

重要
- Windows XP/Windows 2000/Windows Server 2003 の場合は、同じフォルダに Sysprep.exe がありますが、この Sysprep.exe は実行しないでください。
- 起動しているアプリケーション、エクスプローラ等は全て終了させてください。

以下の画面が表示されます。画面の指示に従ってください。(Windows 2000 の場合)

Windows(R) 2000 SystemPreparation ユーティリティ(Sysprep)を
実行します。
実行後、自動的に電源が切断されます。
電源が切断されない場合は電源スイッチを押して切断してください。
また、再起動した場合は POST 画面で電源を切断してください。

何かキーを入力してください。

1.1.6 電源OFF

■ Sysprep 実行後、自動的に電源が OFF になります。
再起動した場合、POST 画面が表示されたら DHCP による IP アドレスを取得する直前で POWER スイッチを押して電源を OFF にしてください。

注意 Windows 2000 の場合、Windows 2000 SP2 以上が適用されていないと、Sysprep 実行後、自動で電源が OFF になりません。手動で電源を OFF にしてください。

1.1.7　マスタコンピュータのHDDバックアップ

ヒント　Web コンソール上で作業を行います。

■ DPM のバックアップ/リストア機能でマスタコンピュータの HDD をバックアップします。バックアップ終了後、自動的にマスタコンピュータが再起動し、再セットアップが始まります。再セットアップが正常に完了すると「マスタコンピュータのセットアップパラメータファイル」の内容になります。

重要　本編「1.1.3 マスタコンピュータ用ディスク複製用情報ファイルの準備」でファイルを作成していない場合、再セットアップ中にエラーとなります。

注意
- ■ 必ず、本編「1.1.2 マスタコンピュータのバックアップ」で使用したバックアップファイルと違うバックアップファイルに保存してください。
- ■ バックアップのシナリオ設定で、「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」を選択しないでください。選択した場合は、バックアップ終了後、手動で電源を入れてください。マスタコンピュータの再セットアップが行われます。
- ■ マスタコンピュータの再セットアップ中にエラーが発生した場合は、本編「1.1.2 マスタコンピュータのバックアップ」でバックアップしておいたバックアップファイルをリストアして、マスタコンピュータを元の状態に戻してください。
- ■ ディスク複製用情報ファイルの設定で「Netware 用ゲートウェイ(とクライアント)サービス」または「Netware 用クライアントサービス」を選択した場合、Windows のログイン時に「Select Netware Logon」画面が表示されることがあります。その場合、20 分程度で自動ログインしシナリオは続行されますので、画面操作を行わないでください。

ヒント　バックアップ用シナリオの作成については、本編「5.1 バックアップシナリオファイルの作成」を参照してください。

1.1.8　複製するコンピュータのディスク複製用情報ファイルの用意

注意　DPM Ver3.0 以前のバージョンで作成したマスタコンピュータのバックアップファイルを用いた場合、以下の項目は設定されません。
— Administrator のパスワード
— 複数の IP アドレスの設定(1 つのみ設定されます。)

ヒント　管理サーバ上で作業を行います。

■ マスタディスクを複製するコンピュータごとに、ディスク複製用情報ファイルを用意します。このディスク複製用情報ファイルを用意することで、それぞれのコンピュータ個別の設定を自動的に反映することができます。

(1) まず、対象となるコンピュータのセットアップパラメータファイルを作成します。作成方法は、本編「2.1.2 セットアップパラメータの作成」を参照してください。
Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 の場合は、本手順は必要はありませんので、(2)へ進んでください。

(2) 次に、作成したセットアップパラメータファイルを指定してディスク複製用情報ファイルを作成します。作成方法は、本編「1.1.3 マスタコンピュータ用ディスク複製用情報ファイルの準備」と同様の手順で行ってください。

注意

■ 複製するコンピュータ 1 台につき、1 つのセットアップパラメータファイルとディスク複製用情報ファイルを作成します。ここで、作成しておかないと、Sysprep が正常に動作しません。
■ ディスク複製後のコンピュータは、マスタコンピュータのページングファイル設定を保持します。この設定を破棄する場合は、作成したディスク複製用情報ファイルの以下の項目を変更してください。
<共有フォルダ(C:¥Deploy)>¥AnsFile¥Sysprep¥<MAC アドレス>.inf

[変更前]
[Unattended]
KeepPageFile="1"
[変更後]
[Unattended]
KeepPageFile=""

上記の記載以外(半角スペースが入る等)の場合は、ページングファイル設定を保持したままの状態となります。
また、DPM Ver5.0 より前のバージョンの DPM で作成されたディスク複製イメージで、ディスク複製を行う場合は、ページングファイル設定は保持されません。
■ Windows Vista/Windows 7 のディスク複製用情報ファイルを作成する場合は、マスタコンピュータのディスク複製用情報ファイルと同じ「OS 種別」、「プロダクトキー」を設定してください。

1.1.9 ディスクイメージの配布

ヒント

Web コンソール上で作業を行います。

■ DPM のバックアップ/リストア機能でリストアします。
ここで使用するイメージファイルは、本編「1.1.7 マスタコンピュータの HDD バックアップ」でバックアップしたファイルを使用してください。
リストアが完了すると、あらかじめ用意したディスク複製用情報ファイルの内容に従って、自動的に各コンピュータの個別情報が反映されます。このとき、自動的に再起動を何度か繰返します。

重要

シナリオ作成時に「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」にチェックを入れないでください。

ヒント

リストア用シナリオの作成については、本編「5.3 リストアシナリオファイルの作成」を参照してください。

注意

■ リストアするコンピュータ用のパラメータファイルを用意していない場合やリモートでの転送に失敗した場合は、リストアを行うコンピュータに以下のエラーが表示されます。この場合は、再起動後表示されるウィザードに従って手作業でパラメータを入力してください。

> 本装置用のパラメータファイルが用意されていないか
> コピーに失敗しました。
> 再起動後に表示されるウィザードにしたがってセットアップ
> を行ってください。
>
> なにかキーを押すと再起動します。

■ ディスク複製用情報ファイルの設定で「Netware 用ゲートウェイ(とクライアント)サービス」または「Netware 用クライアントサービス」を選択した場合、Windows のログイン時に「Select Netware Logon」画面が表示されることがあります。その場合、20 分程度で自動ログインしシナリオは続行されますので、画面操作を行わないでください。

■ ディスク複製では、Web コンソールに登録されているコンピュータの MAC アドレスと同じ名称のディスク複製用情報ファイルを使用します。

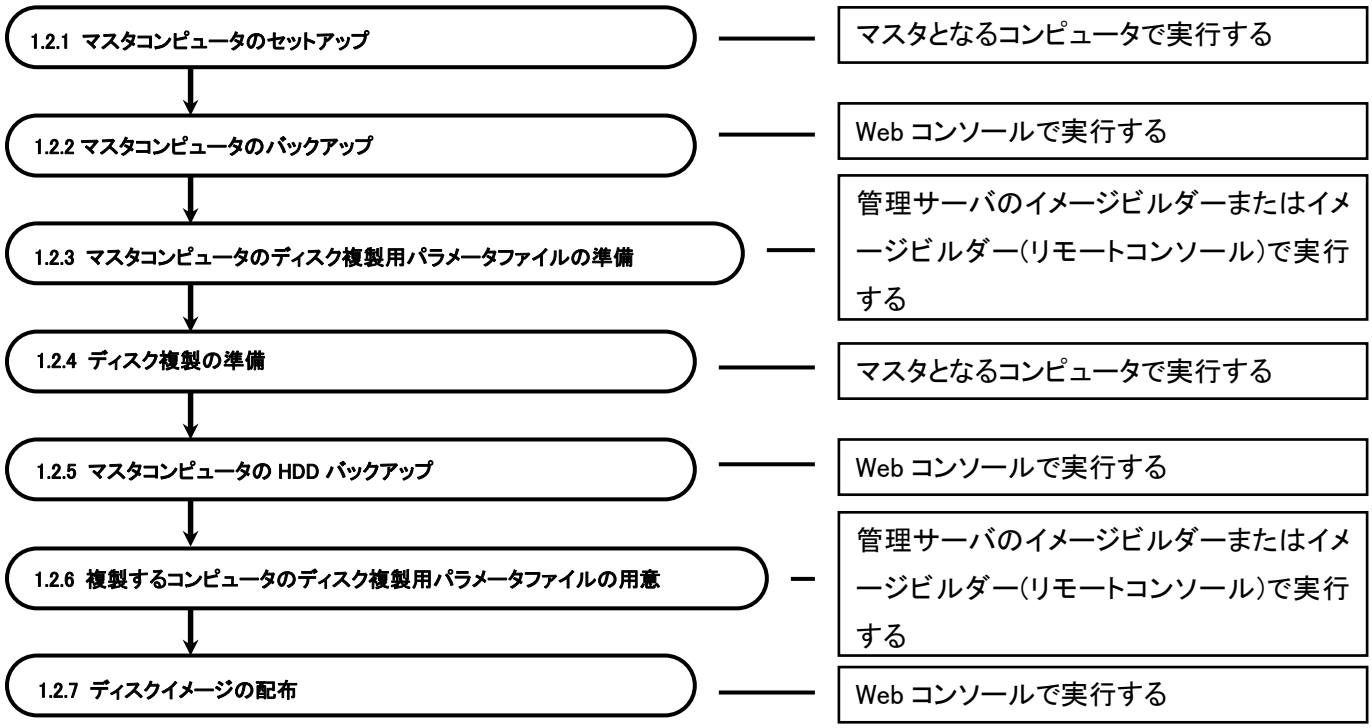
以上で、ディスク複製による OS セットアップの完了です。本編「1.1.2 マスタコンピュータのバックアップ」でバックアップしたファイルを以降使用する必要がない場合は、削除しても構いません。

1.2 ディスク複製によるOSセットアップ(Linux)

■ ディスク複製のシナリオ実行までを以下の流れに沿って説明します。

シナリオ実行までの流れ

操作の概要



1.2.1　マスタコンピュータのセットアップ

■ マスタコンピュータで行います。
ディスクコピーの元となるコンピュータをセットアップします。OS のインストール、各種ドライバ、RPM のアップデートやアプリケーションのインストールをおこなってください。

注意

■ VMware ESX/ESXi の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、ディスク複製インストールのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・VMware ESX Server 2.5.1 の場合
　-vmxnet
・VMware ESX 3.0.1/3.0.2/3.5、ESXi 3.5 の場合：
　-vmxnet
　-拡張 vmxnet
・VMware ESX 4.0、ESXi 4.0 の場合：
　-vmxnet 2
　-vmxnet 3
　-vmware 準仮想化
■ Hyper-V の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、ディスク複製インストールのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・ネットワーク アダプタ
・SCSI コントローラー

1.2.2　マスタコンピュータのバックアップ

■ Web コンソールで行います。
DPM のバックアップ/リストア機能でマスタコンピュータのハードディスクをバックアップします。

注意

必ず、ここでバックアップを取っておいてください。以降の作業を行うと、マスタコンピュータも再度セットアップをしなければ使用できなくなります。

ヒント

バックアップの実行方法については、本編「5. バックアップ/リストア」を参照してください。

1.2.3　マスタコンピュータのディスク複製用情報ファイル（パラメータファイル）の準備

ヒント

管理サーバのイメージビルダー又はイメージビルダー（リモートコンソール）で作業を行います。

マスタコンピュータは後述の「ディスク複製の準備」後、起動すると個別設定情報の適用ツールが実行されます。個別設定情報の適用処理を正常に終わらせるために、マスタコンピュータ用のディスク複製用情報ファイル（パラメータファイル）を作成します。

ヒント

ディスク複製用情報ファイル（パラメータファイル）の作成については、「ユーザーズガイド　応用編　3.2.2　ディスク複製用パラメータファイルの作成（Linux）」を参照してください。

重要

マスタコンピュータの再起動時に、作成したマスタコンピュータ用のディスク複製用パラメータファイルを使用します。マスタコンピュータの再起動が完了するまでは削除しないでください。

注意

DeploymentManager に登録している MAC アドレスを持つ LAN ボードには、固定 IP アドレス、DHCP サーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない場合があります。

1.2.4 ディスク複製の準備

■ マスタコンピュータで行います。
以下の手順で、ディスク複製の準備を行います。

注意

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 の場合は"/mnt"部を"/media"に読み替えて作業をすすめてください。

(1) マスタコンピュータに、root でログインしてください。

(2) インストール CD-ROM を CD-ROM ドライブにセットしてください。

(3) インストール CD-ROM をマウントしてください。
mount /mnt/cdrom

(4) カレントディレクトリを以下へ移動してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合 :
cd /mnt/cdrom/DPM/Linux/*クライアントのアーキテクチャ*/bin/linuxrep
EE/SE 製品の場合 :
cd /mnt/cdrom/Linux/*クライアントのアーキテクチャ*/bin/linuxrep

※「*クライアントのアーキテクチャ*」フォルダのフォルダ名は以下のようになります。
IPF アーキテクチャマシンの場合 : ia64
IA32、EM64T アーキテクチャマシンの場合 : ia32

例) # cd /mnt/cdrom/DPM/Linux/ia64/bin/linuxrep

(5) LinuxRepSetUp を実行してください。
./LinuxRepSetUp

(6) 管理サーバの入力要求が出力されます。

```
Enter the IP address of the management server.
>
```

(7) 管理サーバの IP アドレスを入力して「Enter」キーを押してください。

```
Enter the IP address of the management server.
>
192.168.0.1 ← 実際の環境に合わせてください
```

注意

- ディスク複製時のbondingドライバはサポートしていません。マスタからbonding設定を解除してください。解除しない場合、個性反映時に正しく動作しない場合があります。
- (7)の手順を完了後にLinuxRepSetUpを再度実行しないでください。ディスク複製イメージが正しく作成されない場合があります。

(8) マスタコンピュータにエイリアスインタフェースが設定されていると、ディスク複製後に IP アドレスの競合が発生しますので、以下の手順でエイリアスインタフェース設定ファイルを削除してください。

```
# cd /etc/sysconfig/network-scripts
# rm -f ifcfg-eth*:*
# rm -f ifcfg-bond*:*
```

注意

- LinuxRepSetUp を実行すると現在固定 IP アドレスに設定されているネットワーク設定が全て DHCP からの取得に変更されます。
- マスタコンピュータについても次回 OS 起動時に個性反映を行います。個性反映には本編「1.2.3 マスタコンピュータのディスク複製用情報ファイル(パラメータファイル)の準備」で作成したディスク複製用パラメータファイルを使用します。マスタコンピュータ用に適切な設定のパラメータファイルを作成してください。ディスク複製用パラメータファイル作成の詳細については、「ユーザーズガイド 応用編 3.2.2 ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux)」を参照してください。
- シャットダウンは自動で行われません。
- ディスク複製の準備を行った後では、DPM の管理サーバからのシャットダウンやシナリオによるシャットダウンは出来ません。電源 OFF を行う場合は、手動にて電源 OFF を行ってください。

1.2.5 マスタコンピュータのHDDバックアップ

■ Web コンソールで行います。
DPMのバックアップ/リストア機能でマスタコンピュータのハードディスクをバックアップします。バックアップ終了後、自動的にマスタコンピュータが再起動し、個別設定情報の適用を行います。

注意

- 必ず、本編「1.2.2 マスタコンピュータのバックアップ」で使用したファイルとは違うバックアップファイルとして保存してください。
- バックアップのシナリオ設定で、「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」を選択しないでください。選択した場合は、バックアップ終了後、手動で電源を入れてください。自動的にマスタコンピュータの個別設定情報の適用が行われます。
- マスタコンピュータの個別設定情報の適用でエラーが発生した場合は、本編「1.2.2 マスタコンピュータのバックアップ」でバックアップしておいたファイルをリストアして、マスタコンピュータを元の状態に戻してください。

ヒント

バックアップ用シナリオの作成については、本編 「5.1 バックアップシナリオファイルの作成」を参照してください。

1.2.6 複製するコンピュータのディスク複製用パラメータファイルの用意

■ 管理サーバのイメージビルダーまたはイメージビルダー(リモートコンソール)で行います。
マスタディスクを複製するコンピュータごとに、ディスク複製用パラメータファイルを用意します。このファイルを用意することで、それぞれのコンピュータ個別の設定を自動的に反映することが出来ます。

ヒント

「ディスク複製用パラメータファイルの作成」の詳細については、「ユーザーズガイド　応用編 3.2.2　ディスク複製用パラメータファイルの作成（Linux）」を参照してください。

1.2.7　ディスクイメージの配布

■ Web コンソールで行います。
DPM のバックアップ/リストア機能でリストアします。
ここで使用するイメージファイルは、本編「1.2.5. マスタコンピュータの HDD バックアップ」でバックアップしたファイルを使用してください。
リストアが完了すると、あらかじめ用意したディスク複製用パラメータファイルの内容に従って、自動的に各コンピュータの個別設定情報が反映されます。このとき、自動的に再起動を何度か繰返します。

ヒント

リストア用シナリオの作成については、本編「5.3 リストアシナリオファイルの作成」を参照してください。

重要

■ リストアのシナリオを作成するとき、オプションタブの「実行後に電源を切断する」にチェックを入れないでください。
■ ディスク複製後、LinuxOS 起動時に以下のようなメッセージが表示されたり、X-Window が起動しなくなる場合があります。

"ホスト名"※ の URL が見つかりませんでした。そのため、
GNOME が正しく動作しなくなるおそれがあります。
/etc/hosts ファイルに "ホスト名"※ を追加することで
この問題を解決できる場合があります。

※"ホスト名"：ディスク複製後の各コンピュータのホスト名

これは、/etc/hostsファイルにホスト名が登録されていないことによるものです。この場合には、/etc/hostsファイルにホスト名を登録してください。
ご使用の環境が固定 IP アドレスの場合、以下のような行を登録してください。
（例）192.168.0.1 servername
DHCP の場合は、ループバックアドレスに登録してください。
（例）127.0.0.1 localdomain.localhost localhost servername

注意

ディスク複製では、Web コンソールに登録されているコンピュータの MAC アドレスと同じ名称のディスク複製用情報ファイルを使用します。

以上で、ディスク複製による OS セットアップの完了です。本編「1.2.2 マスタコンピュータのバックアップ」でバックアップしたファイルを以降使用する必要がない場合は、削除しても構いません。

2　OSクリアインストール

■ OS クリアインストールは、本章で説明する OS イメージとセットアップパラメータファイルを使用して、管理対象コンピュータに OS を自動セットアップします。
OS イメージとセットアップパラメータファイルの組み合わせは、DPM の同一バージョンで作成して使用することを推奨します。
本バージョンで作成した OS イメージと旧バージョン(※)で作成したセットアップパラメータファイルの組み合わせ、または、旧バージョン(※)で作成した OS イメージと、本バージョンで作成したセットアップパラメータファイルの組み合わせを使用する場合は、ご使用の旧バージョンでサポートしている機能の範囲内で使用することが可能です。(DPM のバージョンアップにより追加された機能については、使用できません。)
※DPM Ver4.0 以降が対象となります。

2.1　OSクリアインストール(Windows)

■ DPMからWindows OSをインストールする方法について説明します。Windowsのインストールでは、コンピュータ毎のOS設定(ホスト名等)は、あらかじめパラメータファイルを作成しておくことで自動セットアップが可能です。

重要

OSクリアインストールをサポートするWindows OSは以下のとおりです。
Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition
Windows Server 2003 R2 Standard Edition、Enterprise Edition
Windows 2000 Server、Advanced Server、Professional
Windows XP Professional
上記以外のWindows OSはDPMからOSクリアインストールすることはできません。

注意

■ DPMを使用してOSのインストールを行う場合は、インストール対象以外のHDDまたは、外付けのMOなどの装置を接続しないようにしてください。インストールに失敗する場合があります。
■ 「ディスクの管理」を使用してミラー化されているボリュームにインストールする場合は、インストールの実行前にミラー化を無効にして、ベーシックディスクに戻し、インストール完了後に再度ミラー化してください。
■ ダイナミックディスクにアップグレードしたHDDについては、既存のパーティションを残したまま再インストールすることはできません。Windows OSをインストールするときに、「既存のパーティション」を選択しないでください。
■ Windows OSをインストールするときに、「既存のパーティション」を選択すると、最初のパーティションの情報はフォーマットされ、すべてなくなります。それ以外のパーティションの情報は保持されます。
■ イメージファイルの登録は管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)がインストールされているコンピュータから行ってください。
■ OSクリアインストールでは,「ネットワークとダイヤルアップ接続」に登録されている接続名が英語表記(例:Local Area Connection)に設定されます。
必要に応じてOSクリアインストール後「ネットワークとダイヤルアップ接続」に登録されている接続名を変更してください。
■ VMware ESX/ESXi の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、OS クリアインストールのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・VMware ESX Server 2.5.1 の場合
　−vmxnet
・VMware ESX 3.0.1/3.0.2/3.5、ESXi 3.5 の場合:
　−vmxnet
　−拡張 vmxnet
・VMware ESX 4.0、ESXi 4.0 の場合:

−vmxnet 2
−vmxnet 3
−vmware 準仮想化

■ Hyper-V の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、OS クリアインストールシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・ネットワーク アダプタ
・SCSI コントローラー

■ VMware ESX/ESXiの仮想マシンのネットワークドライバにvmxnetドライバを使用している場合、OSクリアインストールシナリオは実行できません。
OSクリアインストールシナリオを実行する場合、仮想マシンはネットワークドライバとしてvlanceドライバを使用している必要があります。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザガイド等を参照ください。

■ VMware ESX/ESXiの仮想マシンのストレージコントローラとしてvmxlsilogicを使用している場合、Windows 2000 Server、Advanced ServerのOSクリアインストールシナリオは実行できません。
仮想マシンに対してDPMを使用してWindows 2000 Server、Advanced Serverのインストールを行う場合には、ストレージコントローラをvmxbuslogicに変更してインストールを行ってください。

■ Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Editionをインストールする場合、シナリオにサービスパックを設定しないでください。Windows Server 2003は、デフォルトで一定時間が経過するとコンピュータのロック状態になります。サービスパックの適用には、ある程度の時間を要するためこのロック状態になる場合がありますが、ロック状態ではDPMからシャットダウンができず自動インストールが継続できなくなります。サービスパックのインストールは、OSクリアインストールとは別のシナリオで行ってください。

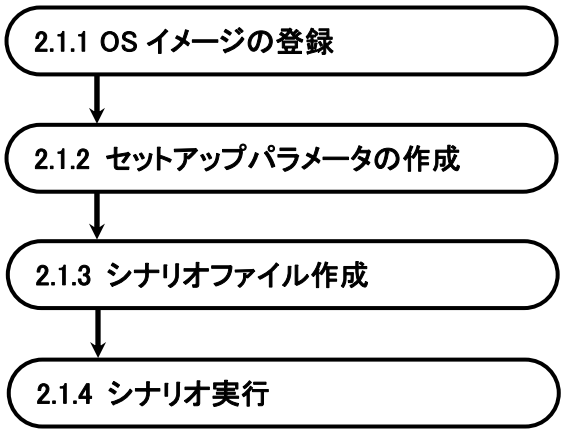
■ Windows Server 2003 R2については、「ユーザーズガイド 付録」および、製品サイト(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/)を参照してください。

■ インストール対象コンピュータのBIOSで「Console Redirection」設定が有効(Enable)になっている場合、Windowsのセットアップ中にパスワード入力画面が表示されることがあります。この場合、セットアップパラメータファイルに設定しているパスワードを入力してインストールを続行してください。
BIOSの「Console Redirection」機能はコンソールレス運用を行う設定になります。
コンソールレスの運用をしない場合は、無効(Disable)にすることでパスワード画面は表示されなくなります。BIOSの設定方法については、対象コンピュータに添付のマニュアルを参照してください。

■ OSの種類(例えば、Windows Server 2003、Windows Server 2008等)によってメッセージ表記やデザインが異なる場合がありますが、基本的な手順は同じになります。

■ Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition以外は以下にもご注意ください。
・Windows OSをインストールするときに、「新規パーティション」を選択した場合、パーティションサイズに120GB以上の値を指定しないでください。
・実領域が120GB以上になる場合は、パーティションサイズに「全領域」を指定しないでください。

シナリオ実行までの流れ



2.1.1 OSイメージの登録

■ ここでは、Windows OS のイメージを登録する方法について説明します。

ヒント　Windows OS のイメージは最大 999 件まで登録が可能です。

(1) インストールする OS の CD-ROM を管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータの CD ドライブにセットします。

注意　コンピュータに添付されているバックアップ/リカバリ CD はご使用になれない場合があります。
CD-ROM が i386 フォルダを含む形式であるものなら、インストール可能です。

(2) 「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダー」を選択します。

(3) 「イメージビルダー」画面で「オペレーティングシステムの登録」をクリックします。「オペレーティングシステムの登録」画面が表示されます。

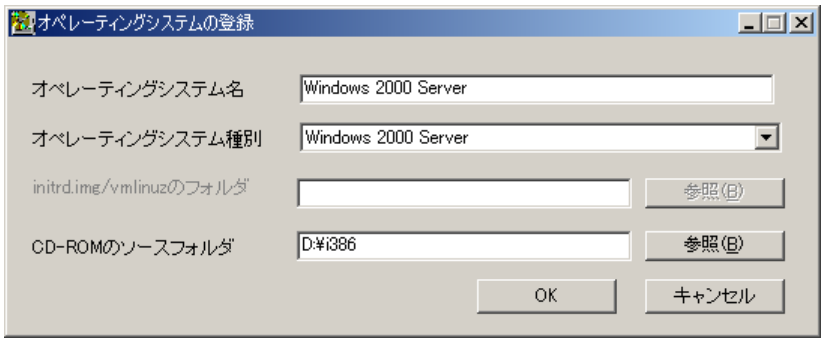
(4) 「オペレーティングシステム名」を入力し、「オペレーティングシステム種別」をプルダウンメニューから選択します。

■ オペレーティングシステム名
126 バイト(半角 126 文字、全角 63 文字)以内で入力できます。ただし、「¥」、「;」、「″」は使用できません。また「Linux」「ks」「daemon」「pxelinux.～」という名前では登録できません。
また指定した名前が既に LinuxOS として登録されている場合も(上書き)登録できません。

■ オペレーティングシステム種別
▼ボタンをクリックしリストから選択します。

■ CD-ROM のソースフォルダ
OS が格納されているフォルダを指定します。「参照」をクリックし指定することができます。インストールする OS が Windows の場合は「CD-ROM のドライブ名 :¥ i386」を指定してください。

下図は、Windows 2000 Server を登録するときの例です。

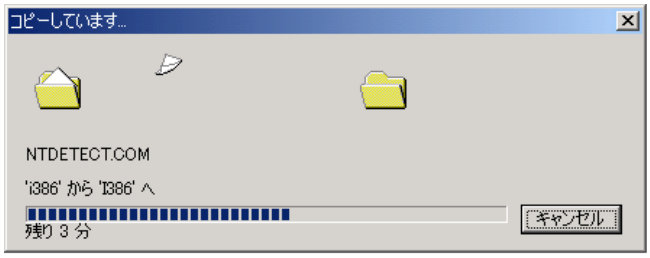


注意

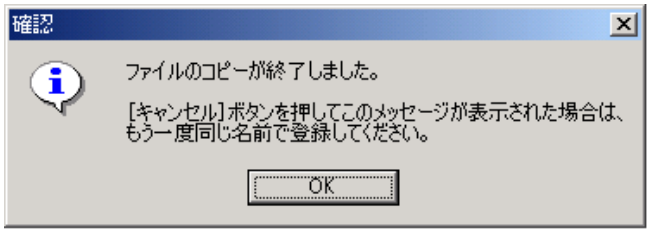
- 「CD-ROMのソースフォルダ」に管理サーバとは別のコンピュータに接続されているCD-ROM、HDDから登録するときは、あらかじめ「ネットワークドライブの割り当て」を行い、ドライブレターを割り当ててください。
- テキストボックスにメモ帳などからコピーして貼り付ける場合、コピーの仕方によっては末尾に改行コードが含まれている場合があります。この場合は該当の改行が文字化けして表示されますので、文字化けの箇所を削除してください。文字化けの箇所を削除せずに登録すると、改行コードは半角スペースに置換されて登録されます。

(5) 「OK」をクリックしますと使用許諾契約が表示されます。

(6) 同意する場合、「OK」をクリックしてください。コピーが開始されます。



(7) コピーが完了したら「OK」をクリックして、「オペレーティングシステムの登録」画面に戻り、「キャンセル」をクリックして「イメージビルダー」画面に戻ってください。



2.1.2 セットアップパラメータの作成

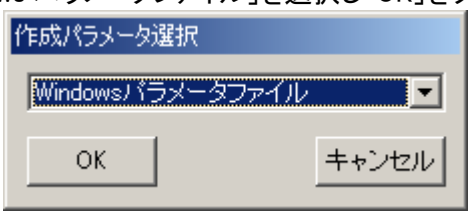
■ セットアップパラメータとは、通常Windowsのインストールのセットアップ時に必要な各項目をあらかじめファイルとして保存しておくことで、OS の無人インストールを可能にするものです。ここでは、そのセットアップパラメータの作成方法について説明します。

注意

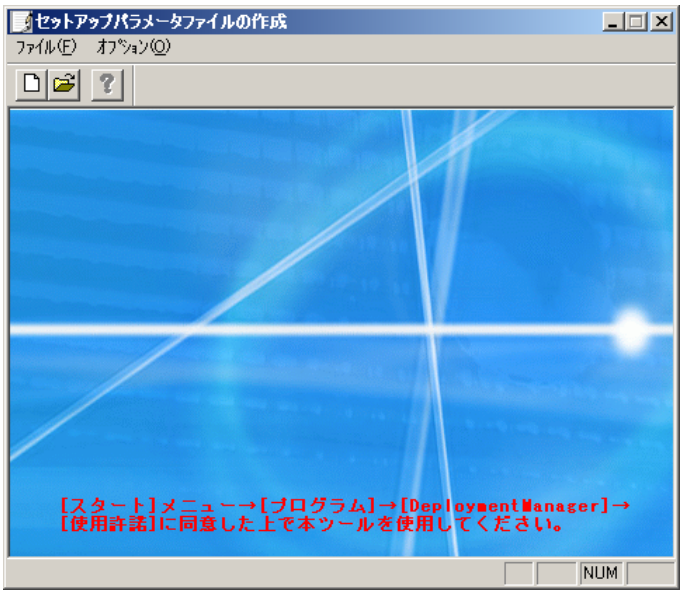
- Windows OS の種類によって入力する項目が違います。
- 項目によっては他の項目のチェックが必要な場合があります。画面にそのようなメッセージが表示された場合は、その画面の指示に従ってください。

(1) 管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダー」を選択します。

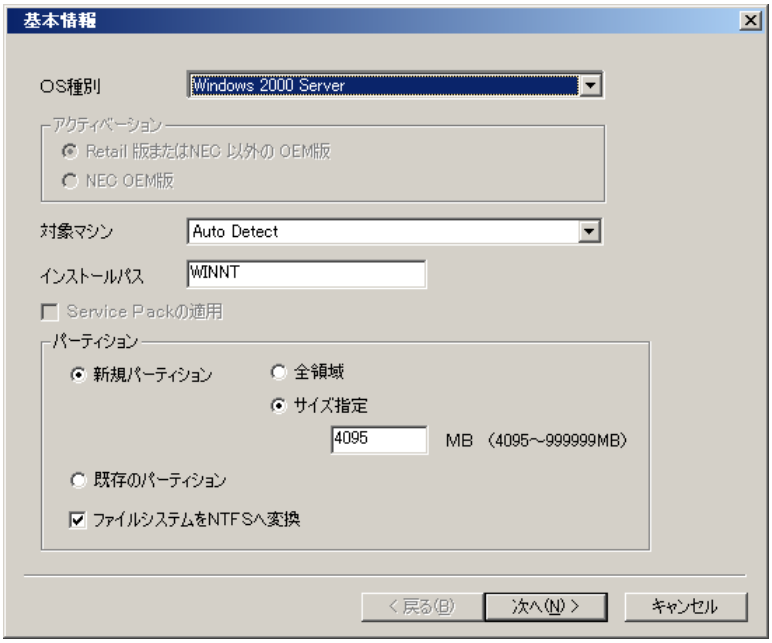
(2) 「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。「作成パラメータ選択」画面が表示されますので「Windows パラメータファイル」を選択し「OK」をクリックします。



(3) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されます。



(4) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「ファイル」メニューから「情報ファイル新規作成」を選択します。「基本情報」画面が表示されます。



■ OS 種別

インストール時の OS 種別を選択します。以下の OS を選択することができます。

・IA32（Intel Architecture 32bit）アーキテクチャ

- Windows 2000 Professional
- Windows 2000 Server
- Windows 2000 Advanced Server
- Windows XP Professional
- Windows Server 2003 Standard Edition
- Windows Server 2003 Enterprise Edition

・EM64T（Extended Memory 64-bit Technology）アーキテクチャ

- Windows Server 2003 Standard x64 Edition
- Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition

・IPF（Itanium Processor Family）アーキテクチャ

- Windows Server 2003 Standard Edition
- Windows Server 2003 Enterprise Edition

注意

■ 「OS の種別」の変更を行うと設定情報は維持されません。各項目が正しく設定されているかを必ず確認してください。

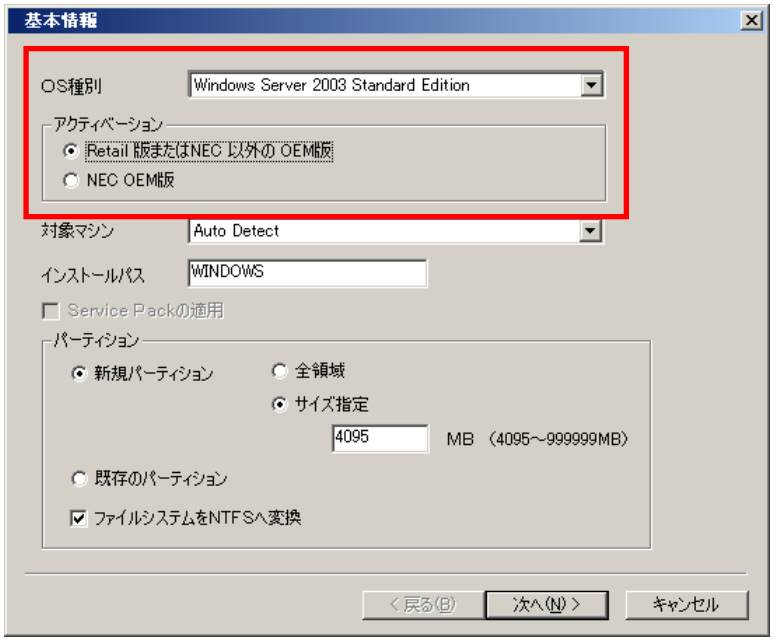
■ 「OS 種別」に以下が表示されますが、、本バージョンではサポートしておりません。

・Windows Server 2003 Datacenter Edition

・Windows Server 2003 Datacenter x64 Edition

以下の OS を選択した場合は、「アクティベーション」が有効になり、「Retail 版または NEC 以外の OEM 版」、「NEC OEM 版」のいずれかを選択します。

- Windows XP Professional
- Windows Server 2003 Standard Edition
- Windows Server 2003 Enterprise Edition
- Windows Server 2003 Standard x64 Edition
- Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition



注意

■ Express5800/50,100,400 シリーズのプレインストールモデルに添付されているバックアップ CD-ROM をご使用になるか、弊社から OS を購入頂いた場合のみ「NEC OEM 版」が選択可能です。

■ EM64T アーキテクチャマシンにて、管理サーバ for DPM を運用している場合は、以下に注意してください。

・「NEC OEM 版」を指定したパラメータファイルでの OS クリアインストール機能は、未サポートとなります。「Retail 版または NEC 以外の OEM 版」を選択して、OS 媒体またはハードウェアに添付のプロダクトキーを使用してパラメータファイルを作成してください。

・下記の弊社製 OS 媒体に対しては、「NEC OEM 版」を選択してパラメータは作成はできません。これらの OS に対してディスク複製 OS インストールを行う場合は、「Retail 版または NEC 以外の OEM 版」を選択し、OS 媒体またはハードウェアに添付のプロダクトキーを使用してパラメータファイルを作成してください。

- Windows XP Professional(SP なし、SP1)(CD 型番:243-110442-007-A)
- Windows XP Professional w/SP2(2006/06 以降除く)(CD 型番:243-110442-007-C)
- Windows Server 2003 Standard Edition(SP なし)(CD 型番:243-110442-100-A/C)
- Windows Server 2003 Enterprise Edition(SP なし)(CD 型番:243-110442-101-A/B/C)

「アクティベーション」で「NEC OEM 版」を選択した場合は、以下の画面が表示されますので、OS の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、「OK」をクリックします。

■ 対象マシン

Windows OS のインストール対象となるコンピュータを指定します。「Auto Detect」のみ指定可能です。

■ インストールパス

Windows 2000 Professional、Server、Advanced Server の場合は「WINNT」、その他の OS の場合は「WINDOWS」を指定してください。

■ パーティション

OS インストールのシナリオ実行を行うときの状況にあわせて「新規パーティション」または「既存のパーティション」を選択します。

◆ 「新規パーティション」を選択してシナリオを実行すると、コンピュータにパーティションが作成されていた場合はすべて削除した後、新規にパーティションを作成してその場所に OS をインストールします。
パーティションのサイズは「全領域」または「サイズ指定」(4095MB～999999MB)を選択します。「全領域」を選択すると HDD にパーティションを作成せずにディスク全体にインストールを行います。「サイズ指定」を選択しサイズを入力すると、そのパーティションサイズに OS がインストールされます。

ヒント

パーティションに「新規パーティション」を選択した場合は、OS をクリーンなディスクにインストールするため、 シナリオ作成時に「HW 設定」の「DeleteAllPartition.dat」も 同時に指定してください。

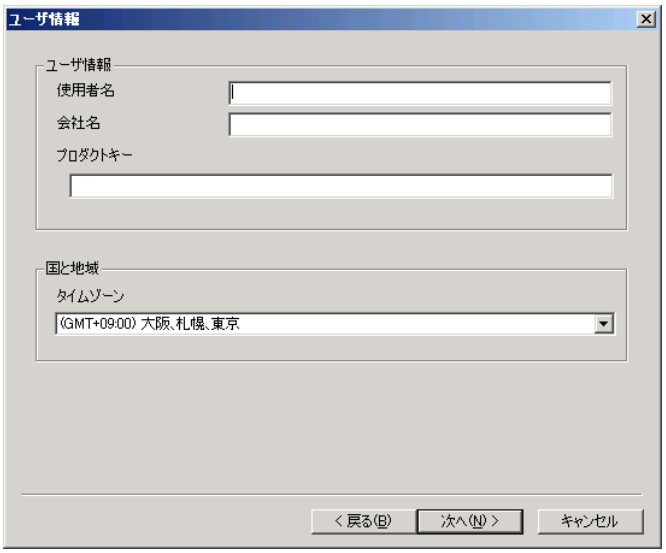
注意

Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition以外でWindows OSをインストールするときに、「新規パーティション」を選択した場合、パーティションサイズに120GB以上の値を指定しないでください。実領域が120GB以上になる場合は、パーティションサイズに「全領域」を指定しないでください。

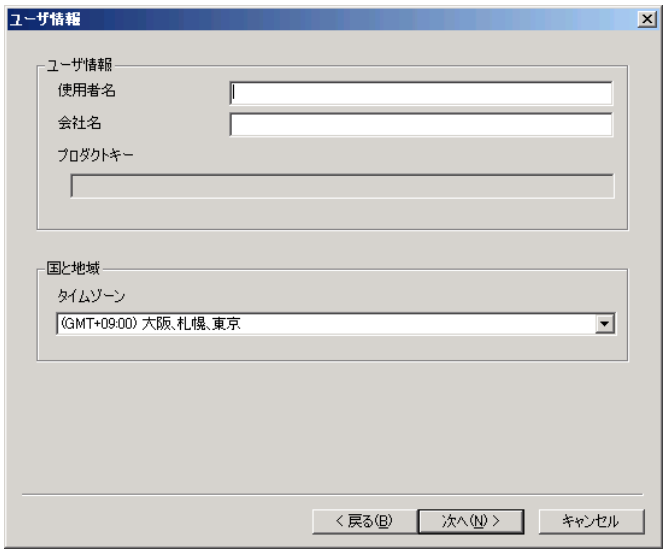
- ◆ 「既存のパーティション」を選択してシナリオを実行すると、コンピュータの保守用パーティションを除いた先頭パーティションにOSインストールが行われます。それ以外のパーティションには影響ありません。
- ◆ OS をインストールする既存パーティションのサイズは、4000MB 以上であることが必要です。

「新規パーティション」を選択する場合は、「ファイルシステムを NTFS に変換」を指定してください。

(5) 「基本情報」画面の設定後、「次へ」をクリックします。「ユーザ情報」画面が表示されます。



・Windows 2000 Professional
・Windows 2000 Server
・Windows 2000 Advanced Server
・Retail 版または NEC 以外の OEM 版
選択時



「NEC　OEM 版」 選択時

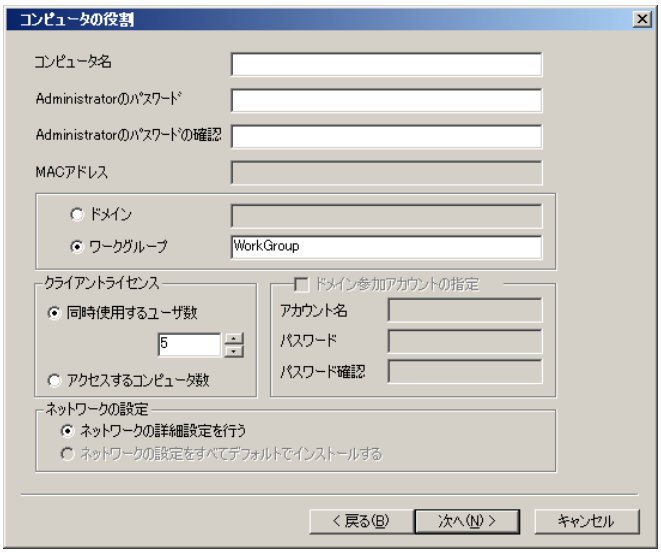
■ 使用者名
コンピュータの使用者を 50 バイト以内で入力します。ただし、「,」カンマは使用できません。
入力は必須です。

■ 会社名
会社名を 50 バイト以内で入力します。ただし、「,」カンマは使用できません。

■ プロダクトキー
- Windows OS のプロダクトキーを入力します。
  半角で「XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX」の形式で入力してください。
  「NEC　OEM 版」 選択時には、入力不要です。
- プレインストール装置の場合は、コンピュータ本体に貼り付けられているシールのプロダクトキーをご入力ください。マイクロソフト社とボリュームライセンス契約を結ばれ、専用媒体でインストールを行なった場合は、媒体に添付されているプロダクトキーを入力してください。

■ タイムゾーン
タイムゾーンを指定します。リストボックスから該当する地域を選択してください。

(6) 「ユーザ情報」画面を設定後、「次へ」をクリックします。「コンピュータの役割」画面が表示されます。



■ コンピュータ名

重要 DPM に登録しているコンピュータ名にしてください。

コンピュータ名を 15 バイト以内で入力します。入力は必須です。
名前は、他のコンピュータ名、ドメイン/ワークグループ名と同じにならないようにしてください。

コンピュータ名には以下の文字は指定できません。
「.」ピリオド、「,」カンマ、「`」、「~」、「!」、「@」、「#」、「$」、「&」、「*」、「%」、「=」、「+」、「{」、「}」、「¥」、「|」、「;」、「:」、「'」、「"」、「<」、「>」、「/」、「?」、半角スペース、「[」、「]」、「^」、「(」、「)」
また、コンピュータ名に数字のみの名前は指定できません。

■ 管理者(Administrator)権限のパスワード
管理者(Administrator)権限のパスワードを設定する場合は入力してください。14 文字以内で入力してください。
管理者(Administrator)権限のパスワードには以下の文字を指定することはできません。
「,」カンマ、「"」、半角カナ、全角文字
管理者(Administrator)権限のパスワードは省略可能です。

注意 「ドメイン」の設定をする場合はドメインコントローラのパスワード設定のポリシーに従って設定してください。従わない場合、OS インストール時、ディスク複製 OS インストール時の途中からログイン毎にログイン画面で止まってしまいます。その場合、手動でログインしてください。

ヒント パスワードの設定は、各 OS のパスワード設定ポリシーも参照して、OS に設定可能なパスワードにしてください。

■ 管理者(Administrator)権限のパスワードの確認
「管理者(Administrator)権限のパスワード」で設定したパスワードと同じ値を入力してください。同じでない場合は次へ進むことができません。

■ MAC アドレス
OS インストールのパラメータファイルには必要ありません。ディスク複製時に使用します。

■ ドメイン/ワークグループ

Windows OS インストール時のドメイン、ワークグループの設定を行います。「ドメイン」または「ワークグループ」を選択後、対応する名称を入力します。

ドメイン名には以下の文字を指定することはできません。

「,」カンマ、「″」、「¥」、「/」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「 」半角スペース、「[」、「]」

ワークグループ名には以下の文字を指定することはできません。

「,」カンマ、「″」、「¥」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「+」、「=」

注意 「ドメイン」の設定をする場合は「管理者(Administrator)権限のパスワード」をドメインコントローラのパスワード設定のポリシーに従って設定してください。OS インストール時、ディスク複製 OS インストール時のログイン時に途中で止まってしまいます。その場合、手動でログインしてください。

■ クライアントライセンス

クライアントライセンスを「同時使用するユーザ数」、「アクセスするコンピュータ数」のいずれかから選択してください。「同時使用するユーザ数」の場合のみ、ユーザ数を指定します。

■ ドメイン参加アカウントの指定

「ドメイン」を選択した場合のみ入力が可能です。

ドメイン参加時のアカウント、パスワードの設定を行う場合はチェックを入れてください。

チェックを入れた場合、「アカウント名」、「パスワード」、「パスワード確認」の設定が可能になります。

「アカウント名」には 32 バイト以内で入力します。以下の文字を指定することはできません。

「,」カンマ、「″」、「/」、「;」、「:」、「|」、「*」、「?」、「<」、「>」、「+」、「=」、「[」、「]」

「パスワード」は 14 文字以内で入力してください。

「パスワード確認」は「パスワード」で設定したパスワードと同じ値を入力してください。

「パスワード」には以下の文字を指定することはできません。

「,」カンマ、「″」、半角カナ、全角文字

注意 「パスワード」は省略しないでください。省略した場合、シナリオ実行エラーとなります。

■ ネットワークの設定

「ネットワークの詳細設定を行う」のみ選択できます。

(7) 「コンピュータの役割」画面を設定後、「次へ」をクリックします。「ドライバの設定」画面が表示されます。

■ ドライバ
接続するドライバを選択します。「Auto Detect」のみ選択可能です。「Auto Detect」はインストール中に接続されているボードを「自動検出」します。

■ 色数
色数をリストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。

「16色」、「256色」、「High Color(16bit)」、「True Color(24bit)」、「True Color(32bit)、

「デフォルトを使用」

設定された値がコンピュータで使用できない値の場合は自動的に「デフォルトを使用」と同じ状態となります。

■ 解像度
解像度をリストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。

「640x480」、「800x600」、「1024x768」、「1280x1024」、「1600x1200」、「デフォルトを使用」

設定された値がコンピュータで使用できない値の場合は自動的に「デフォルトを使用」と同じ状態となります。

■ リフレッシュレート
リストボックスから選択します。以下を選択することが可能です。

「60 Hertz」、「70 Hertz」、「72 Hertz」、「75 Hertz」、「85 Hertz」、「デフォルトを使用」

設定された値がコンピュータで使用できない値の場合は自動的に「デフォルトを使用」と同じ状態となります。

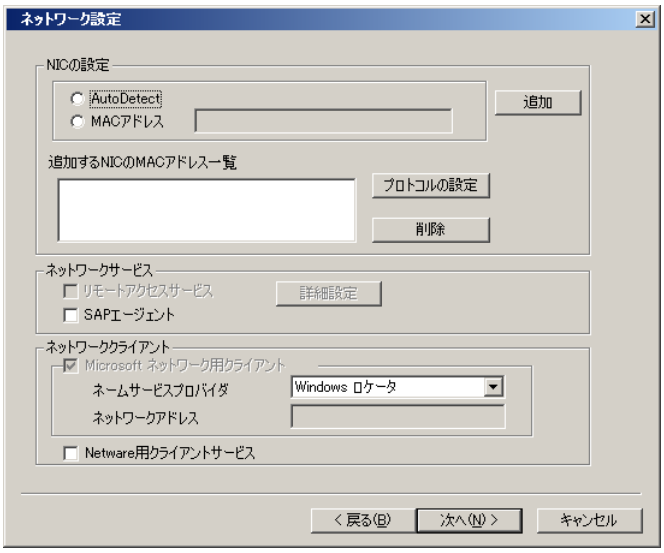
重要

色数、解像度の変更を行うにはグラフィックアクセラレータドライバのインストールを行う必要があります。
詳細については製品添付のユーザーズガイドを参照してください。

注意

OS 標準のドライバで動作しないグラフィックアクセラレータボードの場合、ディスプレイの設定が有効になりません。インストール後に手動で変更してください。

(8) 「ドライバの設定」画面を設定後、「次へ」をクリックします。「ネットワーク設定」画面が表示されます。



■ ネットワークサービス
インストールするサービスを選択します。「SAP エージェント」のみ選択可能です。

■ ネットワーククライアント

インストールするネットワーククライアントの設定を行います。
インストール可能なネットワーククライアントは以下の通りです。

- Microsoft ネットワーク用クライアント
- Netware 用ゲートウェイ(とクライアント)サービス
  (Windows 2000 Server、Advanced Server のみ)
- Netware 用クライアントサービス
  (Windows 2000 Professional、Windows XP Professional、
  Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition)

ネームサービスプロバイダはリストから選択してください。以下を指定することが可能です。
「DCE セル ディレクトリ サービス」を選択した場合、ネットワークアドレスの入力は必須です。ネットワークアドレスは IP アドレス形式で指定してください。

- Windows ロケータ
- DCE セル ディレクトリ サービス

■ NIC の設定

OS インストール時に LAN ボードに対してプロトコルの設定、IP アドレス、DNS、WINS の設定を行うことができます。これらの設定はコンピュータの LAN ボードを直接指定して行うことができます。ただし LAN ボードを指定する場合には MAC アドレスの入力が必須です。

1. LAN ボードの追加を行います。
   LAN ボードを指定して設定を行うか行わないかで設定が異なります。

◆ LAN ボードを指定する場合

「MAC アドレス」を選択します。選択後、ボックスに MAC アドレスを入力します。MAC アドレスの入力は「XX-XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。入力後、「追加」をクリックします。入力した MAC アドレスが「追加する LAN ボードの MAC アドレス一覧」ボックスに追加されます。
この設定を行ったパラメータファイルを使用して OS インストールを行うと、指定した MAC アドレスに設定が行われます。

◆ LAN ボードを指定しない場合

「AutoDetect」を選択して「追加」をクリックします。
この設定を行ったパラメータファイルを使用して OS インストールを行うと、コンピュータに LAN ボードが複数ある場合はどの LAN ボードに対して設定が行われるかはわかりません。
「AutoDetect x」(x は 1～4 の数字)が「追加する LAN ボードの MAC アドレス一覧」ボックスに追加されます。

重要

- LAN ボードは一つ以上指定してください。
- LAN ボードは MAC アドレスと AutoDetect をあわせて 4 つまで追加することができます。
- ここで設定を行わなかった LAN ボードは自動的に DHCP による IP アドレス取得を行う設定になります。

注意

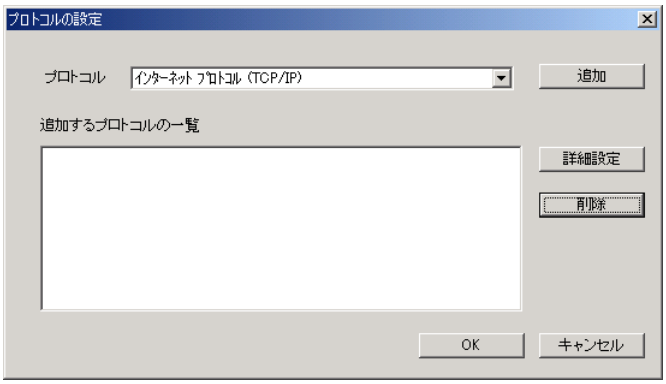
DPM に登録している MAC アドレスを持つ LAN ボードには、固定 IP アドレス、DHCP サーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない場合があります。

ヒント

「追加するNICのMACアドレス一覧」ボックスに追加したMACアドレスまたはAutoDetectを削除する場合は、MACアドレスまたはAutoDetectを選択したあと「削除」をクリックします。

2. LAN ボードに対するプロトコルの設定を行います。

1 の操作のあと「プロトコルの設定」をクリックします。「プロトコルの設定」が表示されます。



プロトコルのリストボックスから LAN ボードに設定するプロトコルを選択して「追加」をクリックします。「追加するプロトコルの一覧」ボックスに追加されます。

追加可能なプロトコルは以下となります。ただし、OS ごとに選択可能な項目は変わります。

- インターネット プロトコル(TCP/IP)
- NWLink IPX/SPX/NetBIOS 互換トランスポート プロトコル
- Apple Talk プロトコル
- ネットワーク モニタ ドライバ
- NetBEUI プロトコル
- DLC プロトコル
- Streams 環境

重要

■ プロトコルは 4 つまで追加することができます。

■ インターネット プロトコル(TCP/IP)を追加した場合、「追加するプロトコルの一覧」ボックスには 1 で入力した LAN ボードの数だけインターネット プロトコル(TCP/IP)が追加され、その横に LAN ボードが MAC アドレスまたは AutoDetect が追記されます。
1 で LAN ボードを「00-00-00-00-00-00」と「AutoDetect1」の 2 つ追加していた場合は以下のようになります。

追加するプロトコルの一覧

インターネットプロトコル(TCP/IP)	00-00-00-00-00-00
インターネットプロトコル(TCP/IP)	AutoDetect1

ヒント

「追加するプロトコルの一覧」ボックスに追加したプロトコルを削除する場合は、プロトコルを選択したあと「削除」をクリックします。

3. 各 LAN ボードに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定を行います。

2 でインターネット プロトコル(TCP/IP)を追加した場合、IP アドレス、DNS、WINS、スコープ ID の詳細設定を行うことができます。

◆ 設定を行う場合

「追加するプロトコルの一覧」ボックスから詳細設定を行うインターネット プロトコル(TCP/IP)の LAN ボードを指定して「詳細設定」をクリックします。「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面が表示されます。設定内容につきましては 4～11 を参照してください。

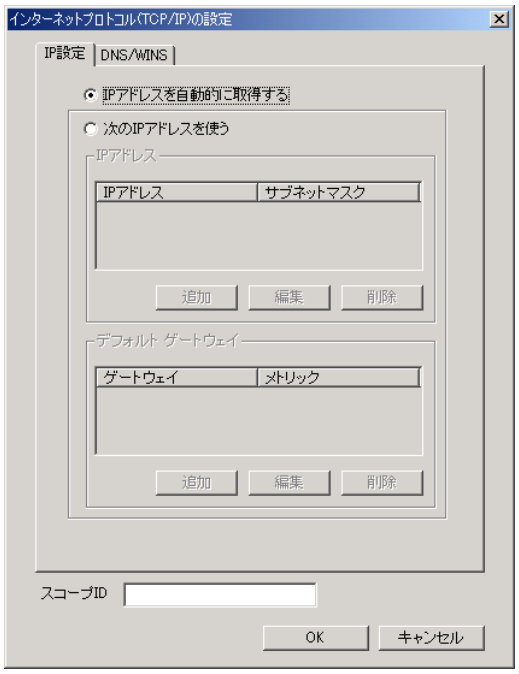
ヒント

複数の LAN ボードに対して設定を行う場合は 3～11 を繰り返し行ってください。

◆ 設定を行わない場合

行わない場合、IP アドレス、DNS、WINS の設定はすべてデフォルトの「自動的に取得する」となります。スコープ ID の値は反映されません。
以降の設定に関しましては 12 に進んでください。

4. 「インターネット プロトコル（TCP/IP）の設定」画面の「IP 設定」タブの設定を行います。



「IP 設定」タブでは IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。

◆ IP アドレスを自動的に取得する場合

「IP アドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。デフォルトはこの設定になっています。

◆ IP アドレスの値を設定する場合

「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れます。この値にチェックを入れると、IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。詳細な内容に関しては 5～6 を参照してください。

注意

Web コンソールの「設定」メニュー→「詳細設定」→「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」にチェックを入れて運用する場合、設定された IP アドレスで管理サーバと通信できないと、シナリオ実行完了と検出されない場合があります。
正しい IP アドレスを設定するか、シナリオを作成するときに「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」を設定してください。
「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」にチェックを入れない場合は IP アドレスに関係なくシナリオ実行の終了を検出することが出来ます。

5. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の IP アドレス、サブネットマスクを指定します。
「IP アドレス」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP アドレス」画面が表示されます。

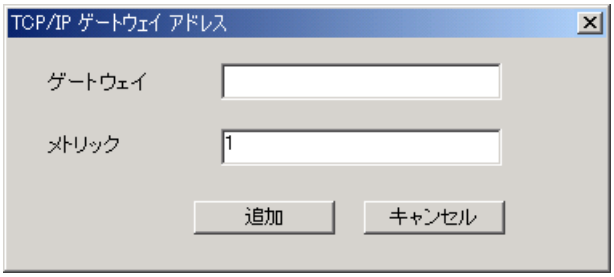
指定する IP アドレス、サブネットマスクを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例)IP アドレス:192.168.0.1
サブネットマスク:255.255.0.0

IP アドレス、サブネットマスクを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「IP アドレス」ボックスに指定した IP アドレスとサブネットマスクが追加されます。

ヒント

- IPアドレス、サブネットマスクは各LANボードに対して最大4つまで追加することができます。
- 「IP アドレス」ボックスに追加された IP アドレス、サブネットマスクを編集する場合は、IP アドレス、サブネットマスクを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP アドレス」画面が表示され、編集することができます。
- 「IP アドレス」ボックスに追加された IP アドレス、サブネットマスクを削除する場合は、IP アドレス、サブネットマスクを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した IP アドレス、サブネットマスクが削除されます。

6. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面のゲートウェイ、メトリックを指定します。
「デフォルト ゲートウェイ」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示されます。



指定するゲートウェイ、メトリックを入力します。
ゲートウェイの入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例) 255.255.0.0

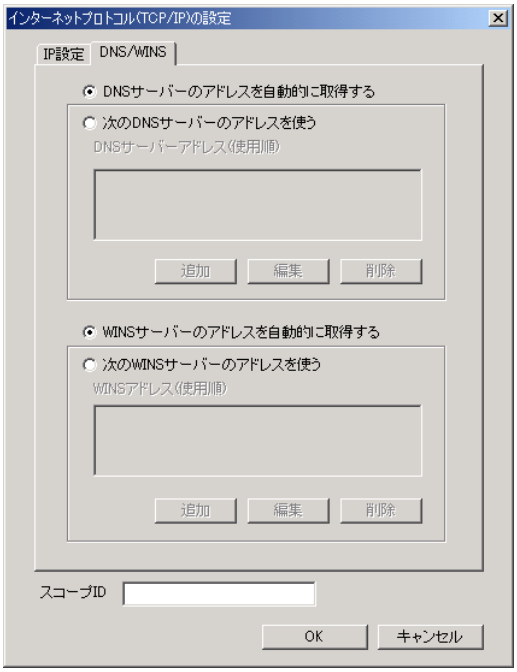
メトリックは数字を入力します。「1」から「9999」の範囲で入力ができます。デフォルトは「1」です。

ゲートウェイ、メトリックを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに指定したゲートウェイとメトリックが追加されます。

ヒント

- ゲートウェイ、メトリックは最大 4 つまで追加することができます。
- 「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに追加されたゲートウェイ、メトリックを編集する場合は、ゲートウェイ、メトリックを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示され、編集することができます。
- 「デフォルト ゲートウェイ」ボックスに追加されたゲートウェイ、メトリックを削除する場合は、ゲートウェイ、メトリックを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定したゲートウェイ、メトリックが削除されます。

7. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「DNS/WINS」タブの設定を行います。



「DNS/WINS」タブでは DNS、WINS の設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。

◆ DNS サーバ、WINS サーバのアドレスを自動的に取得する場合

DNS サーバの場合は「DNS サーバーのアドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。
WINS サーバの場合は「WINS サーバーのアドレスを自動的に取得する」にチェックを入れます。
DNS、WINS ともにデフォルトはこの設定になっています。

◆ DNS サーバ、WINS サーバの IP アドレスの値を設定する場合

DNS サーバの場合は「次の DNS サーバーのアドレスを使う」にチェックを入れます。WINS サーバの場合は「次の WINS サーバーのアドレスを使う」にチェックを入れます。
この値にチェックを入れると、DNS、WINS アドレスの設定を行うことができます。詳細な内容に関しては DNS の場合は 8 を、WINS の場合は 9 を参照してください。

8. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の DNS サーバのアドレスを指定します。

「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS/WINS」タブを選択し「次の DNS サーバのアドレスを使う」を選択した後、「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP DNS サーバー」画面が表示されます。

指定する DNS サーバーのアドレスを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例)192.168.0.250

DNS サーバーのアドレスを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに指定した DNS サーバーのアドレスが追加されます。

ヒント

- DNS サーバーのアドレスは最大 4 つまで追加することができます。
- 「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに追加された DNS サーバーのアドレスを編集する場合は、DNS サーバーのアドレスを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP DNS サーバー」画面が表示され、編集することができます。
- 「DNS サーバーアドレス(使用順)」ボックスに追加された DNS サーバーのアドレスを削除する場合は、DNS サーバーのアドレスを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した DNS サーバーのアドレスが削除されます。

9. 「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の WINS サーバのアドレスを指定します。

「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「DNS/WINS」タブを選択し「次の WINS サーバのアドレスを使う」を選択した後、「WINS アドレス(使用順)」ボックスの「追加」をクリックします。「TCP/IP WINS サーバー」画面が表示されます。

指定する WINS サーバのアドレスを入力します。
入力形式は「xxx xxx xxx xxx」となります。
例) 192.168.125.30

WINS サーバのアドレスを入力したあと「追加」をクリックします。「インターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定」画面の「WINS アドレス(使用順)」ボックスに指定した WINS サーバのアドレスが追加されます。

ヒント

- WINS サーバのアドレスは最大 4 つまで追加することができます。
- 「WINS アドレス(使用順)」ボックスに追加された WINS サーバのアドレスを編集する場合は、WINS サーバのアドレスを選択した後、「編集」をクリックしてください。「TCP/IP WINS サーバー」画面が表示され、編集することができます。
- 「WINS アドレス(使用順)」ボックスに追加された WINS サーバのアドレスを削除する場合は、WINS サーバのアドレスを選択した後、「削除」をクリックしてください。指定した WINS サーバのアドレスが削除されます。

10. スコープ ID の設定を行います。省略可能です。

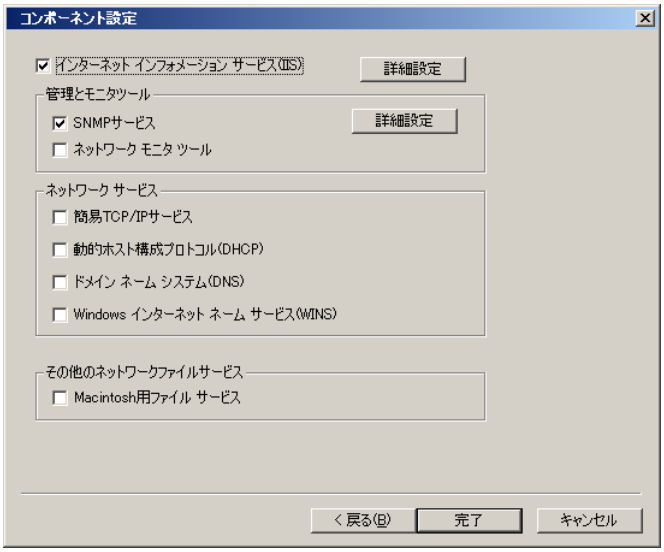
重要

スコープ ID の設定は LAN ボードごとに設定することはできません。
ひとつの LAN ボードに対してインターネット プロトコル(TCP/IP)のスコープ ID を設定した場合、他の LAN ボードに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面を開いても、前に設定を行ったスコープ ID の設定が表示されます。

11. 4～10 の設定を反映する場合は「インターネット プロトコル(TCP/IP)の設定」画面で「OK」をクリックしてください。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。
「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「プロトコルの設定」画面に戻ります。

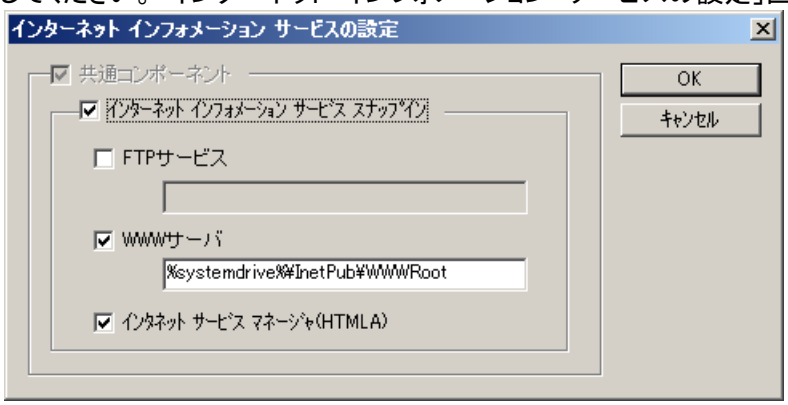
12. 3～11 の設定を反映する場合は「プロトコルの設定」画面で「OK」をクリックします。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。
「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「ネットワーク設定」画面に戻ります。

(9) 「ネットワーク設定」画面の設定後、「次へ」をクリックすると「コンポーネント設定」画面が表示されます。



OS インストール時にインストールを行うコンポーネントの選択を行います。

■ インターネット インフォメーション サービス(IIS)
インストールを行う場合はチェックを入れます。
チェックを入れた場合のみ詳細設定を行うことができます。詳細設定を行う場合は「詳細設定」をクリックしてください。「インターネット インフォメーション サービスの設定」画面が表示されます。



設定可能な項目は以下となります。
設定を行った後、内容を反映する場合は「OK」をクリックしてください。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。
「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「コンポーネント設定」画面に戻ります。

◆ インターネット インフォメーション サービス スナップイン
インターネット インフォメーション サービス スナップインをインストールする場合はチェックを入れます。

◆ FTP サービス
FTP サービスをインストールする場合、「FTP サービス」にチェックをいれ、インストールするディレクトリをドライブレターが含まれるフルパスで指定します。

◆ WWW サーバ
WWW サーバをインストールする場合、「WWW サーバ」にチェックをいれ、インストールするディレクトリをドライブレターが含まれるフルパスで指定します。デフォルトは「%systemdrive¥%InetPub¥WWWRoot」となっています。

◆ インターネット サービス マネージャ(HTMLA)
インターネット サービス マネージャ(HTMLA)をインストールする場合、「インターネット サービス マネージャ(HTMLA)」にチェックを入れます。

◆ パーソナル Web マネージャ
パーソナル Web マネージャをインストールする場合「パーソナル Web マネージャ」にチェックを入れます。
この項目は、OS 種別に Windows XP Professional を選択後、「WWW サーバ」を設定した場合に設定可能になります。

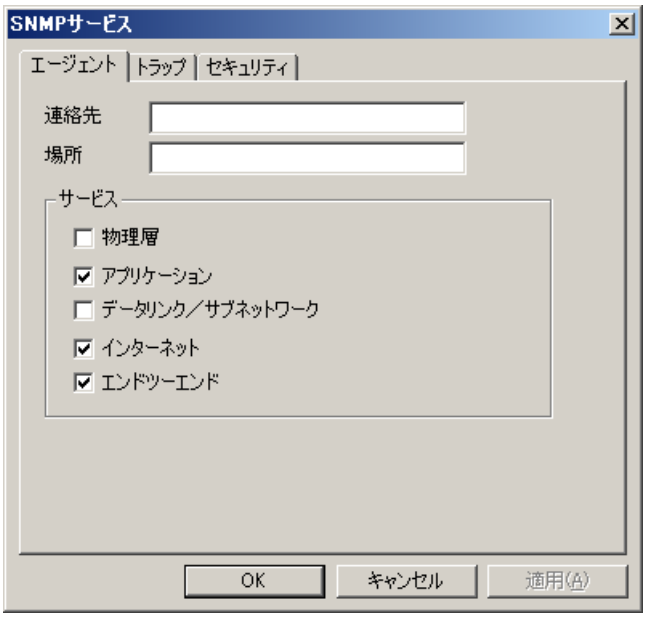
注意 お使いの OS,サービスパックのバージョンによっては、指定した項目がインストール後に正しく設定されない場合があります。詳しくは Microsoft の技術情報を参照してください。

■ 管理とモニタツール
SNMP サービスとネットワーク モニタ ツールをインストールするか選択することができます。

◆ ネットワーク モニタ ツール
インストールを行う場合はチェックを入れます。
以下の OS のみ選択できます。
- Windows 2000 Server / Advanced Server
- Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition

◆ SNMP サービス
インストールを行う場合はチェックを入れます。
チェックを入れた場合のみ詳細設定を行うことができます。詳細設定を行う場合は「詳細設定」をクリックしてください。「SNMP サービス」画面が表示されます。
設定を行った後、内容を反映する場合は「OK」をクリックしてください。反映しない場合は「キャンセル」をクリックしてください。

「OK」または「キャンセル」をクリックした後、「コンポーネント設定」画面に戻ります。



タブごとに SNMP サービスの設定を行うことができます。

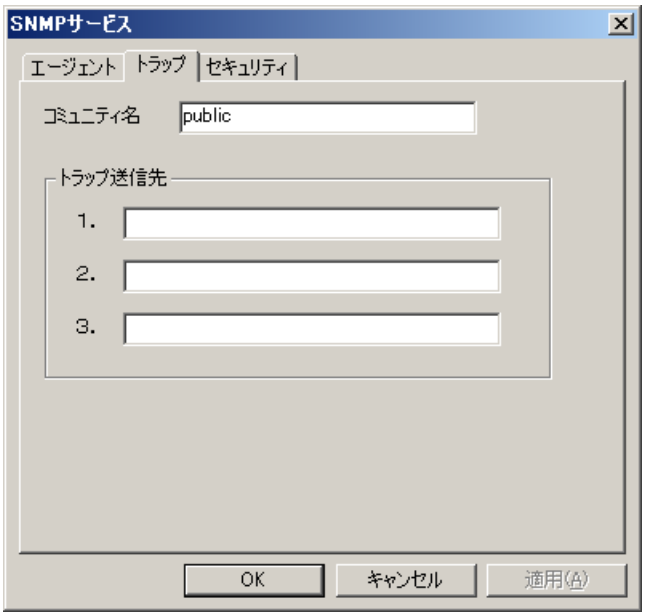
1. エージェントタブ
エージェントタブでは以下の設定を行うことができます。

「連絡先」ボックス
コンピュータの使用者名を 355 バイト以内で入力します。省略可能です。

「場所」ボックス
コンピュータの物理的な配置場所を 355 バイト以内で入力します。省略可能です。

「サービス」ボックス
コンピュータが提供するネットワーク機能を示す項目にチェックを入れます。選択できる項目は以下となります。アプリケーション、インターネット、エンドツーエンドには、デフォルトでチェックが入っています。
- 物理層
- アプリケーション
- データリンク/サブネットワーク
- インターネット
- エンドツーエンド

2. トラップタブ



トラップタブでは以下の設定を行うことができます。

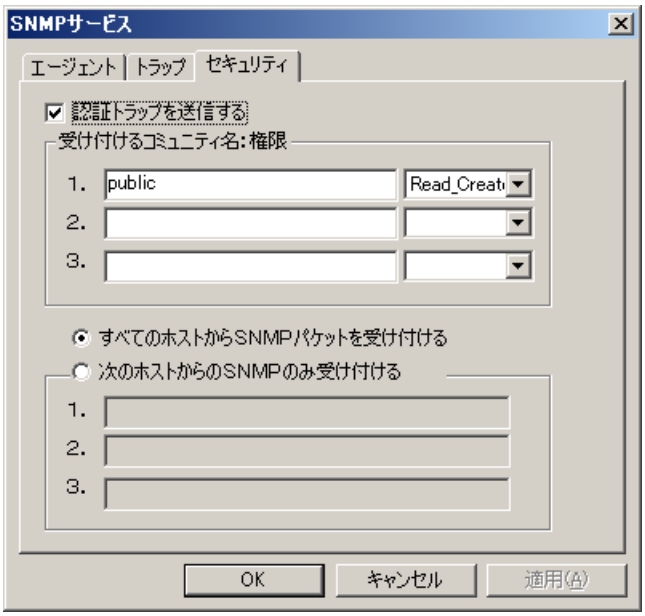
「コミュニティ名」ボックス

コンピュータがトラップを送信する先のコミュニティを入力します。半角 255 バイトで入力可能です。デフォルトは「public」となっています。「コミュニティ名」ボックスは省略可能です。

「トラップ送信先」ボックス

ホスト名、IP アドレス、IPX アドレスのいずれかの形式で入力します。最大 3 箇所まで入力できます。ただし 2 バイト文字は入力できません。「トラップ送信先」ボックスは省略可能です。

3. セキュリティタブ



「認証トラップを送信する」ボックス
認証の失敗があったときにトラップを送信する場合にチェックを入れます。

「受け付けるコミュニティ名：権限」ボックス
要求を受け付けるコミュニティの名前を入力します。最大 3 つまで入力できます。ただし 2 バイトの文字は入力できません。
必ず 1 から入力してください。1 を入力せずに 2 を入力すると正しく情報が保存されません。

「すべてのホストから SNMP パケットを受け付ける」チェックボックス
任意のホストからの SNMP パケットを受け入れる場合はチェックを入れます。デフォルトでチェックが入っています。

「次のホストからの SNMP のみ受け付ける」チェックボックス
指定したホストからの SNMP パケットだけを受け入れる場合はチェックを入れます。チェック後、要求を受け入れるホスト名または IP アドレスを入力します。最大 3 つまで入力できます。ただし 2 バイト文字は入力できません。

■ ネットワーク サービス
インストールする項目にチェックをします。

◆ 簡易 TCP/IP サービス

◆ 動的ホスト構成プロトコル（DHCP）
以下の OS のみ選択できます。
- Windows 2000 Server / Advanced Server
- Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition

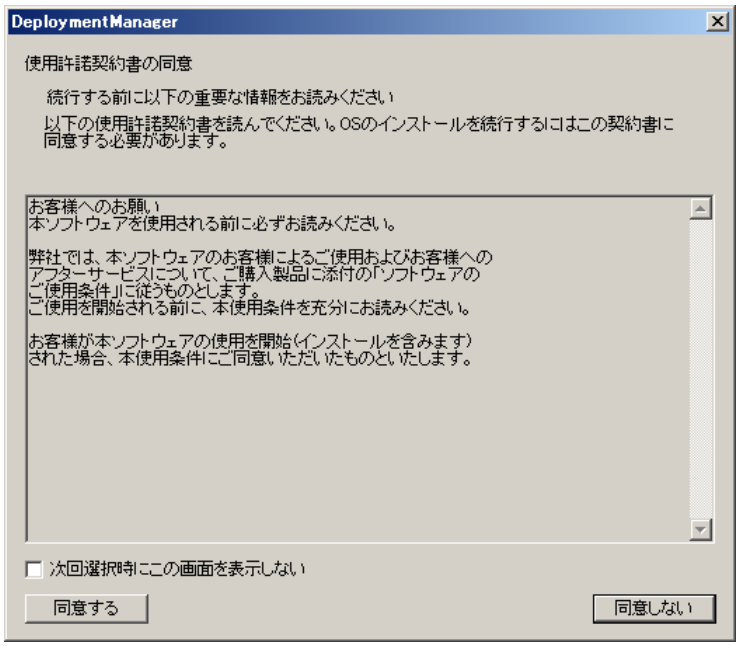
◆ ドメイン ネーム システム（DNS）
以下の OS のみ選択できます。
- Windows 2000 Server / Advanced Server
- Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition

◆ Windows インターネット ネーム サービス（WINS）
以下の OS のみ選択できます。
- Windows 2000 Server / Advanced Server
- Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition

■ その他のネットワークファイルサービス
Macintosh 用ファイル サービスをインストールする場合にチェックをします。

◆ Macintosh 用ファイル サービス
以下の OS のみ選択できます。
- Windows 2000 Server / Advanced Server
- Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition

(10)「コンポーネント設定」画面を設定後、「完了」をクリックすると、「使用許諾契約書の同意」画面が表示されます。内容をよくお読みいただき「同意する」をクリックします。



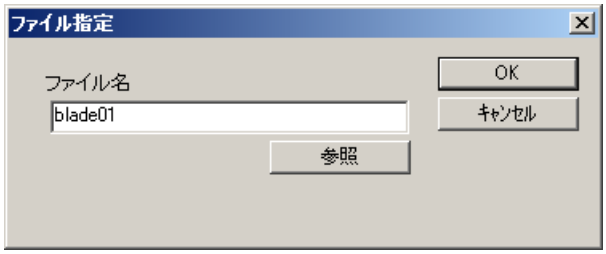
ヒント

「同意しない」を選択すると本機能はご使用いただけません。

(11)「同意する」をクリックすると、次に「ファイル指定」画面が表示されます。
ここでは、各種設定をしてきたパラメータファイルの名前を決めることができます。「ファイル名」は 63 バイト以内で入力してください。以下の文字を入力することはできません。
「"」、「/」、「¥」、「;」、「:」、「|」、「,」、「*」、「?」、「<」、「>」

尚、「参照」ボタンを使用し、ディレクトリ、ファイル名を指定した時はパスを含めて 254 バイト以内になるようにファイル名を入力してください。

(例)ファイル名"blade01"を入力したときの例



「ファイル名」を入力し、「OK」をクリックしてください。「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されたら、パラメータファイルの作成は完了です。

重要

「ファイル指定」画面で入力するファイル名は、DPM に登録しているコンピュータ名を指定することを推奨します。シナリオファイルの作成の際、パラメータファイルを「装置名で割当てる」で指定することが可能となり、1 つのシナリオファイルで複数のコンピュータに転用できます。

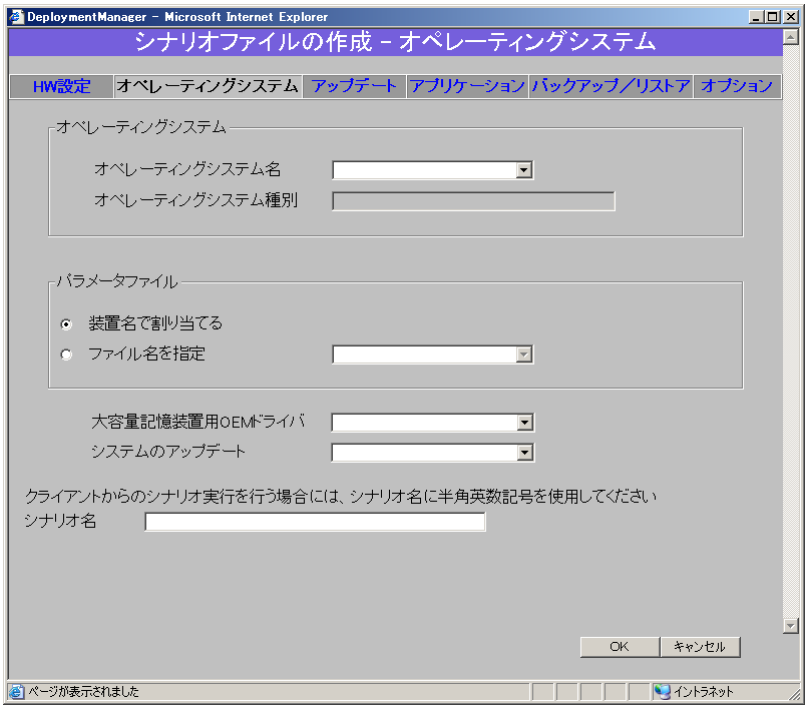
2.1.3　シナリオファイルの作成

■ OS クリアインストールの準備ができたので、次にシナリオファイルの作成方法について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの作成」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) Express5800 シリーズに対するOSクリアインストールのシナリオを作成する場合で、AutoRAIDの設定やオフライン保守ユーティリティの設定を行う場合は「HW設定」タブを選択して設定を行ってください。設定方法については、本編「6.1 BIOS/ファームウェアのアップデート」をご覧ください。

(3) 「オペレーティングシステム」タブをクリックし、「オペレーティングシステム名」のプルダウンメニューより登録した OS イメージを選択し、各項目を設定します。



ヒント

■ セットアップパラメータファイル名を装置名で作成しなかった場合は、「パラメータファイル」の「ファイル名を指定」にチェックを入れて作成したセットアップパラメータファイルを指定してください。

■ パラメータファイル作成時に、インストールするパーティションに「新規パーティション」を選択した場合は、OS をクリーンなディスクにインストールするため、「HW 設定」タブで「DeleteAllPartition.dat」も同時に指定してください。

この画面の各項目の説明は、以下のとおりです。

■ 装置名で割り当てる

OS のインストールを行う時、コンピュータ名と同じセットアップパラメータファイルを自動的に割り当てます。複数のコンピュータにインストールする場合、コンピュータと同じ数だけシナリオを作成する必要はありません。ただし、セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ず同じでなければなりません。(ファイル拡張子の.txt は無視します)また、セットアップパラメータファイルはインストールするコンピュータと同じ数だけ作成してください。

■ ファイル名を指定
OS のインストールを行う時、指定したセットアップパラメータファイルを使用します。複数のコンピュータにインストールする場合、コンピュータと同じ数だけシナリオを作成してください。
セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ずしも同じである必要はありません。

■ 大容量記憶装置用 OEM ドライバ
Express5800 シリーズのコンピュータの中には Windows OS の CD-ROM では、その先に接続された HDD に対し、OS インストールができないような、サードパーティ製の SCSI ドライバ、ディスクアレイコントローラのドライバが必要なものがあります。それらのドライバをここで指定すれば、OS インストールが可能となります。
OEM ドライバの登録については「ユーザーズガイド 応用編 10. 登録ツール」をご覧ください。登録後はプルダウンから、登録したモジュールを選択できるようになります。

ヒント
EXPRESSBUILDER CD-ROM から登録される OEM ドライバモジュールのうちモジュール名の末尾に「W2K」、「DOTNET」または「W2K3」と表示された場合、「W2K」のものは Windows 2000 Server、Advanced Server 用、「DOTNET」と「W2K3」は Windows Server 2003 Standard Edition/Enterprise Edition、Windows Server 2003 R2 Standard Edition/Enterprise Edition 用の OEM ドライバモジュールです。

■ システムのアップデート
Express5800 シリーズのコンピュータに対し OS インストール後にシステムのアップデートを行います。
システムのアップデートモジュールの登録については、「ユーザーズガイド 応用編 10. 登録ツール」をご覧ください。登録後はプルダウンから、登録したアップデートモジュールを選択できるようになります。

ヒント
EXPRESSBUILDER CD-ROM から登録されるシステムのアップデートのうちモジュール名の末尾に「W2K」、「DOTNET」または「W2K3」と表示された場合、「W2K」のものは Windows 2000 Server、Advanced Server 用、「DOTNET」または「W2K3」は Windows Server 2003 Standard Edition/Enterprise Edition、Windows Server 2003 R2 Standard Edition/Enterprise Edition 用のシステムのアップデートです。

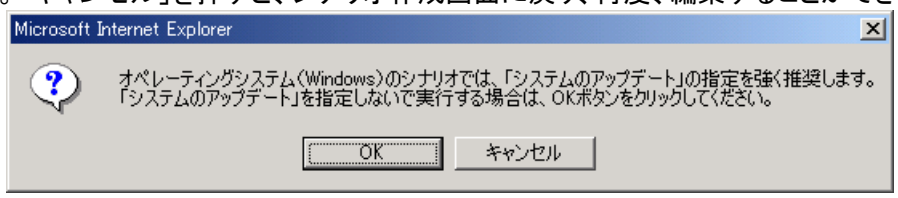
(4) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、「オプション」タブをクリックします。
■ OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント
「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」を行うためにはクライアントコンピュータに DPM のサービスをインストールしてください。詳しくは「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」を参照してください。

注意
■ 管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れていてもシャットダウンできません。
・ ワークステーションロックによりロックされている状態
・ パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
・ リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
・ 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態
■ イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。

■ シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(5) 「シナリオ名」を入力し、「OK」をクリックします。システムのアップデートが選択されていない場合、以下の確認メッセージが表示されます。システムのアップデートが特に必要がなければ、「OK」をクリックします。シナリオファイルの作成が完了し、メインウィンドウ画面のシナリオビューに作成したシナリオファイルが追加されます。「キャンセル」を押すと、シナリオ作成画面に戻り、再度、編集することができます。



重要

Express5800 シリーズの場合、システムのアップデートは必ず行ってください。システムのアップデートは単独で行うことができませんので、システムのアップデートを指定しなかった場合、OS インストール後に EXPRESSBUILDER CD-ROM から手動でシステムのアップデートを行ってください。

ヒント

- シナリオ名は 58 バイト以内の全角、半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「|」は使用できません。
- アップデートモジュール名はEXPRESSBUILDER CD-ROMのバージョン名で作成されます。(例)EXPRESSBUILDER CD-ROM が Ver3.008a-B の場合、登録されるアップデートモジュール名も Ver3.008a-B となります。

(6) OS クリアインストールと同時に BIOS/ファームウェアのアップデート、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、バックアップなどを行う場合は、本編「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「5. バックアップ/リストア」、「6. フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をご覧になってイメージを登録し「HW 設定」、「アップデート」、「アプリケーション」、「バックアップ/リストア」のタブから設定を行ってください。

注意

OS クリアインストール(Windows)と同時にリストアシナリオ、ディスク構成チェックシナリオを作成することはできません。

2.1.4 シナリオ実行

■ 最後に、作成したシナリオを実行する手順を説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、シナリオ名のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、「OK」を押す。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作を、コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。また、コンピュータアイコンを選択し、メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に、手動で電源を OFF してください。

注意

ディスク複製用情報ファイルの設定で「Netware 用ゲートウェイ(とクライアント)サービス」または「Netware 用クライアントサービス」を選択した場合、Windows のログイン時に「Select Netware Logon」画面が表示されることがあります。その場合、20 分程度で自動ログインしシナリオは続行されますので、画面操作を行わないでください。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と表示され、OS クリアインストールを行います。

(5) メニュー画面の「表示」メニュー→「シナリオ実行状況」→「シナリオ実行一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。インストールの進捗状況を見たいときは、シナリオ実行中のコンピュータアイコンを右クリックして「シナリオ実行進行状況」を選択し、「シナリオ実行進行状況」画面を表示させます。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“正常終了”と表示されたら、シナリオは完了です。

2.2　OSクリアインストール（Linux）

■ DPM を使用することで、Linux をネットワーク経由で自動インストールすることができます。

重要

■ OS クリアインストールがサポートする Linux OS は以下のとおりです。
- (IA32)Red Hat Enterprise Linux AS3、ES3、AS4、ES4、5.1～5.4、5.1 AP～5.4 AP
- (EM64T)Red Hat Enterprise Linux AS4 x64 Edition、ES4 x64 Edition、5.1～5.4、5.1 AP～5.4 AP
- (IPF)Red Hat Enterprise Linux WS3 for the Itanium Processor

（SE 製品は、IPF 装置をサポートしていません。）
上記以外の OS は DPM から OS クリアインストールすることはできません。ご注意ください。

■ Express5800/BladeServerをご使用の場合、DPMを使用して市販ディストリビューションからインストールを行うと、インストール中に問題が発生する可能性があります。
このような場合には、Express5800/BladeServer用の「Linux基本サービスセット」をご使用ください。

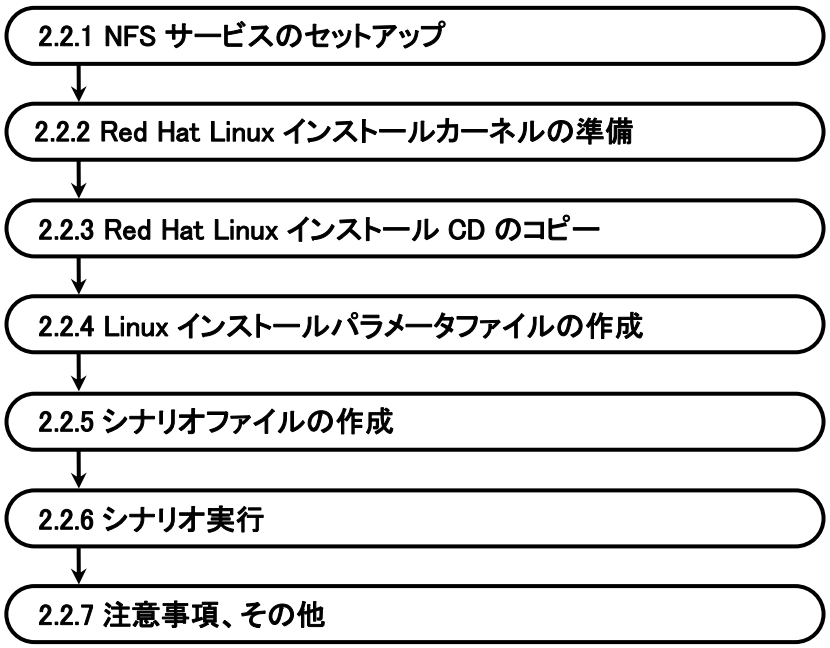
■ DPMを使用してExpress5800/120Ba-4 に対してRed Hat Enterprise Linux ES3/AS3のインストールを行う場合、update3 以降の製品が必要となります。

注意

DPMを使用してOSのインストールを行う場合は、インストール対象以外のHDDまたは、外付けのMOなどの装置を接続しないようにしてください。インストールに失敗する場合があります。

■ ここでは、コンピュータに対して Red Hat Enterprise Linux ES3 をインストールするための DPM の設定、および操作手順を説明します。
Red Hat Enterprise Linux ES3 以外の対応バージョンについても基本操作は同じです。
Red Hat Enterprise Linux ES3 との相違点については、次の「各バージョンの設定方法」をご覧ください。

シナリオ実行までの流れ



各バージョンの設定方法

Red Hat Enterprise Linux ES3 以外の各バージョンをインストールする場合は以下の説明から、
Red Hat Enterprise Linux ES3 の記述部分を各バージョンに置き換えて操作します。

ヒント

- インストールに必要なファイルは以下になります。
  - Red Hat Linux のインストール CD の内容
  - initrd.img、vmlinuz ファイル（ネットワークインストール用）
  - セットアップパラメータファイル（キックスタートファイル）
  - ブートパラメータファイル（パラメータファイル）
- インストールを行うコンピュータが市販の Red Hat Linux のパッケージ品で動作する事とネットワーク経由でインストール可能な事を確認してからインストールを行ってください。
  Express5800 シリーズの場合、以下の URL から確認ができます。
  http://www.express.nec.co.jp/linux/distributions/confirm/index.html

- 以降の章で説明するインストール手順では、以下の CD-ROM が必要になります。
  - Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD1
  - Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD2
  - Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD3
  - Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD4

注意

インストール CD の枚数はディストリビューションごとに異なります。

NFS サービスを Windows 上に構築する場合は、以下のソフトウェアも必要になります。
NFS サービスのインストール手順については、製品に添付の説明書等を参照してください。

- Microsoft（R） Windows（R） Services for UNIX 2.0、3.0、3.5 のいずれか

重要

DPM を使用した Red Hat Linux のネットワークインストールを行うには、DPM 以外に、DHCP サービス、NFS サービスが必要になります。
DHCP サービス、NFS サービスは、Windows 上以外に構築したものでも構いません（例えば、Linux 上に構築したものを使用することもできます）。

注意

Microsoft（R） Windows（R）Services for UNIX のインストールに関しては各製品のインストール条件を満たすようにしてください。

2.2.1 NFSサービスのセットアップ

■ 最初に、NFS サービスをセットアップします。NFS サーバを構築してください。Windows 上に構築する場合は、Services for UNIX をインストールします。
インストールについては製品添付の説明書等をご覧ください。インストール後に再起動が必要になります。

■ NFS サーバ(Services for UNIX)の構築方法

1. 管理サーバに「Services for UNIX」をインストールします。
2. 共有フォルダの下の"exports"フォルダを NFS 共有フォルダに設定します。(共有名:exports)

注意

■ Services for UNIX 2.0 は、Windows XP および Windows Server 2003 にはインストールできません。Services for UNIX 2.0 を使用して NFS サーバを構築する場合は、Windows 2000 上に構築してください。

■ Services for UNIX 3.0、3.5 を Windows XP にインストールするときは「標準インストール」では NFS サーバがインストールされません。「インストールオプション」で「カスタムインストール」にチェックをいれ以降の画面で下記の設定を行ってください。
・「コンポーネントを選択」で下記の2つのコンポーネントを追加してください。
Windows Services for UNIX ― NFS ― NFS サーバー
― NFS 認証ツール ― NFS 認証サーバー
・「セキュリティの設定」で「既定の動作を大文字と小文字を区別する設定に変更します」にチェックを入れてください。
なお上記の設定を行った場合、「Service for NFS」のスタートアップの設定を変更する必要はありません。

■ NFS 共有フォルダ(exports)を Windows XP および、Windows Server 2003 上で設定するには下記の設定が必要となります。

■ Windows Server 2003 の場合

(1) 「スタート」→「すべてのプログラム」→「管理ツール」→「ローカルセキュリティポリシー」を選択し、「ローカルポリシー」→「セキュリティオプション」の「ネットワークアクセス:Everyone のアクセス許可を匿名ユーザーに適用する」を「有効」にし管理サーバを再起動してください。
(ドメインに参加している場合は、ローカルセキュリティポリシーを有効に設定してもドメインセキュリティポリシーが無効に設定されている場合、無効になりますので注意してください。また、ドメインコントローラの場合は、ローカルセキュリティポリシーではなくドメインコントローラセキュリティポリシーを変更してください。)

(2) exports フォルダのプロパティの「セキュリティ」タブに"everyone"を追加してアクセス許可の"読み取りと実行"にチェックを入れてください。ただし、exports フォルダ配下の ks フォルダのみアクセス許可は"読み取り"で問題ありません。

■ Windows XP の場合

(1) 「スタート」→「マイ コンピュータ」を選択し、「ツール」メニューの「フォルダオプション」をクリックします。「表示」タブの「詳細設定」にある「簡易ファイルの共有を使用する(推奨)」をオフにします。

(2) Windows Server 2003 の場合の(1)と同じく「ネットワークアクセス:Everyone のアクセス許可を匿名ユーザーに適用する」を「有効」にし管理サーバを再起動してください。
(ドメインに参加している場合は、ローカルセキュリティポリシーを有効に設定してもドメインセキュリティポリシーが無効に設定されている場合、無効になりますので注意してください。)

(3) Windows Server 2003 の場合の(2)と同じく"everyone"の追加とアクセス許可を設定してください。

ヒント

- Services for UNIX 2.0 はインストールするだけで NFS サーバとして使用することができます。設定は特に必要ありません。Services for UNIX 2.0 をインストールすると、フォルダのプロパティに「NFS 共有」のタブが追加されます。
- Services for UNIX 3.0、3.5 に関しては、インストール完了後、「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択し、「Server for NFS」の「プロパティ」を開きスタートアップの種類を無効から手動もしくは自動に変更して適用後、サービスを開始させます。その後、フォルダのプロパティに「NFS 共有」のタブが追加されます。
- Services for UNIX3.0 または 3.5 を使用して NFS 共有フォルダを設定する場合は、"exports" フォルダのプロパティ画面を開き「NFS 共有」タブで「このフォルダを共有する」を選択し、次に「匿名のアクセスを許可する」のチェックボックスにチェックを入れ、「アクセス権」ボタンをクリックし「ルートのアクセスを許可する」のチェックボックスにチェックを入れて「OK」をクリックして画面を終了してください。

■ Services for UNIX を使用して Red Hat Linux のインストールのシナリオを同時に多数のコンピュータに実行する場合、管理サーバ側の OS のクライアントアクセスライセンス（CAL）数を確認してください。Windows 2000 Server、Windows Server 2003 の場合、デフォルトでは CAL 数は"5"となっています。Windows 2000 Advanced Server ではデフォルトで CAL 数は"25"です。このとき、シナリオ同時実行台数が CAL 数を越えるとシナリオが正しく動作しない場合があります。正常にシナリオを進めるために以下の手順を行うか、実行する台数を減らしてください。尚、Windows 2000 Professional と Windows XP Professional には CAL は存在せず、同時接続ユーザ数は 10 台となっています。管理サーバが Windows 2000 Professional と Windows XP Professional の場合、10 台以上同時に OS クリアインストールを行わないでください。

ライセンス数の確認

(1) 管理サーバで「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」を選択し、管理ツールを起動します。

(2) 「ライセンス発行」を選択します。「エンタープライズ－ライセンス」の画面が表示されます。

(3) 「製品の表示」タブをクリックし、表示された画面で「購入した同時使用ユーザ数」を参照することで現在、接続可能な最大のターゲット数が分かります。

現在のライセンス数を確認し、必要な数に満たない場合は、実行するコンピュータの台数を減らしてください。実行する台数を減らしたくないときはライセンスを購入し、以下の設定を行います。

ライセンスの追加

(1) 「サーバ参照」タブをクリックします。表示された画面で「エンタープライズ」→「WORKGROUP」→「SERVER」→「Windows Server」（Windows 2000 Server で WORKGROUP に属しているとき）を選択し、ダブルクリックします。「ライセンスモードの選択」画面が表示されます。

(2) 「ライセンスモードの選択」画面で「ライセンスの追加」をクリックします。「新しいクライアントアクセスライセンス」画面が表示されます。

(3) 「新しいクライアントアクセスライセンス」画面の「数量」で必要な台数を入力し「OK」をクリックします。次に表示された画面で「同意します」のチェックボックスにチェックを入れて「OK」をクリックします。

(4) 「ライセンスモードの選択」画面に戻り、同時使用ユーザ数が設定どおり増えていることを確認します。これで、設定が完了です。画面を終了してください。

■ Linux 上で NFS サーバの起動を行うには以下のコマンドを実行してください。

```
# /etc/rc.d/init.d/portmap restart
# /etc/rc.d/init.d/nfs stop &> /dev/null
# /etc/rc.d/init.d/nfs start
```

■ 起動時にNFSのサービスを有効化するために以下のコマンドを実行してください。

```
# /sbin/chkconfig --level 345 portmap on
# /sbin/chkconfig --level 345 nfs on
```

2.2.2 Red Hat Linuxインストールカーネルの準備

■ ネットワークブート時、最初にロードされるネットワークインストール用のミニカーネル(ファイル名 vmlinuz 及び initrd.img)を用意します。ミニカーネルの格納場所は、対応ハードウェア／ディストリビューションによって以下のような場所にあります。

■ 市販ディストリビューション(IA32)

インストール CD の 1 枚目の images¥bootnet.img の FD イメージを同じ CD にある dosutils¥rawrite.exe を使用してフロッピーディスクに展開した中にあります。
フロッピーディスクは以下の手順で作成します。

(1) 「Red Hat Linux インストール CD1」を CD-ROM ドライブに挿入します。
(2) 作業用の空フロッピーディスクを 1 枚用意し、フロッピーディスクドライブに挿入します。
このフロッピーディスクのデータは全て上書きされますのでご注意ください。
(3) コマンドプロンプトを起動し以下のとおり実行します。

```
D:¥dosutils¥rawrite.exe -f D:¥images¥bootnet.img -d A: -n
```

（"D:"は CD-ROM ドライブを、"A:"はフロッピーディスクドライブを指定してください。）

ヒント 登録に必要な空き容量は、約 3GB です。

■ Express5800/BladeServer 用の「Linux 基本サービスセット」

「Linux 基本サービスセット」CD の¥nec¥Linux¥tftpboot¥pxelinux¥RedHat¥blade フォルダ内の vmlinuz と initrd.img を使用してください。

■ Red Hat Enterprise Linux

インストール CD の 1 枚目の images¥pxeboot¥vmlinuz および、images¥pxeboot¥initrd.img を使用してください。

■ Red Hat Enterprise Linux WS3 for the Itanium Processor

インストール CD の 1 枚目の kernels¥vmlinuz および、以下の手順で作成した initrd.img を使用してください。

1)インストール CD の 1 枚目を、Linux がインストールされているコンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。

2) CD-ROM をマウントします。

```
# mount /mnt/cdrom
```

3) images¥boot.img ファイルを tmp ディレクトリへコピーします。

```
# cp -p /mnt/cdrom/images/boot.img /tmp
```

4) CD-ROM をアンマウントします。

```
# umount /mnt/cdrom
```

5) boot.img ファイルをマウントします。

```
# mount -o loop /tmp/boot.img /mnt
```

6) mnt ディレクトリから initrd.img ファイルを取り出します。

```
# cp -p /mnt/initrd.img /tmp
```

7) boot.img ファイルをアンマウントします。

```
# umount /mnt
```

以上で、/tmp ディレクトリに initrd.img が作成されます。

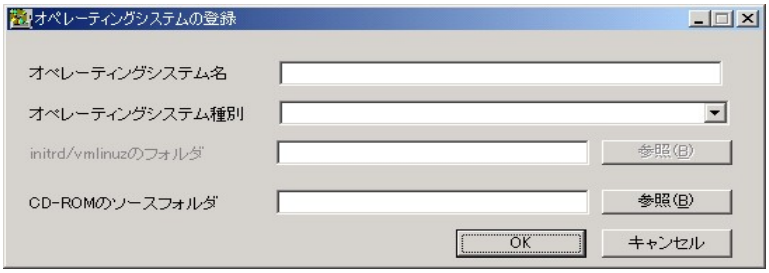
■ 管理サーバもしくはリモートイメージビルダーをインストールしたコンピュータに適当なフォルダを作成し、上記説明にて CD から取り出したミニカーネルを、そこにコピーしてください。(フロッピーディスクを作成した場合はそのディスクをコンピュータに挿入したまま「2.2.3 Red Hat Linux インストール CD のコピー」に進んでください)

2.2.3 Red Hat LinuxインストールCDのコピー

重要 NFS 公開フォルダを<共有フォルダ>¥exports 以外に作成する場合は以下のツールを使用せず、手作業による登録が必要になります。詳しくは、本編「2.2.7 注意事項、その他」の「Linux のインストールについて」を参照してください。

注意 Express5800/BladeServer に「Linux 基本サービス」を使用して Linux のインストールを行う場合は「Linux 基本サービス」の CD 内容もインストール CD と合わせてコピーする必要があります。詳しい手順は、本編「2.2.7 注意事項、その他」の「Linux 基本サービスセットの使用方法」を参照してください。

(1) 「イメージビルダー」画面の「オペレーティングシステムの登録」をクリックする。
「オペレーティングシステムの登録」画面が表示されます。



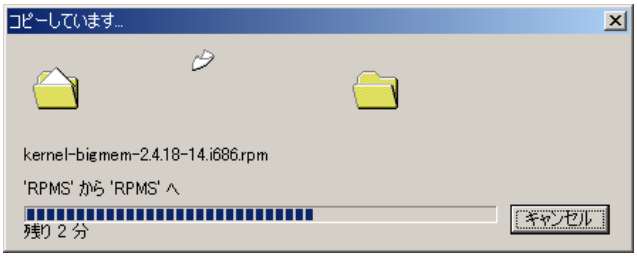
(2) 下記の項目を設定します。

オペレーティングシステム名	: 126 バイト(半角 126 文字、全角 63 文字)以内で入力できます。ただし、「¥」、「;」、「″」は使用できません。また、「Linux」、「ks」、「daemon」「pxelinux.～」という名前は予約されています。登録できません。 : 指定した名前が既に WindowsOS として登録されている場合も(上書き)登録できません。 : Linux の場合は英数字と「.」、「_」、「-」、「(」、「)」以外は使用できません。
オペレーティングシステム種別	: ▼ボタンをクリックし、リストから選択。Linux の場合"Red Hat Linux"を選択
Initrd.img / vmlinuz のフォルダ	: initrd.img、vmlinuz が格納されている箇所を指定。 この項目は、Linux のインストール時のみ有効です。
CD-ROM のソースフォルダ	: OS が格納されているフォルダを指定。 「参照」ボタンをクリックして指定できます。 インストールする OS が、Linux の場合は、「CD-ROM のドライブ名:」を指定してください。

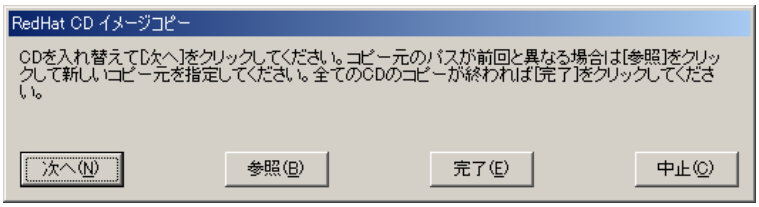
ヒント

Linux のイメージファイル作成では、指定された CD-ROM のソースフォルダ以下を全てイメージファイルとしてコピーします。Red Hat では CD-ROM が複数枚に分かれているので 1 枚目のコピー終了後に次の CD-ROM コピーを促すメッセージが表示されます。順番に CD-ROM を入れ替え、コピーを継続してください。このとき上書き確認のメッセージダイアログが表示されますが「上書き」又は「すべて上書き」を選択して続行してください。

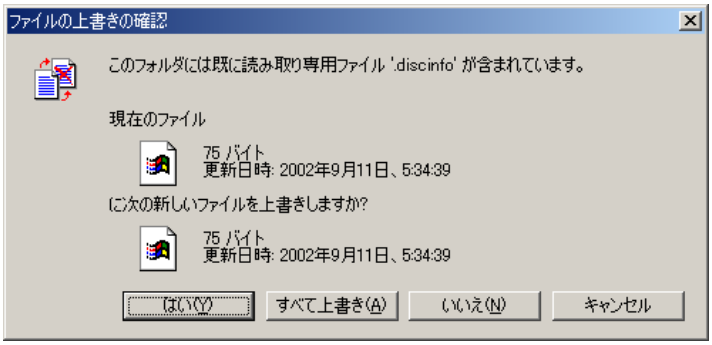
(3) 「OK」をクリックするとコピーが開始されます。コピーの順序は vmlinuz/initrd.img ファイルをコピーしてから CD のコピーに進みます。

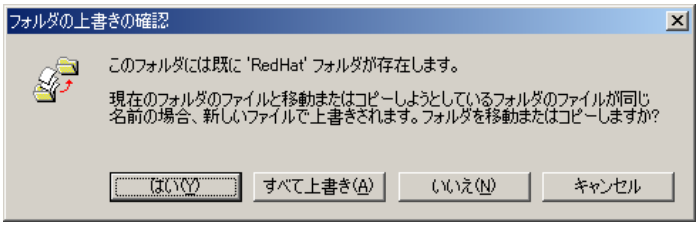


(4) CD のコピーが完了すると「Red Hat CD イメージコピー」画面が表示されます。Red Hat のインストール CD は複数枚あります。登録するインストール CD がまだある場合は、CD を入れ替えて「次へ」をクリックしてください。



(5) 途中、上書き確認が表示される場合がありますが「すべて上書き」を選択してください。





(6) 全ての CD のコピーが完了したら「Red Hat CD イメージコピー」画面にて「完了」をクリックしてください。

2.2.4 Linuxインストールパラメータファイルの作成

■ パラメータファイルとは、Linux インストールのセットアップ時に必要な各項目をあらかじめファイルとして保存しておくことで、OS の無人インストールを可能にするものです。ここでは、そのインストールパラメータファイルの作成方法について説明します。

重要

Linux をインストールする際は、必ず設定してください。

ヒント

■ 大量にセットアップパラメータファイルを作成する場合は、「ユーザーズガイド 応用編 3.1.2 パラメータファイルの作成(Linux)」を参照してください。
■ 作業モード及び作業ディレクトリは、適時切り替え変更可能です。
■ Linux インストールパラメータ設定ツールの各種ボタンでのキーボード操作は、「Enter」または「Space」キーのみ有効です。

注意

Linux インストールパラメータ設定ツールには、作業モードとして、**オンラインモード**と**オフラインモード**があります。

・オンラインモード ： 通常使用するモードです
・オフラインモード ： NFS 共有フォルダ(exports)を<共有フォルダ>¥exports 以外の場所に設定する場合に使用するモードです

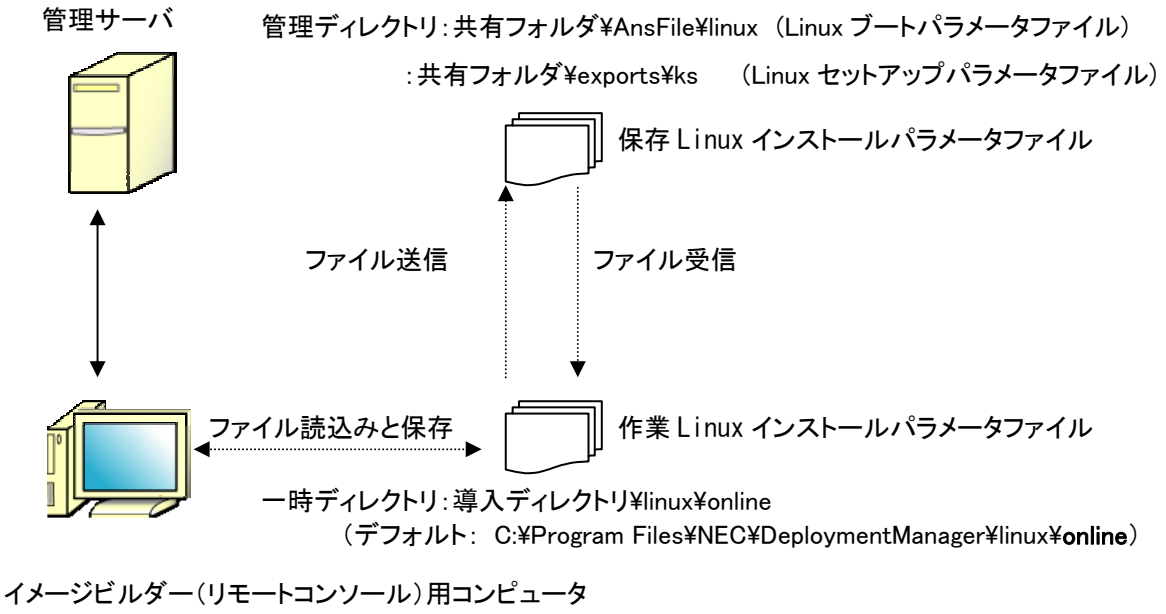
ここでは通常使用する**オンラインモード**を中心に説明します。

<オンラインモードの場合>

ネットワークを通して、管理サーバ上の共有フォルダ配下で、Linux インストールパラメータファイルを作成、管理します。

注意

Linux インストールパラメータファイルは2つのファイルで構成、管理されています。
・Linux ブートパラメータファイル(拡張子無し) 例:nec_host
・Linux セットアップパラメータファイル(拡張子「.cfg」) 例:nec_host.cfg
root のパスワードは deploymgr 固定で出力されます。



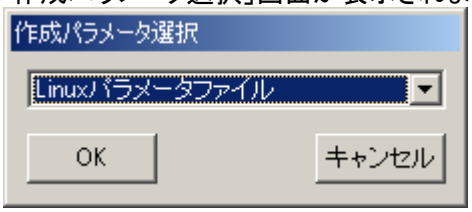
＜オフラインモードの場合＞

Linux インストールパラメータ設定ツールを起動したコンピュータ上で、任意の作業ディレクトリ配下で、Linux インストールパラメータファイルを作成、管理します。

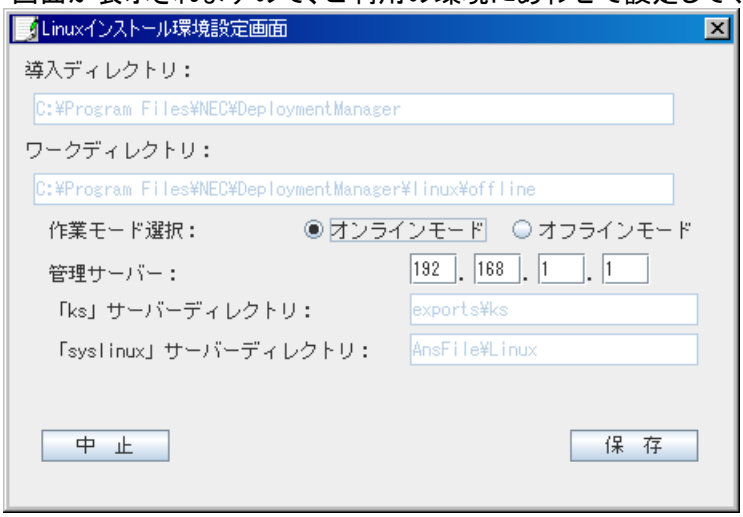
イメージビルダー（リモートコンソール）用コンピュータ

■ 初回起動時の設定

(1) 「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択し、「セットアップパラメータの作成」をクリックします。
「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux パラメータファイル」を選択してください。



(2) 環境情報の設定を行います。「ファイル」メニューの「環境設定」を選択すると「Linux インストール環境設定」画面が表示されますので、ご利用の環境にあわせて設定してください。



■ 導入ディレクトリ

イメージビルダーをインストールしたディレクトリを表示します。

・デフォルト → C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager

■ ワークディレクトリ

オフラインモード時のワークディレクトリを任意の場所に変更できます。
作業モードでオフラインモードを選択している場合のみ入力可能です。

・デフォルト → C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager ¥linux¥offline

以下の文字は使用できません。

「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「'」、「<」、「>」、「|」、「[」、「]」、「@」

■ 作業モード選択

作業モードをオンラインモード、またはオフラインモードに設定できます。
デフォルトは、オンラインモードです。

■　管理サーバ

管理サーバの IP アドレスを指定します。

■　「ks」サーバーディレクトリ

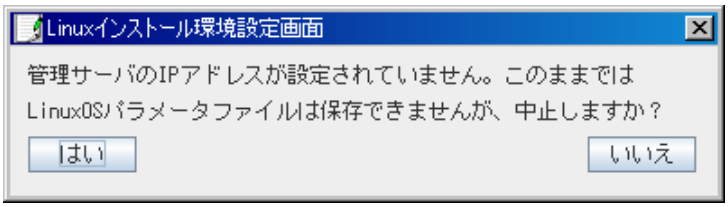
オンラインモード時に、Linux セットアップパラメータファイルを保存する、管理サーバ上のディレクトリ名を表示します。（固定情報）

■　「syslinux」サーバーディレクトリ

オンラインモード時に、Linux ブートパラメータファイルを保存する、管理サーバ上のディレクトリ名を表示します。（固定情報）

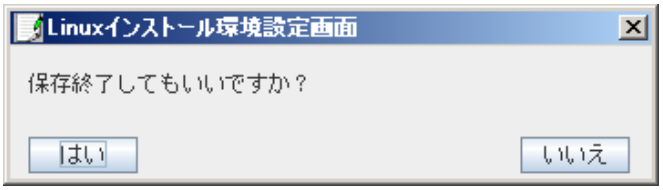
■　「中止」

変更内容を破棄して、環境設定画面を閉じます。事前に「中止」確認メッセージが表示されますので「はい」または「いいえ」をクリックします。



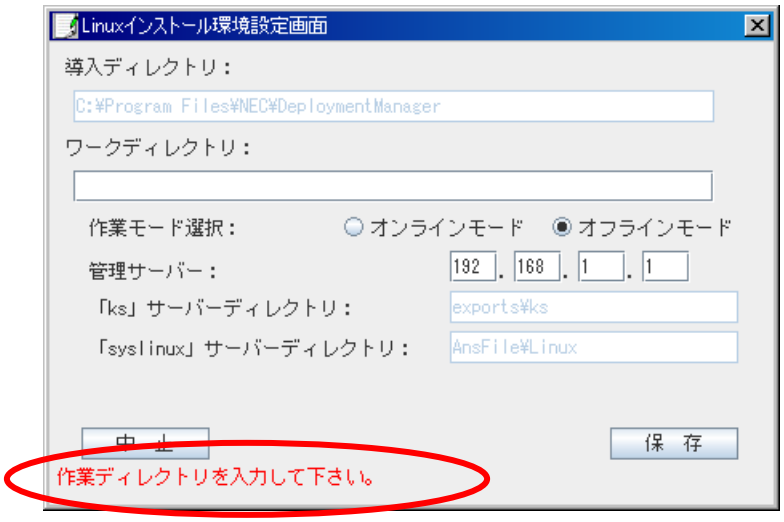
■　「保存」

現在の設定内容を、環境設定ファイル「LinuxIParm.cfg」に保存し、環境設定画面を閉じます。
事前に「保存」確認メッセージが表示されますので「はい」または「いいえ」をクリックします。



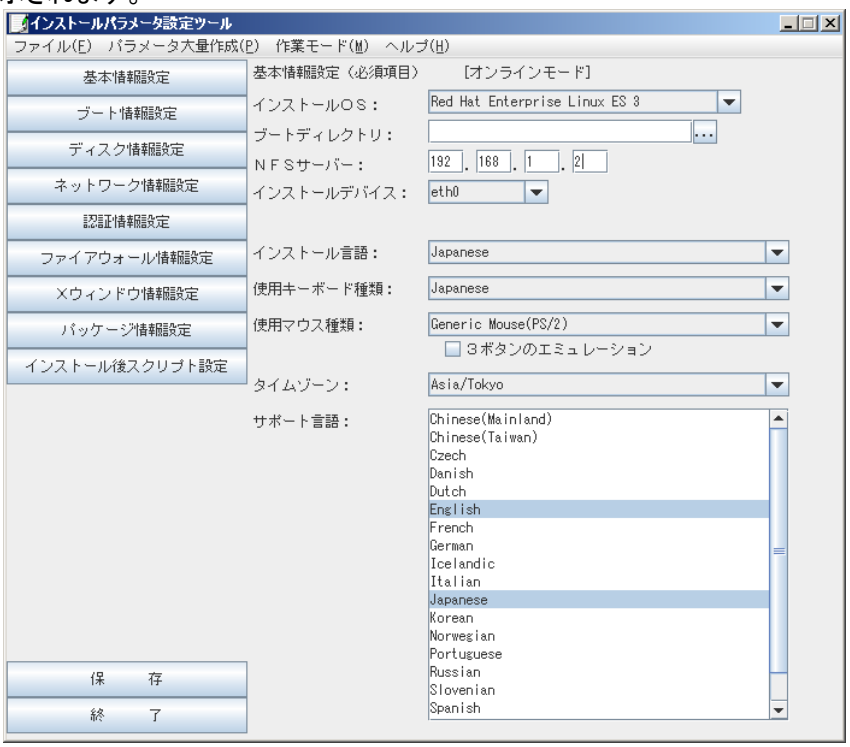
[エラー]

設定内容にエラーが存在する場合は、エラーメッセージが赤字で表示され保存できません。
エラー内容を修正後、再度保存してください。



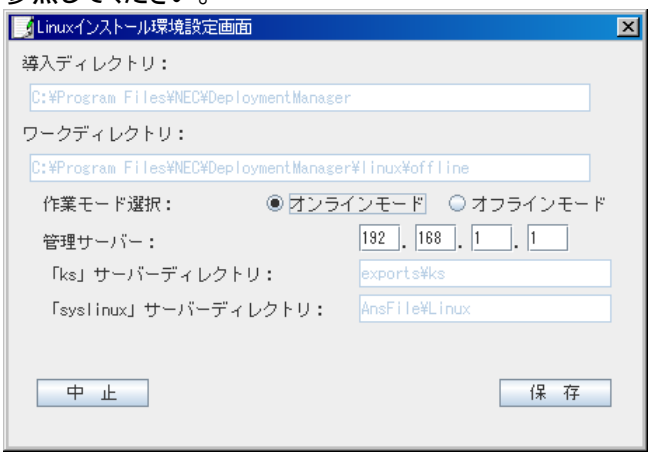
■ インストールパラメータ設定ツール

(1) 初回起動時の設定が終了すると「インストールパラメータ設定ツール」が起動し、下図のメイン初期画面が表示されます。



[エラー]

・ 環境設定情報ファイル「LinuxIParm.cfg」が導入先ディレクトリ配下に存在しない場合は、「Linux インストール環境設定」画面が表示されます。「Linux インストール環境設定」については前述の「初回起動時の設定」を参照してください。

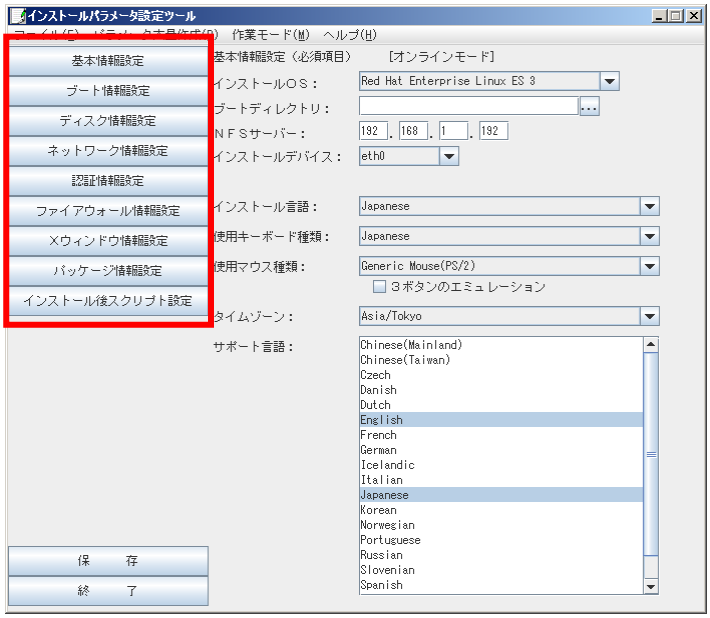


・ 導入ディレクトリ及び管理サーバの IP アドレスの環境情報が正常に取得できない場合、Linux インストールパラメータ設定ツールは起動せず、終了します。

(2)　Linux インストールパラメータの設定

Linux インストールパラメータは、次の 9 種類の情報パネルより構成されています。

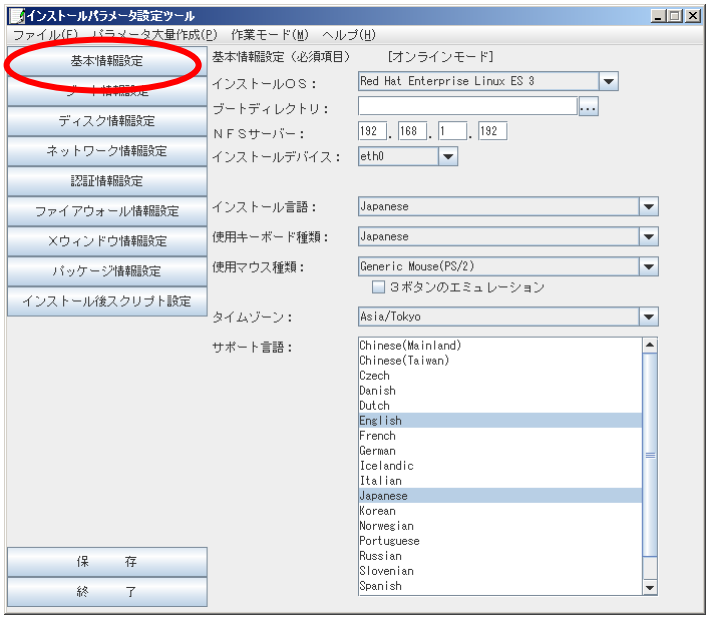
- 基本情報設定パネル
- ブート情報設定パネル
- ディスク情報設定パネル
- ネットワーク情報設定パネル
- 認証情報設定パネル
- ファイアウォール情報設定パネル
- Xウィンドウ情報設定パネル
- パッケージ情報設定パネル
- インストール後スクリプト設定パネル



各情報パネル表示切り替えボタンをクリックし、
表示情報パネルを切り替えて必要な情報を入力
または選択設定します。

■　基本情報設定パネル

Linux ブートパラメータ及び Linux セットアップパラメータの基本情報を設定します。



・インストール OS

インストールする LinuxOS の種類を、LinuxOS 一覧リストより選択します。
インストール OS の選択は必須です。
インストール OS のデフォルトは「Red Hat Enterprise Linux ES 3」になります。
インストール OS 選択時、ブートディレクトリ名が未入力の場合は、選択したインストール OS に該当するブートディレクトリ名の既定値が、ブートディレクトリ名に設定されます。

インストール OS	ブートディレクトリ既定値	対応アーキテクチャ
Red Hat Enterprise Linux AS 3	RedHatAS3	IA32
Red Hat Enterprise Linux ES 3	RedHatES3	IA32
Red Hat Enterprise Linux AS 4	RedHatAS4	IA32/EM64T
Red Hat Enterprise Linux ES 4	RedHatES4	IA32/EM64T
Red Hat Enterprise Linux WS 3	RedHatWS3	IPF
Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP	RedHatServer5.1	IA32/EM64T

ヒント

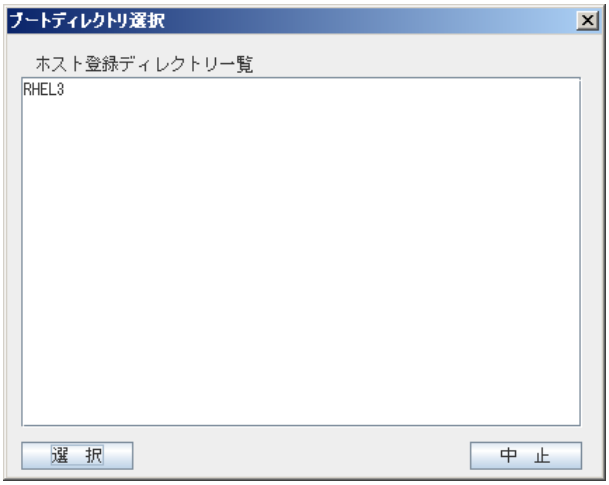
- SE 製品は、IPF 装置をサポートしていません。
- インストールする OS が Red Hat Enterprise Linux 5.2～5.4/5.2 AP～5.4 AP の場合は、「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」を選択してください。

・ブートディレクトリ

管理サーバ上に存在する、選択したインストール LinuxOS に対するブートディレクトリ名を入力します。
ブートディレクトリ名は入力必須です。
（半角文字 255 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

・ブートディレクトリ選択ボタン

作業モードがオンラインの場合、次の入力可能な管理サーバ上のブートディレクトリ一覧リストをダイアログ画面で表示し、ブートディレクトリ名を選択入力できます。
オフラインモードの場合は、選択ダイアログが使用できないのでブートディレクトリ名を入力する必要があります。



・NFS サーバ

導入している DPM システム上の NFS サーバの IP アドレスを入力します。
通常は管理サーバと同じ IP アドレスになります。
NFS サーバの IP アドレスは入力必須です。
NFS サーバの IP アドレスのデフォルトは、管理サーバの IP アドレスとなります。

・インストールデバイス

インストール時に使用するイーサーネットデバイスを選択します。
インストールデバイスは、必須選択項目です。
インストールデバイスのデフォルトは、「eth0」になります。

注意

■ 通信に使用するインストールデバイスを選択してください。正しく設定しない場合は、インストールに失敗します。
■ インストールデバイスを管理サーバに登録されていない MAC アドレスを持つ LAN ボードを指定するとシナリオが完了しない場合があります。

・インストール番号
インストール OS に「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」を選択した場合に表示されます。製品ご購入時の Red Hat Enterprise Linux のインストール番号を入力してください。
インストール番号は、任意入力項目です。

・インストール言語
インストール作業時に適用する言語種類を、言語一覧リストより選択します。
インストール言語は、必須選択項目です。
インストール言語のデフォルトは、「Japanese」になります。

・使用キーボード種類
インストールする Linux ターゲットマシンで適用するキーボード種類を、キーボード一覧リストより選択します。
キーボード種類は、必須選択項目です。
キーボード種類のデフォルトは、「Japanese」になります。

・使用マウス種類
インストールする Linux ターゲットマシンで適用するマウス種類を、マウス一覧リストより選択します。
マウス種類は、必須選択項目です。
マウス種類のデフォルトは、「Generic Mouse(PS/2)」になります。

注意

OS クリアインストール後にマウスが正しく設定されなかった場合、設定に不備がある可能性があります。この場合は、マウスに「Probe For Mouse」を指定し、マウスの自動検出を行ってください。

・3ボタンのエミュレーション
インストールする Linux ターゲットマシンで適用するマウスデバイスが、3ボタンのエミュレーション機能を適用する場合に選択します。
3ボタンのエミュレーションの選択は、任意選択項目です。
3ボタンのエミュレーションの選択は、デフォルトとして選択されません。

・タイムゾーン
インストールする Linux ターゲットマシンで適用するタイムゾーン値を、タイムゾーン一覧リストより選択します。
タイムゾーンは、必須選択項目です。
タイムゾーンのデフォルトは、「Asia/Tokyo」になります。

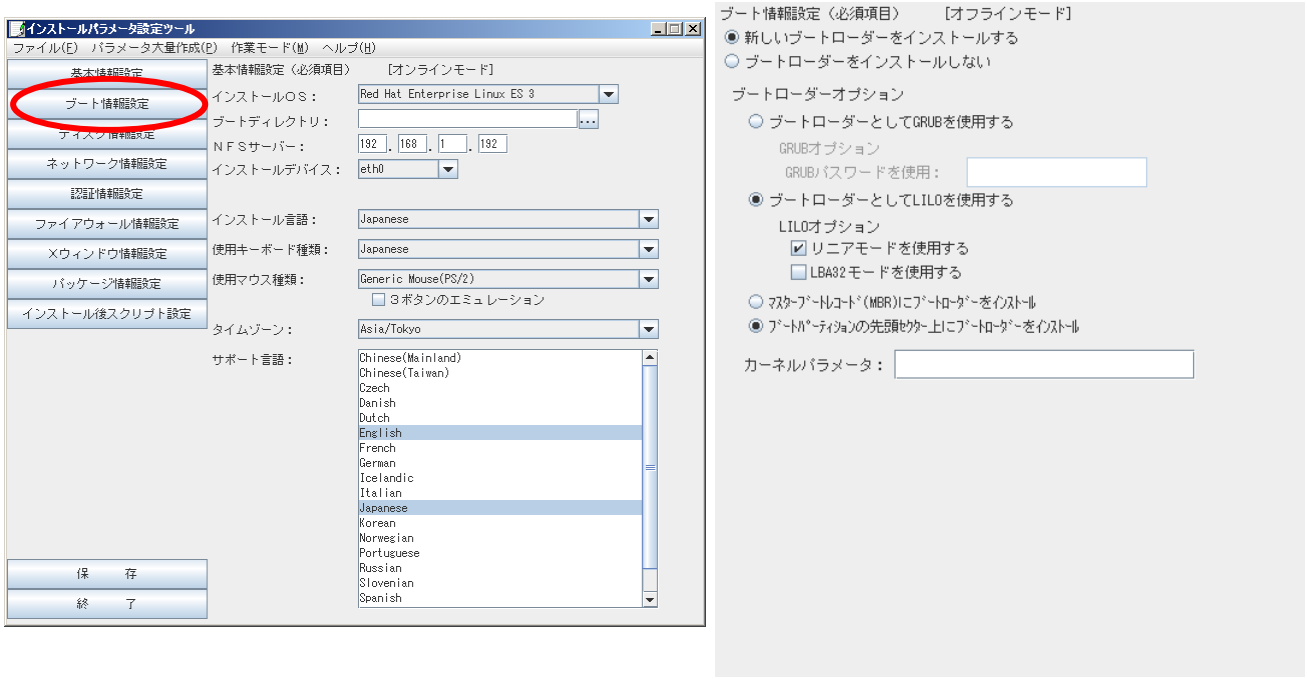
・サポート言語
インストールする Linux ターゲットマシンに導入する言語環境を、言語一覧リストより選択します。
サポート言語は、必須選択項目（複数選択可能：「Ctrl」キー＋マウス選択）です。
サポート言語のデフォルトは、「English」と「Japanese」になります。
又、「English」は、固定選択項目で、非選択にはできません。

注意

Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP の場合は、選択した内容に関わらず、全ての言語が設定されます。

■　ブート情報パネル

インストールする Linux ターゲットマシンのブートローダーに関する設定をします。



・ブートローダーのインストール可否の設定

インストールする Linux ターゲットマシンで、ブートローダーを導入するかを選択します。

- ▶　新しいブートローダーをインストールする
- ▶　ブートローダーをインストールしない

ブートローダーのインストール可否設定は、必須選択項目です。

注意

「ブートローダーをインストールしない」を選択して Linux インストールを行うと、シナリオ実行は正常に終了しますが、Linux をインストールしたパーティションから Linux を起動することはできません。また Linux の IPF アーキテクチャマシンでは、EFI メニューから Linux インストール時に使用した PXE ブートの項目が削除されます。

・GRUB ブートローダーの設定

インストールする Linux ターゲットマシンで GRUB ブートローダーを導入する場合に選択します。

- ▶　ブートローダーとして GRUB を使用する

GRUB ブートローダーの設定は、任意選択項目です。

選択した場合、GRUB ブートローダーのパスワードを任意入力できます。

（GRUB ブートローダーのパスワードには、全角文字は使用できません。）

・LILO ブートローダーの設定

インストールする Linux ターゲットマシンで LILO ブートローダーを導入する場合に選択します。

- ▶　ブートローダーとして LILO を使用する

LILO ブートローダーの設定は、任意選択項目です。

選択した場合、LILO ブートローダーの動作モードを任意選択できます。

- ▶　リニアモードを使用する
- ▶　LBA32 モードを使用する

注意

Red Hat Enterprise Linux AS4、ES4、5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP では LILO パッケージが廃止となりました。Red Hat Enterprise Linux AS4、ES4、5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP をインストールする場合は、ブートローダに GRUB を選択してください。

・ブートローダー導入先の設定

インストールする Linux ターゲットマシンでブートローダーの導入場所を二者択一します。

- マスターブートレコード(MBR)にブートローダーをインストールする
- ブートパーティションの先頭セクタ上にブートローダーをインストールする

ブートローダー導入先の設定は、必須選択項目です。

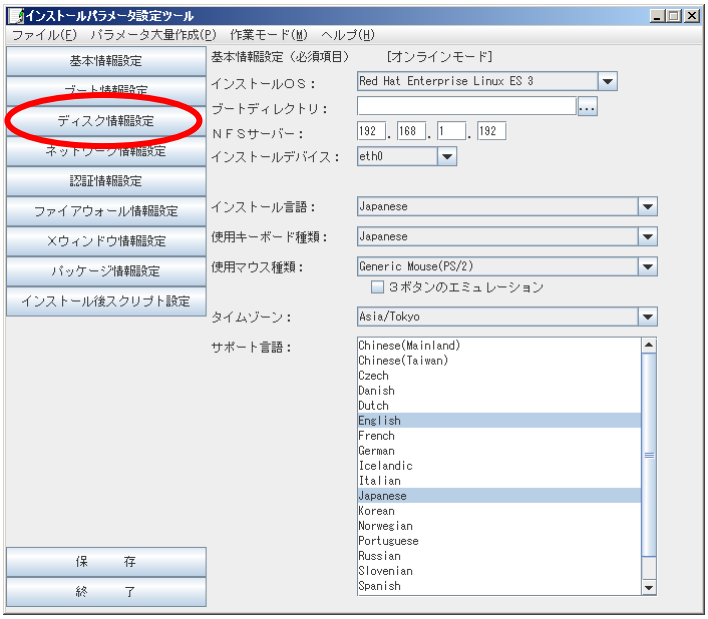
注意 ブートローダ導入先のディスクに対してバックアップ/リストアを行う場合は、「マスターブートレコード(MBR)にブートローダーをインストールする」を指定してください。

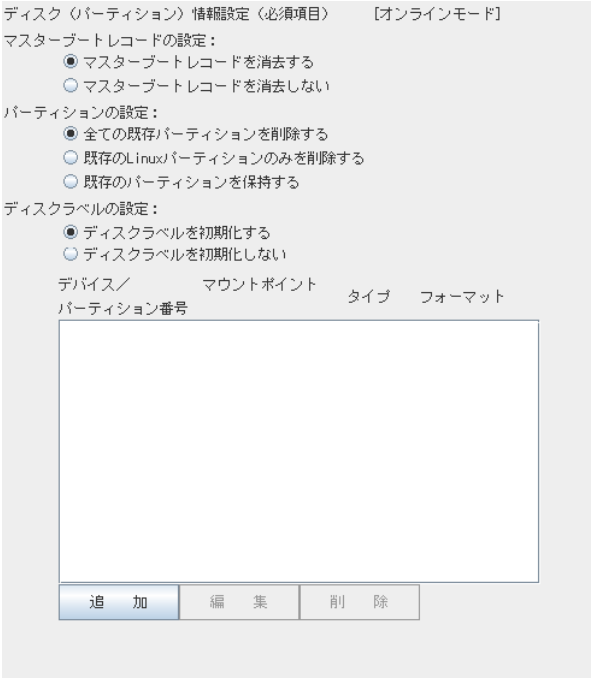
・カーネルパラメータの設定

インストールする Linux ターゲットマシンでブートローダーがカーネルに渡すパラメータを任意に入力、設定します。(カーネルパラメータは、半角文字 255 バイト以内。)

■ ディスク情報パネル

インストールする Linux ターゲットマシンのディスクドライブの使用環境を設定します。





注意 本ツールではソフトウェア RAID の設定はできません。

◆ 現在設定されているディスクドライブ情報の設定

・マスターブートレコードの設定

インストール作業の中で、ディスクドライブのマスターブートレコードの取り扱いを、次の項目から選択します。

- マスターブートレコードを消去する
- マスターブートレコードを消去しない

マスターブートレコードの設定は、必須選択項目です。

・パーティションの設定

インストール作業の中で、ディスクドライブの現在設定されているパーティションの取り扱いをどうするか、次の項目から選択します。

- 全ての既存パーティションを削除する
- 既存の Linux パーティションのみを削除する
- 既存のパーティションを保持する

パーティションの設定は、必須選択項目です。

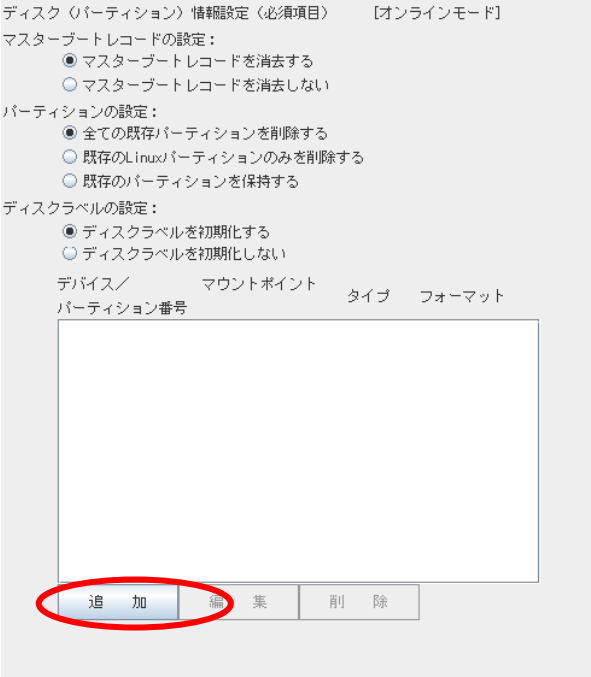
・ディスクラベルの設定
インストール作業の中で、ディスクドライブの現在設定されているディスクラベルの取り扱いをどうするか、次の項目から選択します。

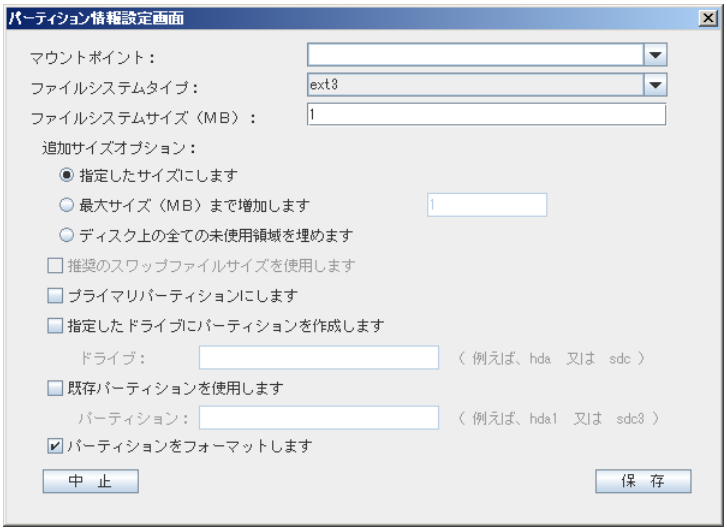
- ディスクラベルを初期化する
- ディスクラベルを初期化しない

ディスクラベルの設定は、必須選択項目です。

◆ インストール時の新規ディスクパーティション情報の設定
インストール作業の中で必要な Linux ディスクパーティション情報を設定します。
ディスクパーティションを追加する場合は、「追加」をクリックし、「パーティション情報設定」画面を表示し、設定します。

重要
インストールする Linux ターゲットマシンのアーキテクチャが IPF の場合は、最初のパーティションに以下を作成する必要があります。
・マウントポイント：/boot/efi
・ファイルシステム：vfat（マウントポイントに/boot/efi を選択すると自動で設定されます）





・マウントポイント
設定しているパーティションのマウントディレクトリを、ディレクトリ一覧から選択、又は、任意のディレクトリ名を入力します。
（マウントディレクトリ名は、「¥」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字を使用できません。）
ファイルシステムのタイプが「swap」の場合は選択できません。
それ以外のファイルシステムのタイプの場合、マウントポイントは必須選択項目です。

・ファイルシステムタイプ
設定しているパーティションの Linux ファイルシステムのタイプを、ファイルシステムタイプ一覧リストから選択します。ファイルシステムタイプは必須選択項目です。
ファイルシステムタイプのデフォルトは、「ext3」タイプになります。

・ファイルシステムサイズ
設定しているパーティションの確保する容量を、M バイトの単位で入力します。
追加サイズオプションで「指定したサイズにします」を選択した場合は、必須入力になります。
ファイルシステムサイズのデフォルトは、1MB になります。

・追加サイズオプション

設定しているパーティションの容量確保をどのようにするかのオプションを選択します。

- 指定したサイズにします
- 最大サイズ（MB）まで増加します。
  選択した場合は、増加容量の単位を M バイトで入力します。

- ディスク上の全ての未使用領域を埋めます

選択可能な場合は必須項目です。

・推奨のスワップファイルサイズを使用します

ファイルシステムタイプにて「swap」を選択した場合、選択可能となります。
選択した場合は、スワップファイルシステムの容量をインストール時に自動設定します。
ファイルシステムタイプにて「swap」を選択した場合の任意の選択項目です。

・プライマリパーティションにします

選択した場合は、設定しているパーティションをプライマリパーティションとして、自動的にアロケーションを強制的に実行します。 実行できない場合は異常終了します。
「プライマリパーティションにします」は、任意選択項目です。

・指定したドライブにパーティションを作成します

選択した場合は、設定しているパーティションをインストール時に新規作成します。
新規作成するパーティションを作成するディスクドライブ名を必須入力する必要があります。
（ドライブ名は、半角英数字で入力して下さい。）

ヒント

IDE ディスクの 1 番目の場合は hda、2 番目の場合は hdb を指定します。又、SCSI ディスクの 1 番目の場合は sda を指定します。

・既存パーティションを使用します

選択した場合は、「パーティション」に現在存在するパーティション名を入力してください。設定しているパーティションは「パーティション」で指定された既存のパーティション上に配置されます。（パーティション名は、半角英数字で入力して下さい。）

ヒント

IDE ディスクの 1 番目の第 1 パーティションの場合は hda1、2 番目の第 2 パーティション場合は hdb2 を指定します。また、SCSI ディスクの 1 番目の第 1 パーティションの場合は sda1 を指定します。

・パーティションをフォーマットします

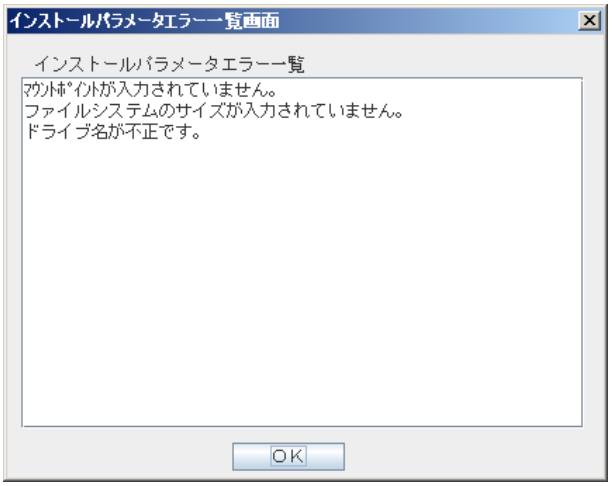
選択した場合は、設定しているパーティションを、インストール時にフォーマットします。
「パーティションをフォーマットします」は、デフォルトとして選択されます。

ヒント

ディスクが複数あるコンピュータにインストールする場合、インストールするドライブを指定しない場合には、どのディスクにインストールするかはインストーラが自動で割り振ります。インストールするディスクを指定するには「指定したドライブにパーティションを作成します」にてインストールするドライブを設定してください。

■「保存」

設定したパーティション情報を保存する場合は、「保存」をクリックして、パーティション設定画面を閉じます。設定したパーティション情報に不具合またはエラーがある場合は、エラー一覧ダイアログ画面が表示され保存できません。

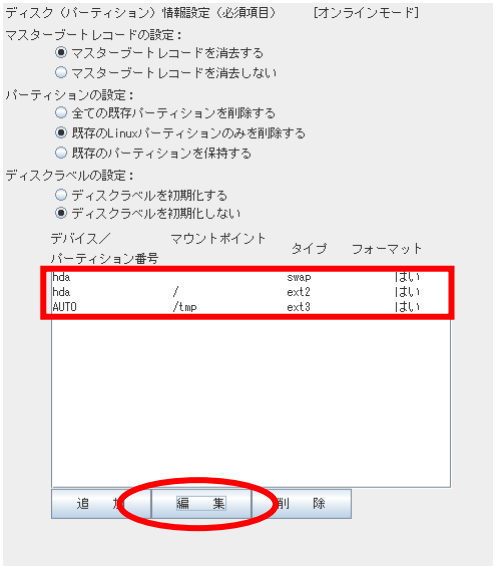


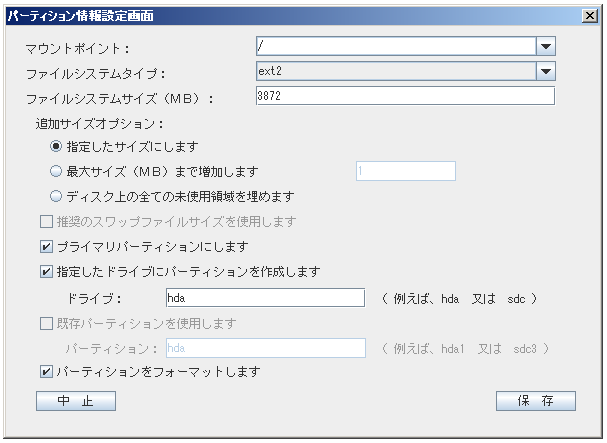
■「中止」

設定したパーティション情報を保存しない場合は、「中止」をクリックして、パーティション設定画面を閉じます。

■「編集」

現在設定されているディスクパーティションを編集する場合は、表示されているパーティション一覧から編集対象のパーティションを選択し、「編集」をクリックしてパーティション設定ダイアログ画面を表示、編集します。





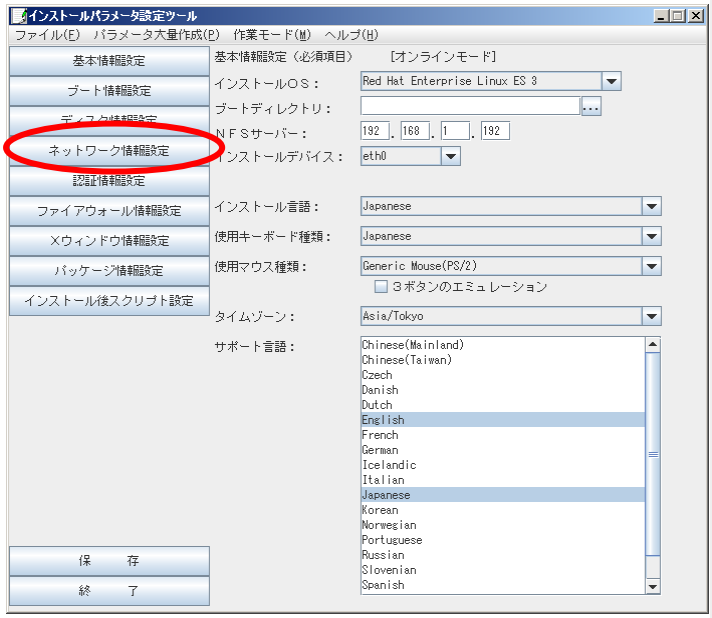
■「削除」

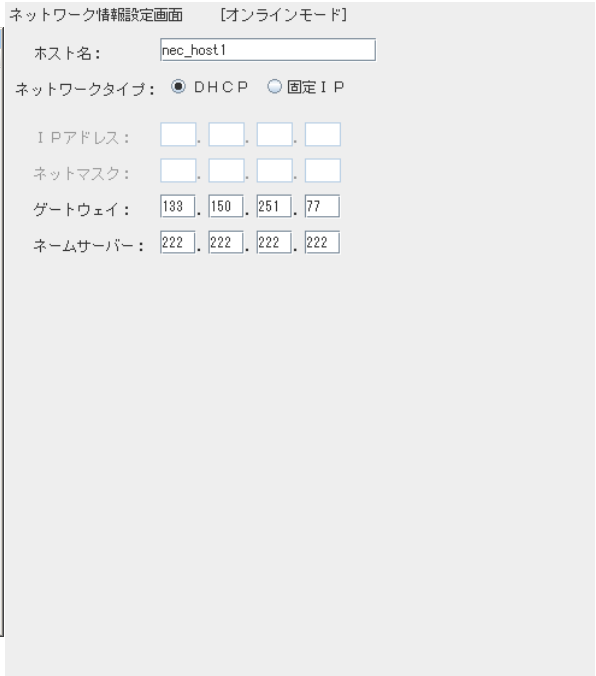
現在設定されているディスクパーティションを削除する場合は、表示されているパーティション一覧から削除対象のパーティションを選択し、「削除」をクリックします。

表示されているパーティション一覧から削除したパーティションが無くなります。

■ ネットワーク情報設定パネル

インストールするLinuxターゲットマシンのイーサーネットデバイス「eth0」におけるTCP／IPネットワーク環境を設定します。





ヒント　ネットワークの設定は基本情報設定パネルのインストールデバイスに指定した LAN ボードに対して設定されます。

・ホスト名

インストールする Linux ターゲットマシンのホスト名を半角文字 255 文字以内で入力します。
ホスト名は、必須入力項目です。
（「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

・ネットワークタイプ

イーサーネットデバイス「eth0」の次の TCP／IP ネットワークタイプを選択します。

- DHCP：DHCP サーバによる動的 IP アドレス設定
- 固定 IP：手動での IP アドレス設定

ネットワークタイプは、「DHCP」がデフォルトで必須選択項目です。

・IP アドレス

イーサーネットデバイス「eth0」の IP アドレスを入力します。
ネットワークタイプが「固定 IP」の場合に、必須入力項目になります。
例）192.168.0.1 や 192.168.100.150

・ネットマスク

イーサーネットデバイス「eth0」の IP アドレスに対するネットマスク値を入力します。
ネットワークタイプが「固定 IP」の場合に、必須入力項目になります。
例）255.255.0.0 または 255.255.255.0

・ゲートウェイ

イーサーネットデバイス「eth0」の IP アドレスに対する、ゲートウェイマシンの IP アドレスを入力します。
ネットワークタイプが「DHCP」、「固定 IP」どちらの場合でも、任意入力項目になります。
例）192.168.0.250 または 192.168.100.200

・ネームサーバー

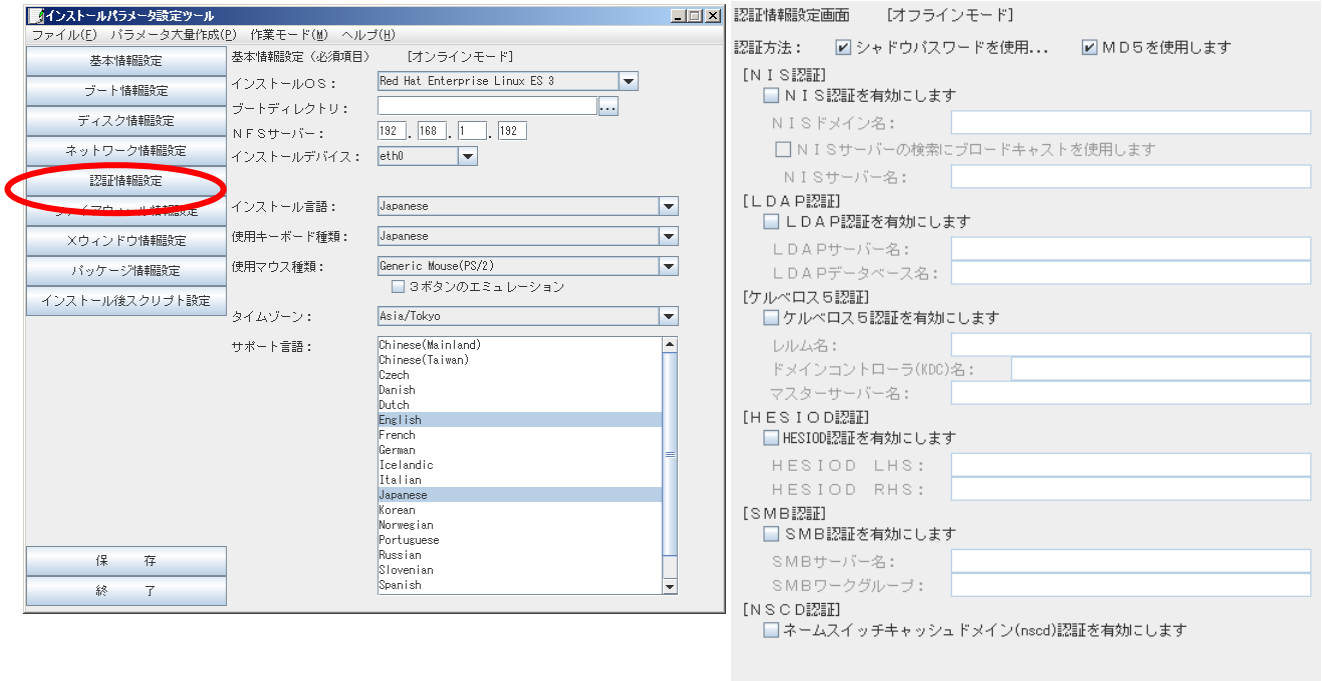
イーサーネットデバイス「eth0」の IP アドレスに対する、DNS サーバの IP アドレスを入力します。
ネットワークタイプが「DHCP」、「固定 IP」どちらの場合でも、任意入力項目になります。
例）192.168.0.120 または 192.168.100.100

注意

DPM に登録している MAC アドレスを持つ LAN ボードには、固定 IP アドレス、DHCP サーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない場合があります。

■ 認証情報設定パネル

インストールする Linux ターゲットマシンで使用する各種認証機能の情報設定をします。



・認証方法

インストールする Linux ターゲットマシンのユーザ認証の方法を選択します。

- シャドウパスワードを使用します
  選択した場合、ユーザパスワードにシャドウパスワードを使用します。
- MD5 を使用します
  選択した場合、ユーザパスワードに MD5 暗号化を使用します。

注意

Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP の場合は、「シャドウパスワードを使用します」を選択してください。

・NIS 認証

「NIS 認証を有効にします」を選択した場合、NIS(Network Information Service)ユーザ認証機能情報を設定する必要があります。

- NIS ドメイン名

NIS ドメイン名を必須入力する必要があります。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

- NIS サーバー名の設定方法

NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用します。

「NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用します」にチェックを入れるか、NIS サーバー名を入力する必要があります。入力は必須です。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

・LDAP 認証

「LDAP 認証を有効にします」を選択した場合、LDAP(Lightweight Directory Access Protocol)ユーザ認証機能情報を設定する必要があります。

- LDAP サーバー名

LDAP サーバー名を必須入力する必要があります。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

- LDAP データベース名

LDAP データベース名を必須入力する必要があります。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

・ケルベロス 5 認証

「ケルベロス 5 認証を有効にします」を選択した場合、ケルベロス 5 のユーザ認証機能情報を設定する必要があります。

- レルム名

所属するケルベロス 5 のレルム名を必須入力する必要があります。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

- ドメインコントローラ（KDC）名

設定したレルムへの要求に対してサービスするKDC名を必須入力する必要があります。設定したレルム内に複数のKDCがある場合は、KDC名をカンマで区切って入力します。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

- マスターサーバー名

設定したレルムに所属するKDCで、「kadmind」が動作しているKDC名を必須入力する必要があります。このマスターサーバーがユーザ情報等の変更等を取り扱うKDCサーバーになります。

（半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

・HESIOD 認証

「HESIOD 認証を有効にします」を選択した場合、HESIOD でのユーザ認証機能情報を設定する必要があります。

HESIOD 認証は、DNS を使用してユーザとグループ情報を管理します。

- HESIOD LHS(Left-hand side)

  ユーザ情報等の検索時の LHS 情報を必須入力する必要があります。

  (半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。)

- HESIOD RHS(Right-hand side)

  ユーザ情報等検索時の RHS 情報を必須入力する必要があります。

  (半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。)

・SMB 認証

「SMB 認証を有効にします」を選択した場合、SMB(Samba)のユーザ認証機能情報を設定する必要があります。

- SMB サーバー名

  SMB 認証に使用するサーバー名を必須入力する必要があります。

  複数のサーバーがある場合は、サーバー名をカンマで区切ります。

  (半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。)

- SMB ワークグループ名

  設定した SMB サーバーの所属ワークグループ名を必須入力する必要があります。

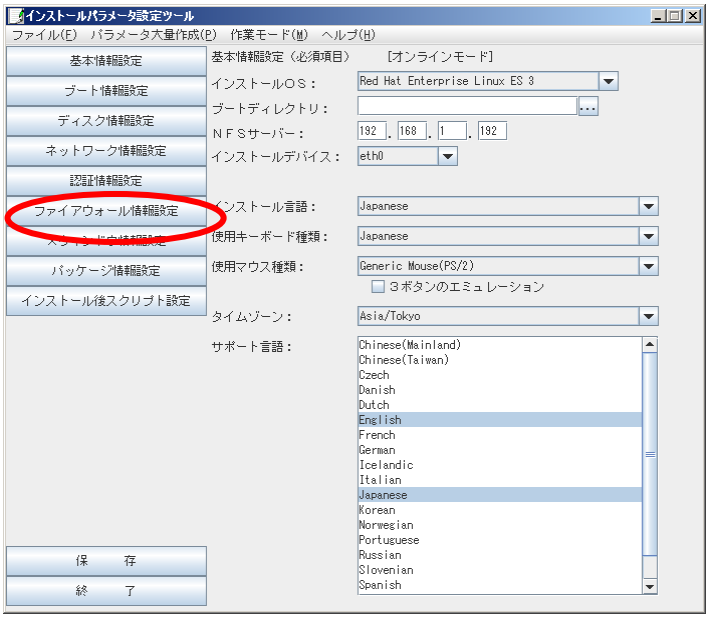
  (半角文字 32 バイト以内、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。)

・NSCD 認証(Name Switch Cache Domain)

「NSCD 認証を有効にします」を選択した場合、ユーザやグループ等の情報をキャッシュすることができます。

■ ファイアウォール情報設定パネル

インストールする Linux ターゲットマシンでのファイアウォール環境の情報設定をします。



・デフォルトのファイアウォールレベル設定

設定するファイアウォールのレベルを選択します。ファイアウォールのレベルは必須選択項目です。ファイアウォールレベルのデフォルトは、「中」レベルになります。

「インストール OS」に「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」を選択した場合は、[デフォルトのファイアウォールレベル設定]は「有効」、「無効」の選択になります。

注意

[デフォルトのファイアウォールレベル設定]の「高」、「中」、「低」レベルの項目は、Red Hat Enterprise Linux 3、4 のバージョンではインストール後に以下のように対応します。

高、中 → ファイアウォールの設定あり

低 → ファイアウォールの設定なし

・デフォルトのファイアウォールのルール設定

設定するファイアウォールのルールを選択します。

- デフォルトのファイアウォールルールを使用します
- ファイアウォールルールをカスタマイズします

「ファイアウォールルールをカスタマイズします」を選択した場合は、次の詳細項目を設定する必要があります。

- 信頼されるデバイス

「eth0」

イーサーネットデバイス「eth0」のみを選択可能です。

選択した「信頼されるデバイス」「eth0」には、ファイアウォールの設定が行われていません。

- 導入許可

ファイアウォール経由で通信する通信プロトコルを選択します。複数選択可能です。

・WWW（HTTP）
・FTP
・SSH
・DHCP
・Mail（SMTP）
・Telnet

注意

Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP の場合は、選択した内容に関わらず SSH が必ず許可されます。

- 他のポート

ファイアウォール経由で通信する通信プロトコルとポートを入力します。

複数ある場合は、カンマ区切りで入力します。

（半角文字 255 バイト以内、「¥」、「/」、「;」、「-」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

例） 1029:tcp,1040:udp

重要

DPM を使用して Linux のインストールを行う場合、以下の設定を行ってください。
設定しない場合はDPMからのリモートアップデート及び、リモートシャットダウンを行うことができません。

■Red Hat Enterprise Linux 3 update2 以前

「デフォルトのファイアウォールレベル設定」を「低」レベルに設定してください。
インストール後にファイアウォールの設定を行う場合は、以下のポートを開けてください。

56000:tcp,56010:tcp,56001:udp

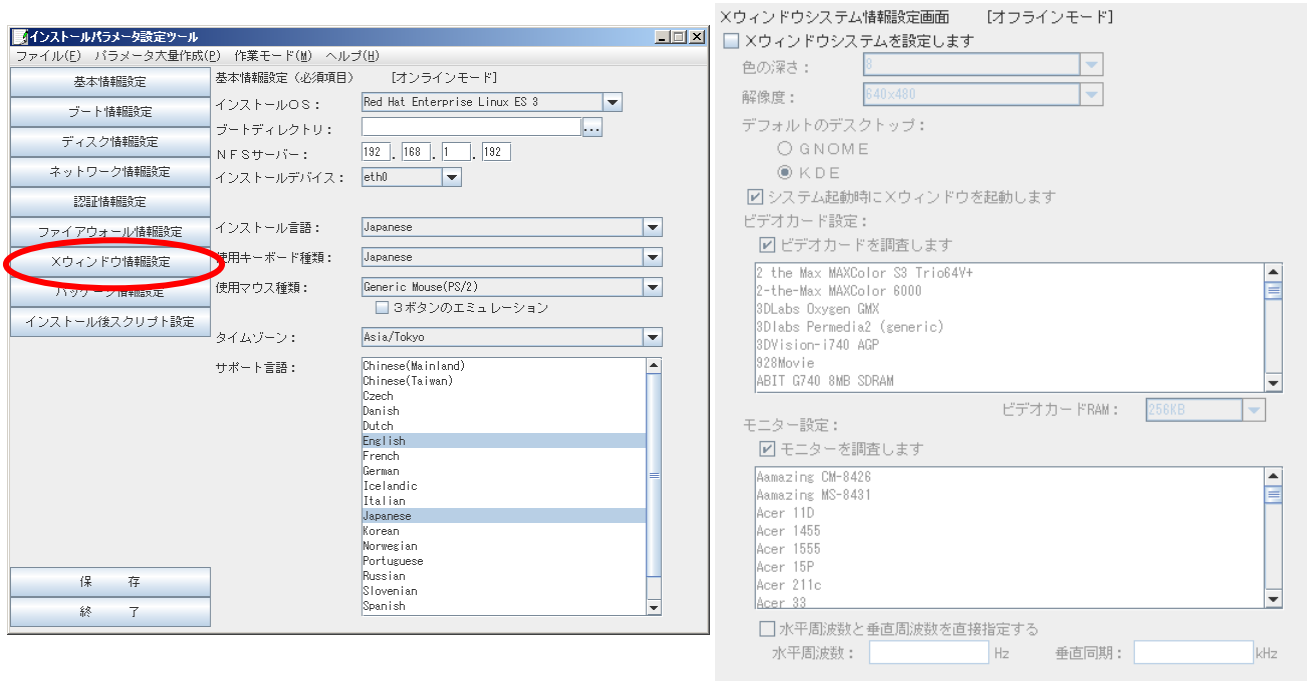
■Red Hat Enterprise Linux 3 update3 以降

「デフォルトのファイアウォールレベル設定」が「高」もしくは「中」レベルの場合、「ファイアウォールのルールをカスタマイズします」を選択して、「他のポート」に以下の記述を追加して下さい。

56000:tcp,56010:tcp,56001:udp

■ Xウィンドウ情報設定パネル

インストールする Linux ターゲットマシンでのXウィンドウ環境の情報設定をします。



・Xウィンドウシステムの環境設定をするかどうか選択します。

「Xウィンドウシステムを設定します」を選択した場合は、導入パッケージに「X Window System」を強制選択します。
また、Xウィンドウ環境の詳細設定項目が入力、選択が可能になります。

・色の深さ

Xウィンドウシステムでのデフォルトのカラー設定を、色の深さ一覧リストから選択します。
「色の深さ」は必須選択項目です。
「色の深さ」のデフォルトは、「8」になります。

注意

Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4/5.1 AP～5.4 AP の場合は、選択した内容に関わらず自動的に設定されます。

・解像度

Xウィンドウシステムでのデフォルトの解像度を、解像度一覧リストから選択します。
「解像度」は必須選択項目です。
「解像度」のデフォルトは、「640x480」になります。

・デフォルトのデスクトップ

Xウィンドウシステムで使用するデフォルトのデスクトップ環境を選択します。

- GNOME
- KDE

「デフォルトのデスクトップ」は必須選択項目です。

注意 Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4、5.1 AP～5.4AP の場合は、選択した内容に関わらず、自動的に設定されます。

・ビデオカード設定

ビデオカードの設定方法を、自動設定する場合は、以下を選択します。

- ビデオカードを調査します

手動設定する場合は上記を選択せず、ビデオカード一覧から導入設定するビデオカードを選択し、ビデオカード RAM の値を、RAM 一覧リストから選択します。

・モニター設定

モニターの設定方法を、自動設定する場合は、以下を選択します。

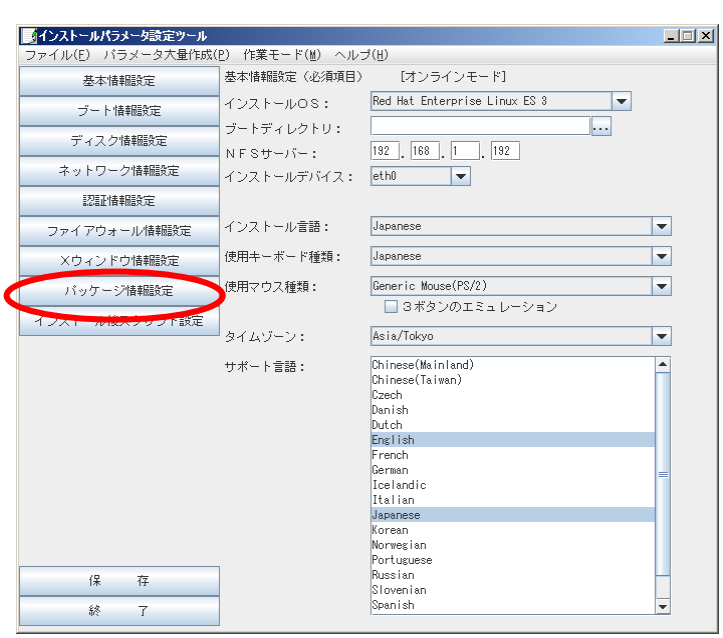
- モニターを調査します

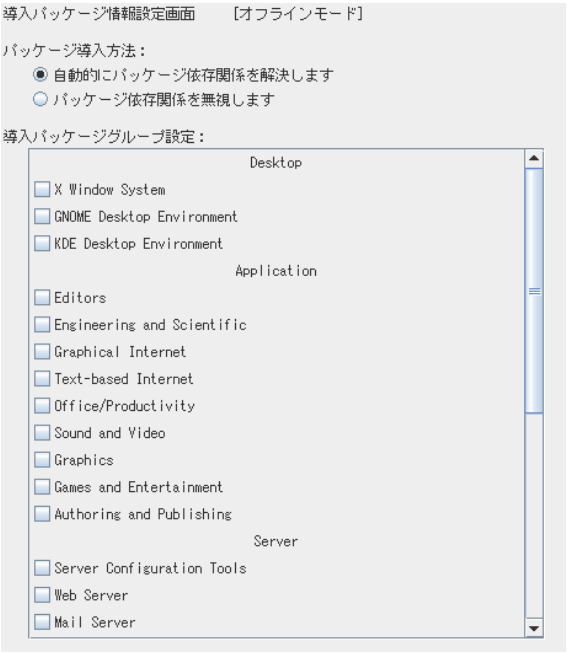
手動設定する場合は上記を選択せず、モニター一覧から導入設定するモニターを選択します。

注意 「モニターを調査します」又は、一覧より項目を選択し、シナリオ実行を行うと解像度が正しく設定されない場合あります。その場合、水平／垂直同期周波数を直接指定することにより正しく設定できますので、モニターのユーザーズガイドに記載されている値を設定してください。

■ パッケージ情報設定パネル

インストールする Linux ターゲットマシンに導入するソフトパッケージの情報設定をします。





・パッケージ導入方法

導入するソフトパッケージの導入方法を選択します。

- 自動的にパッケージ依存関係を解決します
- パッケージ依存関係を無視します

「パッケージ導入方法」は必須選択項目です。

・導入パッケージグループ設定

インストール作業で導入するソフトパッケージグループを、パッケージグループ一覧リストから選択します。複数選択が可能です。

重要

Linuxターゲットマシンがx64 Editionの場合は、/lib/libgcc_s.so.1が必要となります。
/lib/libgcc_s.so.1がない場合は、マルチキャストによるリモートアップデートを行うことはできません。以下のいずれかの方法で/lib/libgcc_s.so.1をインストールしてください。

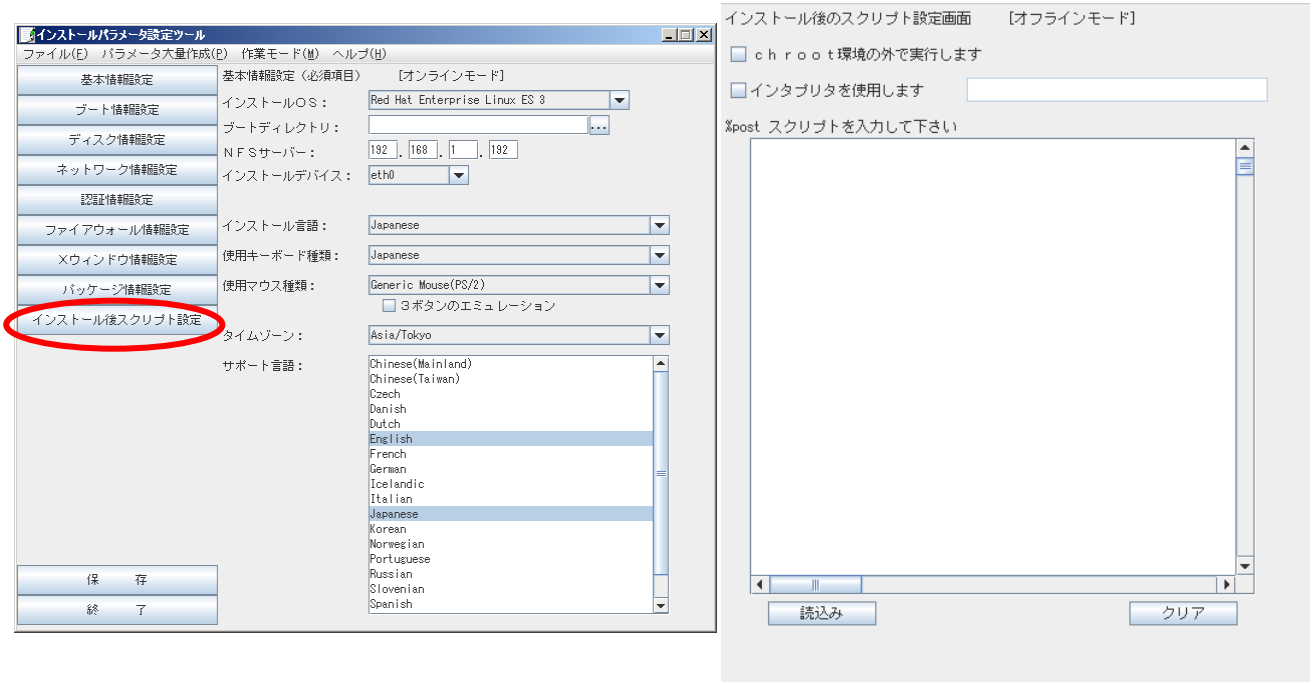
1) OSクリアインストール時にパッケージの「Compatibility Arch Support」を選択してください。
2) OSクリアインストール後にユニキャストによるリモートアップデートでlibgcc-3.4.5-2.i386.rpmをインストールしてください。

注意

パッケージグループ一覧リストは、基本情報設定パネルの「インストール OS」により内容が変わります。

■ インストール後スクリプト情報設定パネル

Linux ターゲットマシンで、インストール終了後に実行したいシェルスクリプトを設定します。



・スクリプト実行環境の設定

通常、スクリプトは chroot 環境下で実行されます。chroot 環境の外で実行したい場合は、「chroot 環境の外で実行します」を選択します。

・インタプリタの設定

デフォルトのシェルインタプリタ以外のインタプリタを使用する場合、使用するインタプリタのファイル名を入力します。

（半角文字 255 バイト以内、「¥」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「'」、「|」、「[」、「]」、「@」、空白、全角文字は使用できません。）

例）　/usr/bin/python

・%post スクリプト入力

Linux ターゲットマシン上で、インストール作業終了後に実行したい Linux シェルスクリプトを入力します。入力できるスクリプトは、1 行の文字数は 320 文字まで、行数は最大 600 行まで入力できます。

注意

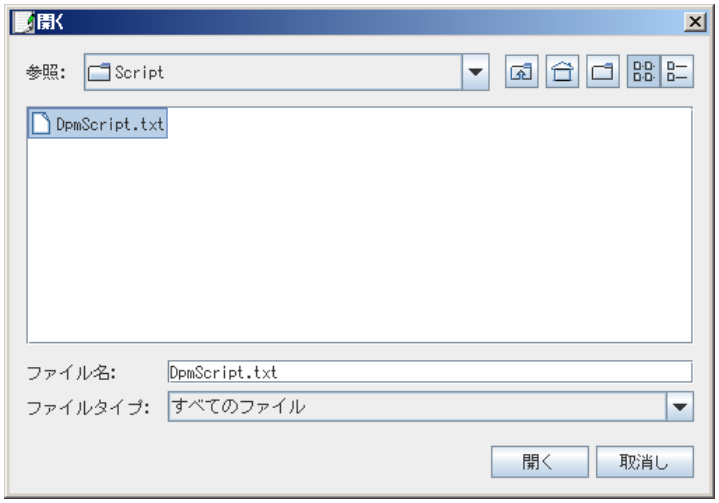
post スクリプトへ記載できるのは、1 行につき最大半角 320 文字までとなります。
読み込みを行うスクリプトに 320 文字を超える行が含まれている場合エラーとなり、post スクリプトの読み込みは行われません。
320 文字を越える行については、予め ″¥″ を改行する位置に挿入して改行し、1行の文字数が 320 文字以下になるように修正してください。

例）以下に修正の例を示します。（″XXXX・・・ZZZZ″ は、スクリプト内の行になります。）

```
修正前----------------------------------------------------------
        :
 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXZZZZZZZZZZZZZZZZ
        :
 ----------------------------------------------------------
修正後----------------------------------------------------------
        :
 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ¥
 ZZZZZZZZZZZZZZZZ
        :
 ----------------------------------------------------------
```

■「読込み」

現在の作業ディレクトリを初期ディレクトリとして、ファイル選択ダイアログ画面が表示され、ファイル選択すると選択したファイルの内容がスクリプト情報として読み込まれます。

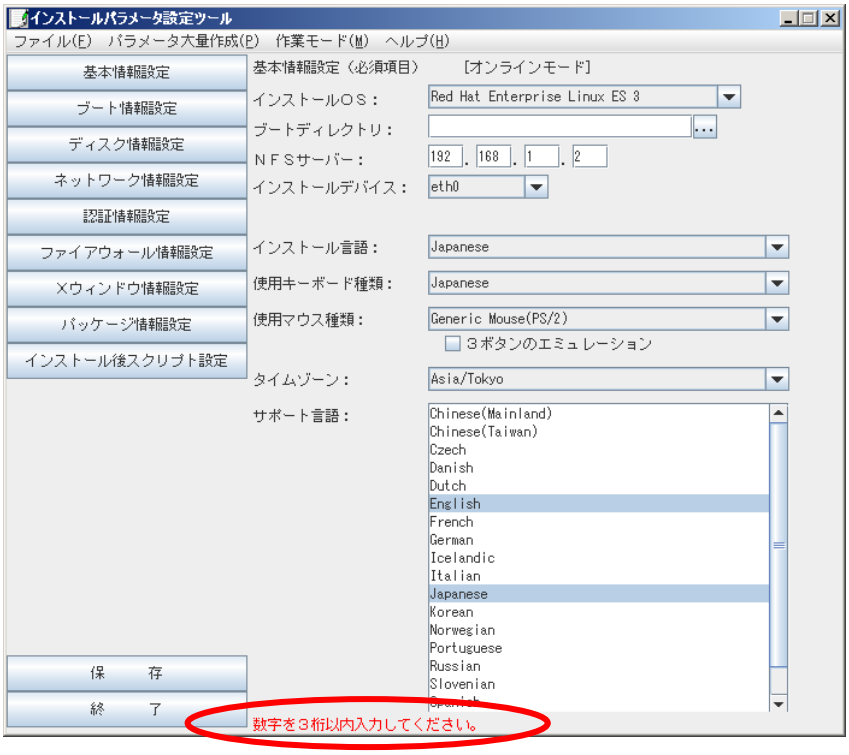


ヒント

■ ファイルを読み込む際に、入力済みの内容とファイルの内容を合わせて行数が 600 行を越える場合と、1 行の行数が 320 文字を超える場合は、ファイルの読み込みができません。
■ DPM クライアントソフトの導入、セットアップ用のスクリプトが、自動的に追加設定されます。

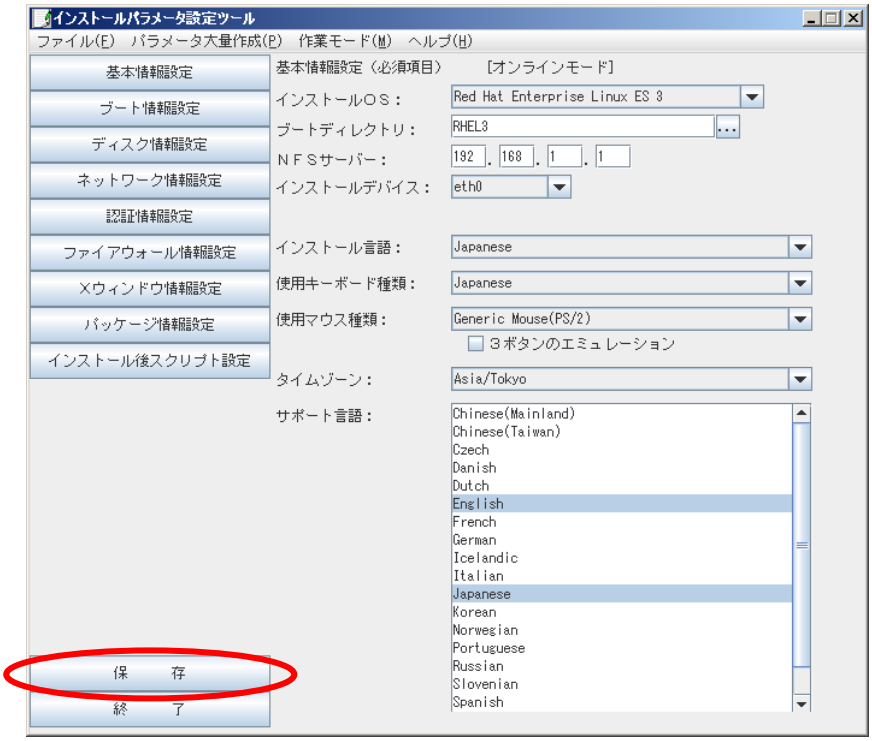
■「クリア」
現在入力されているスクリプト情報を全て削除します

[エラー]
各情報パネルで、入力した情報に不具合またはエラーがある場合は、各情報パネルの最下段に、赤字でエラーメッセージが表示されます。



■ 保存

ここまでで作成したインストールパラメータの内容を、Linux インストールパラメータファイルとして保存します。

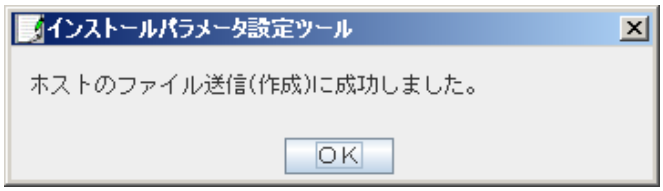


▶ 作業モードがオンラインの場合

作業用の一時ディレクトリから管理ディレクトリにファイルを送信します。

・デフォルト → 共有フォルダ¥AnsFile¥linux （Linux ブートパラメータファイル）

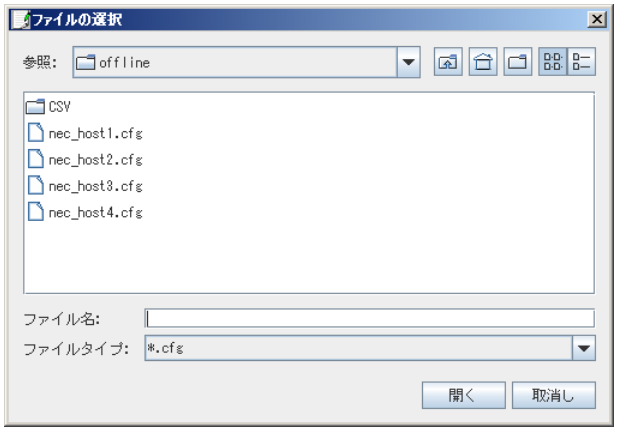
共有フォルダ¥exports¥ks （Linux セットアップパラメータファイル）



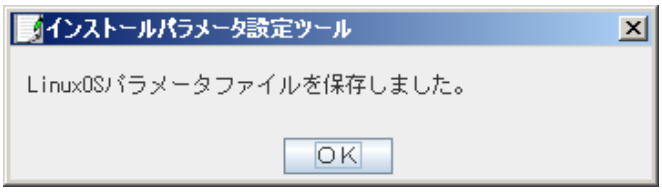
▶ 作業モードがオフラインの場合

ワークディレクトリで指定したフォルダが表示されますので「ファイル名」を指定して保存します。

・デフォルト → C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager ¥linux¥**offline**



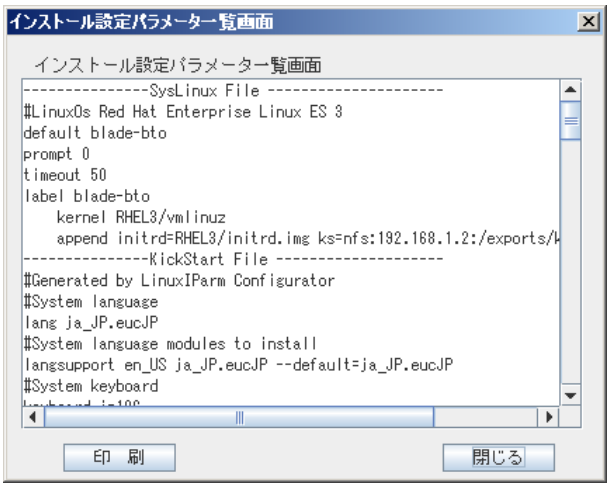
正常に保存処理されると以下の画面が表示されます。



■ 設定情報表示

「ファイル」メニューの「設定情報表示」を選択します。

現在設定されているインストールパラメータの内容を、Linux インストールパラメータファイルの出力形態で、一覧表示します。現在設定されている Linux インストールパラメータの内容が表示されます。



■「印刷」

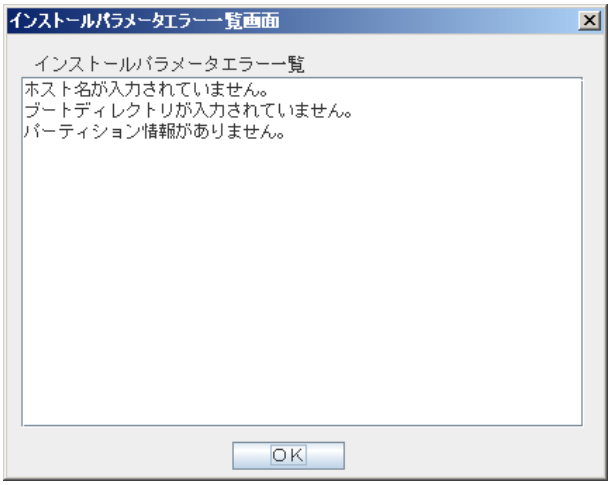
「インストール設定パラメーター覧画面」を印刷します。

■「閉じる」

現在表示されている設定情報表示画面を終了します。

[エラー]

現在設定されている Linux インストールパラメータの内容に不具合またはエラーが存在する場合は、事前に「インストールパラメータエラー一覧」画面が表示されます。エラー一覧に表示されている内容を修正してください。

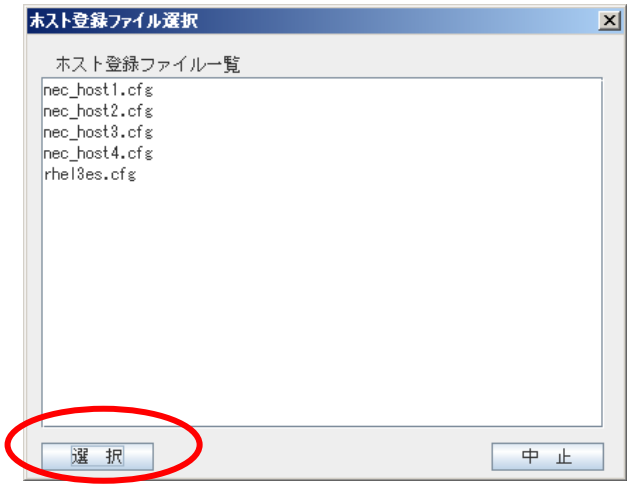


■ 既存の Linux インストールパラメータファイルを読み込む

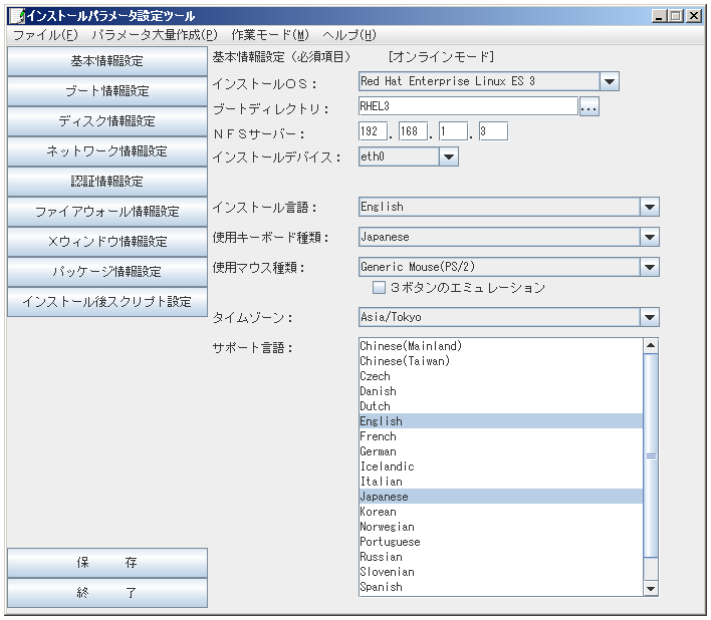
「ファイル」メニューの「開く」を選択します。

▶ 作業モードがオンラインの場合

(1) 管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥exports¥ks」ディレクトリ配下に存在する、Linux セットアップパラメータファイルの一覧リストが表示されます。

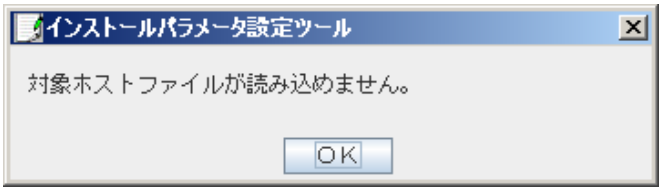


(2) 対象の Linux セットアップパラメータファイルをダブルクリックするか、Linux セットアップパラメータファイルを選択し、「選択」をクリックすると以下のように表示されます。



[エラー]

Linux インストールパラメータファイルの読み込み時に、何等かのエラーがある場合は、次のメッセージが表示されます。Linux セットアップパラメータファイル、および Linux ブートパラメータファイルの内容を確認して下さい。

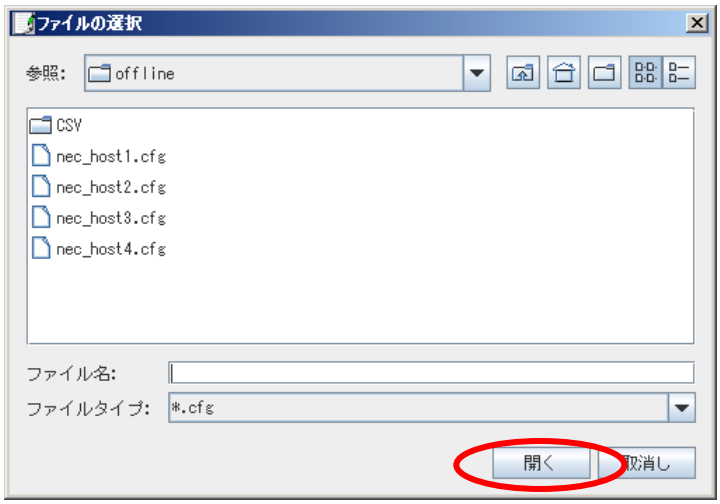


注意

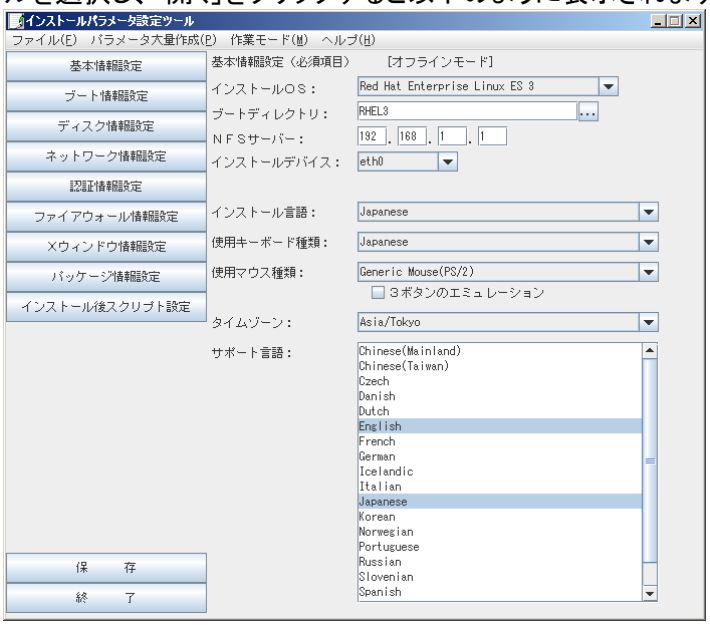
本バージョンでサポートしていない Linux OS のインストールパラメータファイルを選択した場合、上記エラーが表示される場合があります。サポート OS の詳細は、「ユーザーズガイド 導入編 はじめに」を参照してください。

- 作業モードがオフラインの場合

(1) 現在の作業ディレクトリ配下に存在する Linux セットアップパラメータファイルの一覧リストが表示されます。

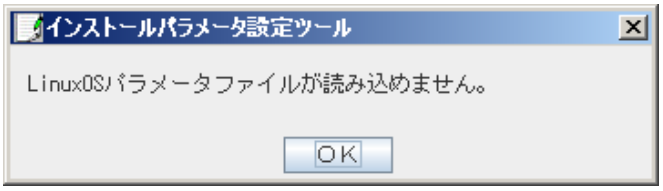


(2) 対象の Linux セットアップパラメータファイルをダブルクリックするか、Linux セットアップパラメータファイルを選択し、「開く」をクリックすると以下のように表示されます。



[エラー]

Linux インストールパラメータファイルの読み込み時に、何等かのエラーがある場合は、次のメッセージが表示されます。Linux セットアップパラメータファイル、および Linux ブートパラメータファイルの内容を確認して下さい。



注意

本バージョンでサポートしていない Linux OS のインストールパラメータファイルを選択した場合、上記エラーが表示される場合があります。サポート OS の詳細は、「ユーザーズガイド 導入編 はじめに」を参照してください。

■ Linux インストールパラメータファイルの上書き保存

現在表示されている Linux インストールパラメータの内容を元のファイルへ上書き保存します。
「ファイル」メニューの「上書き保存」を選択します。

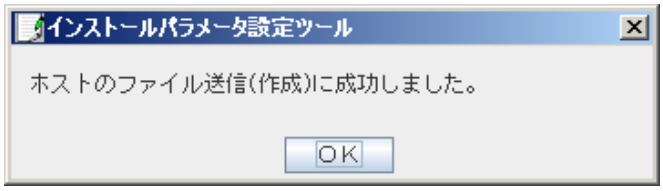
▶ 作業モードがオンラインの場合

設定されている Linux インストールパラメータの内容を、以下のファイルに上書き保存します。

・Linux ブートパラメータファイル
→ 管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥AnsFile¥Linux」

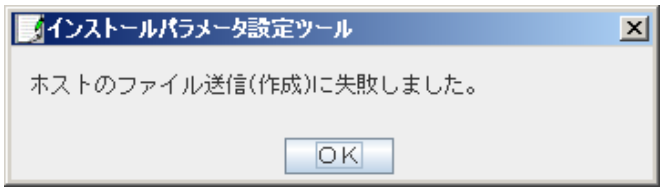
・Linux セットアップパラメータファイル
→ 管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥exports¥ks」

管理サーバへのファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。



[エラー]

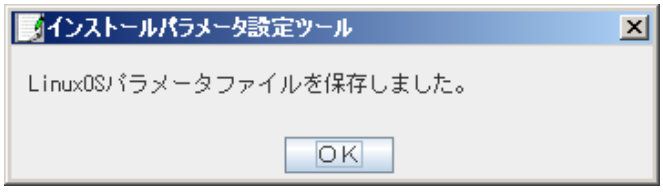
管理サーバへのファイル保存に何等かの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、管理サーバ、またはネットワーク上等の問題解決後、再保存してください。



▶ 作業モードがオフラインの場合

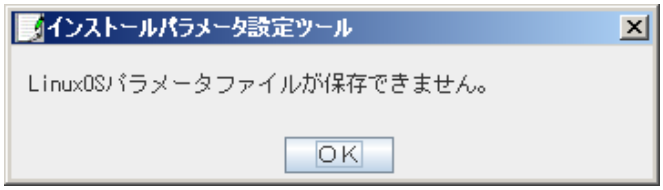
設定されている Linux インストールパラメータの内容を、現在設定されている作業ディレクトリ配下に、上書き保存します。

作業ディレクトリ配下にファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。



[エラー]

作業ディレクトリ配下へのファイル保存に何等かの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、保存先作業ディレクトリ上等の問題解決後、再保存してください。

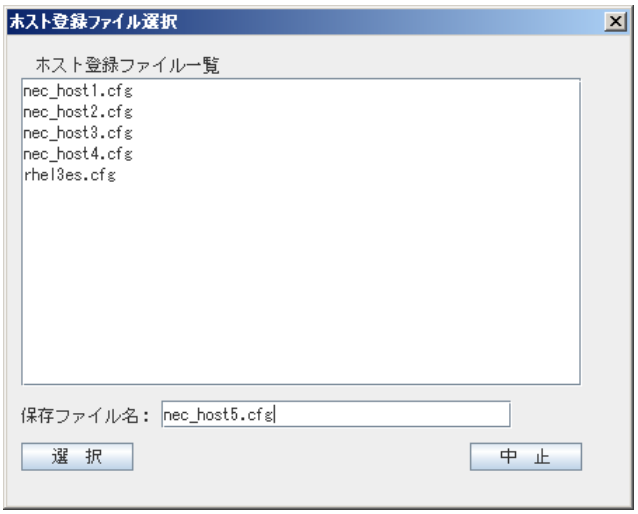


■ Linux インストールパラメータファイルの名前を付けて保存

現在設定されている Linux インストールパラメータの内容を、ファイル名を指定して新規保存します。
「ファイル」メニューの「名前を付けて保存」を選択します。

▶ 作業モードがオンラインの場合

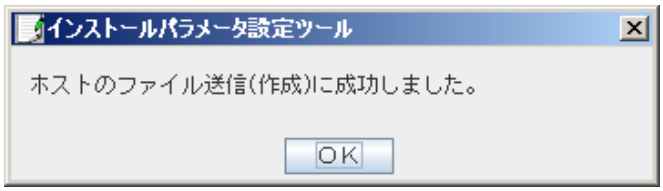
管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥exports¥ks」配下に存在するファイルの一覧が「ホスト登録ファイル選択」画面で表示されます。「保存ファイル名」を入力して「選択」をクリックします。



・Linux ブートパラメータファイル
→ 管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥AnsFile¥Linux」配下に
拡張子無しの入力ファイル名で保存

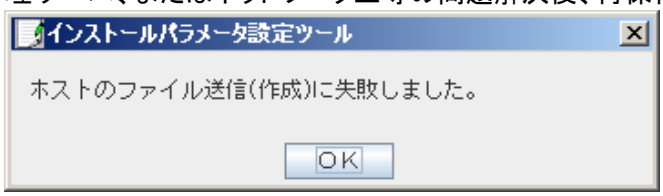
・Linux セットアップパラメータファイル
→ 管理サーバ上の「共有ディレクトリ¥exports¥ks」配下に
拡張子「.cfg」付の入力ファイル名で保存

管理サーバへのファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。



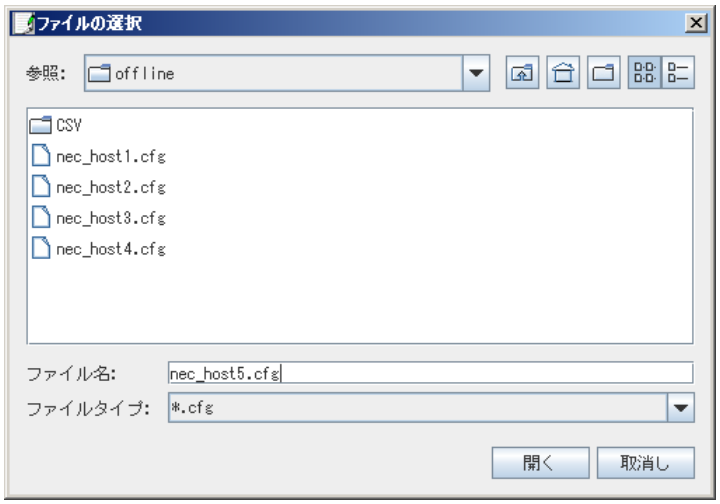
[エラー]

管理サーバへのファイル保存に何等かの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、管理サーバ、またはネットワーク上等の問題解決後、再保存してください。



▶ 作業モードがオフラインの場合

現在設定されている作業ディレクトリ配下に存在するファイルの一覧が「ファイル選択」画面で表示されます。「ファイル名」を入力して「保存」をクリックします。



・Linux ブートパラメータファイル

→ 選択したディレクトリ配下に、拡張子無しの入力ファイル名で保存

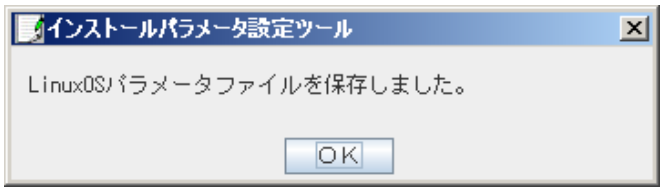
・Linux セットアップパラメータファイル

→ 管選択したディレクトリ配下に、拡張子「.cfg」付の入力ファイル名で保存

ヒント

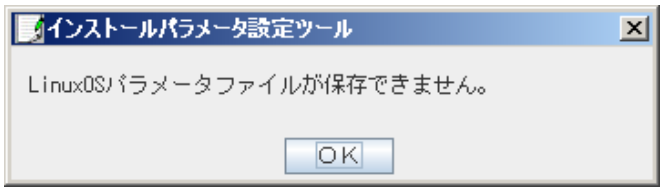
選択時に表示されるディレクトリは、現在設定されているディレクトリになります。
保存先ディレクトリを変更した場合は、そのディレクトリが作業ディレクトリに変更されます。

作業ディレクトリ配下にファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。



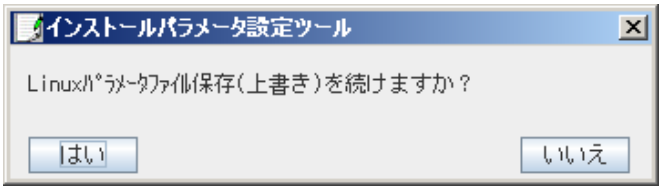
[エラー]

作業ディレクトリ配下へのファイル保存に何等かの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、保存先作業ディレクトリ上等の問題解決後、再保存してください。



ヒント

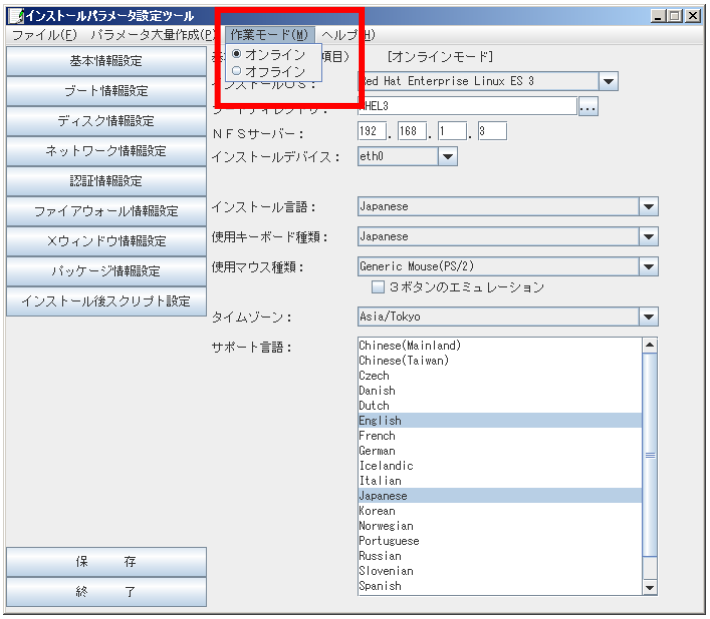
保存先ディレクトリ配下に、同じファイル名のファイルが存在する場合、以下の画面が表示されます。上書き保存する場合は、「はい」を、上書きしない場合は、「いいえ」をクリックしてください。



■　作業モードの変更

現在の作業モードを適時変更することが出来ます。

「作業モード」を選択し、「オンライン」または「オフライン」を選択します。



■　インストールパラメータ設定ツールの終了

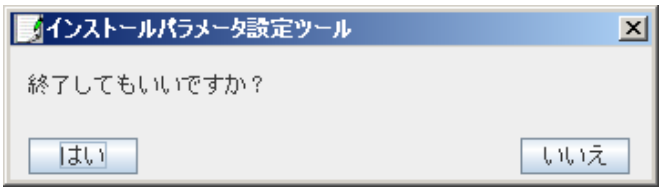
「ファイル」メニューの「終了」を選択します。

「インストールパラメータ設定ツール」終了確認画面が表示されます。

終了する場合は「はい」を、終了しない場合は「いいえ」をクリックしてください。

終了の場合は、全ての画面が閉じ Linux インストールパラメータ設定ツールを終了します。

また、メイン画面左下の「終了」ボタンでもインストールパラメータ設定ツールを終了します。



重要

Linux インストールパラメータ設定ツールでは root のパスワードを"deploymgr"に設定しています。パスワードを変更する場合は以下の方法で行ってください。

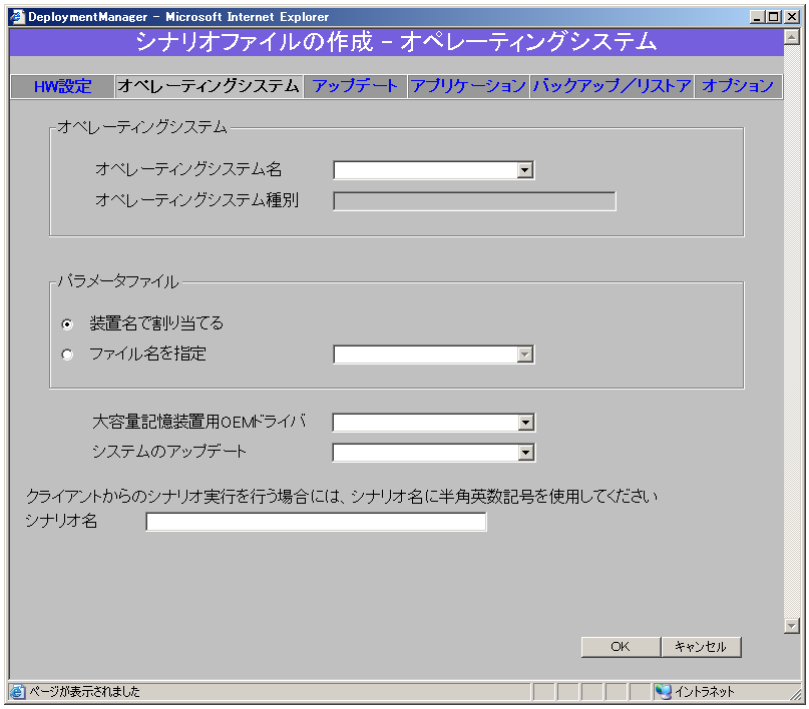
1) パスワードを暗号化しない場合:
下記に格納されているパラメータファイル(cfg ファイル)の"rootpw"の行を変更してください。
<共有フォルダ>:¥exports¥ks
例:rootpw --iscrypted ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊.. (暗号化されたパスワード)
↓
rootpw deploy

2) パスワードを暗号化する場合
Linux 標準のキックスタートファイル作成ツールでパスワードを設定し、キックスタートパラメータファイルを作成してください。
作成したファイルの"rootpw"の行を、下記に格納されている Linux インストールパラメータ設定ツールで作成したパラメータファイル(cfg ファイル)の"rootpw"の行にコピーしてください。
<共有フォルダ>:¥exports¥ks
例:rootpw --iscrypted ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊... (暗号化されたパスワード)
↓
rootpw --iscrypted XXXXXXXXXX... (暗号化されたパスワード)

2.2.5 シナリオファイルの作成

<オペレーティングシステムタブについて>

「オペレーティングシステム」タブを選択すると、以下の画面が表示されます。以下のように項目を設定してください。



■ オペレーティングシステム名
イメージビルダーで作成した OS のイメージファイル名を▼ボタンをクリックして選択してください。
Linux を選択すると後述の「大容量記憶装置用 OEM ドライバ」「システムのアップデート」は設定できなくなります。

■ 装置名で割り当てる
OS のインストールを行う時、コンピュータ名と同じセットアップパラメータファイルを自動的に割り当てます。複数のコンピュータにインストールする場合、コンピュータと同じ数だけシナリオを作成する必要がありません。ただし、セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ず同じでなければなりません。従ってセットアップパラメータファイルはインストールするコンピュータと同じ数だけ作成する必要があります。

■ ファイル名を指定
OS のインストールを行う時、指定したセットアップパラメータファイルを使用します。
セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ずしも同じである必要はありません。

注意

■ OS クリアインストール(Linux)と同時に、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアシナリオ、ディスク構成チェックシナリオは、作成できません。
■ イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。

2.2.6 シナリオ実行

コンピュータに対して割り当てたシナリオを実行します。
操作は Web コンソールで行います。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、アップデート／アプリケーションのシナリオの場合を除き、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に、手動で電源を OFF してください。

注意

シナリオを実行する場合は、インストール先のコンピュータにフロッピーディスクが挿入されていないことを確認してください。フロッピーが挿入されているとリモートインストールに失敗する場合があります。

(1) ツリービューまたはイメージビューからシナリオを実行するコンピュータを選択する。

(2) 選択したコンピュータを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択する。
シナリオの実行が開始されます。

ヒント

「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択しても、シナリオを実行できます。
グループに登録しているコンピュータに、一括してシナリオを実行する場合は、「ユーザーズガイド 応用編 6.3 実行項目を一括設定する」を参照してください。

ここまでが、シナリオ実行までの流れとなります。ここまでに記述されていない機能等については、各項目を参照してください。

2.2.7 注意事項、その他

Linux のインストールについて

Linux のインストールでは pxelinux.bin と NFS サーバを利用したネットワークインストールを行います。
DPM 本体は NFS 機能を有していないので NFS サーバは別途用意する必要があります。

DPM では共有フォルダ(詳細設定にて設定)の下に"exports"という名称のフォルダを用意し、ここを NFS 共有フォルダ(共有名 exports)と仮定してイメージビルダーより登録を行っています。このまま使用される場合は「2.2.1 NFS サービスのセットアップ」に記載されているように「Services for UNIX」等でこのフォルダを NFS 共有(共有名 exports)にしてください。

NFS サーバを別のコンピュータに設置する場合は、インストールイメージ(Red Hat の CD 内容)やインストール用カーネル(vmlinuz,initrd.img)、インストールパラメータファイルを手動で各フォルダにコピーする必要があります。手順について以下に記載します。

(1) インストールパラメータファイル/ブートパラメータファイルの作成
インストールパラメータファイルの作成手順は「2.3.4. Linux インストールパラメータファイルの作成」と同様ですが、作業モードをオフラインにして行います。作業モードをオフラインにすると任意の場所にパラメータファイルを作成することができます。
オフラインモードの場合はブートパラメータファイルとインストールパラメータファイルが同じ場所に作成されます。ブートパラメータファイルは保存したインストールパラメータファイルの拡張子がないファイル名となります。
例えばインストールパラメータファイルが「SampleComp1.cfg」の場合は、ブートパラメータファイルは「SampleComp1」になります。
保存先のデフォルトは<DPMのインストール先(C:¥Program Files¥DeploymentManager)>¥Linux¥offline です。
オンラインモードで作成すると管理サーバの以下のフォルダに各ファイルが作成されます。
ブートパラメータファイル :<共有フォルダ(C:¥Deploy)>¥AnsFile¥Linux
インストールパラメータファイル:<共有フォルダ(C:¥Deploy)>¥exports¥ks

(2) インストールパラメータファイルの格納
NFS サーバの任意の場所に"exports"フォルダを作成し、NFS 共有(共有名:exports)します。
このフォルダ配下に"ks"フォルダを作成して(1)で作成したインストールパラメータファイルをコピーします。

(3) ブートパラメータファイルの格納
管理サーバの<共有フォルダ(C:¥Deploy)>¥AnsFile¥Linux に(1)で作成したブートパラメータファイルをコピーします。インストールパラメータファイルを作成時にオンラインモードで行なった場合は既に格納されています。

(4) インストール用カーネル(vmlinuz、initrd.img)の格納
管理サーバの<DPM のインストール先(C:¥Program Files¥DeploymentManager)>PXE¥images¥pxelinux に(1)のインストールパラメータファイルを作成時に指定したブートディレクトリと同じ名前のフォルダを作成してコピーします。

(5) インストールイメージの格納
(2)で作成した NFS 共有フォルダの下に(1)のインストールパラメータファイルを作成時に指定したブートディレクトリと同じ名前のフォルダを作成して Red Hat のインストール CD の内容を全てコピーします。

(6) クライアントサービス(エージェント)モジュールの格納
管理サーバの<共有フォルダ(C:¥Deploy)>¥expots¥daemon フォルダの内容をフォルダごと(2)で作成した NFS 共有フォルダの下にコピーします。

上記手順の必須条件は、以下になります。
・インストールパラメータ作成時に指定したブートディレクトリ名とインストール用カーネルの格納先フォルダ名が同じである。
・インストールパラメータ作成時に指定したブートディレクトリ名とインストールイメージの格納先フォルダ名が同じである。
・NFS 共有するフォルダの共有名は exports である。

上記手順を実行後、ファイルとフォルダの構成は以下のようになります。

この例では、DPMのインストールフォルダを"C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager"、DPMの共有フォルダを"C:¥Deploy"、NFS共有フォルダを"C:¥exports"、ブートディレクトリ名を"RHEL4"としています。

管理サーバ

```
C:¥
├── Deploy¥
│   └── AnsFile¥
│       └── ブートパラメータファイル(3)
└── Program Files¥
    └── NEC¥
        └── DeploymentManager¥
            └── PXE¥
                └── Images¥
                    └── pxelinuxbin¥
                        └── RHEL4¥
                            └── インストール用カーネル(4)
```

NFS サーバ

```
C:¥(任意)
└── exports¥(NFS 共有名 : exports)
    ├── ks¥
    │   └── インストールパラメータファイル(2)
    ├── RHEL4¥
    │   └── インストールイメージ(5)
    └── daemon¥
        └── redhatall¥
            ├── ia32¥
            │   └── クライアントサービスモジュール(6)
            └── ia64¥
                └── クライアントサービスモジュール(6)
```

「Linux 基本サービスセット」の使用方法

Linux インストール代行モデルの Express5800/BladeServer へ Linux の再インストールを行う場合、Red Hat のインストール媒体に加えて「Linux 基本サービスセット」ソフトウェア CD-ROM に収められているモジュールを登録する必要があります。

以下に Red Hat Enterprise Linux ES3 をインストールする場合の手順を説明します。

(1) イメージビルダーから「オペレーティングシステムの登録」を起動します。
(2) 「オペレーティングシステム名」を入力します。
(3) 「オペレーティングシステム種別」に"Red Hat Linux"を選択します。
(4) 「Linux 基本サービスセット」を CD-ROM ドライブに挿入します。
(5) 「initrd / vmlinuz のフォルダ」項目に(4)の CD-ROM ドライブの以下のフォルダを指定します。
D:¥nec¥Linux¥tftpboot¥pxelinux¥RedHat¥blade
("D:"は CD-ROM ドライブを指定してください。)
(6) 「CD-ROM のソースフォルダ」に(4)の CD-ROM のドライブを設定し、「OK」を選択します。
D:¥
("D:"は CD-ROM ドライブを指定してください。)
(7) (5)(6)で指定したフォルダより必要なファイルをコピーします。コピー終了後、CD-ROM を入れ替えてコピーを続けるかを問い合わせるメッセージダイアログが表示されますので CD-ROM を「Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD1」に入れ替えます。
(8) メッセージダイアログの「参照(B)」をクリックし、(7)の CD-ROM のドライブ(D:¥等)を選択します。
(9) メッセージダイアログの「次へ(N)」をクリックし、CD-ROM のコピーを開始します。
(10) 以降画面の指示に従い「Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD2」「Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD3」「Red Hat Enterprise Linux ES3 インストール CD4」をコピーしていきます。途中で上書き確認のメッセージダイアログが表示された時は「上書き」又は「すべて上書き」を選択しコピーを継続します。CD4 コピー終了後、「完了」を選択します。
(11) 以上で(2)で設定したオペレーティングシステム名でイメージファイルの登録が完了します。

また、セットアップパラメータファイルは以下のキックスタートファイルに記述された post 処理を追加する必要があります。

「Linux 基本サービスセット」ソフトウェア CD-ROM の nec¥Linux¥kickstart¥ks.cfg

上記ファイルの"%post -nochroot"と記述されている行より下(%post行は含みません)の必要な箇所をコピーし、Linuxパラメータ作成ツールの「インストール後スクリプト設定」に貼り付けて下さい。この時、上記ファイル(ks.cfg)のpost処理はchroot環境外として記述されていますので、ツールの"chroot環境の外で実行します"にチェックを入れてください。

注意

「Linux 基本サービスセット」ソフトウェア CD-ROM の nec¥Linux¥kickstart¥ks.cfg に以下の様な記述がある場合、そのまま貼り付けを行うとホスト名が「localhost.localdomain」に設定されてしまいますのでご注意ください。

```
# Remove network setting
cat << EOM > $SYSIMAGE_DIR/etc/sysconfig/network
NETWORKING=yes
HOSTNAME=localhost.localdomain
EOM
$SYSIMAGE_DIR/bin/chmod 644 $SYSIMAGE_DIR/etc/sysconfig/network

# Hosts set
cat << EOM > $SYSIMAGE_DIR/etc/hosts
# Do not remove the following line, or various program
# that require network functionality will fail.
127.0.0.1  localhost.localdomain localhost
EOM
$SYSIMAGE_DIR/bin/chmod 644 $SYSIMAGE_DIR/etc/hosts

$SYSIMAGE_DIR/bin/cp -f /dev/null $SYSIMAGE_DIR/etc/resolv.conf
$SYSIMAGE_DIR/bin/chmod 644 $SYSIMAGE_DIR/etc/resolv.conf
```

2.3 ポート開放ツール

■管理対象コンピュータの OS が以下のいずれかで、かつ、ファイアウォール設定を有効にして DPM による管理を行う場合は、クライアント側でポートを開放する必要があります。

・Windows XP Professional SP2/SP3
・Windows Server 2003 SP1/SP2
・Windows Server 2003 R2
・Windows Server 2008
・Windows Vista
・Windows 7

■ クライアント側で開放が必要なポート番号は以下の通りです。

項目	プロトコル	ポート番号
電源状態の確認	ICMP	8(Echo着信)
自動更新	TCP	56025
シャットダウン	TCP	56010
リモートアップデート	TCP	56000
	UDP	56001

ポート開放用ツールの使用方法について説明します。
ファイアウォール設定が有効となっているコンピュータ上で実行する方法があります。

ヒント

■ ポート開放ツールは、IPF 装置に対応していません。
■ 以下のサービスが停止している状態では、ポート開放ツールによるポートの開放はできません。(Windows Server 2003 SP1/SP2、Windows Server 2003 R2 では、デフォルトでこのサービスが無効となっています。サービスを起動させた後にポート開放ツールを実行してください。)
・Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)
・Windows Firewall
■ DPM のリモートアップデート機能を用いて、ポートが未開放のコンピュータに対してポート開放ツールを適用することはできません。
■ OS クリアインストールと同時に適用することはできません。

2.3.1 コンピュータごとの適用

■ DPM の管理対象となるコンピュータごとに、ポート開放ツールを適用する方法について説明します。

(1) インストールCD-ROMを、ポート開放ツールを適用するコンピュータのCD-ROMドライブにセットしてください。

(2) 下記のポート開放ツールを実行します。
D:¥TOOLS¥OPENPORT¥DepOpnPt.exe
(″D:″はCD-ROM ドライブを指定してください。)

ヒント

コマンドオプションに”-s”を指定した場合、メッセージを表示しないサイレントモードで実行させることができます。
(例)コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行
D:¥TOOLS¥OPENPORT¥DepOpnPt.exe -s
(″D:″は CD-ROM ドライブを指定してください。)

(3) 確認画面が表示されます。ポートの開放を行う場合は[OK]をクリックします。

(4) 完了メッセージが表示されますので、[OK]をクリックします。

以上で、ポートの開放は完了です。

3　サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール

注意

Windows の管理対象コンピュータに対して、サービスパック/HotFix/アプリケーションの適用を行う場合、以下の状態では適用後のシャットダウンができません。
シャットダウンを指定される場合は、こういった状態にならないように注意してください。

- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

■ DPM では、サービスパックや HotFix の適用、アプリケーションのインストールをリモートで行うことができます。
OS と同時にインストールを行う場合と、別に行う場合では動作が異なります。

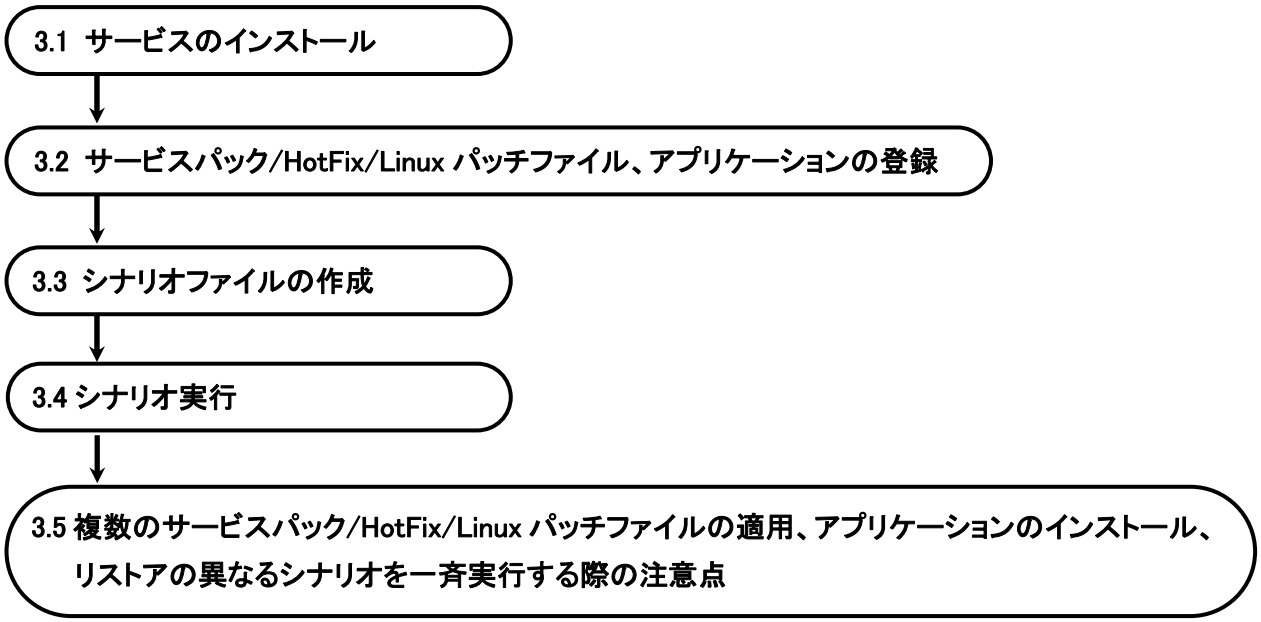
■ OS と同時にインストールを行う場合
OS のインストール後に、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションの順にインストールが行われます。

■ OS を設定せずにインストールを行う場合（リモートアップデートによる適用）
配信には、マルチキャストを使うことにより多数のコンピュータに一括してインストールすることが可能になり、一台一台インストールするよりも大幅な時間の削減ができます。
設定を変更することによりユニキャストでの配信も可能です。

ヒント

OS のインストールと同時に「サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用」、「アプリケーションのインストール」が行えるのはインストールする OS が Windows の場合のみです。Linux の場合はインストール時に同時に行うことはできません。

シナリオ実行までの流れ



3.1　サービスのインストール

■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションインストールを実行可能にするための準備をします。次の項目のいずれかに該当する場合は、次に進んでください。

■ リモートアップデートによるサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを実行しようとしている管理対象コンピュータに以前、DPMを使用してOSクリアインストールを行った。

■ リモートアップデートによるサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを実行しようとしている管理対象コンピュータに以前、DPM を使用してディスク複製による OS インストールを行った。

■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを、OS クリアインストールと同時にシナリオファイルを作成する。

これらの項目に該当しないときは、「ユーザーズガイド　導入編　2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」を参照してクライアントサービス for DPM をインストールしてください。

3.2　サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル、アプリケーションの登録

■ サービスパックや HotFix、アプリケーションを DPM に登録する方法を説明します。

＜サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル/アプリケーションの登録＞

■ 本編「17.4 パッケージの登録/修正」を参照してくだい。

■ EXPRESSBUILDER CD-ROM からの登録
Express5800/BladeServer シリーズの場合、EXPRESSBUILDER CD-ROM から「SystemGlobe ESMPRO/ServerAgent」と「エクスプレス通報サービス」と「Adaptec Storage Manager-Browser Edition」を登録することができます。登録する手順を説明します。

＜SystemGlobe ESMPRO/ServerAgent」と「エクスプレス通報サービス」の場合＞

(1) Web コンソールからシナリオ実行中のコンピュータが存在しないことを確認してください。

(2) EXPRESSBUILDER CD-ROM を挿入すると自動的に起動するマスタコントロールメニューの「ソフトウェアのセットアップ」から、「ESMPRO」を選択します。

(3) 「ESMPRO のセットアップ」画面が表示されるので「DeploymentManager への登録」を選択してください。

注意
EXPRESSBUILDER CD-ROM のバージョンによっては、「SystemGlobe ESMPRO/ServerAgent」、「エクスプレス通報サービス」登録時に「ESMPRO/DeploymentManager」と表示される場合があります。その際は「DeploymentManager」と読み替えてください。登録には影響ありません。

(4) 「DeploymentManager への登録」画面が表示されるので登録したいアプリケーションを選択します。

ヒント
既に同名のパッケージが登録されている場合、上書き確認のメッセージが表示されます。

(5) アプリケーション選択後コピーの終了確認の画面が表示されれば登録は終了です。「OK」をクリックして画面を閉じてください。

＜「Adaptec Storage Manager-Browser Edition」の場合＞

EXPRESSBUILDERに「Adaptec Storage Manager」のメニューが存在する場合、Adaptec Storage Manager-Browser Editionを登録することができます。登録する手順を説明します。

(1) Webコンソールからシナリオ実行中のコンピュータが存在しないことを確認してください。

(2) EXPRESSBUILDER CD-ROM を挿入すると自動的に起動するマスタコントロールメニューの「ソフトウェアのセットアップ」から、「Adaptec Storage Manager」を選択します。

(3) 「ASMBE のセットアップ」画面が表示されるので「DeploymentManager に ASMBE を登録」を選択してください。

ヒント 既に同名のパッケージが登録されている場合、上書き確認のメッセージが表示されます。

(4) ファイルコピーの終了確認画面が表示されれば登録は終了です。「OK」をクリックして画面を閉じてください。

ヒント Windows 2003/XP 環境にAdaptec Storage Manager-Browser Editionをインストールする場合、デジタル署名情報によるセキュリティ警告画面が表示されるため、OS クリアインストールと同じシナリオでインストールする方法を推奨します。

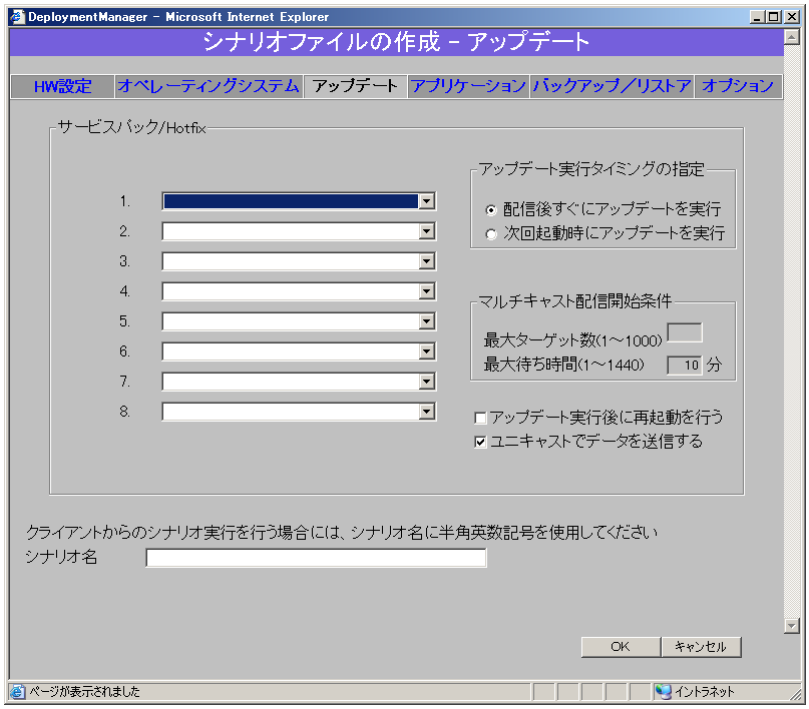
3.3　シナリオファイルの作成

■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを行うシナリオファイルの作成方法について説明します。

3.3.1　サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル適用のシナリオファイル作成

(1) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの作成」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) 「アップデート」タブをクリックし、プルダウンメニューから登録したサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルを選択し、各項目を指定します。



■ アップデート実行タイミングの指定
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
「配信後すぐにアップデートを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信後すぐにアップデートが開始されます。
「次回起動時にアップデートを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信だけ行って、次回コンピュータを起動したときにアップデートが開始されます。

重要

「次回起動時にアップデートを実行」を選択した場合は下記に注意してください。
■ 「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」にチェックを入れた場合、アップデート完了後にコンピュータの電源が OFF されるのではなく、データの配信後にコンピュータの電源が OFF されます。
■ コンピュータが次回起動時のアップデート中にアップデート、またはアプリケーションのシナリオ実行を行った場合はシナリオ実行エラーとなります。シナリオ実行する場合は、アップデートの完了後に再度行ってください。

ヒント

再起動前の管理対象コンピュータには、以下を指定したシナリオを合計 100 個実行することができます。101 個以上のシナリオを実行する場合は、管理対象コンピュータを再起動してください。再起動することにより新たに 100 個のシナリオを実行することができます。
・「アップデート」タブの「次回起動時にアップデートを実行」
・「アプリケーション」タブの「次回起動時にアプリケーションを実行」

■ 最大ターゲット数
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
同じシナリオを割り当てられたコンピュータに対して、ここで指定した数だけ準備が整うとリモートアップデートが開始されます。

注意

■ 最大ターゲット数を越えてシナリオを実行した場合、最大ターゲット数を越えてシナリオ実行したコンピュータはシナリオ実行エラーとなります。一旦、コンピュータアイコンを右クリックして「シナリオ実行エラー解除」を選択し、シナリオ実行エラーを解除してください。その後、シナリオの最大ターゲット数を適切な値に調整してシナリオ実行を行ってください。
■ 「詳細設定」のネットワークタブの同時実行可能台数を超える場合は、同時実行可能台数の値を変更してください。詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 13.3 ネットワークタブ」を参照してください。
■ 「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大ターゲット数は無視されます。
■ イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。

■ 最大待ち時間
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
ここで指定した待ち時間を過ぎると、実行可能な状態となっているコンピュータのみリモートアップデートが開始されます。

重要

■ 最大ターゲット数、最大待ち時間は、アップデートタブ、アプリケーションタブのどちらに入力しても両方のタブに同じ値が設定されます。
■ アップデート/アプリケーションの実行は、シナリオの実行を指示後、実行準備の完了したコンピュータが最大ターゲット数と同じ台数になるか、最大待ち時間が経過するまで待機します。待機中のコンピュータに対してただちにアップデート/アプリケーションを実行する機能はありません。
■ 最大ターゲット数、最大待ち時間の両方とも指定しない場合は、シナリオ実行後、他のコンピュータを待たずに即実行します。

注意

「ユニキャストでデータを送信する」をチェックしている場合は最大待ち時間は無視されます。

■ アップデート実行後に再起動を行う
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
リモートアップデートの実行完了後にコンピュータの再起動を行う場合に選択します。
「アプリケーション」タブにアプリケーションが登録されている場合はアプリケーション配布後に再起動が実行されます。

■ ユニキャストでデータを送信する
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
ユニキャストでデータを送信する場合に選択します。

ヒント

■ 「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れない場合はマルチキャストを使用してデータを送信します。以下のシナリオを複数実行するときは、マルチキャスト IP アドレスを変更してください.
　－サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルをリモートアップデートにより適用するシナリオ
　－アプリケーションをリモートアップデートにより適用するシナリオ
　－リストアのシナリオ
マルチキャスト IP アドレスの設定はオプションタブの詳細設定で変更できます。

■ 「ユニキャストでデータを送信する」のチェックは、ルータを越えた別セグメントのネットワークにアップデートを行う際など、マルチキャストのデータが送信できない場合に入れてください。

■ DPM は、マルチキャストでデータを送信する場合に UDP 通信を行います。
UDP 通信では転送速度が違う機器が経路上にある場合等で、送信側と受信側で転送するデータ量に差が生じ、データがうまく転送できない状態になることがあります。
このような場合は、シナリオ完了までの時間が長くなる場合があります。

(3) シナリオ実行時のシナリオ実行条件を設定する場合は、「オプション」タブをクリックしてください。
シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

注意

シナリオで「アップデート」タブと「アプリケーション」タブのみを指定した場合、「アップデート」タブの「アップデート実行後に再起動を行う」にチェックを入れていると「アップデート実行後に再起動を行う」が優先されます。

ヒント

リモートアップデートのシナリオを実行する場合は、OS が起動していても問題ありませんので、「実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを行う必要はありません。もしチェックを入れてシナリオ実行を行った場合でもコンピュータの再起動は行われません。

(4) サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用と同時に BIOS/ファームウェアのアップデート、OS のインストール、アプリケーションのインストール、バックアップなどを行う場合は、本編「2 OS クリアインストール」、「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「5. バックアップ/リストア」、「6. フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をご覧になってイメージを登録し「HW 設定」、「オペレーティングシステム」、「アプリケーション」、「バックアップ/リストア」のタブから設定を行ってください。

注意

■ 「オペレーティングシステム」タブの設定を行わない場合は、「HW 設定」タブ、「バックアップ/リストア」タブの設定を行わないでください。

■ OS クリアインストールの設定を行わない場合は、BIOS/ファームウェアとサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用を同時に行うシナリオは作成できません。

■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用と同時にリストアシナリオ、ディスク構成チェックシナリオは作成できません。

■ 複数タブを指定する場合、画面左側のタブから設定してください。

ヒント

サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用と同時にアプリケーションも設定した場合は、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル適用の後にアプリケーションのインストールを実行します。

(5) シナリオ名を付けて「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しくサービスパック/HotFix/Linux パッチファイル適用のシナリオが追加されます。

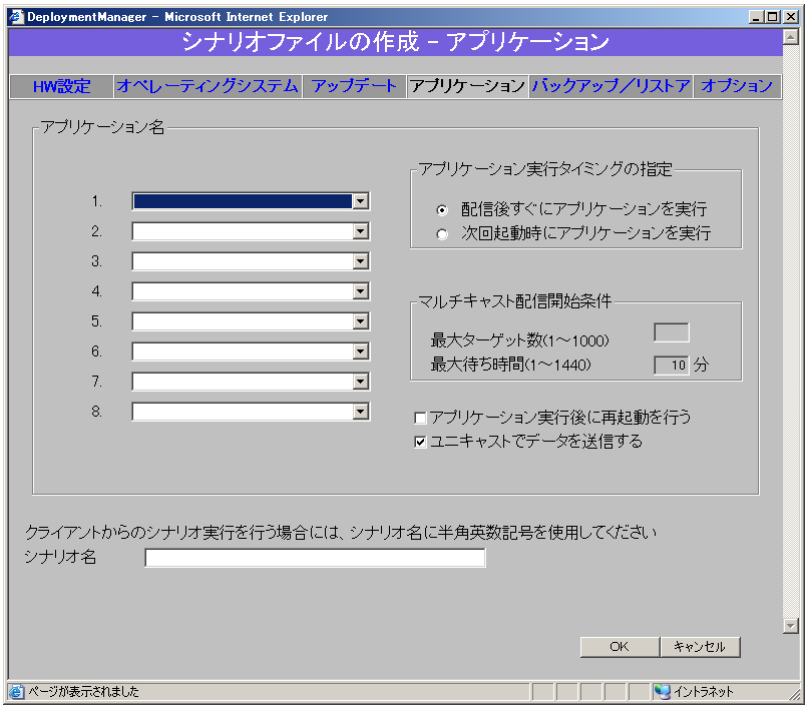
ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「|」は使用できません。

3.3.2 アプリケーションインストールのシナリオファイル作成

(1) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの作成」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) 「アプリケーション」タブをクリックし、プルダウンメニューより登録したアプリケーションを選択し、各項目を指定します。このシナリオファイルを割り当てるコンピュータの台数を「最大ターゲット数」に入力し、「最大待ち時間」を入力します。



■ アプリケーション実行タイミングの指定
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
「配信後すぐにアプリケーションを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信後すぐにアプリケーションの実行が開始されます。
「次回起動時にアプリケーションを実行」を選択した場合は、シナリオ実行してデータの配信だけ行って、次回コンピュータを起動したときにアプリケーションの実行が開始されます。

重要

「次回起動時にアプリケーションを実行」を選択した場合は下記に注意してください。
■ 「オプション」タブの「実行後に電源を切断する」にチェックを入れた場合、アプリケーション実行完了後にコンピュータの電源が OFF されるのではなく、データの配信後にコンピュータの電源が OFF されます。
■ コンピュータが次回起動時のアプリケーション実行中に、アップデート、またはアプリケーションのシナリオ実行を行った場合はシナリオ実行エラーとなります。シナリオ実行する場合は、アプリケーション実行の完了後に再度行ってください。

ヒント

再起動前の管理対象コンピュータには、以下を指定したシナリオを合計 100 個実行することができます。101 個以上のシナリオを実行する場合は、管理対象コンピュータを再起動してください。再起動することにより新たに 100 個のシナリオを実行することができます。
・「アップデート」タブの「次回起動時にアップデートを実行」
・「アプリケーション」タブの「次回起動時にアプリケーションを実行」

■ 最大ターゲット数
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
同じシナリオを割り当てられたコンピュータに対して、ここで指定した数のコンピュータの準備が整うとリモートアップデートが開始されます。

注意

■ 最大ターゲット数を越えてシナリオを実行した場合、最大ターゲット数を越えてシナリオ実行したコンピュータはシナリオ実行エラーとなります。一旦、コンピュータアイコンを右クリックして「シナリオ実行エラー解除」を選択し、シナリオ実行エラーを解除してください。その後、シナリオの最大ターゲット数を適切な値に調整してシナリオ実行を行ってください。
■ 「詳細設定」のネットワークタブの同時実行可能台数を超える場合は、同時実行可能台数の値を変更してください。詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 13.3 ネットワークタブ」を参照してください。
■ 「ユニキャストでデータを送信する」を選択した場合、最大ターゲット数は無視されます。
■ イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。

■ 最大待ち時間
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
ここで指定した待ち時間を過ぎると、実行可能な状態となっているコンピュータのみリモートアップデートが開始されます。

重要

■ 最大ターゲット数、最大待ち時間は、アップデートタブ、アプリケーションタブのどちらに入力しても両方のタブに同じ値が設定されます。
■ アップデート/アプリケーションの実行は、シナリオの実行を指示後、実行準備の完了したコンピュータが最大ターゲット数と同じ台数になるか、最大待ち時間が経過するまで待機します。待機中のコンピュータに対してただちにアップデート/アプリケーションを実行する機能はありません。
■ 最大ターゲット数、最大待ち時間の両方とも指定しない場合は、シナリオ実行後、他のコンピュータを待たずに即実行します。

注意

「ユニキャストでデータを送信する」をチェックしている場合は最大待ち時間は無視されます。

■ アプリケーション実行後に再起動を行う
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
リモートアップデートの実行完了後にコンピュータの再起動を行う場合に選択します。

■ ユニキャストでデータを送信する
リモートアップデートによる実行のみ設定が有効となります。
ユニキャストでデータを送信する場合に選択します。

ヒント

■ 「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れない場合はマルチキャストを使用してデータを送信します。以下のシナリオを複数実行するときは、マルチキャストアドレスを変更してください.
　－サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルをリモートアップデートにより適用するシナリオ
　－アプリケーションをリモートアップデートにより適用するシナリオ
　－リストアのシナリオ
マルチキャストアドレスの設定はオプションタブの詳細設定で変更できます。

■ 「ユニキャストでデータを送信する」のチェックは、ルータを越えた別セグメントのネットワークにアップデートを行う際などの、マルチキャストのデータが送信できない場合に入れてください。

■ DPM は、マルチキャストでデータを送信する場合に UDP 通信を行います。
UDP 通信では転送速度が違う機器が経路上にある場合等で、送信側と受信側で転送するデータ量に差が生じ、データがうまく転送できない状態になることがあります。
このような場合は、シナリオ完了までの時間が長くなる場合があります。

(3) シナリオ実行時のシナリオ実行条件を設定する場合は、「オプション」タブをクリックしてください。
シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

注意

シナリオで「アップデート」タブと「アプリケーション」タブのみを指定した場合、「アプリケーション」タブの「アプリケーション実行後に再起動を行う」にチェックを入れていると「アプリケーション実行後に再起動を行う」が優先されます。

ヒント

リモートアップデートのシナリオを実行する場合はOSが起動していても問題ありませんので、「実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを行う必要はありません。もしチェックを入れてシナリオ実行を行った場合でもコンピュータの再起動は行われません。

(4) アプリケーションと同時に BIOS/ファームウェアのアップデート、OS のインストール、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、バックアップなどを行う場合は、本編「2. OS クリアインストール」、「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「5. バックアップ/リストア」、「6. フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をご覧になってイメージを登録し「HW 設定」、「オペレーティングシステム」、「アップデート」、「バックアップ/リストア」のタブから設定を行ってください。

注意

■ 「オペレーティングシステム」タブの設定を行わない場合は、「HW 設定」タブ、「バックアップ/リストア」タブの設定を行わないでください。

■ アプリケーションと同時にリストアシナリオ、ディスク構成チェックシナリオは作成できません。

■ OS クリアインストールの設定を行わない場合は、BIOS/ファームウェアとアプリケーションを同時に行うシナリオは作成できません。

■ 複数タブを指定する場合、画面左側のタブから設定してください。

ヒント

サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用と同時にアプリケーションも設定した場合は、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル適用の後にアプリケーションのインストールを実行します。

(5) シナリオ名を付けて「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しくアプリケーションのインストールのシナリオが追加されます。

ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「¥」、「/」、「:」、「,」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「|」、「.」は使用できません。

3.4 シナリオ実行

■ 作成したシナリオを実行する手順を説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- ■ イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- ■ シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、「シナリオ名」のプルダウンからシナリオファイルを選択し、「OK」をクリックします。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択します。リモートアップデートの場合、シナリオファイル作成時に「最大ターゲット数」や「最大待ち時間」で設定したタイミングでシナリオが開始されます。同じ操作は、コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。コンピュータをクリックして、メインウィンドウ画面のアイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と表示され、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールが開始されます。

(5) メインウィンドウ画面の「表示」メニュー→「シナリオ実行状況」→「シナリオ実行一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“正常終了”と表示されたら、シナリオは完了です。

注意

- ■ 旧バージョンで作成したシナリオは、IPF アーキテクチャマシンに配信しないでください。
- ■ Windows Server 2008 for Itanium-based System にシナリオ実行を行った場合、「対話型サービスダイアログの検出」ダイアログが表示されますが、所定の時間経過後に自動的にダイアログは消えますのでそのままお待ちください。「メッセージを表示する」を選択し、表示された画面に沿って操作することも可能です。
- ■ 指定したセットアップコマンドが子プロセスを多段階に生成するようなコマンド(コマンド→子プロセス生成→孫プロセス生成)である場合、DPM では子プロセスまでは終了を検知できますが、孫プロセスの終了を検知できません。このようなコマンドを実行すると、シナリオ実行エラーとなる場合があります。
- ■ 120 分経過してもシナリオが完了しない場合は、タイムアウトとなりシナリオ実行エラーとなります。

ヒント

リモートアップデートを行うコンピュータが Linux の場合、コンピュータ側でカウントダウンメッセージが表示されますが、この時にコンソール上で/usr/local/bin/depcancelを実行することによりカウントダウンメッセージをスキップすることができます。ターゲットの OS が SUSE Linux Enterprise の場合で X-Window が起動していない環境（ランレベル 3）では、リモートアップデート時のメッセージが 2 行表示されることがありますが動作に影響はありません。

3.5 複数のサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する際の注意点

■ 次の項目にすべて当てはまる場合、「シナリオファイルの修正」画面の「オプション」タブからマルチキャスト IP アドレスの設定してください。

- ■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを OS クリアインストールと同時に設定していない。（リモートアップデートによりサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを行う）。
- ■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアのシナリオを複数作成しており、これらを一斉実行する。
- ■ サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアのシナリオ作成時に「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れていない。

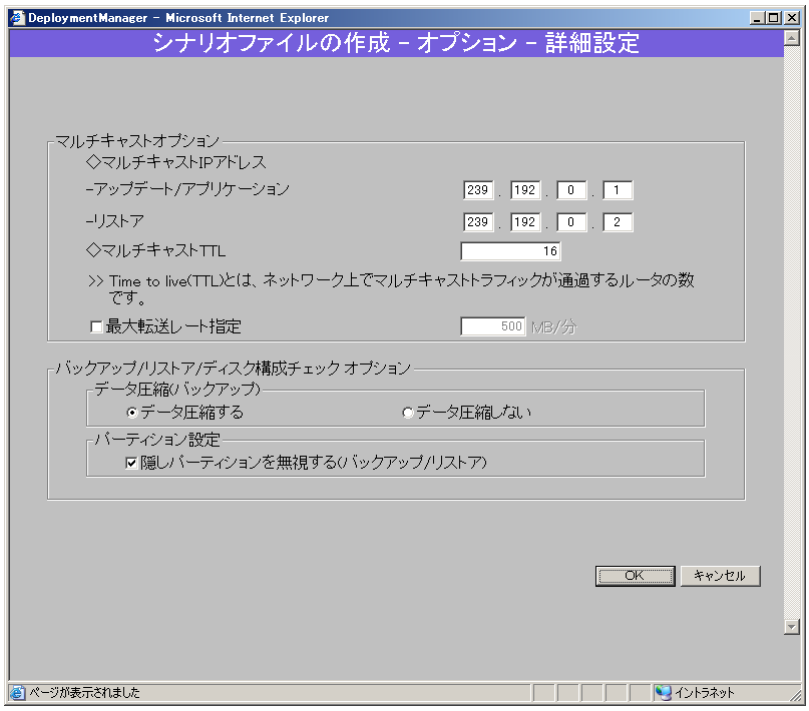
注意

「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れているシナリオは、マルチキャスト IP の設定を行う必要はありません。

■ 以下の手順でマルチキャスト IP アドレスを設定してください。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のシナリオビューから対象となるシナリオファイルを選択し、右クリック→「シナリオファイルの修正」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。あるいは、シナリオファイル作成中に設定するときは、設定中のシナリオファイル作成画面を表示しておきます。

(2) シナリオファイル作成画面の「オプション」タブをクリックし、「詳細設定」をクリックしてください。下図のような「詳細設定」画面が表示されます。

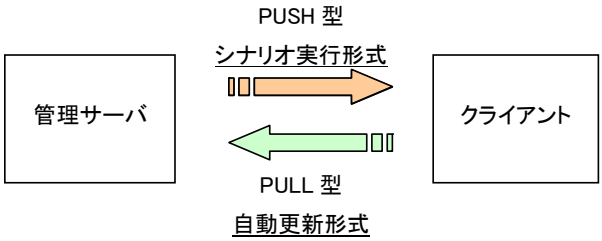


(3) 「詳細設定」画面で「アップデート/アプリケーション」、「リストア」の欄の IP アドレスの値を実行予定のシナリオすべてが異なるように入力して「OK」をクリックします。
(例)アプリケーションのシナリオファイルが 3 つの場合
「アップデート/アプリケーション」の IP アドレスをそれぞれ以下のように設定する。
1)1 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.1
2)2 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.3
3)3 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.4
※239.192.0.2 を使用しないのは、デフォルトでは「リストア」ですでに設定されているため。

(4) シナリオファイル作成画面に戻るので、「OK」をクリックしてください。設定は完了です。(1)の手順でシナリオファイル修正を選択している場合は、ここで本当に修正するかどうかの確認メッセージが表示されるので、もう一度「OK」をクリックします。

4　サービスパック/HotFix/アプリケーションのインストール（自動更新方式）

■ パッケージの配布方式には、「シナリオ実行形式」と「自動更新形式」があります。
本章では、「自動更新方式」について説明します。「シナリオ実行形式」については、本編「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」を参照してください。



＜自動更新とは＞

■ 管理サーバ上に登録されているパッケージを未適用のコンピュータへ自動的に配信し、適用を行う機能のことです。

■ 自動更新対象コンピュータ

管理サーバに登録された下記 OS のコンピュータ

自動更新対象 OS	(IA32)Windows Server 2008 Standard、Enterprise (IA32)Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition (IA32)Windows Server 2003 R2 Standard Edition、Enterprise Edition (IA32)Windows 2000 Server、Advanced Server、Professional (IA32)Windows 7 Professional、Ultimate、Enterprise (IA32)Windows Vista Business、Enterprise、Ultimate (IA32)Windows XP Professional (EM64T)Windows Server 2008 Standard x64、Enterprise x64 (EM64T)Windows Server 2008 R2 Standard、Enterprise、Datacenter (EM64T)Windows Server 2003 Standard x64 Edition、Enterprise x64 Edition (EM64T)Windows Server 2003 R2 Standard x64 Edition、Enterprise x64 Edition (ARM)Windows CE 5.0 ※1

※1 NEC US110 のみ VirtualPCCenter にてサポートしています。

重要

Windows CE(NEC US110)の場合は、本章の説明に加えて、専用の手順が必要です。「ユーザーズガイド 応用編 付録 4 NEC US110 のサポート」を合わせて参照してください。

■ 自動更新対象パッケージ

以下に該当する場合、パッケージが対応するコンピュータに対し自動的に配信を行います。

- 自動更新対象 OS 用のパッケージである
- パッケージの緊急度が「高」または「最高」である
- サービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョン、または識別情報が入力されている
- HotFix の場合、MS 番号、または識別情報が入力されている
- アプリケーションの場合、表示名、または識別情報が入力されている

以下に該当する場合、パッケージは自動的に配信されません。シナリオを作成し配信する必要があります。

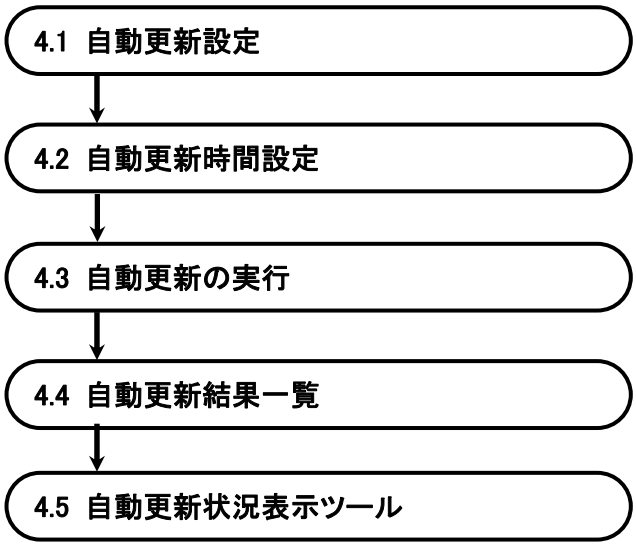
- Linux のパッケージである
- 自動更新対象 OS 用のパッケージではない
- パッケージの緊急度が「一般」または「低」である
- サービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンと、識別情報が入力されていない
- HotFix の場合、MS 番号と識別情報が入力されていない
- アプリケーションの場合、表示名と識別情報が入力されていない

詳細は、本編「17.4パッケージの登録/修正」、または「ユーザーズガイド PackageDescriber編」を参照してください。

■　自動更新は以下の契機で行なわれます。

- 緊急度が最高のパッケージをパッケージ Web サーバからダウンロードした時
- イメージビルダーで緊急度が最高のパッケージを登録して「パッケージの登録・修正画面」を閉じた時
- コンピュータが、本編「4.2　自動更新時間設定」で指定した自動更新時間になった時
- 「自動更新設定」画面で「グループ登録時の自動更新設定」を「起動時　ON」に設定した場合、新規登録したコンピュータがあるグループに追加され、再起動時に自動更新が行われます。

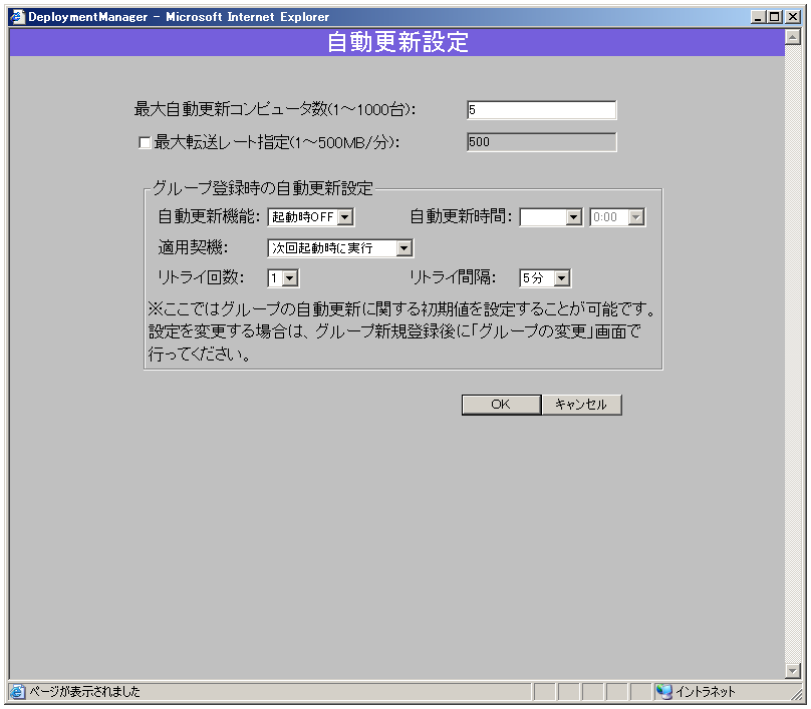
■　自動更新機能について、以下の流れに沿って説明します。



4.1　自動更新設定

■「自動更新設定」画面では最大自動更新コンピュータ台数、最大転送レート及びコンピュータ起動時の自動更新機能を設定できます。

■「自動更新設定」画面は「設定」メニューから「自動更新設定」を選択し起動してください。



- 最大自動更新コンピュータ数

  同時に自動更新を行う最大コンピュータ数を入力します。

  この数値を超えたコンピュータが自動更新を要求した場合、処理が順次に行うことになります。

注意

自動更新の「最大自動更新コンピュータ数」とシナリオの「同時実行可能台数」は、画面での設定値とは別に、合計で 1000 台までです。この条件により、シナリオと自動更新が同時に実行された場合、例えば最大自動更新コンピュータ数を 1000 に設定した場合でも、同時に実行される台数が 1000 台未満の場合があります。

ヒント

- 「最大自動更新コンピュータ数」は、グループ単位ではなく、管理サーバに登録されている全てのコンピュータが対象になります。
- デフォルトは 5 台になっていますが、ご利用の環境に合わせて設定を行ってください。

- 最大転送レート

  チェックすると、自動更新のファイル転送時、転送レートの制御を行います。

ヒント

デフォルトでは最大転送レート指定は行っていませんが、ご利用の環境に合わせて設定を行ってください。

- コンピュータ新規登録時の自動更新

注意

新規コンピュータグループに登録されているコンピュータに対しては、自動更新を行いません。自動更新を行うためには、グループへの追加が必要です。

・ 自動更新機能

以下の 3 つから選択できます。

・常に OFF
　自動更新機能は無効になります。
・起動時 ON
　起動時自動更新を行います。
・起動時 OFF
　起動時自動更新を行いません。

・ 自動更新時間

日、曜日、時間単位で設定できます。

ここで指定したタイミングで、コンピュータが管理サーバに更新されたパッケージの有無を確認し、未適用パッケージがあった場合は配信要求を行います。管理サーバは要求に応じパッケージを配信します。

・ 適用契機

管理サーバから配信されたパッケージを適用するタイミングを以下の 3 つから選択できます。

・すぐ実行

コンピュータの画面上には何も表示されずにパッチが適用されます。

・次回起動時に実行

配信されたパッケージをコンピュータに保存し、次回起動時に適用します。コンピュータの画面上には何も表示されません。

・ユーザ確認画面を表示

確認画面を表示し、ユーザが「すぐ実行」または「次回起動時に実行」を選択します。

・ リトライ回数

コンピュータから管理サーバとの接続に失敗した場合、指定した回数をリトライします。デフォルトは 1 回です。0～5 を選択できます。

・ リトライ間隔

リトライの時間間隔を指定します。デフォルトは 5 分です。

5、10、15、20、25、30 分を選択できます。

注意

自動更新機能を「常に OFF」にすると、コンピュータは管理サーバに未適用パッケージの配信要求を行いません。通常は「起動時 ON」のまま運用することを推奨します。

例）

・ 自動更新機能を「起動時 ON」に、自動更新時間を「毎日 12:00」に設定した場合、コンピュータの起動時と毎日 12:00 になると、自動更新が行われます。

・ 自動更新機能を「起動時 OFF」に、自動更新時間を「水曜日 12:00」に設定した場合、コンピュータは毎週水曜日の 12:00 になると、自動更新が行われます。コンピュータの起動時に自動更新が行われません。

ヒント

自動更新で配信されるパッケージは作成時に緊急度を「最高」または「高」に設定しているものになります。詳しくは、「ユーザーズガイド 基本操作編 17.4 パッケージの登録/修正」を参照してください。

4.2 自動更新時間設定

■ コンピュータが管理サーバに登録された後に、管理サーバでは各コンピュータの自動更新時間をそれぞれに設定できます。指定された時間になると、コンピュータから自動更新要求を管理サーバに発信し、未適用な緊急度の「高」以上のパッケージが自動的に適用されます。

■ ツリービューでグループを右クリックし「一括設定」→「自動更新時間設定」を選択します。
グループに登録されているコンピュータの一覧が表示されますので「自動更新時間」と「適用契機」を選択し「一括設定」をクリックします。
メニューバーの「グループ」から「自動更新時間設定」を選択しても同じ画面を表示できます。
また、個別のコンピュータごとに設定することも可能です。

注意

自動更新実行中にシナリオを実行すると失敗します。自動更新が完了してからシナリオを実行してください。

■ 選択した「自動更新時間」と「適用契機」が表示されますので「OK」をクリックして画面を閉じます。

ヒント

■ 各設定項目の詳細については、本編「4.1 自動更新設定」を参照ください。
■ コンピュータが以下のステータスであれば即座に設定は行ないません。設定データは、次回管理サーバと接続時に適用します。
・電源 OFF
・シナリオ実行中
・シナリオ中断
・自動更新中
・ファイル転送中
・ユーザ確認中
・再起動待ち中
・パッチ適用中

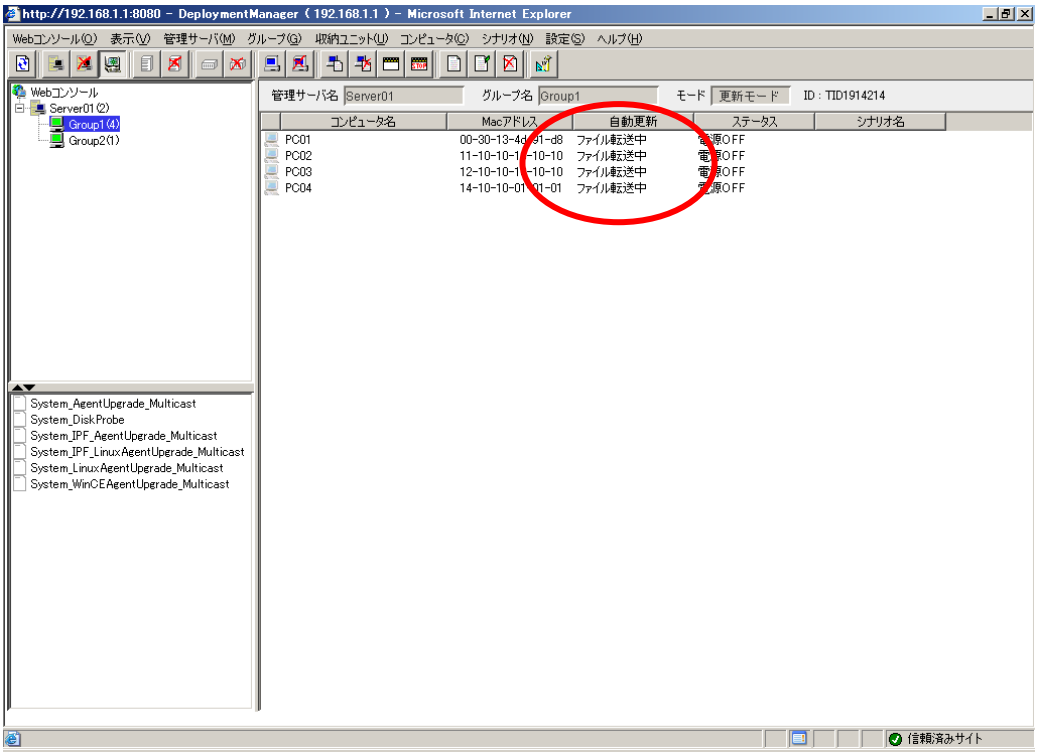
以上で、自動更新の設定は完了です。

4.3 自動更新の実行

注意

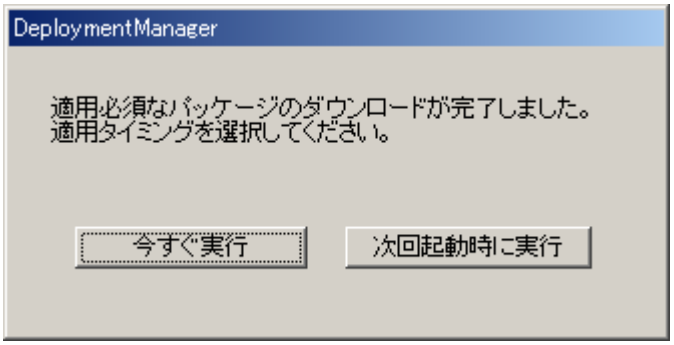
コンピュータが以下のステータスの場合、自動更新できません。
・電源 OFF
・シナリオ実行中
・シナリオ中断
・自動更新設定中
・リモート電源 ON エラー

■ 実行のタイミングになると、コンピュータは管理サーバへ未適用パッケージの有無の確認をします。未適用のパッケージがある場合は配信要求を行います。配信要求を受け取った管理サーバは、未適用パッケージの配信を行います。この動作中メイン画面の自動更新欄は「ファイル転送中」となります。



■ コンピュータはパッケージを受信後、指定された適用契機でパッチの適用を行ないます。

例）コンピュータの自動更新適用契機を「確認画面を表示」に設定している場合、以下の画面がコンピュータ上に表示されます。ユーザは「今すぐ実行」か「次回起動時に実行」を選択します。



ヒント

適用契機に「すぐ実行」、「次回起動時に実行」を指定している場合は、画面表示されません。
詳しくは、「ユーザーズガイド　基本操作編　4.2　自動更新時間設定」を参照してください。

・「今すぐ実行」を選択すると、即時にパッチの適用を行います。
DPM メイン画面の該当コンピュータの自動更新状態は「パッチ適用中」に変わります。

・「次回起動時に実行」を選択すると、次回再起動時にパッチの適用を行います。
DPM メイン画面の該当コンピュータの自動更新状態は「再起動待ち中」に変わります。

■ 自動更新ステータス

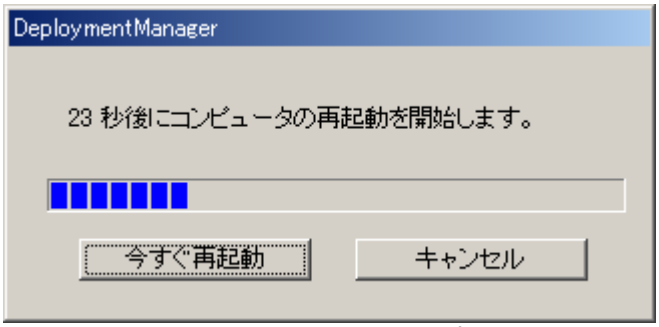
自動更新ステータス	説明
（空白）	自動更新中でない場合や、自動更新に成功した場合は、なにも表示されません。
自動更新中	パッケージの確認中に表示されます。
ファイル転送中	パッケージをコンピュータに転送している場合に表示されます。
ユーザ確認中	ファイル転送が終わり、確認画面を表示してユーザの選択を待っている場合に表示されます。「適用契機」を「確認画面を表示」にしている場合のみ表示されます。
再起動待ち中	コンピュータの再起動を待っている場合に表示されます。
パッチ適用中	パッチの適用中に表示されます。
自動更新実行エラー	自動更新がエラーになった場合に表示されます。
自動更新設定中	自動更新設定中に表示されます。

重要

配布するパッケージによっては再起動が必要な場合があります。適用契機に「確認画面を表示」以外を指定している場合は注意してください。

- 複数の配信ファイルの内、インストール後に再起動が必要なパッケージを含む場合
- 排他で単独適用が必要なパッケージと、それ以外のパッケージがある場合

上記のようなケースではコンピュータを数回再起動する必要があり、再起動が必要になったタイミングで以下の画面が表示され、30 秒のカウントダウン後に再起動が実行されます。



「今すぐ再起動」をクリックすると、コンピュータの再起動を行います。
「キャンセル」をクリックすると、コンピュータの再起動がは中止され、パッケージの適用は次回起動時に実施します。

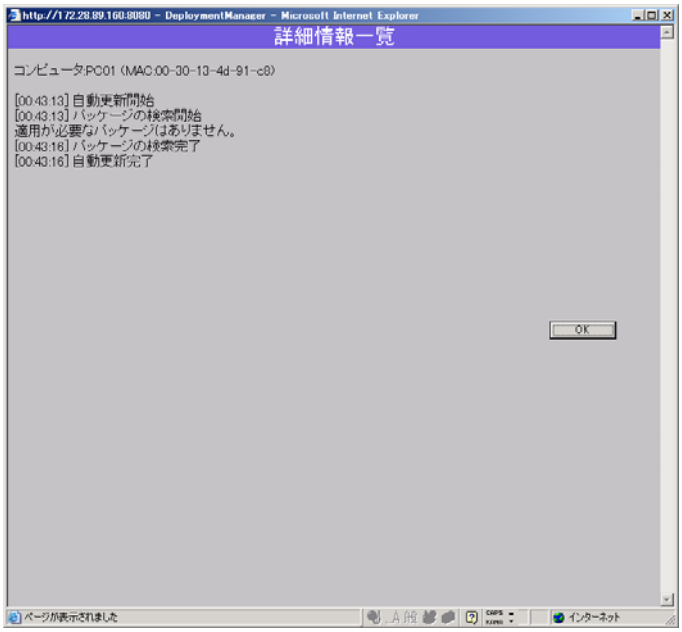
4.4 自動更新結果一覧

■ 自動更新実行進捗状況はメイン画面の「自動更新」の列から確認することができます。

■ 自動更新実行結果は「表示」メニューから、「自動更新結果一覧」を選択すると、「自動更新結果一覧」画面が表示され、自動更新実行結果を確認できます。
自動更新実行結果の一覧は、「前頁」ボタン、「次頁」ボタン、「表示」ボタンにて、表示するページを移動することが可能です。

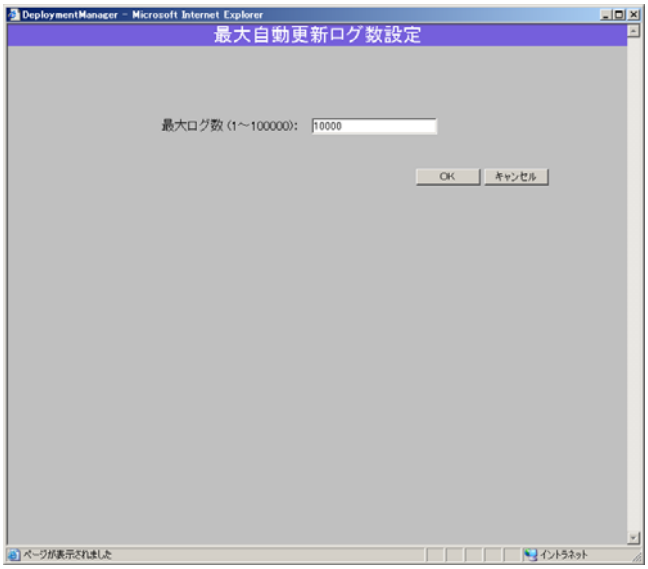
- 詳細情報

「詳細」列の「>>」をクリックすると、自動更新結果の詳細情報を表示します。



- 最大ログ数

「最大自動更新ログ数設定」画面を表示して、「最大自動更新ログ数」を設定できます。



最大ログ数のデフォルトは「10000」です。

注意

- 指定した最大ログ数だけ画面に表示します。
- 最大ログ数を 10000 以内に設定した場合は、最大ログ数を超えると古い情報から順に削除されます。最大ログ数を 10000 より大きいに設定した場合は、最大ログ数を超えると古いログから 10%が削除されます。
- 最大ログ数を前の設定値より小さく設定すると、ログの一部が削除される可能性があります。

ヒント

- 最大ログ数は管理するコンピュータ数によって変更してください。
- 最大ログ数は「管理対象コンピュータ数」以上に設定することを推奨します。

- CSV 形式で保存
  自動更新の実行結果及び詳細情報を CSV（Comma Separated Values）形式で出力します。出力するファイル名を指定してください。

- ログファイルの削除
  表示しているログファイルを削除します。

- 最新の情報に更新（「F5」キーでも更新できます）
  画面の情報を最新の状態に更新します。

4.5 自動更新状態表示ツール

■ 自動更新状態表示ツールは、管理対象コンピュータのタスクトレイに自動更新の状態をアイコン表示します。

注意

本機能は、以下の環境の管理対象コンピュータには対応していません。
・IPF アーキテクチャ
・x64 Edition（Windows Server 2003/Windows XP のみ）のリモートデスクトップ
・Windows Server 2008（Server Core インストール）
・Linux OS

■ タスクトレイに表示されるアイコンは、それぞれ以下の状態を表します。

【アイコン説明】

アイコン	管理対象コンピュータの状態	説明
	レディ	自動更新や、シナリオ実行を行っていない状態です。（シナリオ実行エラー時にも左記アイコンが表示されます。）
	自動更新中	自動更新開始後、適用するパッケージを検索・判断している状態です。
	ファイル転送中	管理対象コンピュータへパッケージを配布している状態です。
	ユーザ確認中	すぐ実行／次回起動時実行の選択ダイアログを表示している状態です。
	再起動待ち中	以下のいずれかの状態です。 ・次回起動時実行を設定後に再起動を待っている状態 ・再起動ダイアログで「キャンセル」をクリック後に再起動を待っている状態
	パッケージ適用中 （パッケージ ID）	パッケージを適用している状態です。 パッケージ ID も表示されます。
	シナリオ実行中	シナリオを実行中です。
	自動更新エラー	自動更新でエラーが発生している状態です。

ヒント

アイコンにマウスポインタを合わせるとポップアップでヒントを表示します

■ アイコン上で右クリックして以下のメニューを使用できます。各メニューの詳細は、本編「4.5.1 クライアント設定ツール」、「4.5.2 DeploymentManager について」を参照してください。

・クライアント設定ツール

・DeploymentManager について

4.5.1 クライアント設定ツール

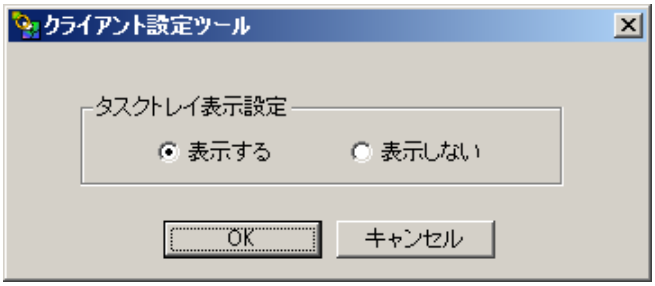
■ 「自動更新状態表示ツール」の表示/非表示を設定します。

(1) 「自動更新状態表示ツール」のアイコン上で右クリックします。表示されたメニューから、「クライアント設定」を選択すると、「クライアント設定ツール」が表示されます。

ヒント

「スタート」→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「クライアント設定ツール」をクリックして、「クライアント設定ツール」を表示することもできます。

(2) 「クライアントの自動更新状態表示ツール」アイコンの表示の有無を設定して、「OK」ボタンをクリックします。



以上でクライアント設定ツールの設定は完了です。

4.5.2 DeploymentManagerについて

■ 使用しているクライアントサービス for DPM のバージョンを「DeploymentManager について」画面から確認できます。

「DeploymentManager について」画面は、「自動更新状態表示ツール」のアイコン上で右クリックし、「DeploymentManager について」を選択すると表示されます。

5　バックアップ/リストア

■ DPMが提供するバックアップ/リストアの機能を使うと、ターゲットのコンピュータのHDDを対象にリモート操作でバックアップを行い、またそのバックアップファイルを使用してリストアすることができます。特に、リストアではマルチキャストを使った配信を行うことができますので、ネットワークに負荷をかけず一括で複数のコンピュータに実行することが可能です。また、ユニキャストによるリストアも可能です。
バックアップファイルは、管理サーバ側に保存します。また、パーティション単位のバックアップ/リストアも可能で、オプション設定と併用して、必要に応じて多様な設定を行うことができます。
尚、バックアップ/リストアを行う前に必ず「ディスクビューア」を使用してディスク番号を確認してください。「ディスクビューア」の使用方法については、「ユーザーズガイド 応用編 4. ディスク構成チェック」を参照してください

注意

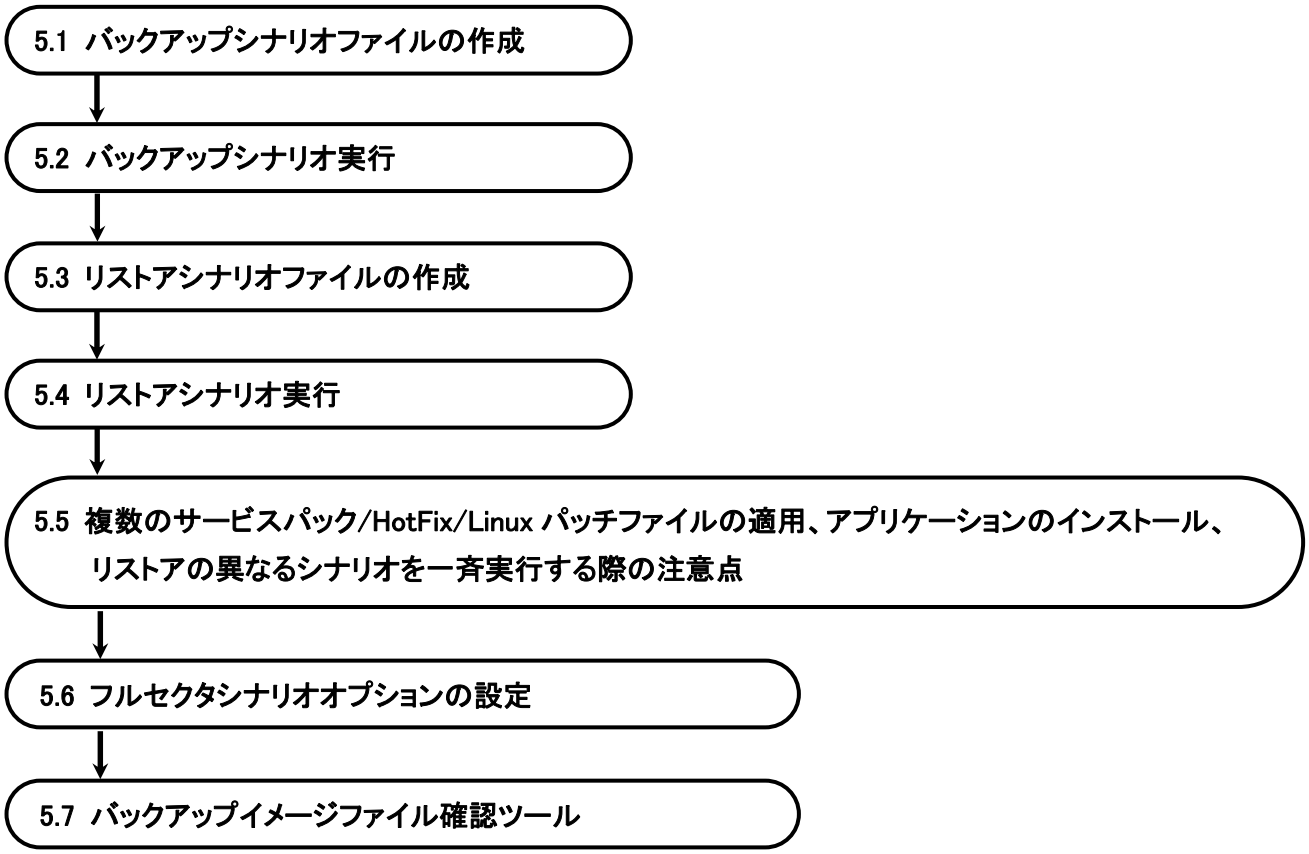
■ ActiveDirectory サーバ(ドメインコントローラ)のバックアップ/リストアには、対応していません。
また、ディスク複製、OS クリアインストール機能を用いて ActiveDirectory サーバ(ドメインコントローラ)をセットアップすることはできません。

■ VMware ESX/ESXi の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、バックアップ/リストア/ディスク構成チェックのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・VMware ESX Server 2.5.1 の場合
　-vmxnet
・VMware ESX 3.0.1/3.0.2/3.5、ESXi 3.5 の場合：
　-vmxnet
　-拡張 vmxnet
・VMware ESX 4.0、ESXi 4.0 の場合：
　-vmxnet 2
　-vmxnet 3
　-vmware 準仮想化

■ Hyper-V の仮想マシンを作成する際に以下のデバイスを選択した場合、バックアップ/リストア/ディスク構成チェックのシナリオは実行できません。
設定方法の詳細については、製品添付のユーザーズガイド等を参照してください。
・ネットワーク アダプタ
・SCSI コントローラー

■ ターゲットの OS が Red Hat Linux や SUSE Linux の場合、ネットワーク設定ファイル名や設定内容に MAC アドレス情報が含まれている場合があります。
この状態のままバックアップを行い他の管理対象コンピュータへリストアした場合は、正しくネットワークが動作しません。他の管理対象コンピュータへリストアする場合は、バックアップを行う前に MAC アドレス情報を削除してください。

シナリオ実行までの流れ



＜バックアップ＞

ネットワークを介して、ターゲットとなるコンピュータのHDDにある有効データを管理サーバ上にアーカイブファイルとして保存します。ディスクの未使用の部分はバックアップ対象にならないので、バックアップファイルの容量を比較的低容量に抑えることができます。また、バックアップ対象は、ディスク単位、パーティション単位から選択することができます。

ヒント

バックアップファイルの圧縮率の目安としては、OS インストール直後のコンピュータに対しバックアップを行った場合、以下のようになります。

- Windows OS の場合、約 60%
- Linux OS の場合、約 40%

＜不良セクタについて＞

バックアップを行う HDD に不良セクタがあり、そこにデータが記録されていた場合は、バックアップ中にエラーが発生することがあります。
また、エラーが発生しない場合も、そのバックアップイメージファイルを使ってリストアするとファイルが正しく読み込めず、OS が起動しない等の問題が発生する可能性があります。

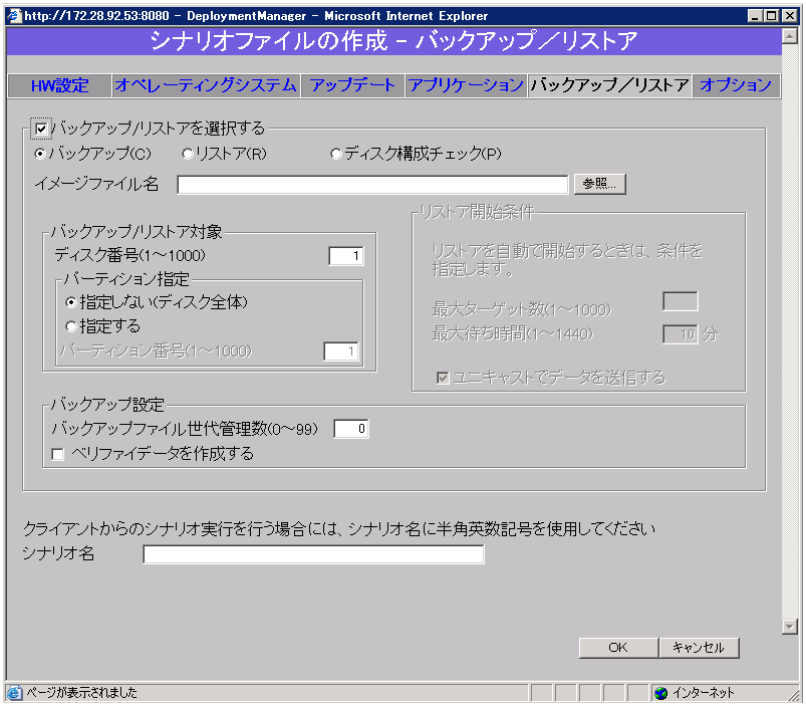
こういった問題を避けるために、バックアップ前に対象 HDD に対して OS からスキャンディスク・チェックディスクを実行されることをお勧めします。
これにより不良セクタは修復、または未使用領域としてデータを保存されないようになります。
スキャンディスク・チェックディスクの実行手順はご使用の OS のヘルプを参照してください。

5.1　バックアップシナリオファイルの作成

■ バックアップのシナリオファイル作成の方法について説明します。

(1) DPMのメインウィンドウ画面の「シナリオ」メニューから「シナリオファイルの作成」を選択します。「シナリオファイルの作成」画面が表示されます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) 「シナリオファイルの作成」画面で「バックアップ/リストア」タブをクリックし、「バックアップ/リストアを選択する」のチェックボックスにチェックを入れます。各項目が入力可能になります。



(3) 「シナリオファイルの作成」画面で「バックアップ」にチェックが入っていることを確認したら、「参照」をクリックします。「イメージファイル設定」画面が表示されます。ここで、バックアップファイルを保存したい場所を指定し、ファイル名を入力します。入力したら、「OK」をクリックしてください。

ヒント

イメージファイル名は、場所、ファイル名、拡張子を含めてバックアップの場合は 128 バイト、リストアの場合は 254 バイト(半角 254 文字、全角 127 文字)以内で入力できます。

注意

- 存在しないフォルダを指定しないでください。存在しないフォルダを指定した場合、バックアップシナリオ実行時にシナリオ実行エラーとなります。
- イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。
- ネットワークに接続している他のコンピュータ(以下ファイルサーバと呼びます)にイメージファイルのパスの指定を行う場合は以下の対応を行ってください。
  例えば、管理サーバ、ファイルサーバの OS に Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows Server 2003 を使用した場合は、以下のように設定してください。

  1～3 は管理サーバ側で行ってください

  1. 管理サーバ for DPM をインストールしたコンピュータに管理者権限を持つユーザでログインする。※1
  2. 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を起動します。
     以下サービスのプロパティを開き、「ログオン」タブの"アカウント"にチェックを入れ、"アカウント"、"パスワード"、"パスワードの確認入力"に管理サーバ for DPM をインストールしたコンピュータとファイルサーバの両方に管理者権限を持つアカウントとそのパスワードを入力する。※2
     なお、ファイルサーバ上のイメージファイル格納フォルダにここで指定するアカウントがフルコントロールでアクセスできるようにアクセス許可の設定を行ってください。

     DeploymentManager Backup/Restore Management
     DeploymentManager API Service

  3. 手順 2 で設定変更を行ったサービスを再起動する。

  4～6 はファイルサーバ側で行ってください

  4. 管理者権限をもつアカウントでログオンする。※1
  5. エクスプローラなどからイメージファイルを保存する共有フォルダを作成する。
  6. 手順 5 で作成した共有フォルダへのアクセス許可に、2 で設定した管理者権限を持つアカウントを追加する。

  7～8 は Web コンソール側で行ってください

  7. シナリオ作成時にバックアップ/リストアタブのイメージファイルに手順 5 で作成したフォルダの下のファイルのパスを入力する。※3
  8. シナリオ実行する。

  ※1 アカウントは半角英数字を使用してください。
  ※2 Windows Server 2003 の場合、1 文字以上のパスワードを設定しておいてください。パスワードの設定を行っていない場合、手順 3 でサービスの起動に失敗します。
  ※3 イメージファイル保存先のパスについては UNC(Universal Naming Convention)形式(¥¥「コンピュータ名」¥「共有フォルダ」¥「サブディレクトリ」)のパス名をイメージファイルに入力してください。
- バックアップを実行すると、バックアップデータは一時的なテンポラリファイルで作成されます。このテンポラリファイルは、バックアップ完了時にシナリオで指定したファイルにリネームされ、自動的に削除されます。そのため、同じシナリオを2回以上実行した場合は、以前作成したバックアップイメージファイルに加え一時的に作成されるテンポラリファイルを含めたディスク容量が必要になります。
- イメージファイルの保存先として、FATのドライブを指定している場合、システムの制限により、イメージファイルは最大4GB(FAT16では2GB)までのものしか作成できません。

(4) 「シナリオファイルの作成」画面に戻り、「イメージファイル」欄に(3)で指定したファイルが入力されます。次に「バックアップ/リストア対象」からバックアップ先の「ディスク番号」を指定します。

重要

ディスク番号は、必ず「ディスクビューア」にて確認後に指定してください。
サポートするデバイスの拡大に伴い、Fibre Channel ストレージについては、旧バージョンで指定したディスク番号と異なる場合があります。
「ディスクビューア」の詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 4. ディスク構成チェック」を参照ください。

注意

本バージョンでサポートする OS に共通する注意事項、および、Windows OS、Linux OS に依存する注意事項を記載します。(サポート OS については「ユーザーズガイド 導入編 1.6 DPM で管理対象となるコンピュータの設定について」を参照してください)

■サポートする OS に共通する注意事項

・以下の Disk 種別について最大ディスク数を越えるディスクが接続されている場合、最大ディスク数を越えた分のディスクをバックアップすることはできません。

Disk 種別	最大ディスク数
IDE	4
SCSI,FC	16 ※1※2
RAID	8 ※3

※1 SCSI と FC を合わせたディスク数となります。
※2 FC で複数の接続パスを設定している場合は、実際の接続ディスク数と異なる台数として認識する場合があります。
※3 1コントローラあたりの論理ディスク数となります。
最大 4 コントローラまでを接続した状態でバックアップ可能です。

・以下の最大パーティション数を越えるベーシックディスクはバックアップできません。
拡張パーティションを作成する場合、バックアップできる論理ドライブ数はパーティション-3になります。これを超えた構成の場合、ディスク指定、パーティション指定ともバックアップできません。尚、ダイナミックディスクでは、Disk 種別に関係なく Windows で作成できる最大数までバックアップは可能です。

Disk 種別	最大パーティション数
IDE	15
SCSI,FC	14
RAID	14(6 ※)

※以下のコントローラのみ 6 個までとなります。
・Mylex AcceleRAID 160
・Mylex AcceleRAID 352

・セクタサイズが通常(512byte)より大きいハードディスクドライブのバックアップ/リストアはサポートしていません。

・フォーマットされていないパーティションはバックアップできません。必ずフォーマットを行ってください。
バックアップ対象の HDD にフォーマットされていないパーティションが含まれる場合、エラーが発生しバックアップは中断されます。
また、エラーにならない場合も正しくバックアップできておりません。(バックアップイメージファイルのサイズが数 Kbyte となっており、このデータからは正しくリストアすることができません。)

・本バージョンでサポートするファイルシステムについては後述の Windows、Linux を参照し

てください。それ以外のファイルシステムはバックアップリストアできません。

・バックアップ/リストアは以下の場合はサポートしていません。

−ディスク全体を指定した場合：

◆バックアップ時とバイト単位でサイズの異なるディスクへのリストア

◆バックアップのディスクとは違う種別（IDE と SCSI 等）のディスクへのリストア。

−パーティション単位を指定した場合：

バックアップ時とバイト単位でサイズの異なるパーティション、及び異なるファイルシステムでフォーマットされたパーティションへのリストア。
サイズの異なるディスクまたはパーティションへリストアを行った場合、以下のエラーが発生する可能性があります。

Could not write data of the specified size. (SIZEA / SIZEB)

The disk may be damaged.

・GPT（GUID Partition Table）形式のディスクについて、以下のバックアップ/リストアは、サポートしておりません。

−パーティション単位

−ダイナミックディスク

−IPF 装置以外で GPT パーティションを作成したディスク

・OS の機能、あるいはディスク管理アプリケーションを使用して作成したソフトウェア RAID ボリューム（RAID0、RAID1、RAID1 のスパン、RAID5、他）はバックアップ/リストアできません。FT サーバについては、機種により、RAID 解除後のバックアップ、または RAID のままでのフルセクタでのバックアップに対応しています。各機種でのバックアップ手順の詳細については、製品サイト(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/)を参照ください。

・複数のディスクやパーティションを一つのシナリオで一度にバックアップ/リストアはできません。

・以下のいずれかに該当する場合、必要なデータが格納されている全ディスク／パーティションをバックアップして下さい。全ディスク／パーティションのバックアップ/リストアが完了するまでは OS を起動させないように注意してください。シナリオ実行のタイミングで OS が起動しないように、シナリオ実行時のオプションで、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

−バックアップ元とリストア先が別の装置の場合

−OS 起動に必要なデータが複数ディスクにまたがって格納されている場合

−OS 起動に必要なデータとディスク複製に必要なデータ(Windows:sysprep、Linux:/opt/dpmclient)が複数ディスクにまたがって格納されている場合

−システムとして必要なファイルが別の HDD に格納されている場合

−他のドライブをディレクトリにマウントするなど、複数のディスク、複数のパーティションにわたってディスクが連結されているような場合

−ディスク間でデータ内容の整合性をとる必要がある場合

・複数の HDD が搭載されているコンピュータでパーティション構成を変更（パーティションの削除、追加、ドライブ文字の変更等）した場合は、必ずバックアップしなおしてください。
パーティション構成を変更する前のバックアップイメージファイルを変更後のコンピュータにリストアするとドライブ文字が正しく復元されないことがあります。

これはドライブ文字が、システムディスク、データディスクの両方に記録されているため、どちらか一方のみリストアすると、管理データの不一致が発生しドライブ文字の再割り当て処理が実行されるためです。

もし、ドライブ文字が正しく復元されなかった場合は、Windows の「ディスクの管理」等を使用しドライブ文字を再設定してください。

■Windows OS に関する注意事項

・以下のフォーマット形式以外の方法でフォーマットされたパーティションについてはバックアップ/リストアを行えません。

-OS クリアインストールを行って作成したパーティション

-本バージョンでサポートしている Windows OS(「ユーザーズガイド 導入編 1.6 DPM で管理対象となるコンピュータの設定について」を参照してください)で作成した FAT16、FAT32、NTFS 4.0、NTFS 5.0、NTFS 5.1 パーティション

・BitLocker ドライブ暗号化が有効になっている管理対象コンピュータのバックアップ/リストアはできません。

・ダイナミックディスク形式のディスクのバックアップ/リストアを行われる場合、以下のことにご注意ください。

-パーティション指定でのバックアップ/リストアはできません。ディスク全体を指定してバックアップ/リストアを行うようにしてください。

-旧 OS でダイナミックディスクに変換後、Windows Server 2008/Windows Vista/Windows 7 へアップグレードを行った環境のバックアップは未サポートになります。

-Windows RE が第 1 パーティション以外にインストールされているディスクをダイナミックディスクに変換した環境のバックアップは、未サポートです。

-ベーシックディスクが拡張パーティションを含んでいる場合ダイナミックディスクに変換してのバックアップはエラーが発生し、中断されますので、プライマリパーティションのみでダイナミックディスクに変換してください。

-保守用パーティションを含むディスクをダイナミックディスクに変換した場合、そのディスクに対して、ディスク全体を指定してのバックアップ/リストアはできません。
保守パーティションは、弊社の Express5800 シリーズの場合は EXPRESSBUILDER CD-ROM から作成することができます。

-FAT32 パーティションを使用する場合は、ベーシックディスクとして FAT32 領域を確保した上でダイナミックディスクに変換してください。

-未フォーマット領域、あるいは未割り当ての領域が存在すると、リストア時にエラーが発生する場合があります。ダイナミックディスク形式のディスクを使用される場合は、ディスク内に未フォーマット領域、未割り当て領域が存在しないように運用してください。

-バックアップしたダイナミックディスクに FAT16 又は、未フォーマット領域が存在すると、リストア時にエラーが発生します。ダイナミックディスク形式のディスクを使用される場合は、ディスク内に FAT16、未フォーマット領域が存在しないように運用してください。

-複数のダイナミック形式のディスクを接続している場合は、各ディスクについてのバックアップ/リストアを続けて一度に行うようにしてください。各ディスクに対する複数のバックアップ/リストアシナリオ実行の途中で Windows の起動を行うと、リストア後、Windows システムが正常に起動しなくなる可能性があります。

■Linux OS に関する注意事項

・クライアントのコンピュータに Red Hat Linux のインストールを行う時に、インストール設定の中でブートローダのインストール先に、MBR(Master Boot Record)ではなくブートセクタの先頭を選択した場合、そのディスクに対してバックアップ/リストアを行うことはできません。ブートローダは、MBR にインストールを行うようにしてください。

・以下のフォーマット形式以外の方法でフォーマットされたパーティションについてはバックアップ/リストアを行えません。

−OS クリアインストールを行って作成したパーティション
−本バージョンでサポートしている Linux OS(「ユーザーズガイド 導入編 1.6 DPM で管理対象となるコンピュータの設定について」を参照してください)で作成した LVM1、ext2、ext3、ReiserFS、JFS、XFS、Linux Swap パーティション
※Linux で作成した VFAT 領域のバックアップ/リストアは未対応です。

・Linux で暗号化パーティションを作成した場合はパーティション指定でのバックアップ/リストアはできません。「シナリオオプション設定ツール」にて、フルセクタオプションを設定してください。詳細は、本編「5.6 フルセクタオプションの設定」を参照してください。

・LVM1(※)、ReiserFS、JFS、XFS パーティションのバックアップ/リストアは、有効セクタだけでなく無効セクタも含んだバックアップ/リストアとなります。
ディスクがベーシックディスクの場合は、通常のバックアップシナリオでバックアップできます。
GPT ディスク(IPF アーキテクチャマシン)の場合は、フルセクタオプションのバックアップを行う必要があります。フルセクタオプションについては、本編「5.6 フルセクタシナリオオプションの設定」を参照してください。
※LVM1 パーティションは、ディスク単位のバックアップ/リストアのみ行えます。
パーティション単位のバックアップ/リストアで LVM1 パーティションは指定できません。
また、LVM1 パーティションが未フォーマット領域の場合、バックアップ時にエラーが発生する場合があります。必ず pvcreate 等でフォーマットを行ってください。
LVM1 パーティションを含むディスクをバックアップ/リストアする場合は、上記に注意してください。
なお、複数の HDD 上で構成された LVM1 パーティションのディスク全体のバックアップ/リストアは、対応していません。

・LVM2 パーティションのバックアップを行う場合は、フルセクタオプションのバックアップを行う必要があります。フルセクタオプションについては、本編「5.6 フルセクタシナリオオプションの設定」を参照してください。
なお、複数の HDD 上で構成された LVM2 パーティションのバックアップ/リストアは、対応していません。

・複数の HDD が搭載されているコンピュータでは、LinuxOS のようにシステムとして必要なファイルが別の HDD に格納されている場合があります。このような場合にはすべての HDD についてバックアップ/リストアを行ってください。
Linux の場合に 1 つの HDD にインストールする方法は、本編「2.2.4 Linux インストールパラメータファイルの作成」を参照してください

(5) パーティションを指定してバックアップする場合は、「パーティション指定」の「指定する」にチェックを入れます。

重要

パーティションを指定してリストアを行う場合は、バックアップ元とリストア先のパーティションサイズとフォーマットを一致させてください。

注意

■ 指定する「パーティション番号」は「オプション」⇒「詳細設定」画面の「隠しパーティションを無視する」 が選択されている場合は、隠しパーティションをカウントしません。

例） 以下のような（A）～（D）まで 4 つのパーティションに区切られたディスク装置で、パーティション（D）を指定したい場合

ディスク装置

隠しパーティション（A）	通常のパーティション（B）	隠しパーティション（C）	通常のパーティション（D）

・「オプション詳細設定」画面の「隠しパーティションを無視する」を選択した場合「パーティション番号」に「2」を指定します。

・「オプション詳細設定」画面の「隠しパーティションを無視する」を選択しない場合「パーティション番号」に「4」を指定します。

■ 空きパーティション（フォーマットされていないパーティション）はカウントしません

■ 「指定しない（ディスク全体）」を指定した場合は、「オプション詳細設定」画面の「隠しパーティションを無視する」の設定内容に関係なく、隠しパーティションを含め、ディスク全体が対象となります。

■ メーカーによっては保守用パーティションを隠しパーティションとして認識しない場合があります。（Windows RE の保守用パーティションは隠しパーティションとして認識します）

例） 弊社の Express5800 シリーズの EXPRESSBUILDER で使用する保守用パーティションは隠しパーティションと認識しません。

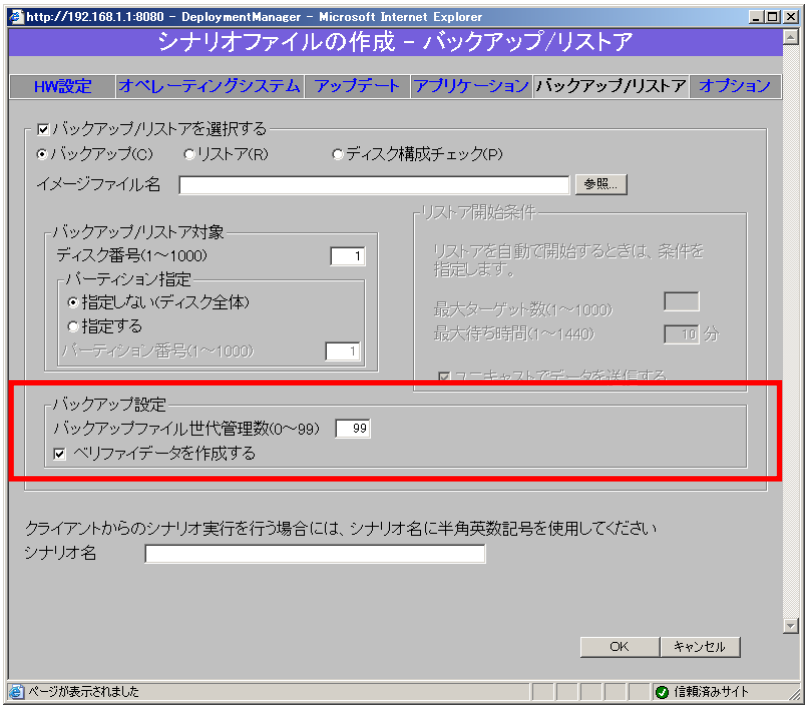
■ パーティション番号はプライマリパーティション、拡張パーティションの論理ドライブの順で番号が割り振られます。

例）以下のディスク装置では、パーティション（A）は「1」、拡張パーティションの論理ドライブ（B）は「3」、拡張パーティションの論理ドライブ（C）は「4」、パーティション（D）は「2」になります。

ディスク装置

プライマリパーティション（A）	拡張パーティション		プライマリパーティション（D）
	論理ドライブ（B）	論理ドライブ（C）	

(6) バックアップファイルの世代管理を行う場合は、世代管理数を入力します。
また、ベリファイデータを作成する場合は、「ベリファイデータを作成する」にチェックを入れます。



◆ 世代管理とは
通常のバックアップイメージファイルに加え何世代まで保存するかを指定する機能です。
デフォルトは「0」となっており、「99」までの世代管理が可能です。
世代管理対象のイメージファイル名は、作成時のタイムスタンプ（年月日時分秒）が付加される形で保存されます。
指定した数値を超える回数のバックアップを行なった場合、最も古いイメージファイルが自動的に削除されます。
例） 10 回分のバックアップデータを保存しておきたい場合は、「10」と入力します。
初めてバックアップする場合は、イメージファイル名が、<指定したファイル名>.lbr となります。
2 回目以降は、前回のイメージファイル名を<指定したファイル名>.lbr から <指定したファイル名>タイムスタンプ.lbr に変更し、今回のものを<指定したファイル名>.lbr として保存します。

注意
世代管理の機能を使用する場合、イメージファイルは(世代管理の数+1)作成されますので、イメージファイルの保存先の HDD の空き容量に注意してください。
例） 世代管理の数が 5 で 1 つのイメージファイルのサイズが約 5GB の場合 5GBx(5+1)=30GB で、最大で約 30GB の空き容量が必要となります。

◆ ベリファイデータとは
バックアップしたデータが、バックアップ時から破損していないかを確認するための機能です。
「ベリファイデータを作成する」にチェックを入れておくと、リストアする際にバックアップデータに不正（データの破損など）がないかを、あらかじめ「バックアップイメージファイル確認ツール」で確認することができます。
詳しくは、本編「5.7 バックアップイメージファイル確認ツール」を参照してください。

(7) バックアップと同時にフロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録、OS のインストール、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールなどを行う場合は、本編「2. OS クリアインストール」、「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「6. フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をご覧になってイメージを登録し「HW 設定」、「オペレーティングシステム」、「アップデート」、「アプリケーション」のタブから設定を行ってください。

(8) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、「オプション」タブをクリックします。
OS が起動しているコンピュータに対しシナリオを実行する場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

「実行前に再起動の強制実行を行う」を行うためにはクライアントコンピュータに DPM のサービスをインストールしてください。詳しくは「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」を参照してください。

注意

Windows の管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れていてもシャットダウンできません。
- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(9) 設定が終了したらシナリオ名を入力後、「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しくバックアップのシナリオが追加されます。

ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「|」は使用できません。

(10) 以下のいずれかに該当する場合は、フルセクタバックアップでのみバックアップ可能です。フルセクタバックアップの設定方法については、本編「5.6 フルセクタシナリオオプションの設定」を参照してください。
- VMware ESX 3.0.1/3.0.2/3.5/4.0、ESXi 3.5/4.0 のホストマシン
- LVM2 パーティション
- GPT ディスク上の LVM1 パーティション
- IPF Linux 上の EFI(Extensible Firmware Interface)パーティション

5.2 バックアップシナリオ実行

■ 作成したバックアップのシナリオの実行の方法について説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- ■ イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- ■ シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、「シナリオ名」のプルダウンからシナリオファイルを選択し、「OK」をクリックします。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」→「シナリオ実行」を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作は、コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。コンピュータアイコンを選択し、メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に手動で電源を OFF してください。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と表示され、バックアップが開始されます。

(5) メインウィンドウ画面の「表示」→「シナリオ実行状況」→「シナリオ実行一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。また、バックアップの詳細な進捗を見るときは、「バックアップ/リストア実行一覧」を選択し、「バックアップ/リストア実行一覧」画面を表示します。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“実行完了”と表示されたら、シナリオは完了です。「バックアップ/リストア実行一覧」画面の「実行状況」にも“バックアップ正常終了”と表示されます。

重要

- バックアップの時間が極端に短かった場合などは、バックアップイメージファイルのサイズを確認して下さい。バックアップイメージファイルのサイズは、圧縮を設定して OS インストール直後のコンピュータに対しバックアップを行った場合、以下のようになります。
  - Windows OS の場合、約 60%
  - Linux OS の場合、約 40%

  これと比較してバックアップイメージファイルのサイズが小さすぎる場合、シナリオが正常終了していてもバックアップに失敗している可能性があります。以下のようなパーティションがないか、確認して下さい。以下のパーティションがありましたら、そのパーティションを削除してから再度バックアップを実行してください。
  - 未フォーマットにも関わらず、ドライブ名が設定されている。
- IPF 装置に対してバックアップを実施すると、バックアップイメージファイルと同じフォルダに拡張子が nvr というファイルが作成されます。このファイルには、EFI ブート情報を管理する NvRAM 領域のデータが含まれます。バックアップ中の PXE ブートや起動制御を行うために必要になりますので削除しないでください。

注意

■ バックアップのシナリオを実行する前に、必ず管理サーバのバックアップファイルを指定した先の空き容量を確認してください。容量不足になると、途中でバックアップが中止してしまいます。

■ Linux でパーティションを確保する場合、fdisk にてディスク先頭に書き込まれるパーティション ID の値にご注意ください。
パーティション ID の値は、fdisk の-l オプションで確認できます。
バックアップではこのパーティション ID の値と実際のパーティションの内容とを比較し不整合がないかを確認しています。
Linux では OS としてこの値を使用しないので、実際のパーティションと異なる値が記録されている場合があります。このような場合は、データ不整合として以下のようなエラーメッセージを出力して終了します。

```
There is a mismatch between partition types of MBR(0x83-5) and BPB(NO6-6)
This disk can no be backed-up/restore
```

例えば、swap領域の拡張で新たにfdiskでパーティションを作成し、mkswapなどでそのパーティションをswapにした場合上記のようなエラーになります。
このような場合はfdiskにて該当パーティションIDを実際のパーティション内容に合わせたものに更新してから再度バックアップを実行してください。

■ ダイナミックディスク上で新たに作成できるパーティションは NTFS のみとなります。
NTFS で作成した後、FAT に再フォーマットしたパーティションはリストアできません。

ヒント

バックアップがエラー終了した場合、クライアント画面に以下のメッセージが表示されます。

```
Press 'p' key to poweroff, 'r' key to reboot:
```

・ 再起動する場合は、「r」キーを入力後「Enter」キーを押してください。
・ 電源 OFF する場合は、「p」キーを入力後「Enter」キーを押してください。

「p」キーを押した場合に、装置によっては完全に電源 OFF されない場合があります。
その場合、以下のメッセージが表示されていれば問題ありませんので、手動で電源 OFF してください。

```
flushing ide device : hda (※)
system halted.
```

※環境によって表示される文字列が異なります。

＜リストア＞

■ ネットワーク上のコンピュータの HDD に、DPM でバックアップをとったバックアップファイルをリストアします。マルチキャストでバックアップファイルを配信する場合、多数のコンピュータにリストアを実行しても、ネットワークに負荷をかけません。ユニキャストによる配信も可能です。

5.3 リストアシナリオファイルの作成

■ リストアのシナリオファイルの作成方法について説明します。

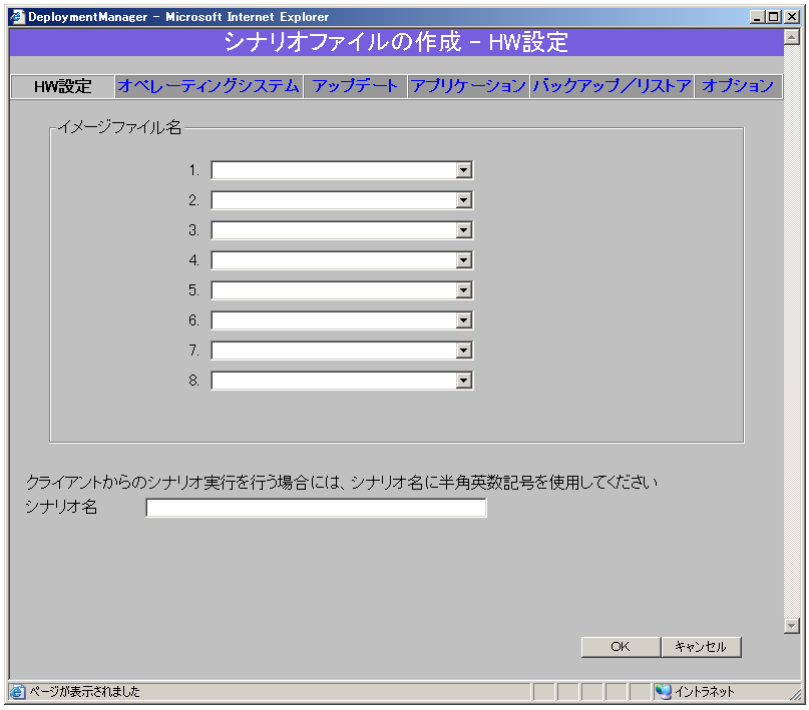
■ バックアップファイル作成時に「ベリファイデータを作成する」にチェックを入れている場合は、リストアのシナリオファイル作成前に、本編「5.7 バックアップイメージファイル確認ツール」を実行されることを推奨します。

重要

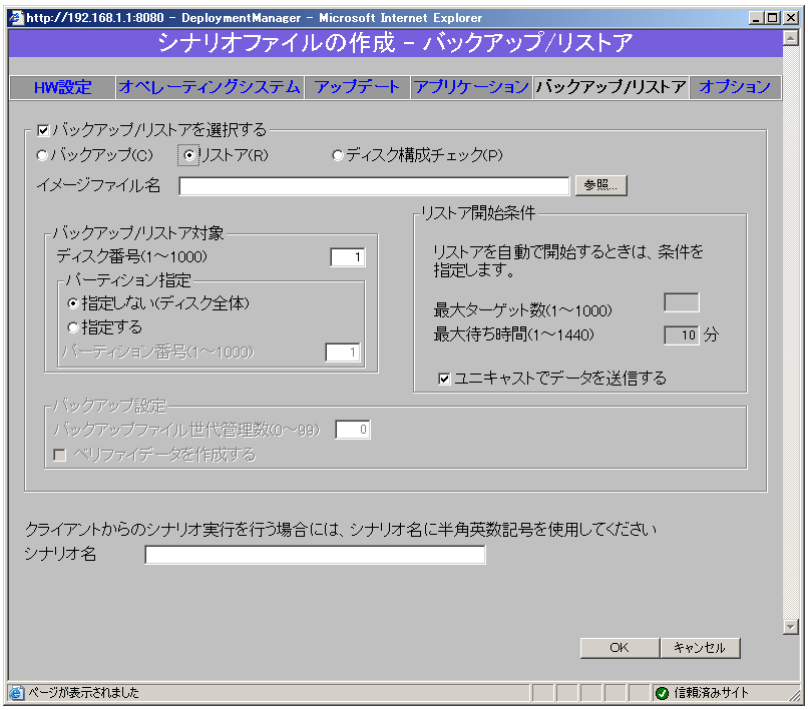
複数のサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する場合はマルチキャストの設定をしてください。詳細は、本編「3.5 複数のサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する際の注意点」を参照してください。

(1) DPM のメインウィンドウ画面の「シナリオ」メニューから「シナリオファイルの作成」を選択します。「シナリオファイルの作成」画面が表示されます。メインウィンドウ画面の をクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) クライアントが IPF の場合、シナリオの作成画面で「HW 設定」タブをクリックし「イメージファイル名」のコンボボックスで「nbprestvar.efi」を選択してください。



(3) 「シナリオファイルの作成」画面で「バックアップ/リストア」タブをクリックし、「バックアップ/リストアを選択する」のチェックボックスにチェックを入れます。各項目が入力可能になります。



(4) 「シナリオファイルの作成」画面で「リストア」にチェックを入れます。次に「参照」をクリックします。「イメージファイル設定」画面が表示されますので、リストアしたいバックアップファイルを指定し、ファイル名を入力します。入力したら、「OK」をクリックしてください。

注意

ここで、指定するファイルは、必ず DPM Ver2.0 以降でバックアップしたファイルを指定してください。他のファイルを指定すると、シナリオを実行したときに正常に動作しません。

(5) 「シナリオファイルの作成」画面に戻り、「イメージファイル」欄に(3)で指定したファイルが入力されます。次に「バックアップ/リストア対象」から「ディスク番号」を指定します。

重要

「ディスク番号」の詳細は、本編「5.1 バックアップシナリオファイルの作成」を参照ください。

(6) パーティションを指定してバックアップする場合は、「パーティション指定」の「指定する」にチェックを入れ、「ディスク番号」とともに番号を設定します。

重要

- パーティション指定のリストアシナリオを設定する場合は、バックアップ元とリストア先のパーティションサイズとフォーマットを一致させてください。
  (例)NTFS で 5GB のパーティションをバックアップしたファイルは、同じ NTFS でフォーマットされた 5GB のパーティションのみリストアできます。
- ディスク単位でバックアップしたファイルをパーティション指定でリストアできません。

注意

通常、「パーティション番号」はディスクの先頭から順に割り振りますが、ディスクに隠しパーティションや拡張パーティションがあると、番号の振り方が変わります。詳細は、本編「5.1 バックアップシナリオファイルの作成」を参照ください。

(7) ユニキャストでデータを送信する場合は、「リストア開始条件」の「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れてください。

ヒント

ルータを越えた別セグメントのネットワークにリストアを行う際などの、マルチキャストのデータが送信できない場合にチェックしてください。

注意

- 「ユニキャストでデータを送信する」にチェックをいれた場合は(8)の設定は必要ありません。(9)へ進んでください。
- マルチキャストリストアは、ディスク複製 OS インストールのリストア時のみ使用してください。

(8) マルチキャストで配信を行う場合は、このシナリオを割り当てるコンピュータの数を「最大ターゲット数」に入力し、「最大待ち時間」を入力します。

- 最大ターゲット数
  リストア選択時のみ設定可能です。ここで指定した数のコンピュータの準備が揃うとリストアが開始されます。

注意

- 最大ターゲット数を越えてコンピュータを実行した場合、最大ターゲット数を越えて実行したコンピュータはリストア実行待ちとなります。
- 実行待ちとなったコンピュータは、実行中のコンピュータのリストアが完了次第、最大ターゲット数あるいは最大待ち時間のいずれかの条件を満たすか、「バックアップ/リストア実行一覧」画面で「今すぐ実行」のクリックにより開始されます。
- 「ユニキャストでデータを送信する」にチェックをいれた場合、設定は無効となります。
- DPM は、マルチキャストでデータを送信する場合に UDP 通信を行います。
  UDP 通信では転送速度が違う機器が経路上にある場合等で、送信側と受信側で転送するデータ量に差が生じ、データがうまく転送できない状態になることがあります。
  このような場合は、シナリオ完了までの時間が長くなる場合があります。

- 最大待ち時間
  リストア選択時のみ設定可能です。ここで指定した待ち時間を過ぎると、実行可能な状態となっているコンピュータのみリストアが開始されます。

重要

- リストアの実行は、シナリオの実行を指示後、実行準備の完了したコンピュータの台数が最大ターゲット数と同じ台数になるか、最大待ち時間が経過するまで待機します。
- 最大ターゲット数、最大待ち時間の両方とも指定しない場合は、シナリオ実行後、自動的にリストアが開始されることはありません。その場合は、「バックアップ/リストア実行一覧」で「今すぐ実行」をクリックしてリストアを開始してください。

注意

「ユニキャストでデータを送信する」にチェックをいれた場合、設定は無効となります。

(9) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、「オプション」タブをクリックします。
OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」を行うためにはクライアントコンピュータに DPM のサービスをインストールしてください。詳しくは「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」をご覧ください。

注意

Windows の管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れていてもシャットダウンできません。

- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(10)リストアと同時に BIOS/ファームウェアのアップデート、EFI アプリケーションを行う場合は、本編「6. フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をご覧になってイメージを登録し「HW 設定」のタブから設定を行ってください。

注意

複数タブを指定する場合、画面左側のタブから設定してください。
またリストアと同時に OS、アップデート、アプリケーションタブの設定を行うことはできません。

(11)設定が終了したらシナリオ名を入力後、「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しくリストアのシナリオが追加されます。

ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「|」は使用できません。

(12)フルセクタオプションを設定したシナリオで作成したバックアップイメージは、同様にフルセクタオプションを設定したリストアシナリオでのみリストアできます。
フルセクタシナリオオプションの設定方法については、本編「5.6 フルセクタシナリオオプションの設定」を参照してください。

5.4 リストアシナリオ実行

■ リストアのシナリオの実行の方法について説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。

- ■ イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- ■ シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、「シナリオ名」のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、「OK」をクリックします。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択します。シナリオファイル作成時に「最大ターゲット数」や「最大待ち時間」で設定したタイミングでシナリオが開始されます。同じ操作はコンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。コンピュータアイコンを選択し、メインウィンドウ画面のアイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に、手動で電源を OFF してください。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と表示され、リストアを行います。

(5) メインウィンドウ画面の「表示」メニュー→「シナリオ実行状況」→「実行結果一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。また、リストアの詳細な進捗を見るときは、「バックアップ/リストア実行一覧」を選択し、「バックアップ/リストア実行一覧」画面を表示します。

注意

シナリオ作成時に「ユニキャストでデータを送信する」にチェックをいれた場合は、「バックアップ/リストア実行一覧」は表示されません。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“実行完了”と表示されたら、シナリオは完了です。「バックアップ/リストア実行一覧」画面の「実行状況」にも“リストア正常終了”と表示されます。

重要

マルチキャストリストアを実行し、エラーまたは中断となったコンピュータに対して、再度リストアシナリオを行う際は、 以下を確認後に行ってください。
・エラーまたは中断となったシナリオが、すべてのコンピュータにおいて、シナリオ実行中でないこと
※ Web コンソールのアイコンの色から確認できます。

ヒント

リストアがエラー終了した場合、クライアント画面に以下のメッセージが表示されます。

Press 'p' key to poweroff, 'r' key to reboot:

・ 再起動する場合は、「r」キーを入力後「Enter」キーを押してください。
・ 電源 OFF する場合は、「p」キーを入力後「Enter」キーを押してください。

「p」キーを押した場合に、装置によっては完全に電源 OFF されない場合があります。
その場合、以下のメッセージが表示されていれば問題ありませんので、手動で電源 OFF してください。

flushing ide device : hda (※)
system halted.
※環境によって表示される文字列が異なります。

5.5 複数のサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアの異なるシナリオを一斉実行する際の注意点

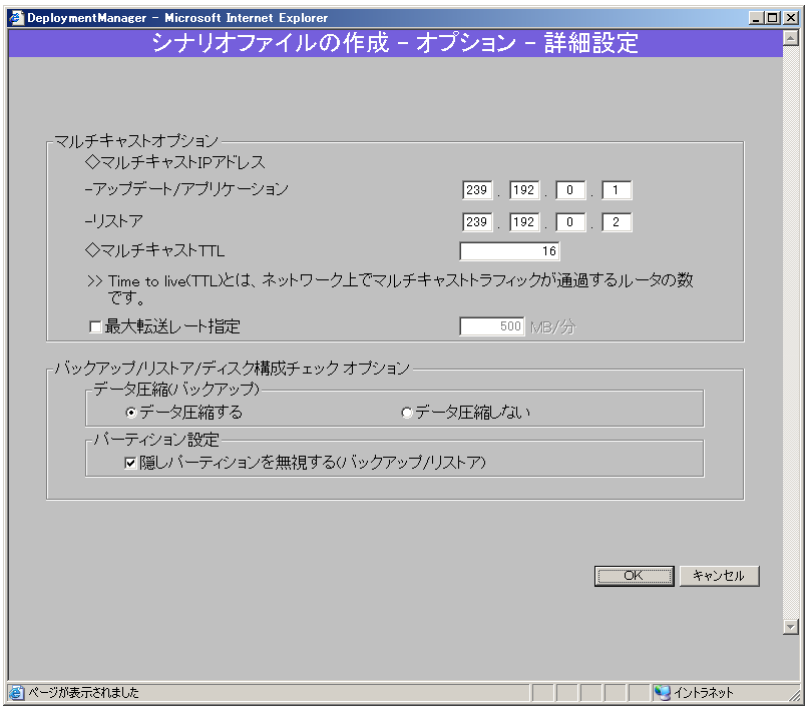
- 次の項目にすべて当てはまる場合、「シナリオファイルの修正」画面の「オプション」タブからマルチキャスト IP アドレスの設定してください。
- サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールをクリアインストールと同時に設定していない。(リモートアップデートによりサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストールを行う。)
- サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール、リストアのシナリオを複数作成しており、これらを一斉実行する。
- サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用アプリケーションのインストール、リストアのシナリオ作成時に「ユニキャストでデータを送信する」にチェックを入れていない。

注意

シナリオ作成時に「ユニキャストでデータを送信する」にチェックをいれた場合は、以下の設定を行う必要はありません。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のシナリオビューから対象となるシナリオファイルを選択し、右クリック→「シナリオファイルの修正」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。あるいは、シナリオファイル作成中に設定するときは、設定中のシナリオファイル作成画面を表示しておきます。

(2) シナリオファイル作成画面の「オプション」タブをクリックし、「詳細設定」をクリックしてください。「詳細設定」画面が表示されます。



(3) 「詳細設定」画面で「リストア」の欄の IP アドレスの値を実行予定のシナリオすべてが異なるように入力して「OK」をクリックします。

(例)シナリオファイルが 3 つの場合

「リストア」の IP アドレスをそれぞれ以下のように設定する。

1)1 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.2

2)2 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.3

3)3 つ目のシナリオファイル・・・239.192.0.4

※「アップデート/アプリケーション」のデフォルト設定で、すでに設定されているため 239.192.0.1 は使用しません。

(4) シナリオファイル作成画面に戻るので、「OK」をクリックしてください。設定は完了です。(1)の手順でシナリオファイル修正を選択している場合は、ここで本当に修正するかどうかの確認メッセージが表示されるので、もう一度「OK」をクリックします。

5.6 フルセクタシナリオオプションの設定

■ サポートするディスク形式、ファイルシステム中、以下のものは通常のバックアップ/リストアシナリオでは対応できません。これらについては本章のツールを使用してシナリオにフルセクタオプションを設定して実行してください。

・GPT ディスク上に構築した LVM1 パーティション[IPF 装置]
・ベーシックディスク上に構築した/boot/efi パーティション(EFI)[IPF 装置]
・LVM2 パーティション[IA32/EM64T/IPF 装置]

ディスク構成によってフルセクタの設定が必要なものと、通常のシナリオで可能なものとがありますので以下の表を参照して対応する方式でバックアップしてください。

	EFIあり、LVMなし	EFIあり、LVMあり	EFIなし、LVMなし	EFIなし、LVMあり
GPTディスク ※1	通常	フルセクタ	通常	フルセクタ
Basicディスク ※1	フルセクタ	フルセクタ	通常 ※2	通常 ※3

※1 IPF 版の Linux ではベーシックディスクにフォーマットされた HDD に対するインストール時には自動的にベーシックディスクになります。それ以外の場合は GPT ディスクになります。
※2 パーティション単位のバックアップ/リストアが可能です。これ以外の構成の場合は、ディスク単位のバックアップ/リストアのみサポートしています。
※3 LVM2 パーティションの場合は、フルセクタの設定が必要です。

ヒント

ベーシックディスク上に構築した LVM パーティションが、LVM2 パーティションであるかを確認する方法については、以下の手順を参考にしてください。

例)Red Hat Enterprise Linux 5.1 上のバックアップ対象のディスク(/dev/sda)を確認する場合

(1)fdisk コマンドを実行して、パーティション構成を確認します。

```
#fdisk -l /dev/sda
```

※以下のような結果が出力されます。

```
#fdisk -l /dev/sda

Disk /dev/sda: 164.6 GB, 164696555520 bytes
255 heads, 63 sectors/track, 20023 cylinders
Units = cylinders of 16065 * 512 = 8225280 bytes

Device Boot      Start         End      Blocks   Id  System
/dev/sda1   *        1          13      104391   83  Linux
/dev/sda2           14       20023   160730325   8e  Linux LVM
```

(2)出力結果より、"Linux LVM"と表示されたパーティション毎に pvdisplay コマンドを実行します。
pvdisplay コマンドを実行した出力結果の「Fmt」に"lvm2"と表示された場合は、LVM2 パーティションとなります。

```
#pvdisplay -C /dev/sda2
```

※以下のような結果が出力されます。

```
#pvdisplay -C /dev/sda2

PV          VG          Fmt   Attr  PSize     PFree
/dev/sda2   VolGroup00  lvm2  a-    153.28G   0
```

シナリオオプション設定ツール(SnrOpEdt.exe)は、「管理サーバ for DPM」のインストールフォルダに格納しています。管理サーバ for DPM のインストールフォルダのデフォルトは、C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager です。

エクスプローラなどでインストールフォルダを開き、直接ダブルクリックなどで起動してください。
SnrOpEdt.exe を起動するとディスク単位のバックアップ/リストアのシナリオ一覧が表示されます。
フルセクタオプションを設定(または解除)したいシナリオを選択してダブルクリックすることで設定が変更されます。
変更は即座に反映されます。変更時に該当シナリオが実行中でないことを確認してください。

注意

フルセクタオプションのバックアップシナリオでは、ディスクの全ての内容をバックアップします。このため圧縮無し、あるいは圧縮率が低い場合には、バックアップイメージのサイズがバックアップを行うディスクサイズと同じ大きさになってしまう可能性があります。

ヒント

SE 製品は、IPF 装置をサポートしていません。

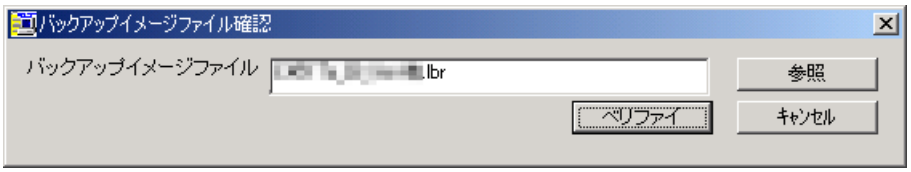
5.7 バックアップイメージファイル確認ツール

■ バックアップイメージファイル確認ツールとは、リストアする前にバックアップファイルが不正でないか、正しくリストアできるかを事前に確認するためのツールです。

■ バックアップイメージファイル確認ツールの使い方について説明します。

(1) 管理サーバの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「バックアップイメージファイル確認ツール」を選択します。

(2) 以下の画面が表示されますので「参照」をクリックし、確認したいバックアップファイルを選択し、「ベリファイ」をクリックします。

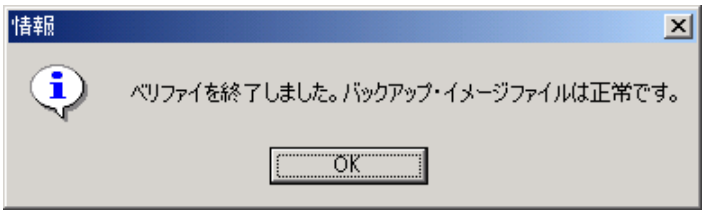


(3) 「進捗」画面が表示され、バックアップファイルの確認が始まります。そのまましばらくお待ちください。
処理を中断する場合は「中断」をクリックしてください。

「中断」をクリックすると以下の画面が表示されます。中断する場合は「はい」をクリックします。
「いいえ」をクリックすると(3)の「進捗」画面に戻ります。

「はい」をクリックすると以下の画面が表示されます。「OK」をクリックしてください。

(4) バックアップファイルの確認が終了すると「情報」画面が表示されます。「イメージファイルは正常です」と表示されたら完了ですので「OK」をクリックして画面を閉じてください。



(5) バックアップファイルに異常があった場合、原因により以下のようなメッセージが表示されます。
この場合、「ユーザーズガイド 応用編 エラー情報」から該当する箇所を参照してください。

以上で、バックアップイメージファイルの確認は完了です。

6　フロッピーディスクのイメージ作成/ EFIアプリケーションの登録

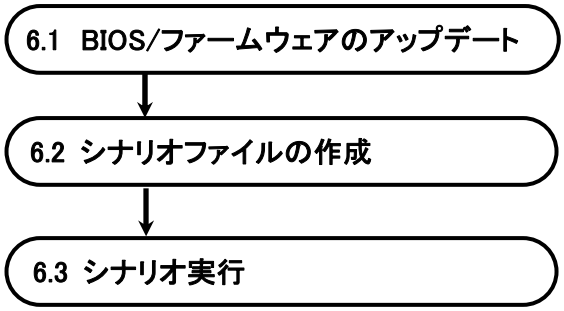
■ 「フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」機能を使うことにより、BIOS/ファームウェアのアップデート用フロッピーディスクイメージ、あるいは EFI アプリケーションを DPM へ登録し、ネットワークを介して配信することが可能です。
また、フロッピーディスクサイズ（1.44MB）までのものに限りますが、フロッピーディスク単体として起動できるようオリジナル作成したツールも DPM を使用して配信、実行することができます。Express5800 シリーズの装置に対しては AutoRAID とオフライン保守ユーティリティの設定も可能です。

注意

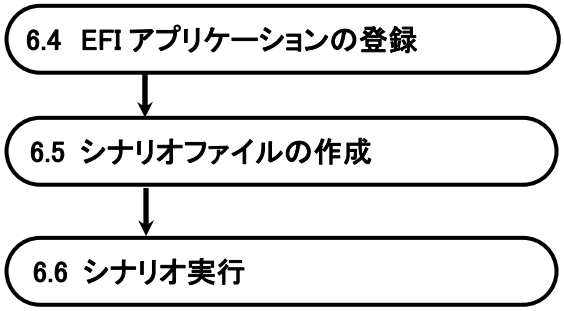
BIOS/ファームウェアのアップデート用フロッピーディスクイメージの登録/配信については、IA32 アーキテクチャマシンが対象となります。EFI アプリケーションの登録/配信については、IPF アーキテクチャマシンが対象となります。

シナリオ実行までの流れ

フロッピーディスクイメージの登録



EFI アプリケーションの登録



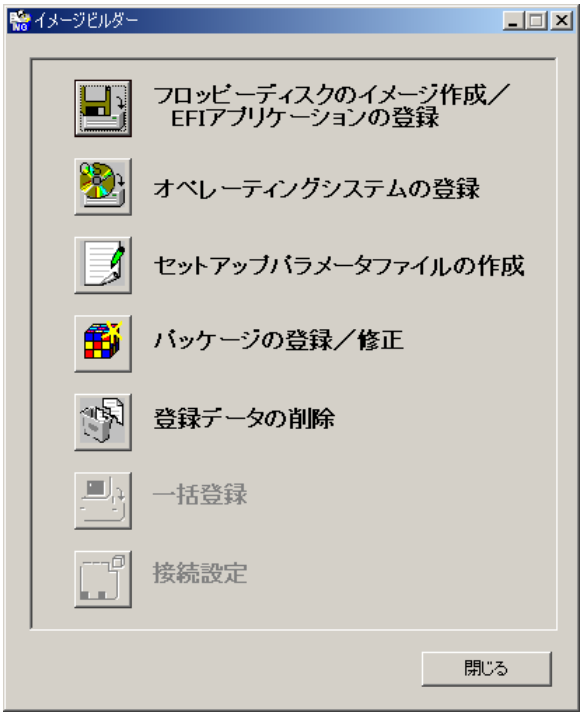
6.1　BIOS/ファームウェアのアップデート

■ イメージの登録方法にはイメージビルダーを使用する方法と登録ツールを使用する方法の 2 種類があります。登録ツールを用いますと AutoRAID の設定用のイメージやオフライン保守ユーティリティのイメージを作成することができます。

■ イメージビルダーを用いてフロッピーディスクのイメージを DPM に登録する方法について説明します。はじめに、BIOS/ファームウェアのアップデートを自動的に実行するフロッピーディスクを用意します。用意ができたら DPM に登録するために管理サーバ側のフロッピーディスクドライブにフロッピーディスクを挿入します。

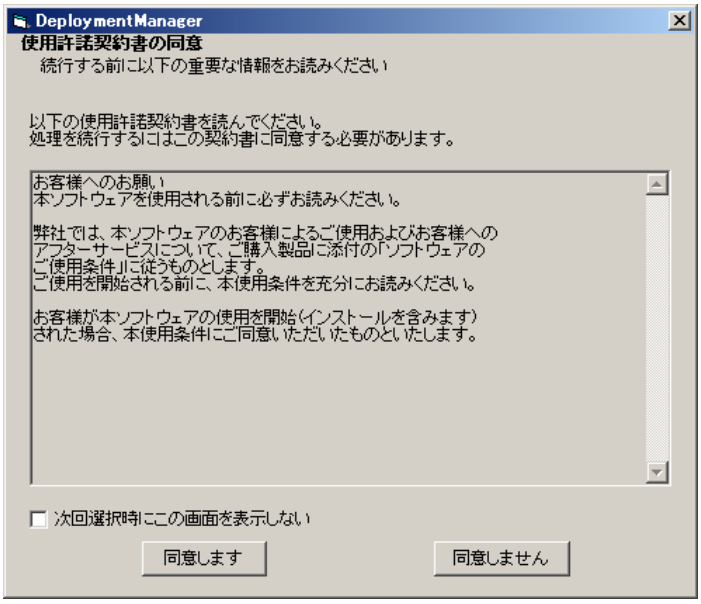
(1) 管理サーバまたはイメージビルダー（リモートコンソール）をインストールしたコンピュータから「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択します。

(2) 「フロッピーディスクのイメージ作成／EFI アプリケーションの登録」をクリックします。



ヒント

イメージビルダーを起動し、メニューを選択すると、初回に「使用許諾契約の同意」が表示されます。内容をよくお読みになり「同意します」をクリックしてください。「同意しません」を選択すると本機能はご使用いただけません。

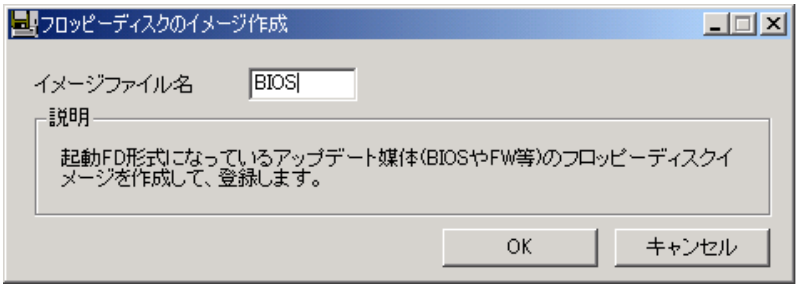


(3) 「登録イメージ作成」画面が表示されますので、「フロッピーディスクのイメージ作成」を選んで「OK」をクリックします。

(4) 「フロッピーディスクのイメージ作成/EFIアプリケーションの登録」画面が表示されたら、例として下図のようにイメージファイル名を入力し、「OK」をクリックします。

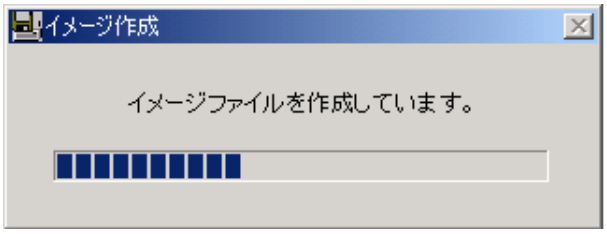
■ イメージファイル名
8 バイト(半角英数字または「.」、「_」、「-」)以内で入力できます。

(例)イメージファイル名を“BIOS”とした場合の「フロッピーディスクのイメージ作成」の登録画面

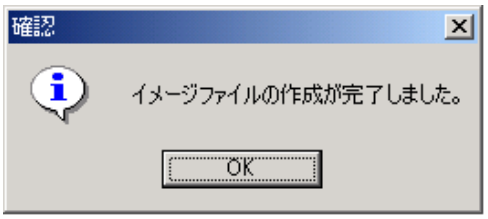


(5) 確認画面が表示されますので、フロッピーディスクが挿入されていることを確認して「OK」をクリックします。

(6) 下図の画面が表示され、DPM への登録が開始されます。



(7) 下図の確認画面が表示されたら、登録完了です。

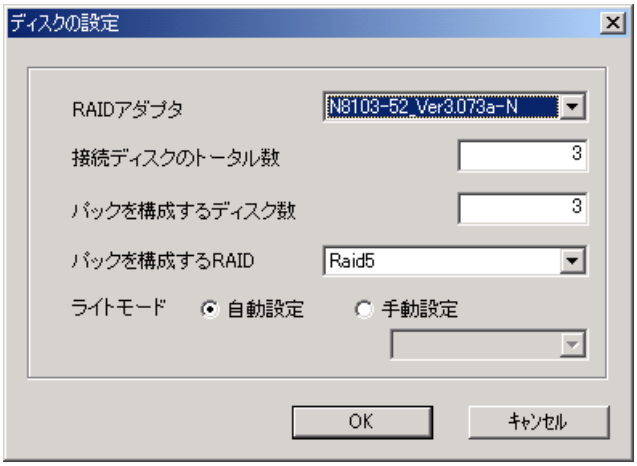


■ 登録ツールを使用したイメージの登録方法について説明します。

■ RAID セットアップイメージファイルの作成方法
ここでは、DPMを使用して、RAID のセットアップを行う場合に作成するRAID セットアップイメージファイルの作成方法を説明します。

(1) AutoRAID モジュールを、DPM に登録する。
登録方法については「ユーザーズガイド 応用編 10. 登録ツール」をご覧ください。

(2) RAID 情報ファイルを作成する。
管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータの「スタート」メニュー→「プログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択しイメージビルダーを起動させます。「セットアップパラメータファイルの作成」→「Windows パラメータファイル」を選択し「セットアップパラメータファイルの作成」画面を表示させます。「オプション」メニューから、「RAID 設定」の「RAID 情報ファイル新規作成」を選択します。



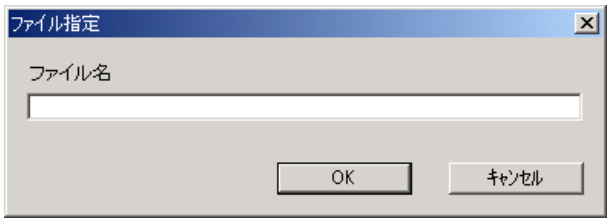
「ディスクの設定」画面が表示されます。

以下の各項目を設定します。

- RAID アダプタ
  設定するディスクアレイコントローラを指定します。(1)で登録したモジュールを選択してください。
- 接続ディスクのトータル数
  接続されているディスクのトータル数を入力します。
- パックを構成するディスク数
  1 つのフィジカルパックを構成する HDD の台数を指定します。
- パックを構成する RAID
  RAID レベルを指定します。
- ライトモード
  書き込みモードを指定します。手動セットアップの場合は以下の 2 つより指定できます。
  「WRITE_THRU」:データの書き込み時、データの HDD への書き込み完了を待って命令終了とする方式
  「WRITE_BACK」:データの書き込み時、キャッシュにデータを書き込んだ時点で命令終了とする方式

注意 ディスクアレイコントローラによりセットアップできる項目、範囲が異なります。詳しくは装置添付のユーザーズガイド、または各コントローラの説明書を参照してください。

(3) 「OK」をクリックします。
「ファイル指定」画面が表示されます。



(4) 保存するファイル名を指定して、「OK」ボタンをクリックします。
RAID 情報ファイルが作成されます。

ヒント

■ ファイル名は 63 バイト以内で入力できます。
ただし、以下の半角文字は入力できません。
「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「|」
■ 作成した RAID 情報ファイルを修正する時は、「RAID 設定」の「RAID 情報ファイル修正」を選択してください。

(5) RAID 設定イメージファイルを作成します。
「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「オプション」メニューから、「RAID 設定」の「RAID 設定イメージファイルの作成」を選択します。
「RAID 情報ファイルの選択」ダイアログボックスボックス画面が表示されます。

(6) (4)で作成した RAID 情報ファイルを選択して、「OK」をクリックします。
「RAID 設定イメージファイルの保存」ダイアログボックスボックス画面が表示されます。

(7) 保存するファイル名を指定して、「OK」をクリックします。
以下のメッセージが表示されます。

(8) 「OK」をクリックします。

以上で、RAID 設定イメージファイルの作成は完了です。

注意

■RAID設定イメージファイルとDeleteAllPartitionを同時にシナリオファイルに設定するときは、必ずDeleteAllPartitionを最初に設定してください。
■登録したRAID設定イメージファイルの順番は正しく指定してください。例えばEXPRESSBUILDER Ver3.008a－Bを使用してRAID1を構築される場合は以下の順番で指定してください。
S3-RAID1_1st
S3-RAID1_2nd
■DPMを使用してRAIDを構築される場合は、新規にOSをインストールしてください。
■DPMを使用してRAIDを構築される場合は、シナリオタイムアウト時間を大きくしてください。シナリオタイムアウト時間の設定方法については、「ユーザーズガイド 応用編 13.2 シナリオタブ」を参照ください。

■ オフライン保守ユーティリティ
DPM を使用して、オフライン保守ユーティリティの登録を行います。

ヒント

オフライン保守ユーティリティとは、通常、Express の保守員が使用するプログラムで、Express サーバの予防保守、障害解析を用途とします。詳細は Express サーバ装置に添付のユーザーズガイドを参照してください。

(1) 登録方法については、「ユーザーズガイド 応用編 10. 登録ツール」をご覧ください。

(2) 登録後、HW 設定タブで、(1)で登録したイメージファイルを指定できるようになります。
イメージファイルは 3 個で 1 セットとなり、必ず 3 個を以下の順番で指定してください。
例)EXPRESSBUILDER Ver3.084a－N を使用した場合

OFFUTL1_Ver3.084a-N_56Wg
OFFUTL2_Ver3.084a-N_56Wg
OFFUTL3_Ver3.084a-N_56Wg

※Ver 以降はモジュールにより異なります。

注意

- AutoRAID、オフライン保守ユーティリティは Express5800 シリーズのみ対応しています。
- オフライン保守ユーティリティと OS の新規インストールを同時に行う場合は、オフライン保守ユーティリティのイメージファイルの前に"DeleteAllPartition"イメージファイルを指定してください。以下の順番で指定してください。

  Delete All Partition
  OFFUTL1_‥‥
  OFFUTL2_‥‥
  OFFUTL3_‥‥

6.2 シナリオファイルの作成

■ BIOS/ファームウェアアップデートのシナリオ作成について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの作成」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) 「HW 設定」タブをクリックし、プルダウンメニューより登録した「フロッピーディスクイメージ」、を選択します。次に「シナリオ名」を入力します。

注意

- DPM ではあらかじめ「DeleteAllPartition」イメージが登録されています。DeleteAllPartition を選択してシナリオを作成し、シナリオ実行を行うと HDD のパーティション情報が削除されて OS が起動できなくなってしまいます。
- DeleteAllPatition とオフライン保守ユーティリティのみを指定したシナリオファイルを実行するとエラーになる場合があります。
  オフライン保守ユーティリティの登録は、Windows OS クリアインストールと同時に行ってください。
- OS クリアインストールをサポートしていないコンピュータに対して DeleteAllPartition.dat を指定したシナリオを実行しないでください。意図しないディスクのパーティション情報が削除される場合があります。
- イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。

(3) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、「オプション」タブをクリックします。
OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」を行うためにはクライアントコンピュータに DPM のサービスをインストールしてください。詳しくは、「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」をご覧ください。

注意

Windows の管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れていてもシャットダウンできません。
- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(4) BIOS/ファームウェアのアップデートと同時に OS のインストール、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルのインストール、アプリケーションのインストール、バックアップ、リストアなどを行う場合は、本編「2. OS クリアインストール」、「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「5. バックアップ/リストア」をご覧になってイメージを登録し「オペレーティングシステム」、「アップデート」、「アプリケーション」、「バックアップ/リストア」のタブから設定を行ってください。

注意

- ■ OS クリアインストールの設定を行わない場合は、BIOS/ファームウェアのアップデートとサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションを同時に行うシナリオは作成できません。
- ■ BIOS/ファームウェアのアップデートと同時にディスク構成チェックシナリオを作成できません。

(5) 設定が終了したらシナリオ名を入力後、「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しく BIOS/ファームウェアのシナリオが追加されます。

ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「|」は使用できません。

6.3 シナリオ実行

■ BIOS/ファームウェアアップデートのシナリオ実行について説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- ■ イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- ■ シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、「シナリオ名」のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、「OK」をクリックします。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作は、コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。また、メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックしても同様の操作が可能です。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に、手動で電源を OFF してください。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と緑色で表示され、BIOS/ファームウェアのアップデートを行います。

(5) メインウィンドウ画面の「表示」メニュー→「シナリオ実行状況」→「シナリオ実行一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“実行完了”と表示されたら、シナリオは完了です。

注意

実行するコンピュータの BIOS のバージョンが同じものを配信すると、BIOS の設定によっては BIOS が終了せずに途中で止まってしまう場合があります。途中で止まってしまうと、DPM ではタイムアウトするまでシナリオ実行エラーになりません。シナリオを実行する際は、配信する BIOS のバージョンにご注意ください。

6.4 EFIアプリケーションの登録

■ EFI アプリケーションの登録について説明します。

ヒント

SE 製品は、本機能をサポートしていません。

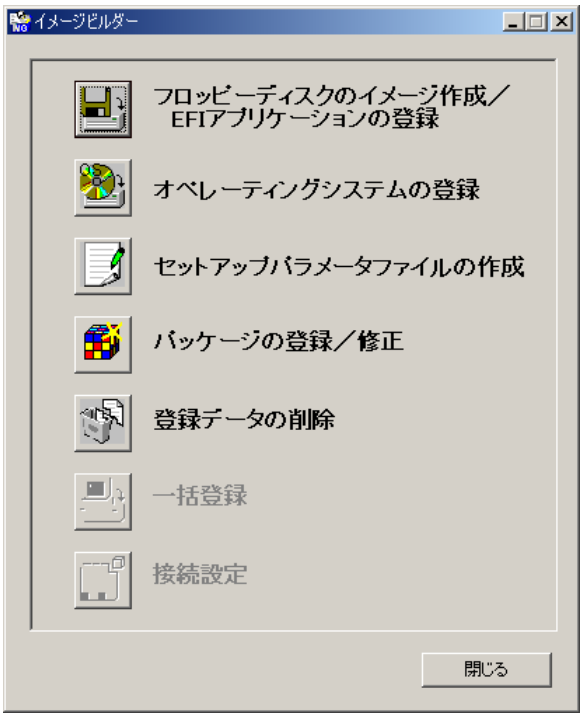
■ イメージビルダーを用いて EFI アプリケーションを DPM に登録します。はじめに、登録する EFI ファイル及び一緒にしようされるファイルを同一フォルダ上に格納して置きます。

重要

イメージビルダーにて登録される EFI アプリケーションは拡張子が efi のファイルのみです、また、この時拡張子「efi」以外のファイルを同時に登録する場合は、登録される efi ファイルとファイル名が同一である必要があります。

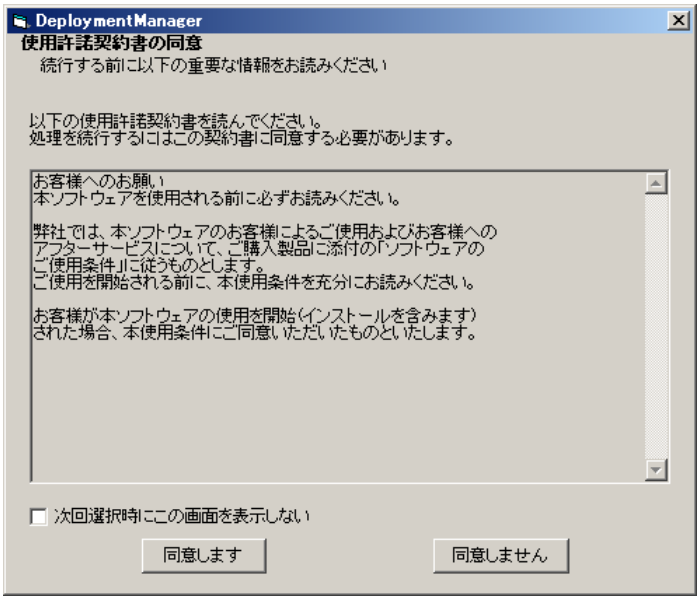
(1) 管理サーバまたはイメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータから「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択して、イメージビルダーを起動します。

(2) 「フロッピーディスクのイメージ作成/EFI アプリケーションの登録」をクリックします。



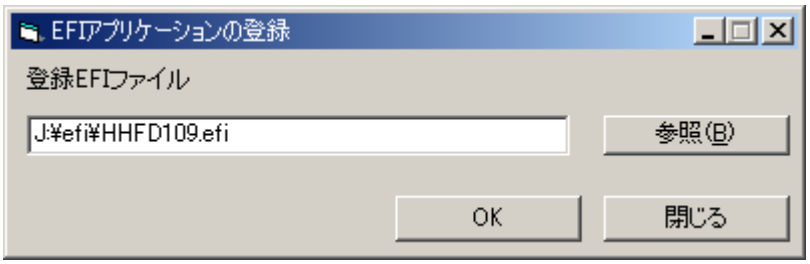
ヒント

イメージビルダーを起動し、メニューを選択すると、初回に「使用許諾契約の同意」が表示されます。内容をよくお読みになり「同意します」をクリックしてください。「同意しません」を選択すると本機能はご使用いただけません。



(3) 「登録イメージ作成」画面が表示されますので、「EFI アプリケーションの登録」を選んで「OK」をクリックします。

(4) 「EFI アプリケーションの登録」画面が表示されますので「参照」をクリックして「登録 EFI ファイル」を選択し「OK」をクリックします。



重要

イメージビルダーにて登録されるファイルは指定した EFI ファイルに対し同一フォルダ内で同一ファイル名(拡張子が異なるもの)全てです。上図の内容を例にとると J:¥efi¥HHFD109.efi が指定されているので J:¥efi¥HHFD109.*が登録対象になります。

(5) 下図の確認画面が表示されたら、登録完了です。

6.5 シナリオファイルの作成

■ EFI アプリケーションのシナリオ作成について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの作成」を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メインウィンドウ画面の アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) 「HW 設定」タブをクリックし、プルダウンメニューより登録した「EFI アプリケーションイメージ」を選択します。次に「シナリオ名」を入力します。

注意

拡張子「efi」のファイルについては IPF ターゲット、拡張子「.dat」のファイルについては IA32 ターゲット向けイメージとなります。同一シナリオ内で混在して登録しないようにしてください。

(3) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、「オプション」タブをクリックします。
OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」を行うためにはクライアントコンピュータに DPM のサービスをインストールしてください。詳しくは「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」をご覧ください。

注意

Windows の管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れていてもシャットダウンできません。
- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(4) EFI アプリケーションと同時に OS のインストール、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルのインストール、アプリケーションのインストール、バックアップ、リストアなどを行う場合は、本編「2. OS クリアインストール」、「3. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションのインストール」、「5. バックアップ/リストア」をご覧になってイメージを登録し「オペレーティングシステム」、「アップデート」、「アプリケーション」、「バックアップ/リストア」のタブから設定を行ってください。

注意

OS クリアインストールの設定を行わない場合は、EFI アプリケーションとサービスパック/HotFix/Linux パッチファイルの適用、アプリケーションを同時に行うシナリオは作成できません。

(5) 設定が終了したらシナリオ名を入力後、「OK」をクリックします。これで、シナリオビューに新しく EFI アプリケーションのシナリオが追加されます。

ヒント

シナリオ名は 58 バイト以内の全角/半角英数字で入力できます。ただし、「.」ピリオド、「,」カンマ、「¥」、「/」、「:」、「;」、「*」、「?」、「″」、「<」、「>」、「|」は使用できません。

6.6 シナリオ実行

■ EFI アプリケーションのアップデートのシナリオ実行について説明します。

(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- ■ イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ割当て」を選択します。
- ■ メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
- ■ シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ＆ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、「シナリオ名」のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、「OK」をクリックします。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、「コンピュータ」メニューから「シナリオ実行」を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作は、コンピュータアイコンを右クリックし、「シナリオ」→「シナリオ実行」を選択しても行えます。また、メインウィンドウ画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックしても同様の操作が可能です。

重要

シナリオを実行する時、コンピュータの電源が ON 状態の時は、シナリオ実行は開始されません。「シナリオファイル」の「オプション」タブで「実行前に再起動の強制実行を行う」を選択しておくか、シナリオ実行前に、手動で電源を OFF してください。

(4) イメージビューの「ステータス」欄に“シナリオ実行中”と緑色で表示され、EFI アプリケーションのアップデートを行います。

(5) メインウィンドウ画面の「表示」メニュー→「シナリオ実行状況」→「シナリオ実行一覧」を選択し、「シナリオ実行一覧」画面を表示します。

(6) 「シナリオ実行一覧」画面の「ステータス」に“実行完了”と表示されたら、シナリオは完了です。

注意

実行するコンピュータの BIOS のバージョンが同じものを配信すると、BIOS の設定によっては BIOS が終了せずに途中で止まってしまう場合があります。途中で止まってしまうと、DPM ではタイムアウトするまでシナリオ実行エラーになりません。シナリオを実行する際は、配信する BIOS のバージョンにご注意ください。

7　シナリオファイル

7.1　シナリオファイルの作成

■　本編の 2、3、5、6 章のシナリオファイル作成を参照してください。

7.2　シナリオファイルの修正

■　シナリオファイルの修正方法について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のシナリオビューから修正するシナリオファイルを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの修正」を選択し、「シナリオファイルの修正」画面を表示させます。シナリオビューで修正するシナリオファイルを選択後、右クリックし「シナリオファイルの修正」を選択しても「シナリオファイル修正」画面を表示できます。

(3) シナリオファイルを修正します。各項目の設定は本編の 2、3、5、6 章のシナリオファイル作成を参照してください。

(4) 「OK」をクリックします。確認メッセージが表示されます。

(5) 修正が完了した後、「OK」をクリックします。修正したシナリオファイルがシナリオビューに登録されます。

注意　一度作成されたシナリオ名は変更できません。変更したい場合は、再度同じシナリオを作成し、新たにシナリオ名を指定してください。

7.3　シナリオファイルの削除

■　シナリオファイルの削除方法について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のシナリオビューから削除するシナリオファイルを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「シナリオファイルの削除」を選択し、「シナリオファイルの削除」画面を表示させます。シナリオビューで削除するシナリオファイルを選択後、右クリックし「シナリオファイルの削除」を選択しても「シナリオファイルの削除」画面を表示できます。

(3) 削除する場合は「OK」をクリックします。シナリオファイルがシナリオビューから削除されます。

7.4　プロパティ

■　シナリオファイルのプロパティについて説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のシナリオビューからプロパティを表示するシナリオファイルを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「シナリオ」メニュー→「プロパティ」を選択し、「シナリオファイルのプロパティ」画面を表示させます。シナリオビューでプロパティを表示するシナリオファイルを選択後、右クリックし「プロパティ」を選択しても「シナリオファイルのプロパティ」画面を表示できます。

(3) プロパティ画面を参照後、画面を閉じるには「閉じる」をクリックします。

8　パッケージWebサーバ

8.1　パッケージWebサーバの設定

■ パッケージ Web サーバの構築・設定については、「ユーザーズガイド 導入編 1.4 パッケージ Web サーバの設定について」を参照してください。

8.2　パッケージWebサーバのご利用について

■ パッケージ Web サーバにパッケージを登録する場合は、PackageDescriber をご利用ください。

■ パッケージ Web サーバに保存したパッケージを管理サーバで利用する際は、管理サーバの「ダウンロード設定」画面でパッケージ Web サーバの登録を行ってください。詳細は、本編 「13. 自動ダウンロード」を参照してください。

9　管理サーバ

9.1　アクセスモード変更

■ 管理サーバに登録している情報を参照のみとするか、更新を行えるようにするかを選択することができます。参照か更新であるかはイメージビューの色、またはメインウィンドウ画面のモードから確認することができます。

重要

管理サーバを操作するには更新権が必要です。ただし一度に更新権を取得できるのは１つのコンソールのみです。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから管理サーバを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「管理サーバ」メニュー→「アクセスモード変更」メニュー→「参照モード」を選択しますと、イメージビューがクリーム色になり、管理サーバに登録されている情報を参照することができます。「更新モード」を選択しますと、イメージビューが白色になり、コンピュータの追加やシナリオ実行などの更新を行うことができます。

9.2　管理サーバへの接続

■ 管理サーバと接続するときに使用します。

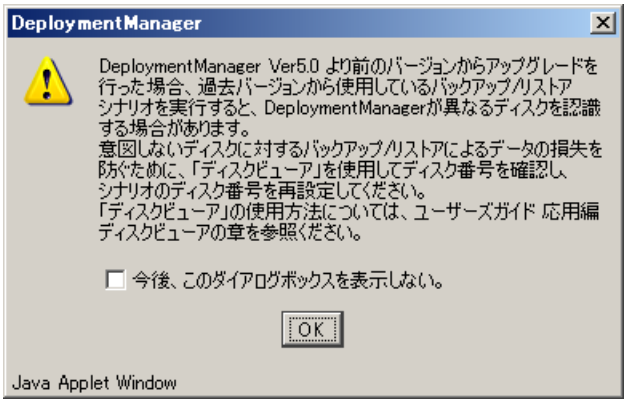
■ ツリービュー上で管理サーバが赤くなったときのみ選択可能となります。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから管理サーバを選択します。

(2) 右クリックし、「管理サーバへの接続」を選択します。

ヒント

■ デフォルトの設定では、管理サーバに接続する度に「おしらせダイアログ」（以下の画面）が表示されます。次回以降に「おしらせダイアログ」を表示したくない場合は、「今後、このダイアログボックスを表示しない。」にチェックを入れて、「OK」ボタンをクリックしてください。



■ DPM のメインウィンドウ画面の「表示」メニュー　→　「おしらせダイアログ表示」からも「おしらせダイアログ」の表示/非表示の切り替えができます。

■ 「お知らせダイアログ」の表示/非表示の切り替えは、Web コンソールに表示している全ての管理サーバに対して有効になります。
また、複数の Web コンソールを使用している場合は、全ての Web コンソールに対して有効になります。

9.3　管理サーバの追加

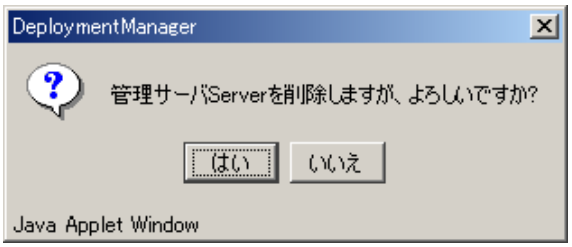
■ 「ユーザーズガイド 導入編 4.1 管理サーバの登録」を参照してください。

9.4　管理サーバの削除

■ 管理サーバの削除について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから削除する管理サーバを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「管理サーバ」メニュー→「管理サーバの削除」を選択し、確認画面を表示させます。ツリービューで削除する管理サーバを選択後、右クリックし「管理サーバの削除」を選択しても確認画面を表示できます。



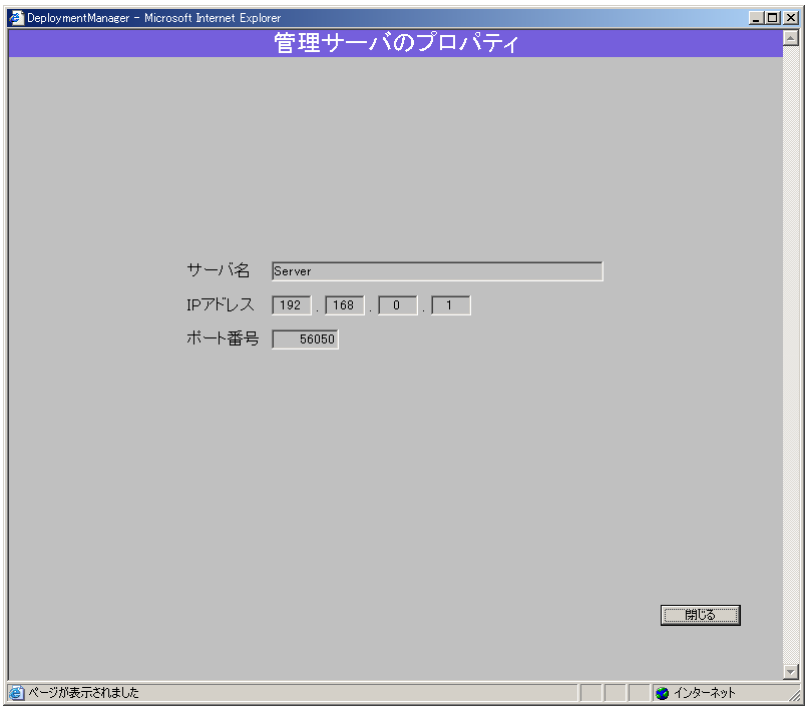
(3) 削除する場合は「はい」をクリックします。管理サーバがツリービューから削除されます。

9.5　プロパティ

■ 管理サーバのプロパティについて説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューからプロパティを表示する管理サーバを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「管理サーバ」メニュー→「プロパティ」を選択し、「管理サーバのプロパティ」画面を表示させます。ツリービューでプロパティを表示する管理サーバを選択後、右クリックし「プロパティ」を選択しても「管理サーバのプロパティ」画面を表示できます。



(3) プロパティ画面を参照後、「管理サーバのプロパティ」画面を閉じる場合は「閉じる」をクリックします。

9.6 コンピュータ情報インポート

■ 「ユーザーズガイド 応用編 1.1 コンピュータ情報インポート」を参照してください。

9.7 コンピュータ情報エクスポート

■ 「ユーザーズガイド 応用編 1.2 コンピュータ情報エクスポート」を参照してください。

9.8 ライセンス登録

ヒント

SSC 向け製品のライセンス登録については、SigmaSystemCenter インストレーションガイドを参照してください。

■ 「ユーザーズガイド 導入編 3.2 ライセンスキーの登録」を参照して DPM のライセンスを登録してください。

10　グループ

10.1　グループの追加

■ 「ユーザーズガイド 導入編 4.2 グループの登録」を参照してください。

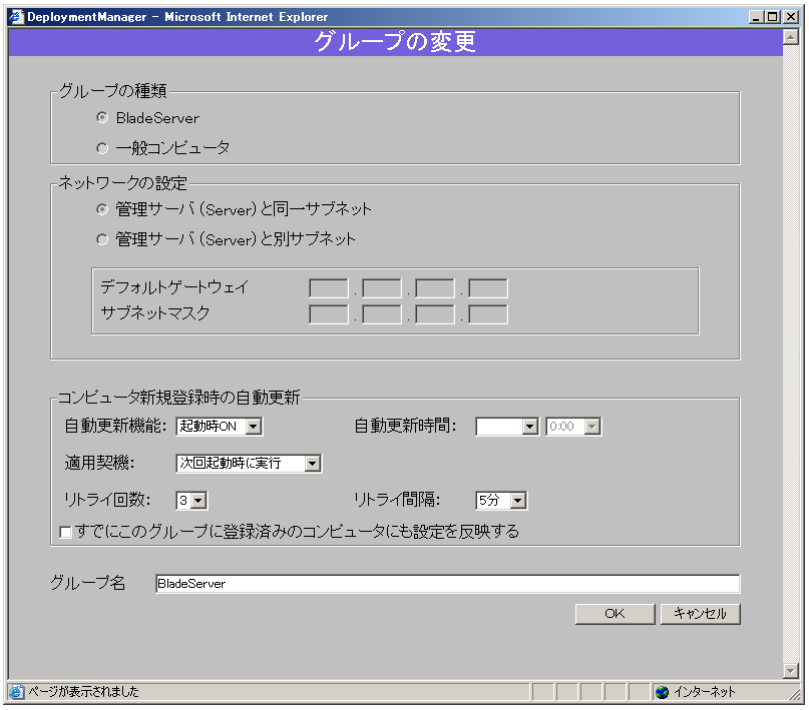
10.2　グループの変更

■ グループの設定内容の変更について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから変更するグループを選択します。

(2) 右クリックし「グループの変更」を選択します。確認画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

(3) 「グループの変更」画面が表示されますので、各設定を変更してください。



ヒント

■ 「グループ名」は、「グループの種類」によって、入力可能な文字が異なります。
「BladeServer」グループの場合は、64 バイト以内の半角英数字と「-」ハイフンと「_」アンダーバーと「.」ピリオドが入力できます。
「一般コンピュータ」グループの場合は、64 バイト以内で入力できます。「;」セミコロンと「#」シャープは入力できません。

■ 「コンピュータ新規登録時の自動更新」の各設定項目については、本編「4.1 自動更新設定」を参照してください。

■ 「すでにこのグループに登録済みのコンピュータにも設定を反映する」にチェックを入れた場合は、グループ下に登録済みのコンピュータに対して設定内容を反映します。

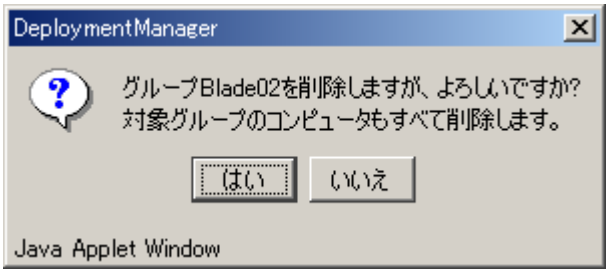
(4) 入力後、変更を行う場合は「OK」をクリックします。

10.3　グループの削除

■　グループの削除方法について説明します。

（1）DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから削除するグループを選択します。

（2）DPM　のメインウィンドウ画面から「グループ」メニュー→「グループの削除」を選択します。確認画面が表示されます。
ツリービューで削除するグループを選択後、右クリックし「グループの削除」を選択してもグループの削除画面を表示できます。



（3）「はい」を選択します。グループがツリービューから削除されます。

10.4　自動登録モードへの切替

■「ユーザーズガイド　導入編　5.　自動登録モードについて」を参照してください。

注意

自動登録モードへの切替を行うと、切替を行ったグループに自動登録機能の対象とならないコンピュータの情報が存在すると、削除されてしまいます。
切替を行うグループに、既にコンピュータが登録されている場合はご注意ください。

10.5　自動登録モードの解除

■「ユーザーズガイド　導入編　5.　自動登録モードについて」を参照してください。

10.6　一括設定

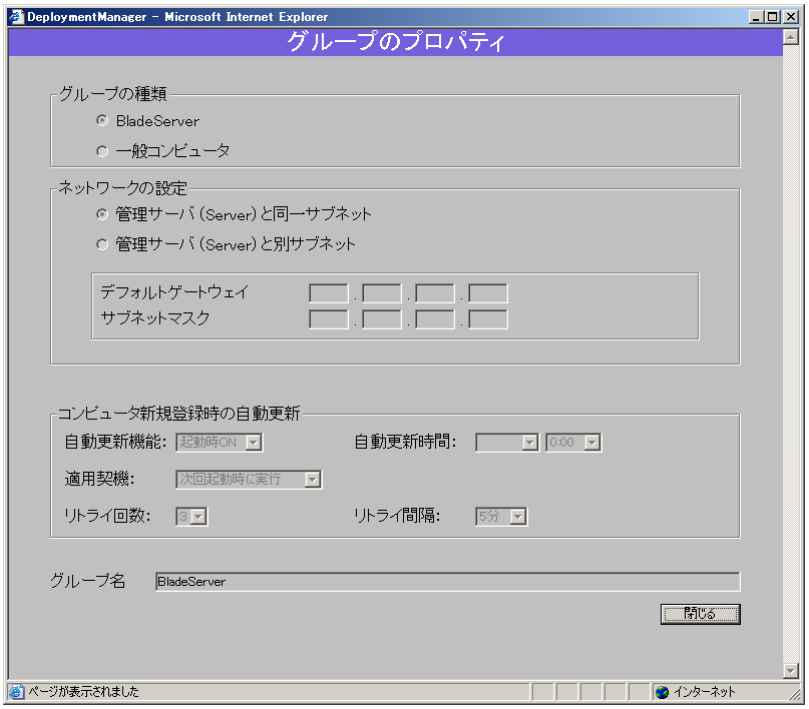
■「ユーザーズガイド　応用編　6.　スケジュール機能の利用」を参照してください。

10.7　プロパティ

■　グループのプロパティについて説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューからプロパティを表示するグループを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「グループ」メニュー→「プロパティ」を選択し、「グループのプロパティ」画面を表示させます。ツリービューでプロパティを表示するグループを選択後、右クリックし「グループのプロパティ」を選択しても「グループのプロパティ」画面を表示できます。



(3) 「グループのプロパティ」画面を閉じる場合は「閉じる」をクリックします。

11　収納ユニット

11.1　収納ユニットの追加

■ 「ユーザーズガイド 導入編 4.3 収納ユニットの登録」を参照してください。

11.2　収納ユニットの削除

■ 収納ユニットの削除について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから削除する収納ユニットを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「収納ユニット」メニュー→「収納ユニットの削除」を選択し、確認画面を表示させます。ツリービューで削除する収納ユニットを選択後、右クリックし「収納ユニットの削除」を選択しても確認画面を表示できます。

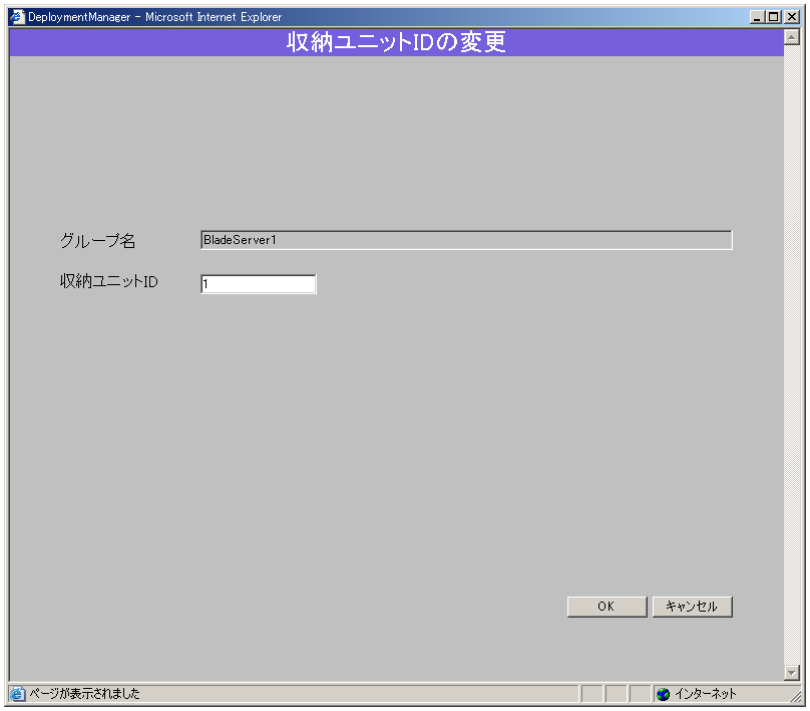
(3) 削除する場合は「はい」をクリックします。収納ユニットがツリービューから削除されます。

11.3　収納ユニットIDの変更

■ 収納ユニット ID の変更について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから収納ユニット ID を変更する収納ユニットを選択します。

(2) 右クリックし「収納ユニット ID の変更」を選択し収納ユニット ID の変更画面を表示します。



(3) 収納ユニット ID を入力します。

(4) 収納ユニット ID を変更する場合は「OK」をクリックします。収納ユニット ID がツリービューから変更されます。

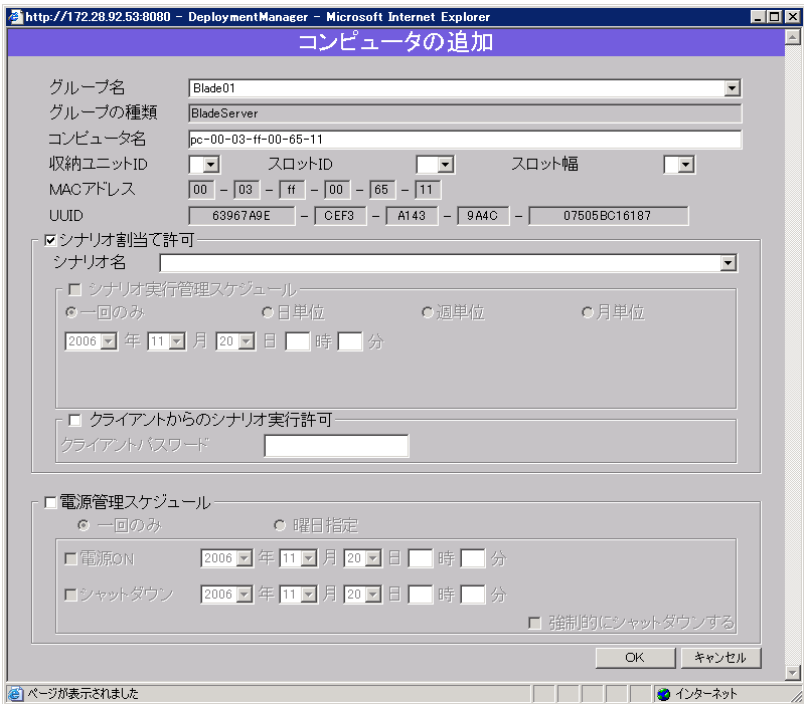
12　コンピュータ

■ コンピュータについて説明します。

12.1　コンピュータの追加

■ コンピュータ追加時の操作は「ユーザーズガイド 導入編 4.4 CPU ブレードの登録」と「ユーザーズガイド 導入編 4.5 一般コンピュータの登録」を参照してください。

■ コンピュータ登録時の各項目は以下のようになります。



各項目の説明

■ グループ名
　コンピュータを追加するグループを選択します。

■ コンピュータ名
　コンピュータ名を指定します。

■ 収納ユニット ID
　ブレード収納ユニットの ID を選択します。

■ スロット ID
　CPU ブレードを挿入したスロット ID を挿入します。

■ スロット幅
　登録する CPU ブレードの幅を入力します。

■ MAC アドレス
　コンピュータの MAC アドレスを入力します。

■ UUID
　管理対象コンピュータの UUID を入力します。
　「xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx」の形式で半角英数字にて入力してください。
　MAC アドレスを入力せず、UUID に全て「0」、または、全て「F」を入力した場合、DPM では入力値がないものとみなします。
　UUID と MAC アドレスのいずれか、または、両方を入力してください。

■ シナリオ割当て許可
　シナリオの割当てを許可する場合、チェックを入れます。チェックを入れると「シナリオ割当て許可」ボックスが入力可能となります。

■ シナリオ名
追加するコンピュータに割当てるシナリオを設定します。

■ シナリオ実行管理スケジュール
「シナリオ名」で指定したシナリオを実行する時間を指定することができます。指定する場合はチェックをいれ、日時を指定してください。
詳しくは、「ユーザーズガイド 応用編 6. スケジュール機能の利用」を参照してください。

■ クライアントからのシナリオ実行許可
クライアントからのシナリオ実行を許可する場合はチェックを入れます。実行方法は「ユーザーズガイド 応用編 2. クライアントからのシナリオ実行」を参照してください。

■ クライアントパスワード
クライアントからシナリオ実行を行うときのパスワードを入力します。パスワードは半角英数字15文字以内で設定できます。

■ 電源管理スケジュール
電源 ON、シャットダウンを行う時間を指定できます。詳細は「ユーザーズガイド 応用編 6. スケジュール機能の利用」を参照してください。

重要

■ すでに管理するコンピュータにOSがインストールされている場合は、必ず登録するコンピュータ名は管理するコンピュータ名と同じ名前にしてください。

■ クライアントサービス for DPM がインストールされている場合は、Web コンソール上で登録したコンピュータ名と実際のコンピュータ名が違っていても、コンピュータを電源 ON したときに自動で Web コンソール上のコンピュータ名を実際のコンピュータ名に変更します。
もし、同じ管理サーバ配下にすでに同じ名前のコンピュータ名が存在した場合は、すでに存在するコンピュータの方の名称が「(コンピュータ名)x」と変更されます(x の箇所には 1 から順に 39999 までの数字が入ります)。

注意

正しいコンピュータ名を入力してください。DPMは、コンピュータの生存確認やシナリオ実行を行うときに登録されたコンピュータ名から名前解決を行い、取得したIPアドレスを使ってTCP/IP通信を行います。詳細は、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。

12.2 コンピュータの削除

■ コンピュータの削除方法について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービューから削除するコンピュータを選択します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面から「コンピュータ」メニュー→「コンピュータの削除」を選択し、確認画面を表示させます。ツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「コンピュータの削除」を選択しても確認画面を表示できます。

(3) コンピュータを削除する場合は「はい」をクリックします。コンピュータがツリービューとイメージビューから削除されます。

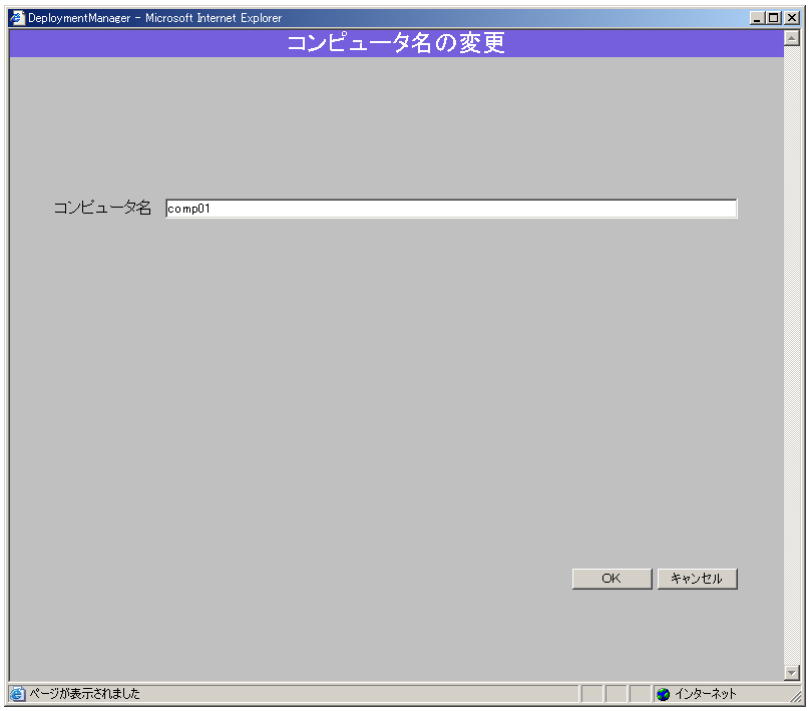
12.3　コンピュータ名変更

■ コンピュータ名変更について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューから名称を変更するコンピュータを選択します。

(2) ツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「コンピュータ名変更」をクリックし、確認画面を表示させます。

(3) 「はい」を選択した後、「コンピュータ名の変更」画面が表示されます。



(4) コンピュータ名を入力します。

重要

- すでに管理するコンピュータに OS がインストールされている場合は、必ず登録するコンピュータ名は管理するコンピュータ名と同じ名前にしてください。
- クライアントサービス for DPM がインストールされている場合は、Web コンソール上で登録したコンピュータ名と実際のコンピュータ名が違っていても、コンピュータを電源 ON したときに自動で Web コンソール上のコンピュータ名を実際のコンピュータ名に変更します。
  もし、同じ管理サーバ配下にすでに同じ名前のコンピュータが存在した場合は、すでに存在するコンピュータの方の名称が「(コンピュータ名)x」と変更されます(x の箇所には 1 から順に 39999 までの数字が入ります)。

注意

■ 正しいコンピュータ名を入力してください。DPMは、コンピュータの生存確認やシナリオ実行を行うときに登録されたコンピュータ名から名前解決を行い、取得したIPアドレスを使ってTCP/IP通信を行います。詳細は、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。

■ メインウィンドウ画面が起動していないときに、シナリオのスケジュールが設定されているコンピュータのコンピュータ名は変更しないでください。シナリオ実行エラーが発生するか、誤ったコンピュータにシナリオが実行される場合があります。ただし、メインウィンドウ画面が起動しているときに変更されたものについては正しくスケジュールは実行されます。

ヒント

コンピュータ名は 63 バイト以内で入力できます。ただし数字のみのコンピュータ名または以下の半角文字は入力できません。

「.」ピリオド、「,」カンマ、「;」セミコロン、「`」、「~」、「%」、「!」、「@」、「#」、「$」、「^」、「&」、「*」、「=」、「+」、「「」、「」」、「{」、「}」、「¥」、「|」、「:」、「'」、「"」、「<」、「>」、「/」、「?」、半角スペース

(5) コンピュータ名を変更する場合は「OK」をクリックします。コンピュータ名がツリービューとイメージビューで変更されます。

12.4 シナリオ割当て

■ 本編の 2、3、5、6 章のシナリオ実行を参照してください。

12.5 シナリオ解除

■ シナリオ解除について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシナリオ割当てを解除するコンピュータを選択します。

(2) DPM のメニューから「コンピュータ」メニュー→「シナリオ解除」を選択し、確認画面を表示させます。ツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「シナリオ」→「シナリオ解除」を選択しても確認画面を表示できます。

(3) シナリオ割当てを解除する場合は「はい」をクリックします。シナリオがツリービューとイメージビューのコンピュータから解除されます。

12.6 シナリオ実行

■ 操作方法については本編の 2、3、5、6 章のシナリオ実行を参照してください。

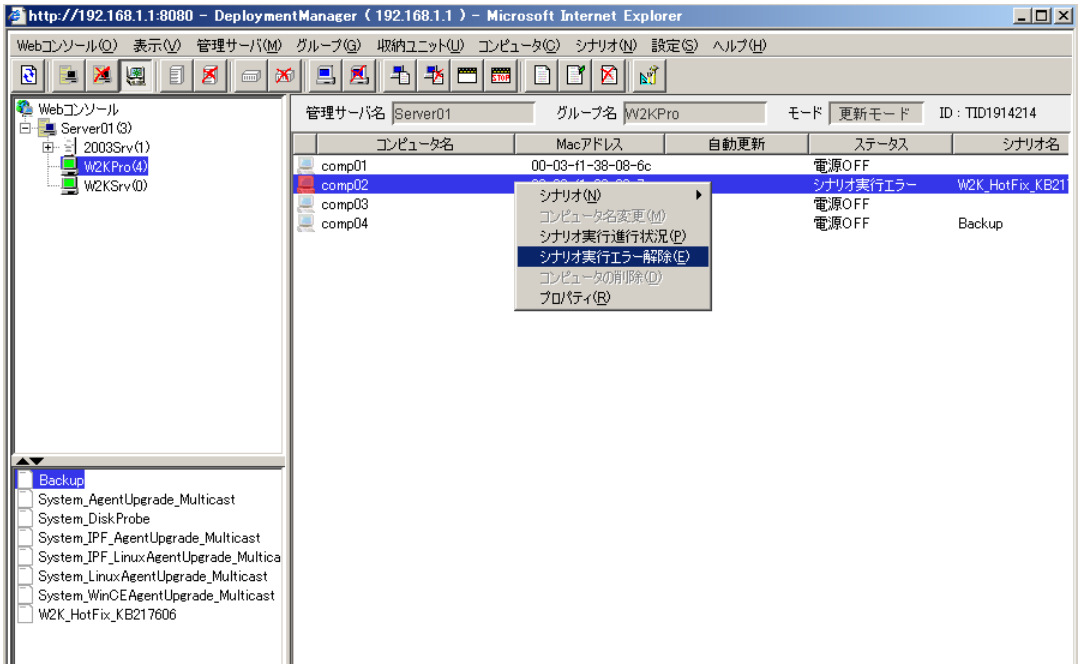
■ シナリオ実行は指定した時間に行うことが可能です。詳細は「ユーザーズガイド 応用編 6. スケジュール機能の利用」を参照してください。

12.7　シナリオ実行エラー解除

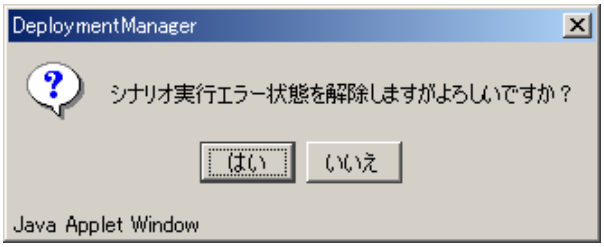
■　シナリオ実行エラー解除について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシナリオ実行エラーのコンピュータを選択します。

(2) コンピュータを右クリックし「シナリオ実行エラー解除」を選択します。



(3) 確認画面が表示されますので「はい」をクリックします。シナリオ実行エラーが解除され、コンピュータのステータスが正常に戻ります。

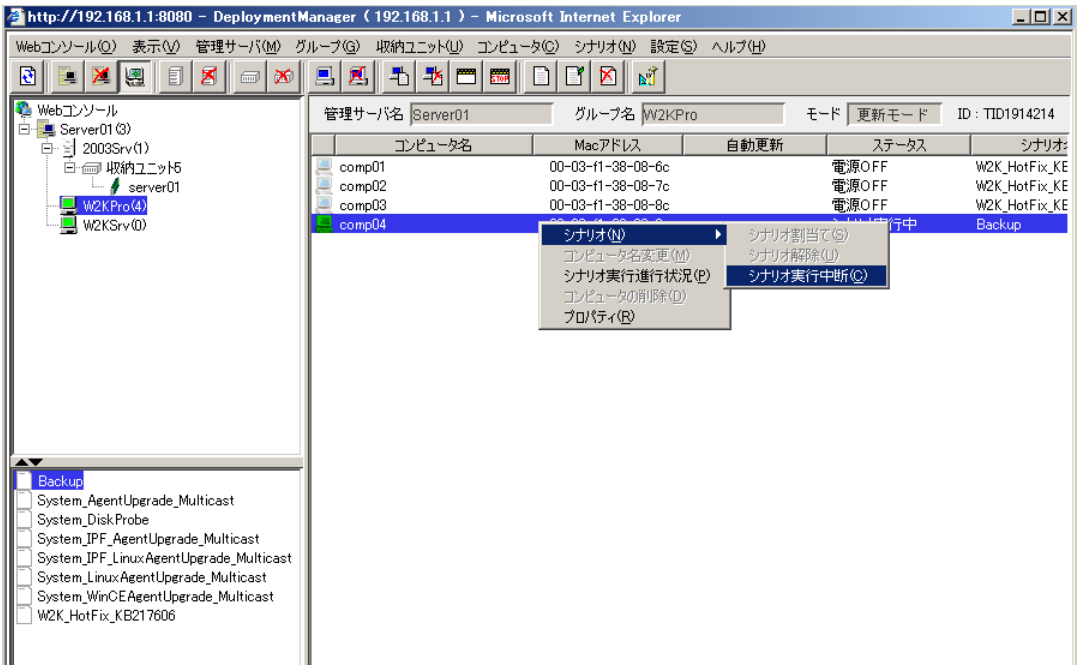


12.8　シナリオ実行中断

■　シナリオ中断について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシナリオ実行中のコンピュータを選択します。

(2) DPM のメニューから「コンピュータ」メニュー→「シナリオ実行中断」を選択します。ツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「シナリオ」→「シナリオ実行中断」でも同様の操作が可能です。



(3) 確認画面が表示されますのでシナリオを中断する場合は「はい」をクリックします。シナリオが中断されコンピュータのステータスが「シナリオ実行中断」になります。

重要 シナリオ中断したシナリオを、再開して実行することはできません。再度、シナリオを実行する時は、シナリオ実行中断処理が終わってから、再度シナリオ実行を行ってください。

注意 「シナリオ実行中断中」のステータスは、中断処理が完了すれば自動的にクリアされ正常に戻ります。実行していたシナリオによっては、中断処理に時間がかかる場合があります。

12.9 シナリオ実行中断解除

■ シナリオ中断解除について説明します。

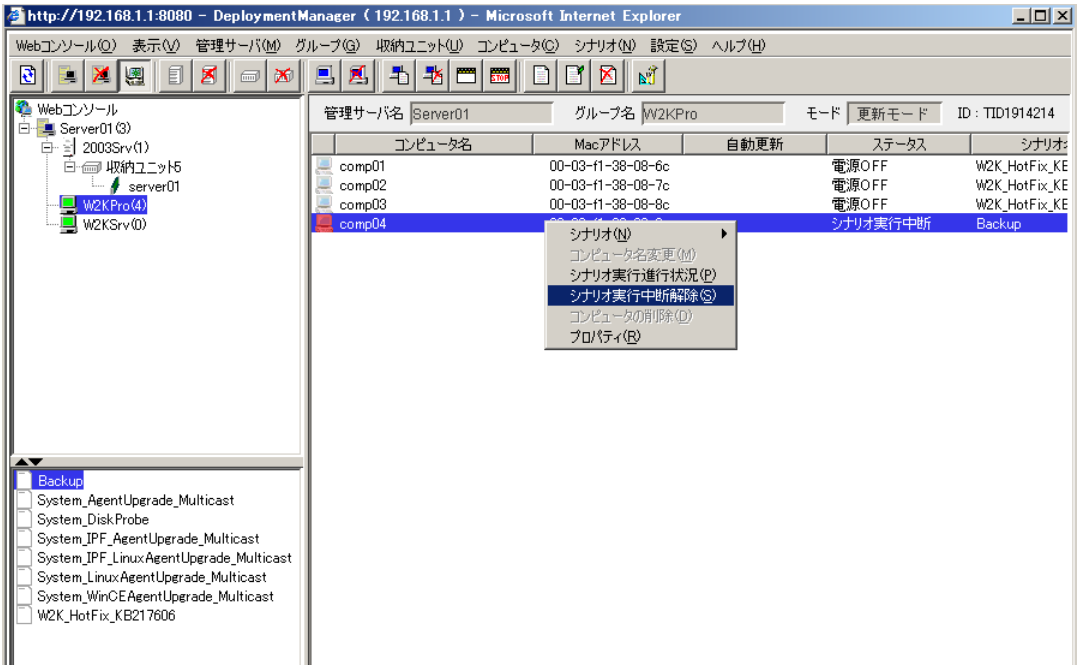
■ 中断処理が完了すると、通常はステータスがクリアされ正常に戻りますので「シナリオ実行中断解除」を行う必要はありません。以下の例に示すような状態である場合に中断解除を行ってください。

例） 1. シナリオ実行中断を行ってから 2 時間以上経過しているが、最新情報の取得をしてもステータスが「シナリオ実行中断中」のままである。
2. 「シナリオ実行中断」を行った後、中断処理中のコンピュータの電源を手動で OFF にした。

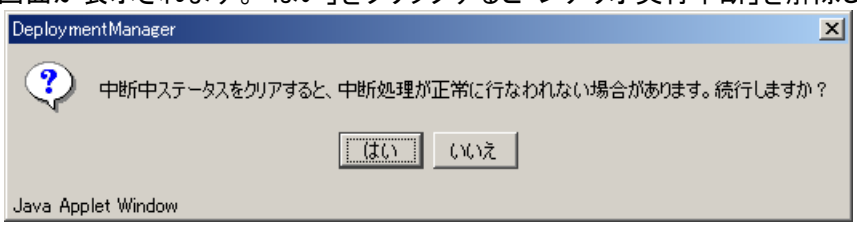
■ シナリオ実行中断解除は以下の手順を行うか、またはコンピュータの再起動で解除されます。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシナリオ実行中断中のコンピュータを選択します。このときイメージビューのコンピュータのステータスは「シナリオ実行中断」となっています。

(2) DPM のツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「シナリオ実行中断解除」を選択します。



(3) 確認画面が表示されます。「はい」をクリックすると「シナリオ実行中断」を解除します。



ヒント

■ 「シナリオ実行中断解除」を選択後も、メインウィンドウ画面のコンピュータのステータスが「シナリオ実行中断」のままの場合は、最新の情報に更新してください。

■ 「シナリオ実行中断解除」を行うと、中断処理が正常に行われず、以下のような状態になる場合があります。この場合はコンピュータの電源を手動で「ON」または「OFF」にしてください。

・コンピュータの電源を「ON」または「OFF」できない。

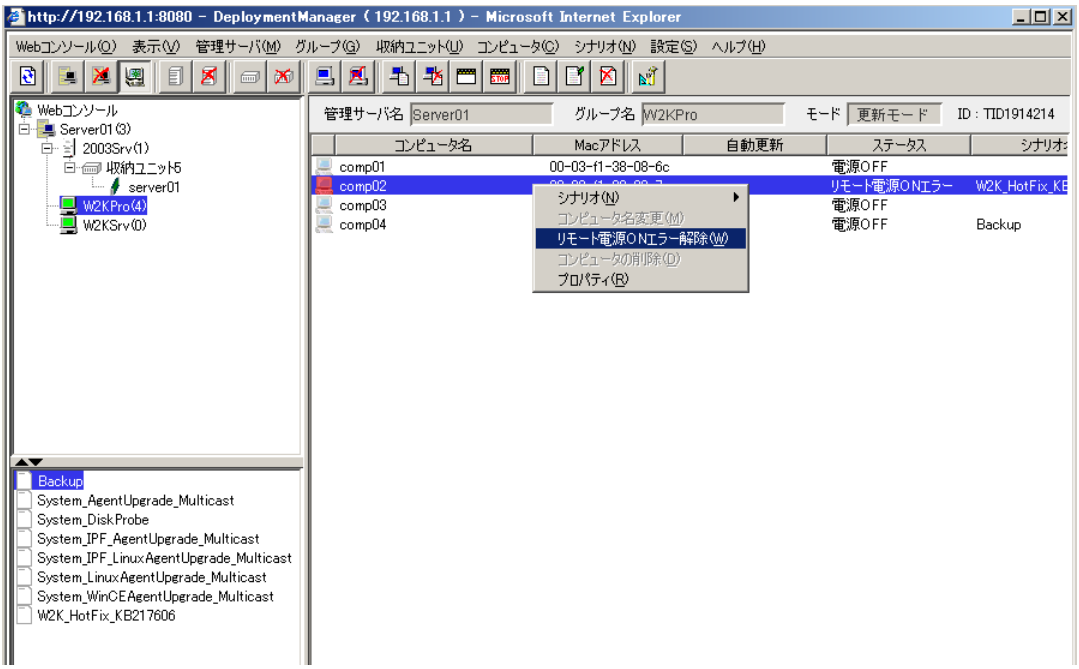
・シナリオ実行できない。

12.10 リモート電源ONエラー解除

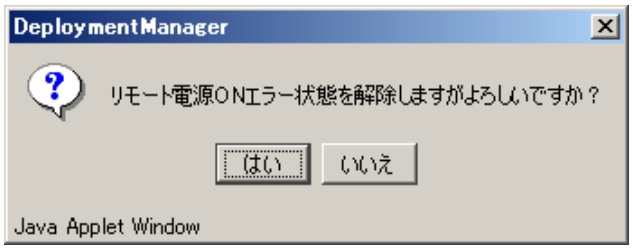
■ リモート電源 ON エラー解除について説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからリモート電源 ON エラーのコンピュータを選択します。このときイメージビューのコンピュータのステータスは「リモート電源 ON エラー」となっています。

(2) DPM のツリービュー又はイメージビューでコンピュータを選択後、右クリックし「リモート電源 ON エラー解除」を選択します。



(3) 確認画面が表示されますので「はい」をクリックします。リモート電源 ON エラーが解除され、コンピュータのステータスが正常に戻ります。



12.11 電源ON

■ 電源 ON について説明します。

■ 電源 ON は指定した時間に行うことが可能です。詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 6. スケジュール機能の利用」を参照してください。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のイメージビューから電源 ON を行うコンピュータのステータスが電源 OFF であることを確認します。

(2) DPMのメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューから電源ONを行うコンピュータを選択します。

(3) 右クリックし「電源 ON」を選択します。コンピュータの電源が ON となり、イメージビューのコンピュータのステータスが電源 ON になります。

ヒント 「電源 ON」を選択後もステータスが電源 OFF のままの場合は最新の情報に更新してください。

12.12 シャットダウン

■ シャットダウンについて説明します。

■ シャットダウンは指定した時間に行うことが可能です。詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 6. スケジュール機能の利用」を参照してください。

重要

■ シャットダウンを行う場合は、コンピュータにクライアントサービス for DPM をインストールしてください。DPM を使用して OS をインストールした場合は自動でインストールされます。詳しくは「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」を参照してください。

■ Windows の管理対象コンピュータの状態が以下の場合は、シャットダウンできません。
- ワークステーションロックによりロックされている状態
- パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- 編集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

デフォルトでパスワードロックがかかる OS の場合は、必ず、パスワードロックを解除してから、シャットダウンしてください。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のイメージビューからシャットダウンを行うコンピュータのステータスが電源 ON であることを確認します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシャットダウンを行うコンピュータを選択します。

(3) 右クリックし「シャットダウン」を選択します。コンピュータがシャットダウンされ、イメージビューのコンピュータのステータスが電源 OFF になります。

ヒント

■ 「シャットダウン」を選択後もステータスが電源 ON のままの場合は最新の情報に更新してください。

■ シャットダウンを行うコンピュータがWindowsの場合、コンピュータ側でカウントダウンダイアログが表示されます。この時に「キャンセル」をクリックするとシャットダウンを中止することができます。コンピュータがLinuxの場合は、コンピュータ側でカウントダウンメッセージが表示されますが、コンソール上で/usr/local/bin/depcancelを実行することによりシャットダウンを中止することができます。ターゲットのOSがSUSE Linux Enterpriseの場合でX-Windowが起動していない環境(ランレベル3)では、リモートアップデートおよびリモートシャットダウン時のメッセージが2行表示されることがありますが、動作に影響はありません。

注意

■ Linux のコンピュータが X Window システムで動作している場合、コンソールが起動していないとシャットダウンを実行されたことが認識できません。

■ DianaScope を使用して管理を行っているクライアントでは、HW の電源が投入された時点で DPM 管理画面上では電源 ON 状態となります。
しかし、その後 OS が起動し、クライアントサービス for DPM が起動してくるまでの間に、シャットダウンコマンドを実行するとエラーとなり、シャットダウンに失敗します。
クライアントの OS が起動完了していることを確認してから、シャットダウンを実行するようご注意ください。

■ Windows Server 2008 for Itanium-based System にシャットダウンを行った場合、「対話型サービスダイアログの検出」ダイアログが表示されますが、所定の時間経過後に自動的にダイアログは消えますのでそのままお待ちください。「メッセージを表示する」を選択し、表示された画面に沿って操作することも可能です。

12.13 強制シャットダウン

■ 強制シャットダウンについて説明します。

■ 強制シャットダウンは、ICMB接続されたコンピュータ、および、DianaScopeで管理されたコンピュータのみ可能です。ICMBについては、「ユーザーズガイド 導入編 5. 自動登録モードについて」を、DianaScopeについては、「ユーザーズガイド 導入編 6. DianaScopeについて」を参照してください。

重要

強制シャットダウンを実行後、DPMからCPUブレードの電源ONができない場合があります。その場合はCPUブレードを手動で電源ONを行ってください。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のイメージビューからシャットダウンを行うコンピュータのステータスが電源 ON であることを確認します。

(2) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからシャットダウンを行うコンピュータを選択します。

(3) 右クリックし「強制シャットダウン」を選択します。コンピュータがシャットダウンされ、イメージビューのコンピュータのステータスが電源OFFになります。

ヒント

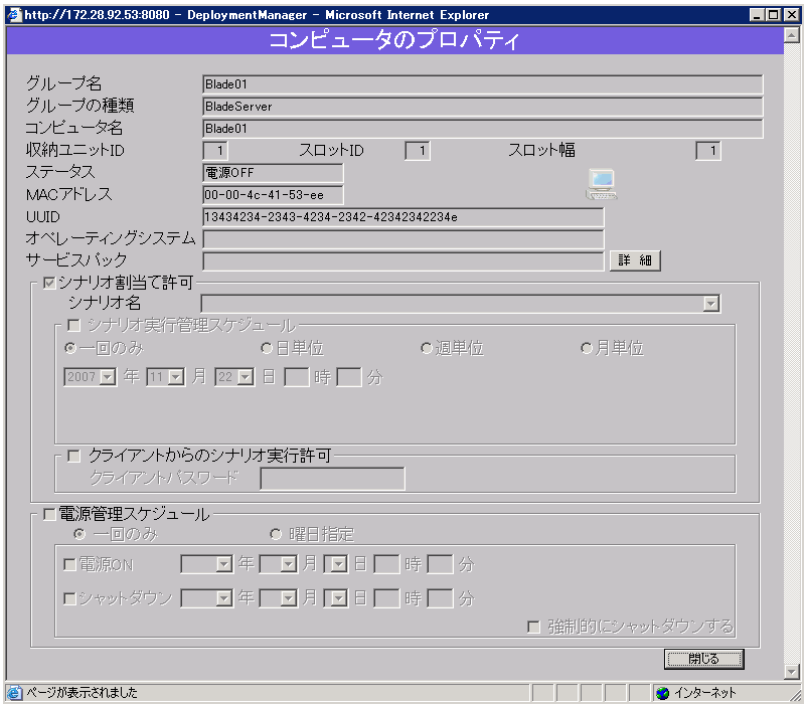
「強制シャットダウン」を選択後もステータスが電源 ON のままの場合は最新の情報に更新してください。

12.14 プロパティ

■ プロパティについて説明します。

(1) DPM のメインウィンドウ画面のツリービュー又はイメージビューからプロパティを表示するコンピュータを選択します。

(2) DPM のメニューの「コンピュータ」→「プロパティ」を選択し、コンピュータのプロパティ画面を表示させます。ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータを選択後、右クリックし「プロパティ」を選択してもコンピュータのプロパティ画面を表示できます。



注意

コンピュータの OS が Windows Server 2003 R2 の場合は以下の値が表示されます。
オペレーティングシステム：Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition
または、Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition
サービスパック：Service Pack 1

ヒント

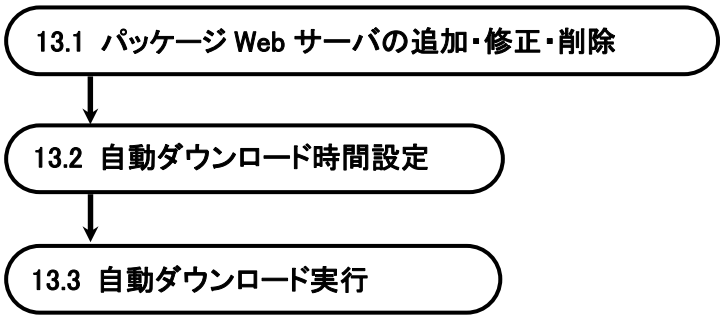
- コンピュータ名は、FQDN のうちホスト名の部分となります。ドメインサフィックスは表示されません。
- 「詳細」をクリックすると「HotFix/アプリケーション一覧」画面が表示され、コンピュータにインストールされた HotFix とアプリケーションを確認できます。ただし本バージョンのクライアントサービス for DPM をインストールしていない場合、または LinuxOS の場合は、アプリケーションの一覧は表示されません。

(3) 「閉じる」を選択しますと画面が閉じます。

13　自動ダウンロード

■ DPM Ver3.8 以前では、複数の管理サーバが設置されている場合、管理サーバごとに配信するパッチを用意しシナリオを作成する必要がありましたが、DPM Ver4.0 から「パッケージ Web サーバ」と「PackageDescriber」を利用することにより 1 度パッケージを作成すれば複数台の管理サーバで同じパッケージを共有することができるようになっています。

■ パッケージ Web サーバから管理サーバにパッケージを定期的にダウンロードする機能について、以下の流れに沿って説明します。



13.1　パッケージWebサーバの追加・修正・削除

■ 管理サーバにパッケージ Web サーバを追加する手順について説明します。

(1) メニューバーの「設定」→「ダウンロード設定」を選択します。「ダウンロード設定」画面が表示されます。

◆各項目の説明◆

■ アドレス

プロキシのアドレスを指定します。プロキシを利用してパッケージ Web サーバをアクセスする場合に、入力します。127 バイト以内で入力できます。

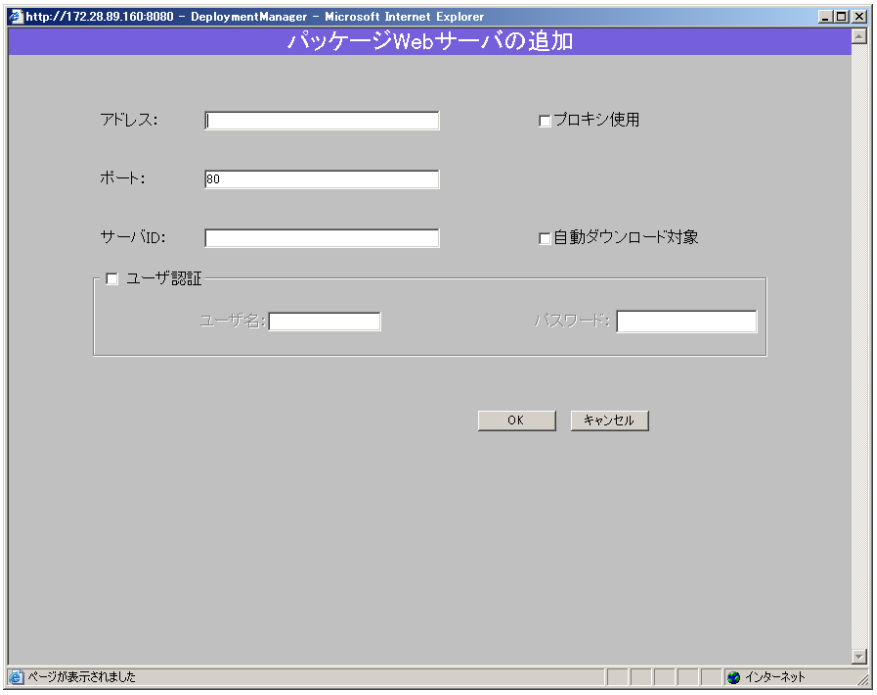
■ ポート
プロキシサーバのポート番号を指定します。0-65535 の範囲内で入力できます。0 を入力した場合は、自動的に既定値の 80 に変更されます。

■ パッケージ Web サーバ
管理サーバに登録したパッケージ Web サーバの一覧です。

以下に各列の説明をいたします。

- サーバアドレス
  パッケージ Web サーバのアドレスを表示します。
- サーバ ID
  サーバの識別子を表示します。パッケージが管理サーバにダウンロードされると、各パッケージの ID 番号の前にサーバ ID を付けます。
- ダウンロード
  パッケージ Web サーバが自動ダウンロード対象であるかどうかを表します。
- プロキシ
  パッケージ Web サーバからパッケージをダウンロードする際に、プロキシを経由するかどうかを表します。
- 最終ダウンロード情報
  ダウンロードの成功、失敗、または最終ダウンロードの時刻を表示します。

(2) ダウンロード設定画面で「追加」ボタンをクリックすると、「パッケージ Web サーバの追加」画面が表示されますので各項目を設定します。



◆各項目の説明◆

■ アドレス
パッケージ Web サーバの URL を指定します。「ユーザーズガイド 導入編 1.4 パッケージ Web サーバの設定について」で指定した Web 共有フォルダを指定してください。255 バイト以内で入力できます。
自動ダウンロード機能は HTTP プロトコルをサポートしています。
例：www.nec.co.jp/PatchWS/

注意 パッケージ Web サーバのアドレスには日本語文字を入力しないでください。

■ ポート

パッケージ Web サーバのポート番号を指定します。0-65535 の範囲内で入力できます。0 を入力した場合は、自動的に既定値の 80 に変更されます。

■ サーバ ID

パッケージ Web サーバの ID を指定します。7 バイト以内で入力できます。
（英文字、数字の 0～9、「-」、「_」以外の文字は入力できません。）

注意 「local」（大小文字区別無し）はあらかじめ予約されているため使用できません。

■ プロキシ使用

パッケージ Web サーバへアクセスする際にプロキシサーバを使用するかどうかを指定します。プロキシサーバの「アドレス」と「ポート」は「ダウンロード設定」画面の上側の「プロキシ」で設定します。

注意 プロキシサーバを使用する場合は、プロキシサーバにユーザー認証は設定しないでください。

■ 自動ダウンロード対象

パッケージ Web サーバからパッケージを定期的にダウンロードする場合にチェックを入れます。
自動ダウンロードを行う場合は必ずチェックを入れてください。

■ ユーザ認証

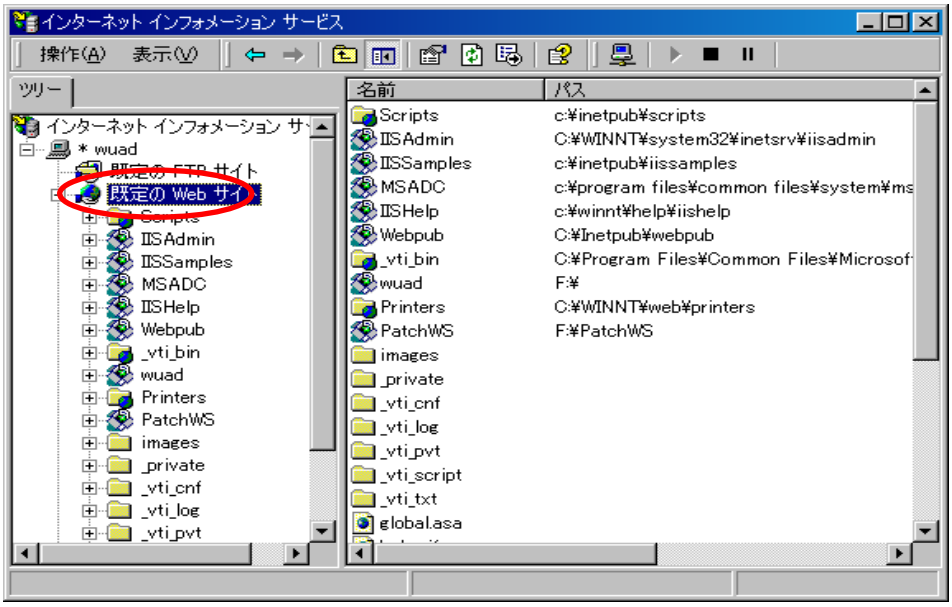
パッケージ Web サーバへのアクセスに、ユーザ認証が必要な場合にチェックを入れます。
「ユーザ認証」にチェックを入れると「ユーザ名」、「パスワード」の入力が有効になり、「ユーザ名」は必須入力項目となります。

注意

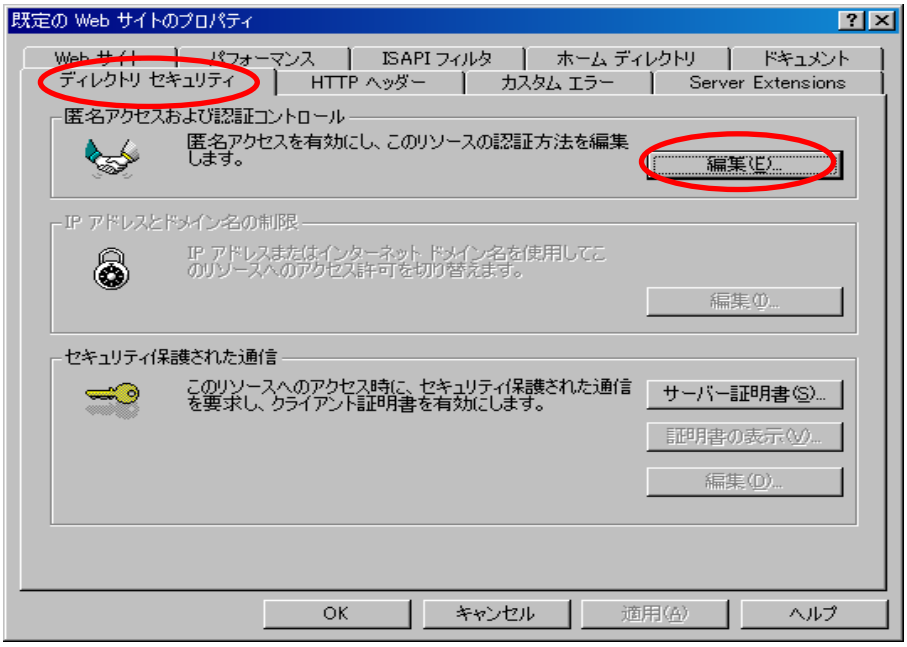
■ IISを利用してHTTPサービスの提供やユーザ認証を設定する場合は、「基本認証」を有効にして「統合認証」を無効にしてください。

・IIS5.0(Windows 2000 Server)/IIS6.0(Windows Server 2003)の場合

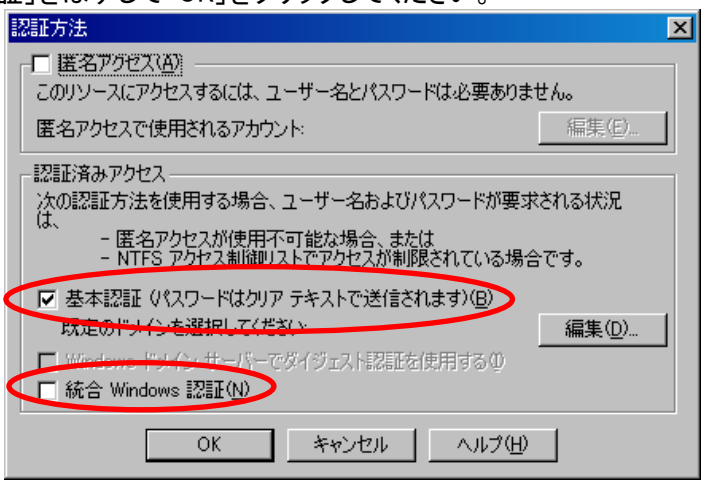
1)「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」からインターネットサービスマネージャを起動し、「既定の Web サイト」を右クリックして「プロパティ」を選択します。



2)「既定の Web サイトのプロパティ」画面が表示されますので、「ディレクトリセキュリティ」タブの「匿名アクセスおよび認証コントロール」の「編集」をクリックします。



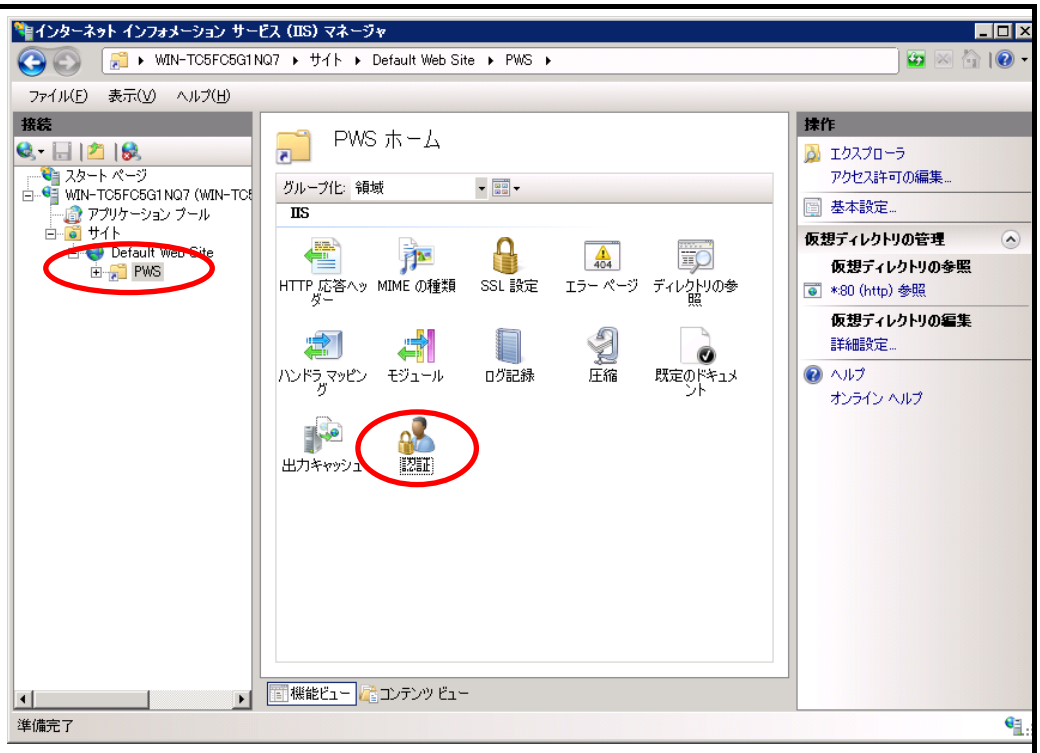
3)「認証方法」画面が表示されますので、「基本認証」にチェックを入れ、「統合 Windows 認証」をはずして「OK」をクリックしてください。



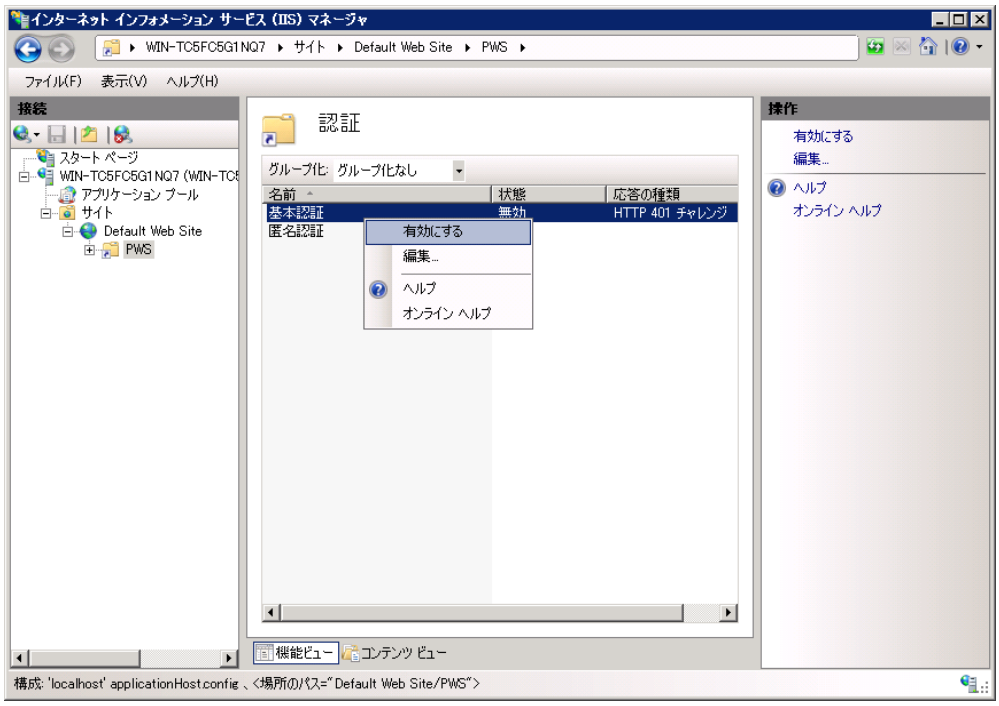
・IIS7.0(Windows Server 2008/Windows Vista)の場合

1)「スタート」メニュー→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。

2)「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が表示されますので、画面左側で、作成した仮想ディレクトリを選択後、画面中央の「認証」をダブルクリックします。



3)画面中央の「基本認証」を右クリックして、「有効にする」を選択します。



■ Tomcatを利用してHTTPサービスを提供する場合は、「ユーザーズガイド 導入編 1.4 パッケージWebサーバの設定について」を参照してください。

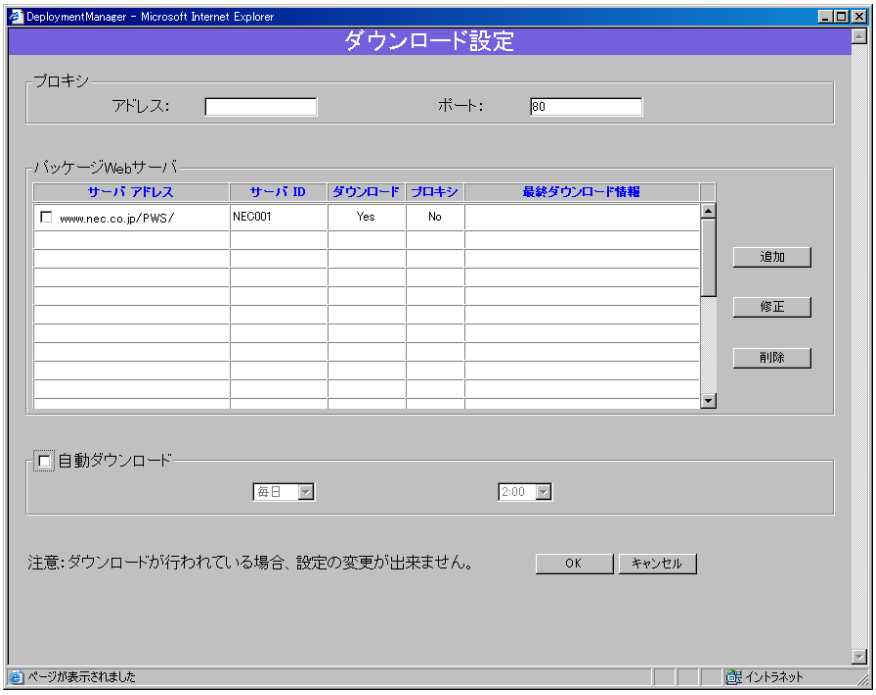
■ Tomcatを利用してHTTPサービスを提供し、ユーザ認証を設定する場合は、「ユーザーズガイド 応用編 14. アクセス制限」を参照してください。

■ ユーザ名

ユーザ認証に必要なユーザ名を63バイト以内で入力してください。ユーザ認証にチェックを入れた場合は、ユーザ名の入力は必須になります。

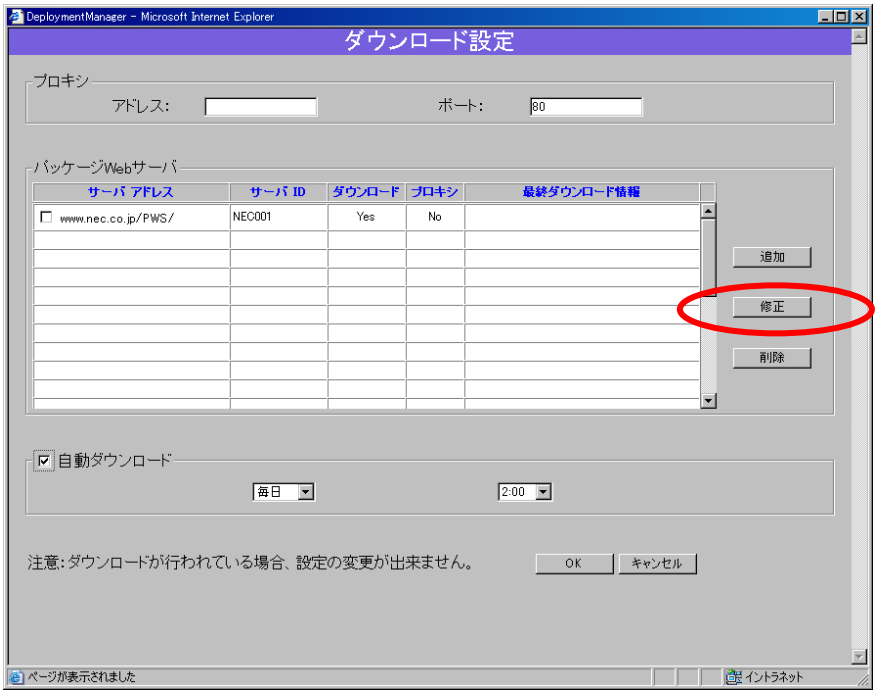
■ パスワード
上記ユーザのパスワードを入力してください。63 バイト以内で入力してください。

(3) 各項目の設定が終わったら「OK」をクリックします。設定した「パッケージ Web サーバ」の内容がダウンロード設定画面に表示されます。

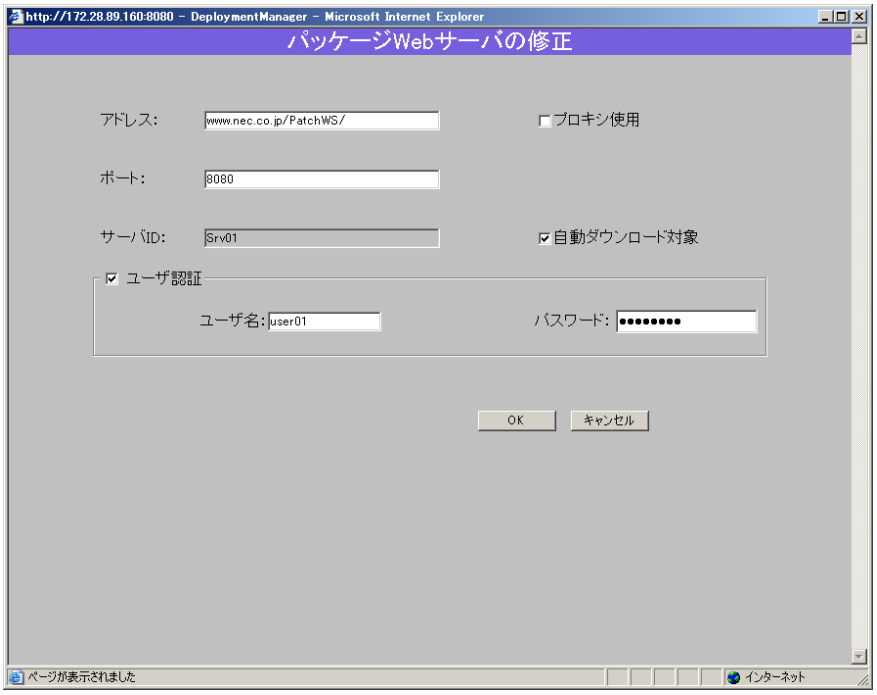


■ パッケージ Web サーバの修正について説明します。

(1) 「パッケージ Web サーバ」の設定を修正する場合は、「ダウンロード設定」画面でサーバアドレス列の修正するパッケージ Web サーバのチェックボックスにチェックを入れ「修正」ボタンをクリックしてください。

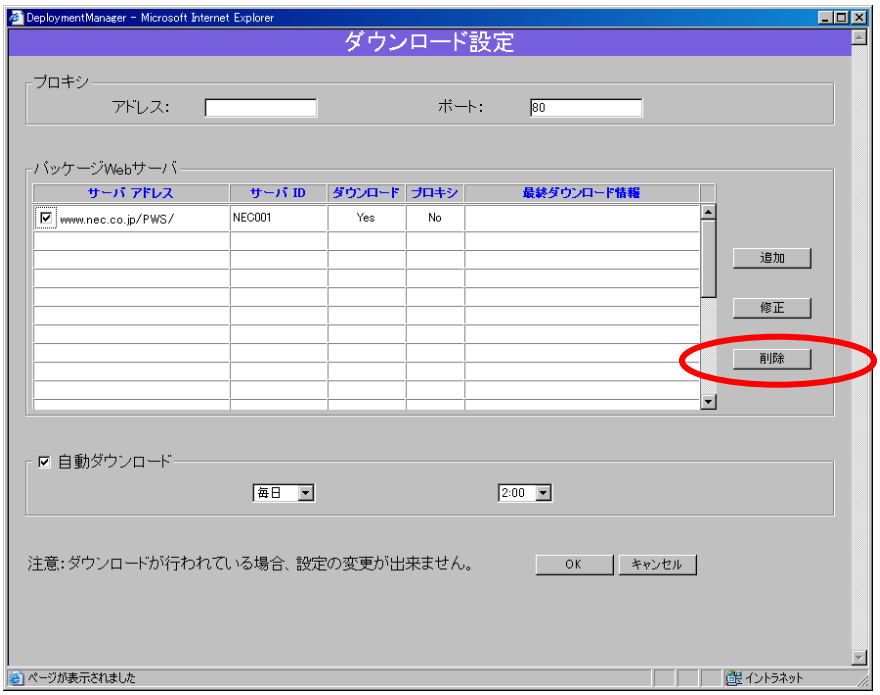


(2) 「パッケージ Web サーバの修正」画面が表示されますので修正を行い「OK」をクリックしてください。「サーバID」は修正できません。

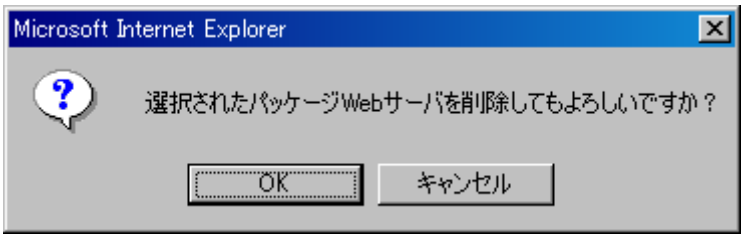


■ パッケージ Web サーバの削除について説明します。

(1) 「パッケージ Web サーバ」の設定を削除する場合は、「ダウンロード設定」画面で削除するパッケージ Web サーバを選択し「削除」ボタンをクリックしてください。



(2) 確認画面が表示されますので「OK」をクリックします。



以上でパッケージ Web サーバの追加・修正・削除は終了です。

13.2　自動ダウンロード時間設定

■　自動ダウンロードするタイミングの設定について説明します。

(1) 「ダウンロード設定」画面の「自動ダウンロード」にチェックを入れ、コンボボックスから日時の設定を行ってください。「OK」をクリックすれば設定完了です。

「自動ダウンロード」チェックボックスの下の左のリストボックスから"毎時"、"毎日"または各曜日を選択し、右のリストボックスで自動ダウンロードが開始される時間を設定してください。

左のリストボックス	右のリストボックス
毎時	0分、10分、20分、30分、40分、50分の10分単位で設定することができます。
毎日	0:00 から 23:00 までの 1 時間単位で設定することができます。
各曜日	0:00 から 23:00 までの 1 時間単位で設定することができます。

注意　管理サーバは次回ダウンロードを行うまで最新のシステム時間を取得しないため、自動ダウンロード設定後に Windows のシステム時間を変更した場合、ダウンロードが予定通り行われない場合があります。

13.3　自動ダウンロード実行

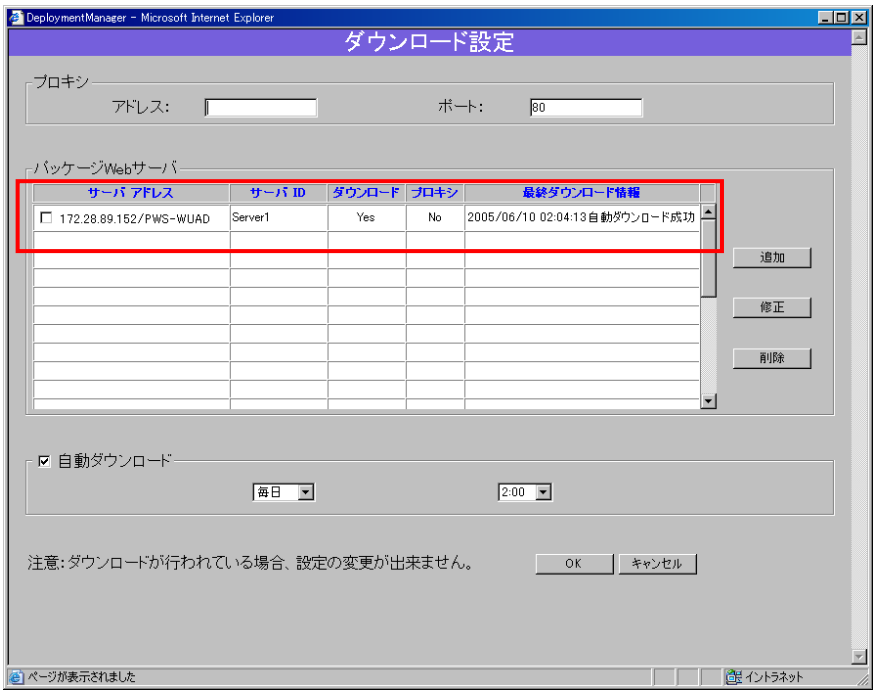
■　管理サーバは、設定された時刻になると自動的にパッケージWebサーバを参照し、更新されたパッケージのダウンロードを行います。

ヒント　自動ダウンロードの実行中に「ダウンロード設定」を行うことはできません。

■ ダウンロード結果の確認

(1) メニューバーの「設定」→「詳細設定」→「全般」タブで設定した「共有フォルダ」のパスを確認してください。（デフォルトでは C:¥Deploy に設定されています。）パッケージ Web サーバからダウンロードされたパッケージは「共有フォルダ」配下に格納されます。

(2) ダウンロード完了後、ダウンロード設定画面の「最終ダウンロード情報」からダウンロード結果を確認できます。



注意

■ イメージビルダーのパッケージ削除機能を利用することにより、自動ダウンロードより登録されたパッケージを一時的に削除できます。
ただし、パッケージ Web サーバから当該パッケージを削除しない場合は、設定した自動ダウンロード時間になると再度ダウンロードされます。

■ パッケージ Web サーバからダウンロードされたパッケージを削除したい場合は、PackageDescriber でパッケージ Web サーバから削除してください。次回自動ダウンロード実行時に管理サーバのパッケージは自動的に削除されます。

ヒント

パッケージ Web サーバを複数登録している場合、ダウンロード設定画面で追加した順に自動ダウンロードが行われます。

例）PWS01（パッケージ Web サーバ） → 最初に設定 → 最初にダウンロード
PWS02（パッケージ Web サーバ） → 2 番目に設定 → 2 番目にダウンロード
PWS03（パッケージ Web サーバ） → 3 番目に設定 → 3 番目にダウンロード

また、ダウンロードされたパッケージは「共有フォルダ」配下に格納される際、フォルダ名の最初に「パッケージ Web サーバ」ID が付き、どの「パッケージ Web サーバ」からダウンロードされたか判別することができます。

14　ライセンスキー

ヒント

SSC 向け製品のライセンス登録、削除については、SigmaSystemCenter　インストレーションガイドを参照してください。

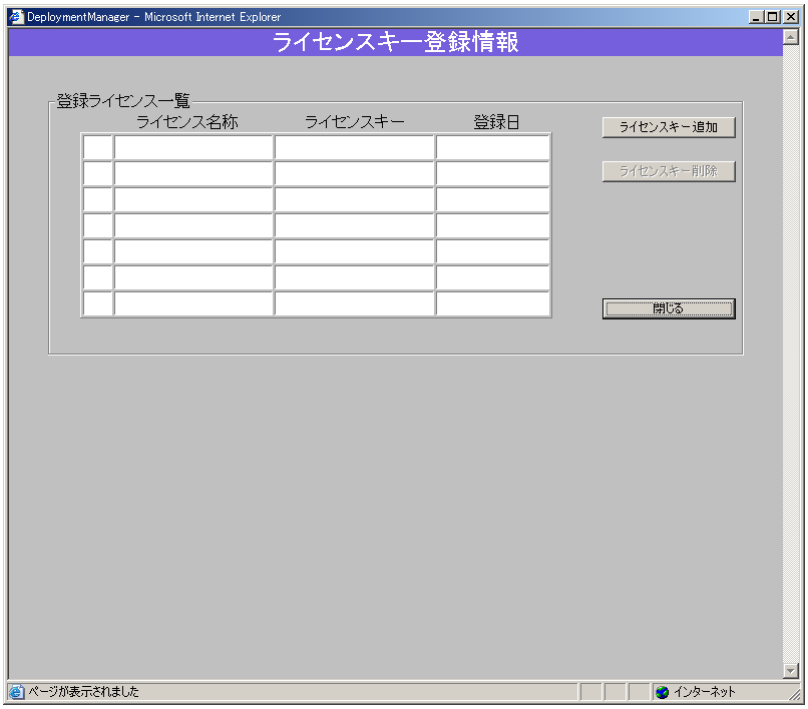
14.1　ライセンスキーの登録

■「ユーザーズガイド　導入編　3.2　ライセンスキーの登録」を参照してください。

14.2　ライセンスキーの削除

■　ライセンスキーの削除について説明します。

(1) DPM　のメインウィンドウ画面から「設定」メニュー→「ライセンス情報」を選択します。「ライセンスキー登録情報」画面が表示されます。



(2) 削除するライセンスキーの左のチェックボックスを選択し「ライセンスキー削除」をクリックします。確認画面が表示されます。

(3) ライセンスキーを削除する場合は「OK」をクリックしてください。「ライセンスキー登録情報」画面からライセンスキーが削除されます。

(4) 複数のライセンスキーを削除する場合は、(2)～(3)までの処理をライセンスキーの数だけ繰り返し行ってください。

15　アイコンの説明

■ イメージビューに表示されるコンピュータのアイコンはそれぞれ以下のコンピュータの状態を表します。

アイコン	状態
	電源 ON
	電源 OFF、ステータス不明
	シナリオ実行中
	エラー

■ ツリービューに表示される管理サーバのアイコンはそれぞれ以下の管理サーバの状態を表します。

アイコン	状態
	通常の状態
	管理サーバが Web サーバと接続していない状態
	Web サーバーとの接続でエラー発生
	使用期間終了

■ ツリービューに表示されるグループ(BladeServer)のアイコンはそれぞれ以下の BladeServer グループの状態状態を表します。

アイコン	状態
	手動登録の BladeServer グループ
	自動登録の BladeServer グループ

16　バージョン情報

■ 使用しているDPMのバージョンは、「バージョン情報」画面から確認できます。「バージョン情報」画面はDPMのメインウィンドウ画面の「ヘルプ」メニュー→「バージョン情報」を選択しますと表示されます。

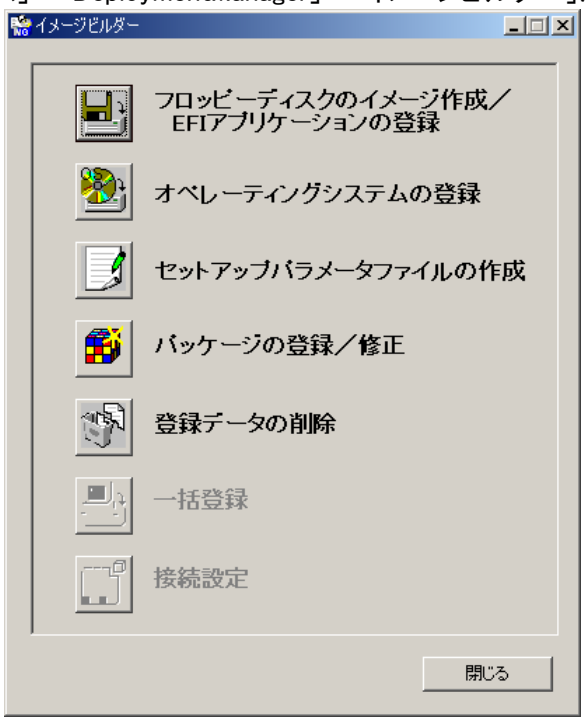
ヒント

画面の上部には Web サーバのバージョン情報が表示されます。
画面の中部には使用しているWebコンソールのブラウザ、Java Plug-in、Java VM Vendor、が表示されます。

17　イメージビルダー

■　DPM を使用して Windows OS のインストール、サービスパック、または Linux のアプリケーション、パッチなどのインストールを行う場合、パッケージファイルなどをあらかじめ DPM に登録してください。登録したファイルはパッケージファイルと呼び、登録にはイメージビルダーというツールを使用します。

■　イメージビルダーを使用できるコンピュータは以下の 2 種類です。両方とも「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」から起動することができます。



■　管理サーバ for DPM をインストールしたコンピュータ
作成したパッケージは管理サーバの共有フォルダに格納されます。

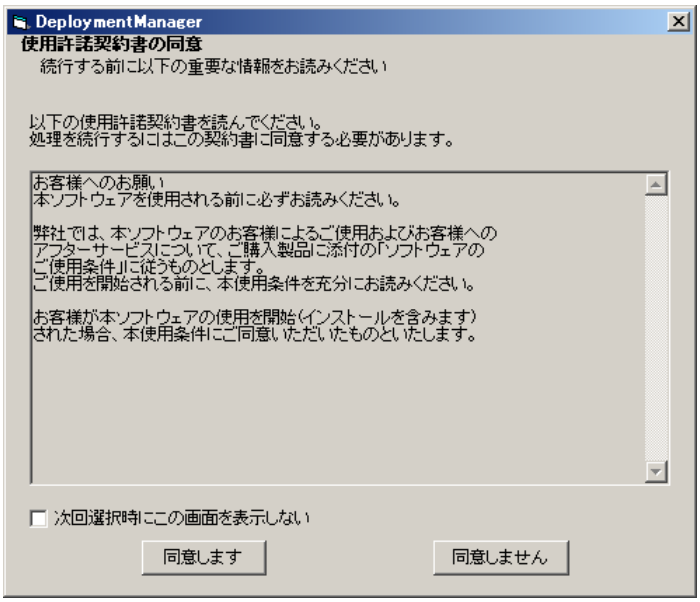
■　イメージビルダー（リモートコンソール）をインストールしたコンピュータ
イメージビルダー（リモートコンソール）をインストールしたコンピュータ上にパッケージファイルを一時的に格納し、その後管理サーバ上の共有フォルダに転送します。詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 11. イメージビルダー（リモートコンソール）」を参照してください。

注意

■　イメージファイルの登録・削除とシナリオの作成・編集は同時には行えません。
シナリオ作成・編集画面を開いている時はイメージビルダーを操作しないでください。
■　イメージビルダーでは実行中のシナリオに設定されているパッケージや、自動更新で使用中のパッケージの修正、削除を行うことはできません。
パッケージが使用中の場合は、しばらく待って処理が完了してからパッケージの修正、削除を行ってください。
■　Windows のリモートデスクトップ接続でイメージビルダーを使用しないでください。

ヒント

イメージビルダーを起動し、メニューを選択すると、初回に「使用許諾契約書の同意」が表示されます。内容をよくお読みになり「同意します」をクリックしてください。「同意しません」をクリックすると本機能はご使用いただけません。



17.1　フロッピーディスクのイメージ作成／EFIアプリケーションの登録

■ 起動フロッピーディスク形式になっているアップデート媒体（BIOS　やファームウェア等）のフロッピーディスクイメージを作成して登録します。登録方法は、本編「6.1 BIOS/ファームウェアのアップデート」を参照してください。

■ EFI アプリケーションファイルを登録します。登録方法は、本編「6.4　EFI アプリケーションの登録」を参照してください。

17.2　オペレーティングシステムの登録

■ OS をリモートインストールする場合は、あらかじめ OS ファイルを登録します。登録方法は、本編「2. OS クリアインストール」を参照してください。

注意

登録時のテキストボックスにメモ帳などからコピーして貼り付けた場合、コピーの方法により末尾に改行コードが含まれる場合があります。この場合は該当の改行が文字化けして表示されますので、文字化けの箇所を削除してください。文字化けの箇所を削除せずに登録すると、改行コードは半角スペースに置換されて登録されます。

17.3　セットアップパラメータファイルの作成

■ セットアップパラメータファイルは、Windows OS、Linux OS のリモートインストールとディスク複製のために使用するファイルです。OS をリモートインストールする時は、必ず作成してください。登録方法は、本編「2.1.2 セットアップパラメータの作成」、「2.2.4　Linux　インストールパラメータファイルの作成」、「ユーザーズガイド　応用編 3.2　ディスク複製用情報ファイル(パラメータファイル)大量作成アシスト」を参照してください。

17.4　パッケージの登録/修正

■ パッケージの登録/修正をします。以下の手順で行います。

重要

- Express5800シリーズ用のRURの登録を行う場合は、RURのインストール手順書をよくお読みになってから登録を行ってください。
- Windows CE(NEC US110)の場合は、本章の説明に加えて、専用の手順が必要です。「ユーザーズガイド 応用編 付録 5. Windows CE(NEC US110 専用)のパッケージの作成方法」を合わせて参照してください。
- パッケージの作成/修正の際に以下の設定を含める場合は PackageDescriber を使用してください。各設定項目の説明は、「ユーザーズガイド PackageDescriber 編」を参照ください。
  - ・「基本」タブの MS 番号に「-」半角ハイフン、「.」半角ピリオド、「_」アンダーバーを指定する場合
  - ・「実行設定」タブの「実行ファイル」に拡張子「msp」、「msu」を含むファイルを指定する場合
  - ・「依存情報」タブ「ファイル条件」のファイルパスにレジストリに記載されたパスを指定する場合
  - ・「依存情報」タブの「ファイル条件」や「レジストリ条件」に、以下を指定する場合
    - -存在する(バージョンより小さい)
    - -存在する(バージョン以下)
    - -存在する(バージョンより大きい)
    - -存在する(バージョン以上)
  - ・「依存情報」タブの「条件指定」で「and」または、「or」を使用した複数条件を指定する場合
  - ・「識別情報」タブのファイルパスにレジストリに記載されたパスを指定する場合

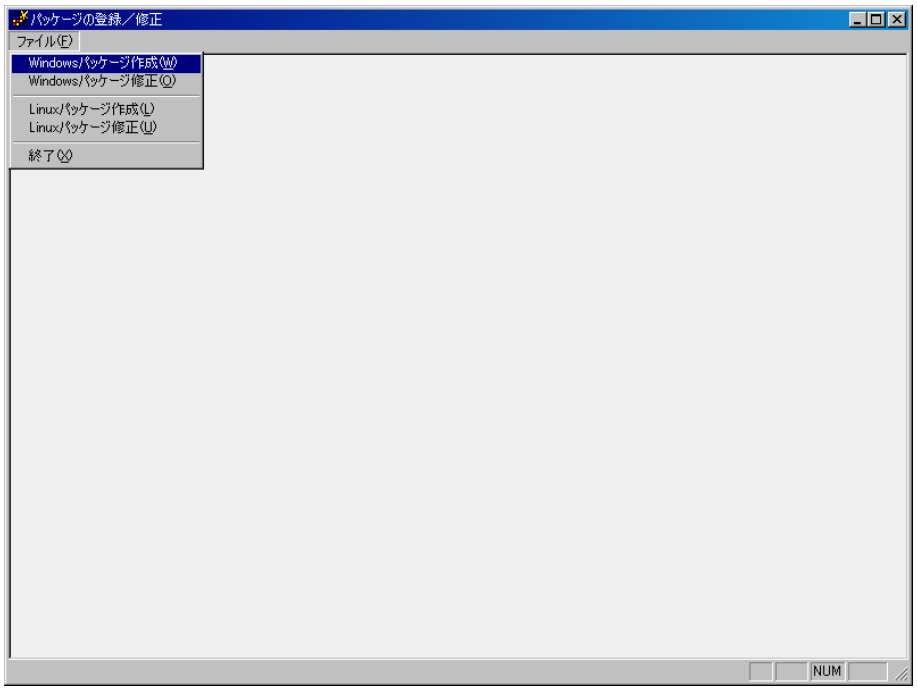
注意

DPM では JIS2004 はサポートしておりません。

(1) イメージビルダーを使用できるコンピュータで、「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択しイメージビルダーを起動します。

(2) 「パッケージの登録/修正」をクリックします。「パッケージの登録/修正」画面が表示されます。

(3) 「パッケージの登録/修正」画面の「ファイル」をクリックすると、以下のメニューが表示されます。



Windows パッケージを作成する場合、「Windows パッケージ作成」をクリックします。
作成した Windows パッケージを修正する場合、「Windows パッケージ修正」をクリックします。

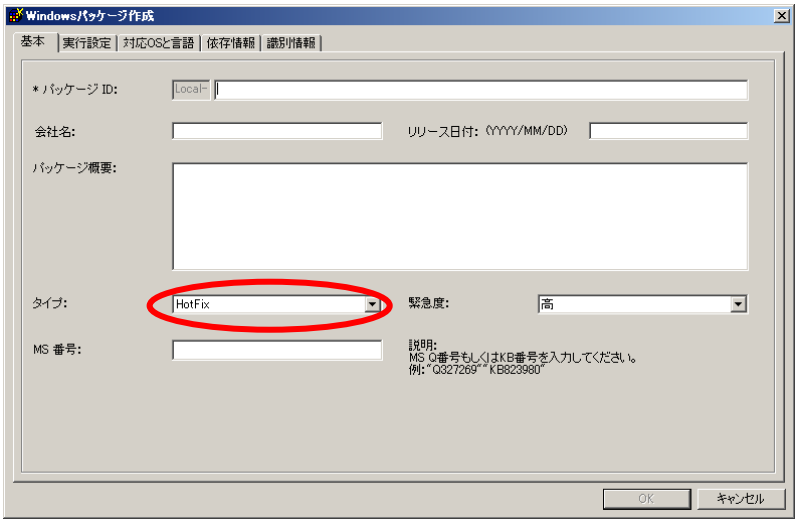
Linux パッケージを作成する場合、「Linux パッケージ作成」をクリックします。
作成した Linux パッケージを修正する場合、「Linux パッケージ修正」をクリックします。

17.4.1　Windowsパッケージ作成

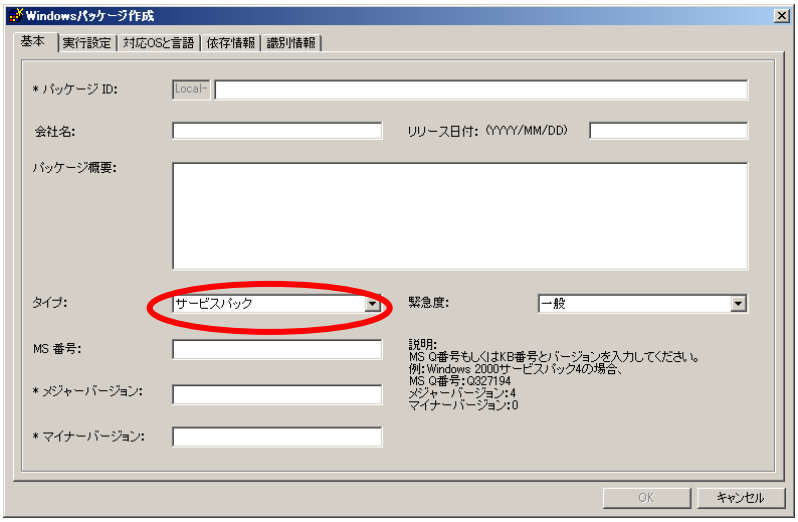
■ 「基本」タブ

(1) 「Windows パッケージ作成」画面の「基本」タブで各項目を入力します。

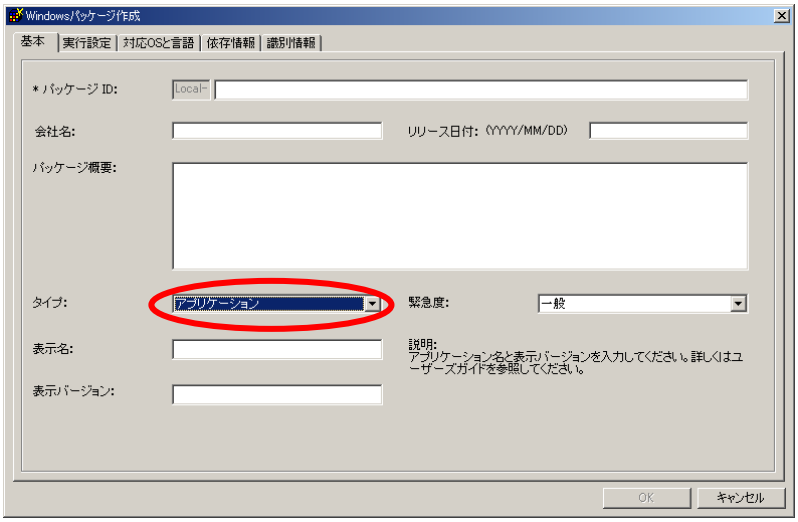
＜HotFix 選択時＞



＜サービスパック選択時＞



＜アプリケーション選択時＞



- パッケージ ID
  パッケージにつける ID 番号です。半角英数と「-」、「_」63 バイト以内で入力します。入力は必須です。
- 会社名
  パッケージを発行する発行元の名称です。127 バイト以内で入力します。
- リリース日
  パッケージをリリースした日付を入力します。西暦/月/日の書式で入力します。

ヒント

■ リリース日付に無効な値を入力すると、無視されるまたは自動的に補正されます。
■ リリース日付の年は 4 桁、月と日は 2 桁で入力してください。

- パッケージ概要
  パッケージの概要情報を入力します。511 バイト以内で入力します。
- タイプ
  サービスパックか HotFix または、アプリケーションを選択します。デフォルトは、HotFix になります。
- 緊急度
  パッケージの緊急度(4 種類)を設定します。HotFix を選択時した場合のデフォルトは「高」になります。サービスパックまたは、アプリケーションを選択時した場合のデフォルトは、「一般」になります。緊急度の種類により管理サーバが自動ダウンロードを行った際の処理が異なります。以下の表を参考にしてください。

緊急度	コンピュータの電源状態	配信手順
最高	電源 ON のコンピュータ	適用可のクライアントに即時配信します。
	電源 OFF のコンピュータ	即座に自動更新通知を発行しますが、電源 OFF の場合、自動更新は行なわれません。次回コンピュータの起動時に、パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し、未適用のパッケージのみを配信します。
高	電源 ON のコンピュータ	あらかじめ管理サーバ側で指定した時刻に配信します。
	電源 OFF のコンピュータ	次回コンピュータの起動時に自動更新を行います。 パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し、未適用のパッケージのみを配信します。
一般		管理サーバ側でシナリオを作成し、手動で配信します。
低		

注意

■ パッケージを登録する際に識別情報を入力していない場合、パッケージが「識別できないパッケージ」となりクライアントに自動更新通知を発信しません。
例： HotFix を登録する際に「MS 番号」「識別情報」のいずれも入力されていない場合は、管理サーバ側でシナリオを作成し、配信する必要があります。

■ タイプを変更した場合、「緊急度」、「実行設定」情報がデフォルトに変わりますので、もう一度確認してください。
- タイプをサービスパックに変更した場合
  緊急度は「一般」に変更されます。また、実行設定タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」のチェックボックスが自動的にチェックされます。
  コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。
- タイプを HotFix に変更した場合
  緊急度は「高」に変更されます。また、実行設定タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」のチェックボックスが自動的に外されます。
  コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。
- タイプをアプリケーションに変更した場合
  緊急度は「一般」に変更されます。また、実行設定タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」のチェックボックスが自動的に外されます。

- MS 番号
  Microsoft 社が発行するサービスパックや HotFix にあらかじめ付けられている MS（KB）番号を入力します。31 バイト以内で入力します。
  入力例） KB889293
  Q819696

重要

■ Microsoft 社の HotFix の場合、「MS 番号」欄に入力した値とレジストリに書き込まれる MS 番号（KBXXXXXX や QXXXXXX）を比較し値が一致した場合適用されていると判断します。必ず正しい値を「KB」もしくは「Q」を含めて入力してください。「MS 番号」欄に入力しない場合は、「識別情報」に入力したレジストリやファイルの情報で適用状態を判断します。
■ Microsoft 社の HotFix の場合、「MS 番号」「識別情報」ともに情報を入力していない HotFix は自動更新の対象となりません。緊急度「最高」または「高」を指定する場合は、いずれかを必ず指定してください。
■ サービスパックの場合、「MS 番号」「識別情報」の入力は不要です。

- メジャーバージョンとマイナーバージョン
  作成するパッケージがサービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンの入力が必要です。入力できる値は以下になります。
  有効値：
  メジャーバージョン：0～65535
  マイナーバージョン：0～65535

重要

Microsoft 社のサービスパックの場合、メジャーバージョン欄とマイナーバージョン欄に入力した番号と現在の OS にインストールされているサービスパックのバージョンを比較し、適用されているか判断します。必ず正しい番号を入力してください。

ヒント

■ メジャーバージョンとマイナーバージョンに無効な値を入力すると、自動的に補正されます。
■ サービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンの入力は必須です。以下の例)を参考にして入力してください。

例)Windows 2000/Windows XP の場合

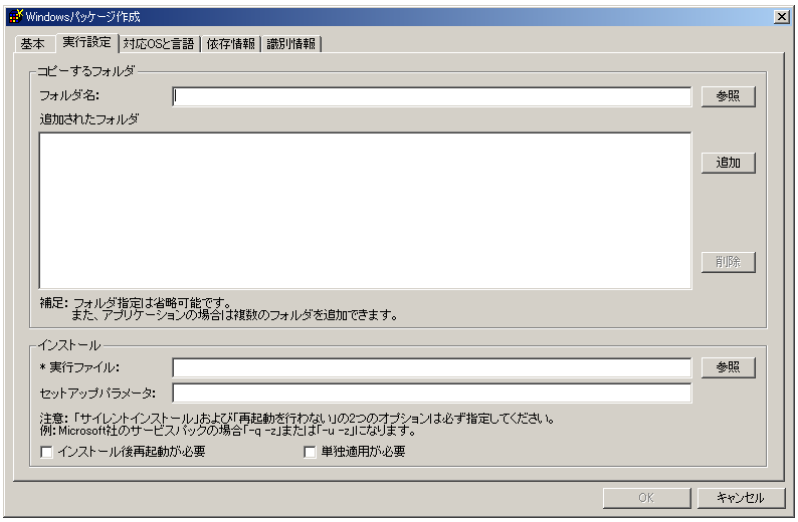
OS 種別	サービスパック	メジャーバージョン	マイナーバージョン
Windows 2000	SP1	1	0
	SP2	2	0
	SP3	3	0
	SP4	4	0
Windows XP	SP1	1	0
	SP2	2	0
	SP3	3	0

- 表示名
  作成するパッケージがアプリケーションの場合は表示名が表示されます。
  アプリケーションの表示名を入力してください。アプリケーションがインストールされた後、レジストリ Uninstall サブキーに保存する“DisplayName”の値と同じになります。511 バイト以内で入力します。

- 表示バージョン
  作成するパッケージがアプリケーションの場合は表示バージョンが表示されます。
  アプリケーションの表示バージョンを入力してください。アプリケーションがインストールされた後、レジストリの Uninstall サブキーに保存する“DisplayVersion”の値と同じになります。127 バイト以内で入力します。

■ 「実行設定」タブ

「Windows パッケージ作成」画面の「実行設定」タブをクリックし、各項目を入力します。



- フォルダ名/「参照」ボタン
  パッケージフォルダを入力します。255 バイト以内で入力してください。

  「参照」ボタンをクリックすると、「フォルダの参照」画面が表示されます。パッケージフォルダを選択後、「OK」ボタンをクリックしてください。

- 追加されたフォルダ
  追加済みのパッケージフォルダが表示されます。
  ー サービスパック/HotFix の場合は、1つのフォルダが追加できます。
  ー アプリケーションの場合は、複数のフォルダが追加できます。

- 「追加」ボタン
  フォルダ名に入力したフォルダを追加されたフォルダに追加します。

- 「削除」ボタン
  追加されたフォルダから選択したフォルダを削除します。
  追加されたフォルダで 1 つ以上のフォルダが選択されている場合のみ、「削除」ボタンは有効になります。

- 実行ファイル/「参照」ボタン
  パッケージの実行ファイルを「参照」から選択します。
  直接入力も可能で、255 バイト以内で入力します。
  パス長が 255 バイトより大きい場合、パスが自動的にクリアされます。

重要

実行ファイル名に%xx(xx は 16 進数の 0～f)を含むファイル(例:file%9d.exe)は登録しないでください。%xx を含むパッケージは管理サーバに正しくダウンロードできません。

注意

■ 実行ファイルには、以下のすべての条件を満たしているものを指定してください。
・サイレントインストールが出来ること。(ファイルを実行中にキー入力など応答が必要ないこと。または、バッチファイルを作成して、サイレントインストールにすることが可能であること。)
・インストール中に OS の再起動が発生しないこと。
・ローカルシステムアカウントでインストール出来ること。(ネットワーク参照しない。)
・ファイルサイズの合計が 2GB を超えないこと。
・実行中に子プロセスを作成する場合、作成した子プロセスの終了を待たずに親プロセスが終了しないこと。
■ 実行ファイルに日本語を含むファイルパスを入力すると、IPF アーキテクチャマシンに正しく適用できない場合があります。

- セットアップパラメータ
  パッケージのセットアップパラメータを指定します。
  パラメータは「実行後再起動しない」と「無人モード」または「Quiet モード」の 2 つのパラメータを指定してください。半角英数 31 バイト以内で入力します。

注意

サービスパック、ハードウェアのマニュアルを参照した上で指定してください。

ヒント

■ Windows 2000 SP 1、2、3、4 および Windows XP SP1 を登録する場合は、セットアップパラメータに再起動を行わないようにするために「-z」を指定してください。
サイレントインストールは以下の 2 つのどちらかを指定することを推奨します。
「-u」:無人モードで更新します。シナリオ実行中にエラーとなった場合はその箇所でシナリオ実行が止まってしまいます。OS インストール中の場合タイムアウトするまでWebコンソール上ではシナリオ実行中となります。リモートアップデート中の場合 Web コンソール上ではシナリオ実行中のままです。
「-q」:Quiet モードで実行します。シナリオ実行中にエラーとなった場合でもそのまま次へ進みます。そのため Web コンソール上でシナリオ実行完了となっていても適用されていない場合があります。
■ その他のサービスパック、HotFix のパラメータについては、あらかじめ実行ファイルに「/?」を指定して実行し、パラメータを確認してください。
■ サービスパックを適用する場合は、「ユーザーズガイド 付録」および、製品サイト(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/)を参照してください。

- インストール後再起動が必要
  パッケージの適用後に再起動を行う場合に設定します。自動更新方式での適用時に有効です。

- 単独適用が必要
  単独での適用が必要なサービスパックやHotFixの場合に設定します。チェックを入れると適用前に自動で再起動を行います。自動更新方式での適用時に有効です。

重要

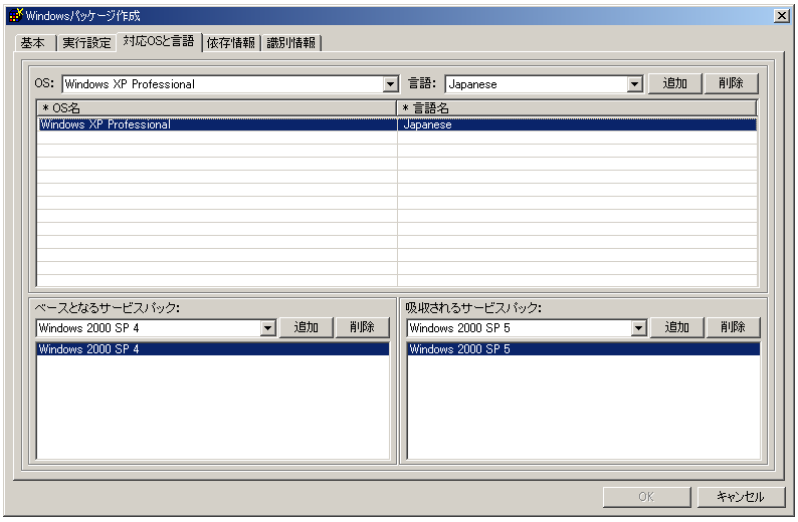
■ 登録されたサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル、アプリケーションは、管理サーバの内部フォルダにコピーします。登録に必要な空き容量は、登録するサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル、アプリケーションの容量の約2倍です。
■ ここで登録できるサービスパック/HotFix/Linux パッチファイル、アプリケーションはサイレントインストール型であり、インストール後に再起動をしないものに限ります。(デジタル署名情報によるセキュリティ警告画面が表示されるようなものの場合、適用時にクライアントで確認画面が表示されインストールが続行できません)
※ サイレントインストールとは、実行形式(setup.exe や Update.exe)を実行すれば自動的にセットアップを行う、「次へ」のクリックや値の入力が一切不要なセットアップの形式のことです。
※ 有効にするために再起動が必要なサービスパック/HotFix 等の場合は再起動を行わないオプション(一般的には「-z」)をつけてイメージを登録し、シナリオで「実行後に再起動を行う」オプションを設定するようにしてください。
■ セットアップパラメータは、サービスパック/HotFix に「/h」または「-?」のオプションをつけて実行することで調べることができます。サイレントインストール型であり、「インストール後に再起動を行わない設定のセットアップパラメータを必ず指定してください。

注意

■ 「フォルダ名入力フィールド」に UNC 形式(¥¥「コンピュータ名」¥「共有フォルダ」¥「サブディレクトリ」)の指定はできません。あらかじめ「ネットワークドライブの割り当て」を行い、ドライブレターを割り当ててください。
■ Microsoft から提供されるセキュリティパッチや、アプリケーションの仕様によっては、実行パスに 2 バイト文字が含まれると処理が正常に行われない可能性があります。パッチや、アプリケーションを格納する「フォルダ名入力フィールド」は 1 バイト文字で作成されることを推奨します。
■ パッチの登録は、フォルダ単位で行われます。1 つのフォルダ内には 1 つのパッチのみを格納するようにしてください。
■ 「セットアップパラメータ」の欄には、登録するアプリケーションによって入力が必要な場合があります。

■ 「対応 OS と言語」タブ

「Windows パッケージ作成」画面の「対応 OS と言語」タブで各項目を入力します。



- OS
  パッケージを適用する OS を選択します。

注意

■ サービスパック/HotFix が対応している OS を正しく指定してください。
■ IPF アーキテクチャマシン用のパッケージを作成する場合は、OS に“OtherOS”を指定してください。
■ 「All OS」を選択した場合は、選択可能なすべての OS が対象になります。

- 言語
  パッケージを適用する OS の対応言語を選択します。

- OS と言語の「追加」ボタン
  選択した「OS」、「言語」を追加します。

- OS と言語の「削除」ボタン
  選択した「OS」、「言語」を削除します。

- ベースとなるサービスパック
  HotFix が適用できる前提となるサービスパックを指定します。

- ベースとなるサービスパックの「追加」ボタン
  選択した「ベースとなるサービスパック」を追加します。

- ベースとなるサービスパックの「削除」ボタン
  選択した「ベースとなるサービスパック」を削除します。

- 吸収されるサービスパック
  次期サービスパックを指定します。「ベースとなるサービスパック」と併用して使用します。
  例） SP4 の適用された Windows2000 のコンピュータがある場合、「ベースとなるサービスパック」に SP4 を、「吸収されるサービスパック」に SP5 を入力しておきます。これにより【SP4 が適用されていて、SP5 は未適用のコンピュータに適用】という条件になります。

- 吸収されるサービスパックの「追加」ボタン
  選択した「吸収されるサービスパック」を追加します。

- 吸収されるサービスパックの「削除」ボタン
  選択した「吸収されるサービスパック」を削除します。

■ 「依存情報」タブ
パッケージを適用する際に依存情報をチェックします。依存条件を満たす場合のみ適用を行ないます。

＜依存情報＞
パッケージを適用する際の前提条件となるパッケージを指します。OS のサービスパックに依存する場合、「対応 OS と言語」タブの「ベースとなるサービスパック」で指定してください。

依存情報は以下の 3 種類に分類しています。

1） 依存パッケージ
依存するパッケージがインストールされている場合のみ適用します。依存するパッケージは、PackageDescriber で登録されている他のパッケージから選択します。また、依存パッケージを複数追加した場合は、すべての依存パッケージが適用されている場合に適用を行います。
例）Internet Explorer 6 Service Pack 1 用累積的なセキュリティ更新プログラム(KB867801)は、Internet Explorer 6 Service Pack 1が適用されていないとインストールできません。
このような場合、(KB867801)を適用する依存条件がInternet Explorer 6 Service Pack 1となります。

2） 依存ファイル情報
ファイルのいずれかの存在有無により適用を行います。ファイルを複数追加した場合は、いずれか 1 つを満たせば適用します。

3） 依存レジストリ情報
レジストリのいずれかの存在有無により適用を行います。レジストリ情報を複数追加した場合は、いずれか 1 つを満たせば適用します。

※ 「依存パッケージ」「依存ファイル情報」「依存レジストリ情報」を複合して追加した場合は、各項目の条件をすべて満たした場合にのみ適用します。

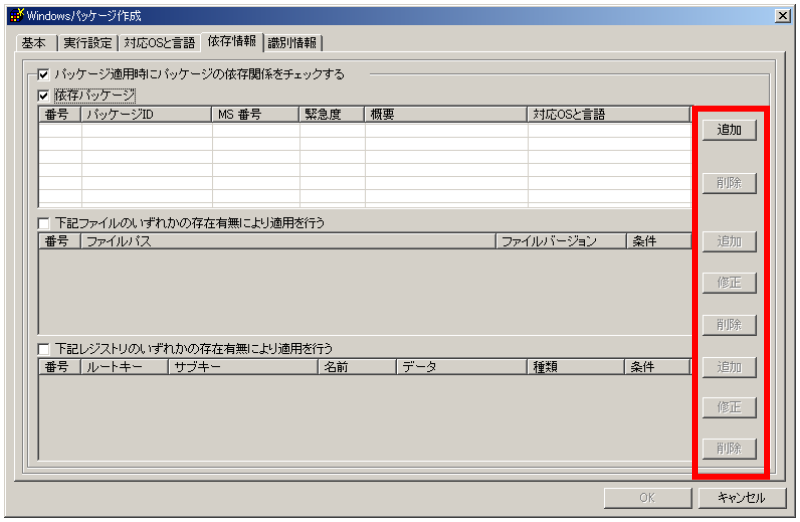
例）仮に「依存パッケージ」を A、「依存ファイル情報」を B、「依存レジストリ情報」を C とします。複合適用条件は下記のようになります。

	追加情報	各適用条件	複合適用条件
A	1	1、2、3 のすべてが適用されている	A を満たし かつ B を満たし かつ C を満たす
	2		
	3		
B	1	1、2 の条件のうちいずれか 1 つを満たす	
	2		
C	1	1、2 の条件のうちいずれか 1 つを満たす	
	2		

注意
パッケージがサービスパックに依存する場合、「対応OSと言語」タブで「ベースとなるサービスパック」を選択してください。

■ 依存情報の入力方法を説明します。

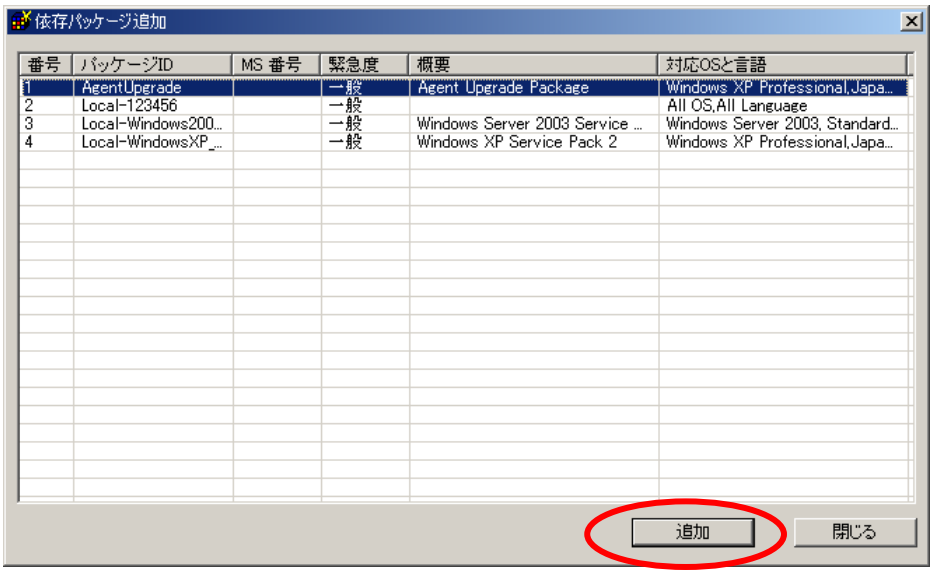
（1） 「パッケージ情報ファイル作成」画面の「依存情報」タブをクリックし、「パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする」にチェックを入れ、設定する各項目を入力します。



（2） 依存パッケージ

➢ 追加

「依存パッケージ」項目の「追加」をクリックすると以下の画面が表示されます。
画面に表示されているパッケージは、現在管理サーバに登録されているパッケージです。リストから依存するパッケージを選択し、「追加」をクリックしてください。



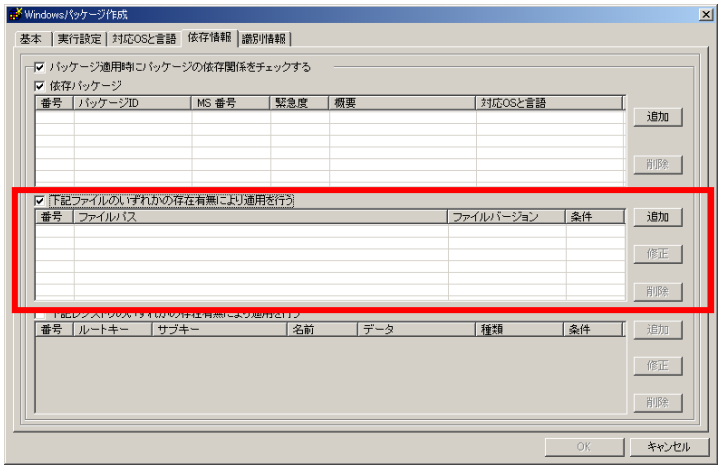
➢ 削除

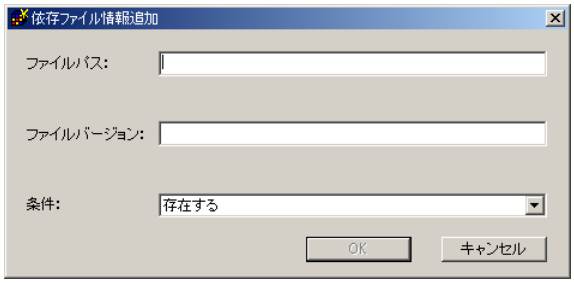
依存パッケージからパッケージを選択し「削除」ボタンをクリックすると、依存パッケージが削除されます。

（3） 依存ファイル

➢ 追加

「下記ファイルのいずれかの存在有無により適用を行う」にチェックを入れ「追加」をクリックすると、以下の画面が表示されます。各項目を入力し「OK」をクリックしてください。





ファイルパス		依存するファイルパスとファイル名を入力します。259 バイト以内で入力します。
ファイルバージョン		ファイルのバージョンを入力します。 半角数字と「.」のみ、31 バイト以内で、「x.x.x.x」の形式で入力します。
条件	存在する	入力したファイルが存在する場合、パッケージの適用を行ないます。
	存在しない	入力したファイルが存在しない場合、パッケージの適用を行ないます。

ヒント

- ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。
- ファイルバージョンはファイルプロパティの「バージョン情報」タブから確認できます。
- プロパティに「バージョン情報」タブが存在しない、または「バージョン情報」タブの「ファイルバージョン」の項目が空の場合、何も記入する必要はありません。

➢ 修正

ファイルを選択し「修正」をクリックすると「依存ファイル情報変更」画面が表示されます。

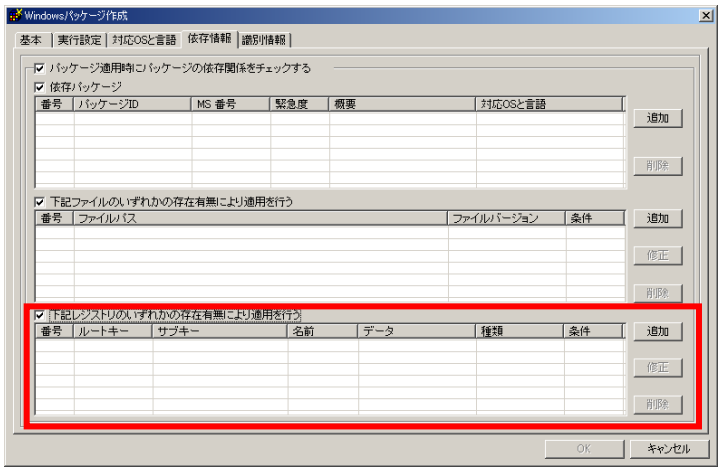
➢ 削除

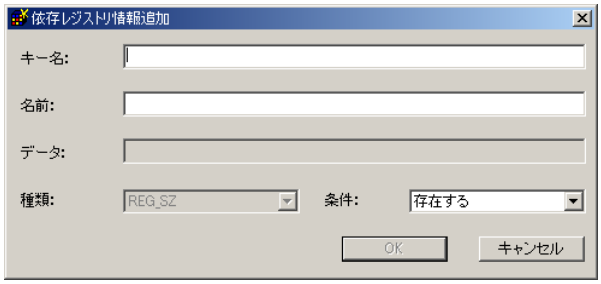
ファイルを選択し「削除」をクリックすると「依存ファイル」が削除されます。

（4） 依存レジストリ

➢ 追加

「レジストリのいずれかの存在有無により適用を行う」にチェックを入れ「追加」をクリックすると、以下の画面が表示されます。各項目を入力し「OK」をクリックしてください。





キー名		ルートキーも含め、レジストリキー名を入力します。255 バイト以内で入力します。
名前		キー名に所属する値（ValueName）。255 バイト以内で入力します。
種類		値のタイプ（ValueType）
データ		値のデータ（ValueData）。 ・「REG_SZ」と「REG_BINARY」 ・・・ 1024 バイト以内 ・「REG_DWORD」 ・・・ 0 から 4294967295 までの数字 ・「REG_QWORD」タイプ ・・・ 0 から 18446744073709551615 までの数字
条件	存在する	入力したレジストリが存在する場合パッケージ適用を行ないます。
	存在しない	入力したレジストリが存在しない場合パッケージ適用を行ないます。

➢ 修正

レジストリを選択し「修正」をクリックすると、「依存レジストリ情報変更」画面が表示されます。

➢ 削除

レジストリを選択し「削除」をクリックすると、依存レジストリが削除されます。

■ 「識別情報」タブ

識別情報を利用して、コンピュータにパッケージが適用されたかを判断します。

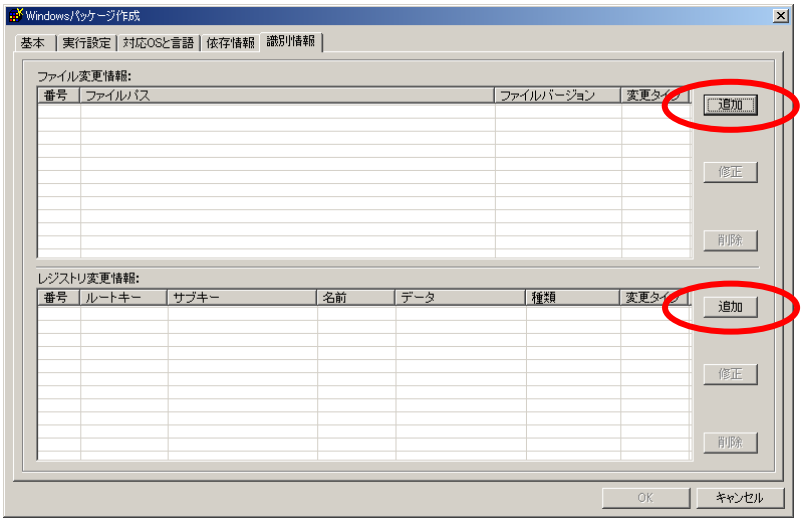
＜識別情報＞
サービスパック/HotFixをインストールしたことにより起こる、ファイルとレジストリの変化を「識別情報」として入力します。
例）パッチAを登録し、コンピュータに配信します。
1） 配信前 → 現在どのパッチがインストールされているか
ファイル情報やレジストリはどうなっているか
2） 配信後 → パッチAが配信されると、ファイルやレジストリにどのような変化があるか
上記1）2)を比較して得られる差分情報を「識別情報」として登録します。
DPMでは、ここで指定した識別情報を元にパッケージの適用状況を判断します。入力したファイル変更情報とレジストリ変更情報を全て満たした場合、適用済みと判断します。

ヒント

- 作成するパッケージファイルが Microsoft 社の発行したサービスパック/HotFix の場合、識別情報を入力しなくてもレジストリに書き込まれた MS 番号(KBXXXXXX や QXXXXXX)と「基本」タブで入力した「MS 番号」を比較して一致していれば適用済みと判断することができます。
- MS 番号を持っていない、或いは MS 番号で識別できないパッケージの場合や、レジストリ等にしか情報が残らないパッケージを適用する場合に、識別情報の入力が必要になります。

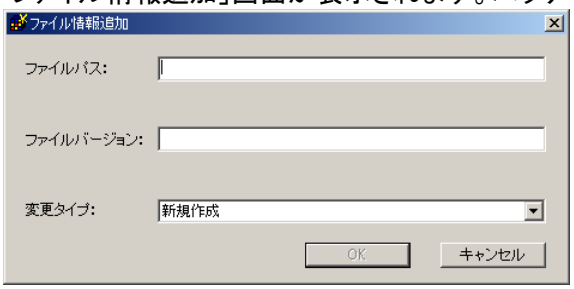
■ パッケージの識別情報の入力方法を説明します。

(1) 「パッケージ情報ファイル作成」画面の「識別情報」タブをクリックします。「ファイル変更情報」の「追加」、もしくは「レジストリ変更情報」の「追加」をクリックし、各項目を入力します。



- ファイル変更情報
  パッケージを適用したことにより、ファイルシステムに起こる変更情報を元に適用状態の判断を行う場合に使用します。

➢ 追加
「ファイル情報追加」画面が表示されます。パッケージのファイル識別情報を追加します。



・ファイルパス → 変化があったファイルパスとファイル名を入力します。259 バイト以内で入力します。
・ファイルバージョン → ファイルのバージョンを入力します。半角数字と「.」のみ、31 バイト以内で、「x.x.x.x」の形式で入力します。

・変更タイプ　　→ 以下の選択肢から選択します。
新規作成　：パッケージの適用で新規生成される場合に選択します。
書き換え　：パッケージの適用で書き換えられる場合に選択します。
バージョンアップ：以下に該当するファイルの場合に選択します。
● 既存ファイルより新しいファイルの場合
⇒ 書き換えを行う仕様のパッチである。
● 既存ファイルより古いファイルの場合
⇒ 書き換えを行わない仕様のパッチである。
削除　　：パッケージの適用で削除される場合に選択します。

重要

ファイルパスは利用環境によって異なる場合がありますので、システム環境変数を入力してください。
例）C:¥WINNT¥system32¥の配下、winsock.dll に変化があった場合
%WinDir%¥system32¥winsock.dll

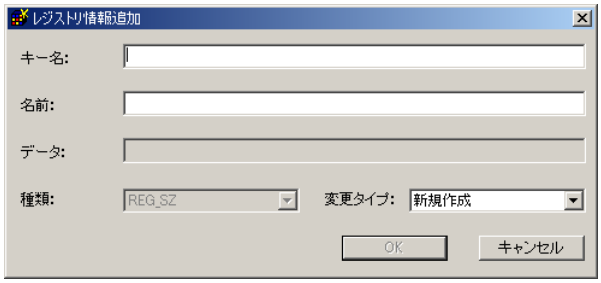
ヒント

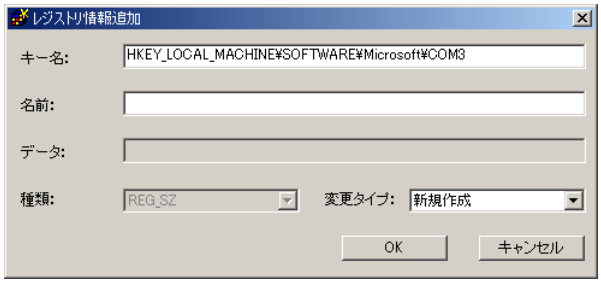
■ ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。
■ ファイルバージョンはファイルプロパティの「バージョン情報」タブから確認できます。
■ プロパティに「バージョン情報」タブが存在しない、または「バージョン情報」タブの「ファイルバージョン」の項目が空の場合、何も記入する必要はありません。

➢ 修正
追加したパッケージのファイル識別情報を修正します。
➢ 削除
追加したパッケージのファイル識別情報を削除します。

- レジストリ変更情報
パッケージを適用したことにより、変更のあったレジストリ情報を元に適用状態の判断を行う場合に使用します。

➢ 追加
「レジストリ情報追加」画面が表示されます。パッケージのファイル識別情報を追加します。





・キー名：ルートキーも含め、レジストリキー名を入力します。
・名前　　→ キー名に所属する値（ValueName）
・種類　　→ 値のタイプ（ValueType）
・データ　→ 値のデータ（ValueData）
・変更タイプ → 以下の選択肢から選択します。
新規作成　：パッケージの適用で新規生成される場合。
書き換え　：パッケージの適用で書き換えられる場合。
削除　　：パッケージの適用で削除されます。

➢ 修正
追加したパッケージのレジストリ識別情報を修正します。

➢ 削除
追加したパッケージのレジストリ識別情報を削除します。

（2） 必要な情報を入力した後「OK」をクリックすると「パッケージ情報ファイル」が作成されます。
「キャンセル」をクリックすると入力情報はすべて破棄され「パッケージ情報ファイル作成」画面を閉じます。

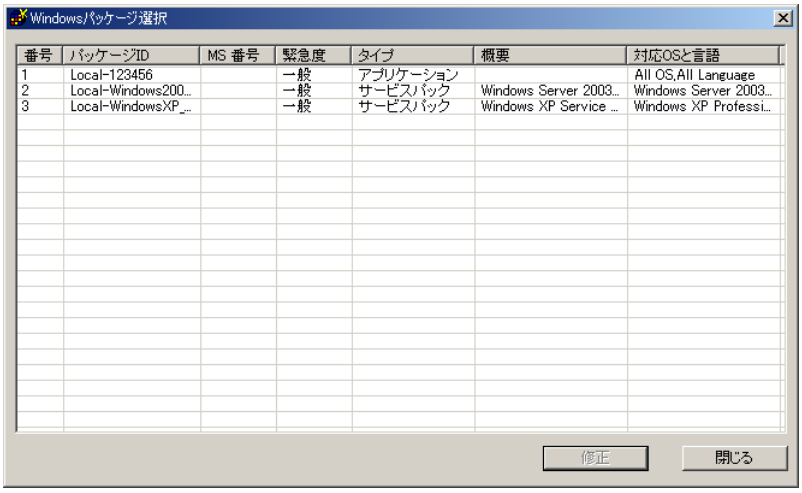
以上で Windows パッケージ作成に必要な情報の入力は完了です。
「Windows パッケージ作成」画面の「OK」ボタンをクリックして、Windows パッケージを作成してください。

ヒント

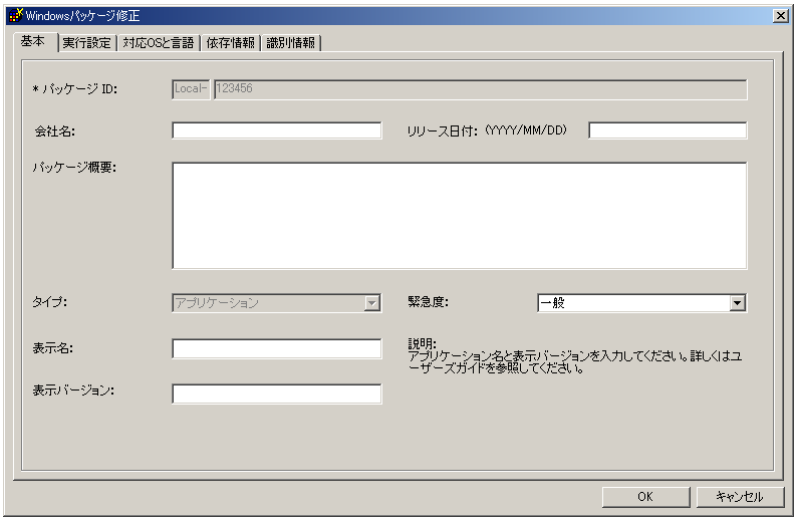
イメージビルダーでは、連続登録が可能です。続けて登録する場合は、次のパッケージの情報を入力して再度「OK」ボタンをクリックしてください。登録作業を完了する場合は、「完了」ボタンをクリックしてください。（一度「OK」ボタンをクリックした後は、「キャンセル」ボタンは「完了」ボタンになります。）

17.4.2 Windowsパッケージ修正

（1） 「Windows パッケージ修正」メニュー項目を選択します。



（2） 「Windows パッケージ選択」画面から１つのパッケージ情報を選択し、「修正」ボタンをクリックすると、「Windows パッケージ修正」画面が表示されます。



「Windowsパッケージ作成」画面と同様に、「Windowsパッケージ修正」画面にも「基本」、「実行設定」、「対応OSと言語」、「依存情報」及び「識別情報」の5つのタブ画面があります。修正可能な項目については、以下のとおりです。

① 「基本」タブ
「パッケージ ID」と「タイプ」以外は修正可能です。

② 「実行設定」タブ
「コピーするフォルダ」と「実行ファイル」以外は修正可能です。

③ 「対応 OS と言語」タブ
全項目修正可能です。

④ 「依存情報」タブ
全項目修正可能です。

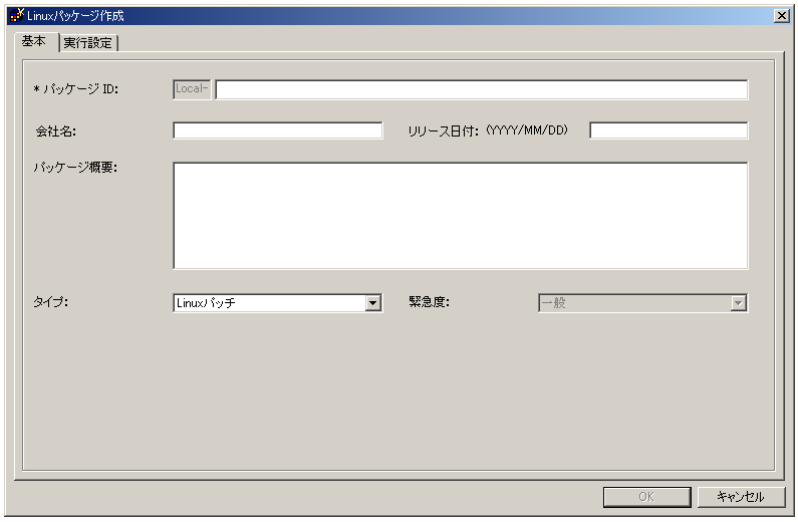
⑤ 「識別情報」タブ
全項目修正可能です。

上記各タブ画面の入力方法については「Windows パッケージの作成」を参照して修正を行ってください。

17.4.3 Linuxパッケージ作成

「Linux パッケージ作成」メニュー項目を選択した場合、「Linux パッケージ作成」画面が表示されます。

■ 「基本」タブ
「Linux パッケージ作成」画面の「基本」タブで各項目を入力します。



- パッケージ ID
  パッケージ ID 番号です。半角英数と「-」、「_」63 バイト以内で入力します。入力は必須です。

- 「会社名」入力域
  パッケージを発行する発行元の名称です。127 バイト以内で入力します。

- 「リリース日付」入力域
  パッケージをリリースした日付です。日付書式は YYYY/MM/DD 形式です。

- 「パッケージ概要」
  パッケージの概要情報です。511 バイト以内で入力します。

- 「タイプ」コンボボックス
  Linux パッチまたは、アプリケーションを選択します。

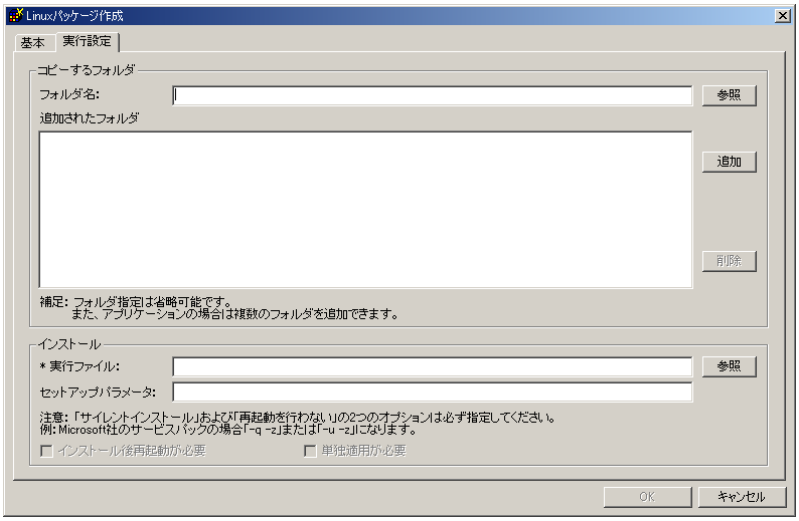
- 「緊急度」コンボボックス
  パッケージの緊急度を選択します。変更できません。

- 「OK」ボタン
  すべての入力必要な項目を正しく入力した後、「OK」ボタンが有効になります。
  「OK」をクリックしたら、Linux のパッケージを作成します。

- 「キャンセル」ボタン
  何も処理をせずに画面を閉じます。

■ 「実行設定」タブ

（1） 「Linux パッケージ作成」画面の「実行設定」タブで各項目を入力します。



- フォルダ名/「参照」ボタン
  パッケージフォルダを入力します。255 バイト以内で入力してください。

  「参照」ボタンをクリックすると、「フォルダの参照」画面が表示されます。パッケージフォルダを選択後、「OK」ボタンをクリックしてください。

- 追加されたフォルダ
  追加済みのパッケージフォルダが表示されます。
  ー Linux パッチの場合は、1つのフォルダのみ追加できます。
  ー アプリケーションの場合は、複数のフォルダを追加できます。

- 「追加」ボタン
  「フォルダ名」入力域に入力したフォルダを追加されたフォルダに追加します。

- 「削除」ボタン
  追加されたフォルダから選択したフォルダを削除します。
  追加されたフォルダで 1 つ以上のあるフォルダが選択されている場合のみ、「削除」ボタンは有効になります。

- 実行ファイル入力域/「参照」ボタン
  パッケージの実行ファイルを「参照」から選択します。
  直接入力も可能で、255 バイト以内で入力します。

重要

実行ファイル名に%xx(xx は 16 進数の 0～f)を含むファイル(例:file%9d.exe)は登録しないでください。%xx を含むパッケージは管理サーバに正しくダウンロードできません。

注意

■ 実行ファイルには、以下のすべての条件を満たしているものを指定してください。

・サイレントインストールが出来ること。(ファイルを実行中にキー入力など応答が必要ないこと。または、バッチファイルを作成して、サイレントインストールにすることが可能であること。)

・インストール中に OS の再起動が発生しないこと。

・ネットワーク参照しないこと。

・ファイルサイズの合計が 2GB を超えないこと。

・実行中に子プロセスを作成する場合、作成した子プロセスの終了を待たずに親プロセスが終了しないこと。

■ 実行ファイルに日本語または、「&」を含むファイルパスを入力すると、正しく適用できない場合があります。

- セットアップパラメータ
  パッケージのセットアップパラメータを指定します。
  パラメータは「実行後再起動しない」と「無人モード」または「Quiet モード」の 2 つのパラメータを指定してください。半角英数 128 バイト以内で入力します。

重要

rpm パッケージを登録する場合はコマンドオプションに 「-i」や「-U」など、インストールに適したオプションを指定して下さい。

ヒント

■ Linux の場合にシェルスクリプトを登録する場合はコンソールにメッセージが出力されないようにして下さい。メッセージを出力するとシナリオが失敗します。必要なメッセージの場合はログファイルにリダイレクトし、不要なメッセージの場合は/dev/null にリダイレクトするなどしてください。

例）ログに出力する場合

```
dmseg >> /tmp/dmesg.log
```

例）メッセージを保存しない場合

```
/etc/rc.d/init.d/depagtd start > /dev/null
```

■ rpm パッケージを登録する場合は、登録するパッケージによって「-i」オプションでは正しくインストールができない場合があります。原因として署名がある場合や依存関係がある rpm の可能性があります。又、既にインストール済みの場合も失敗します。
代表的なオプションを以下に記述していますので、内容をもとにセットアップパラメータを指定してください。

オプション	サブオプション	内容
-i		新しいパッケージをインストールします。
-U		既にインストールされているパッケージのアップグレードを行います。インストールされていない場合もインストールを実施します。古いバージョンは全て削除されます。
-F		古いバージョンが現在インストールされている場合に限りアップデートを行います。古いバージョンは全て削除されます。
-i	--oldpackage	既にインストール済みのパッケージよりも古いパッケージをインストールします。
-i	--replacefiles	インストール済みの他のパッケージに含まれるファイルを置き換えてしまう場合にもインストールを実行します。
-i	--replacepkgs	インストール済みのパッケージを再インストールします。
-i	--force	--oldpackage + --replacefiles + --replacepkgs
-i	--nodeps	依存関係を無視して強制的にインストールします。
-i	--nosignature	読み込み時にパッケージまたはヘッダの署名を検査しません。

又、オプションに標準出力されるようなものを指定するとインストールに失敗しますので指定しないでください。
表示系のオプションは以下のようなものになります。

-v、--verbose	より多くの情報を表示する。通常は、ルーチンの進捗メッセージが表示されます。
-vv	沢山の汚いデバッグ情報を表示する。
-h、--hash	パッケージアーカイブから取り出されるにつれ、50 個のハッシュマーク(″#″) を表示して進捗状況を表します。
--percent	パッケージアーカイブからファイルが取り出されるにつれて、その割合を表示します。

オプションの詳細については、お使いの Linux オンラインヘルプドキュメントを参照してください

- インストール後再起動が必要
  本項目は無効です。

- 単独適用が必要
  本項目は無効です。

注意

- アプリケーションの仕様によっては、実行パスに 2 バイト文字が含まれると処理が正常に行われない可能性があります。アプリケーションを格納する「フォルダ名入力フィールド」は 1 バイト文字で作成されることを推奨します。
  又、Linux のクライアント用に登録する場合は、実行パスには 2 バイト文字を含まないでください。2 バイト文字を含んだ場合は、文字によって実行パスが正しく認識されない場合があります。
- シェルスクリプトを登録する場合はコンソールにメッセージが出力されないようにして下さい。メッセージを出力するとシナリオが失敗します。必要なメッセージの場合はログファイルにリダイレクトし、不要なメッセージの場合は/dev/null にリダイレクトするなどしてください。
  例）ログに出力する場合
  dmseg >> /tmp/dmesg.log
  例）メッセージを保存しない場合
  /etc/rc.d/init.d/depagtd start > /dev/null
- シェルスクリプト等は、正常終了時に終了コードが 0 となるようにしてください。終了コードが 0 以外の場合、スクリプトの実行は成功していてもシナリオ実行エラーとなります。

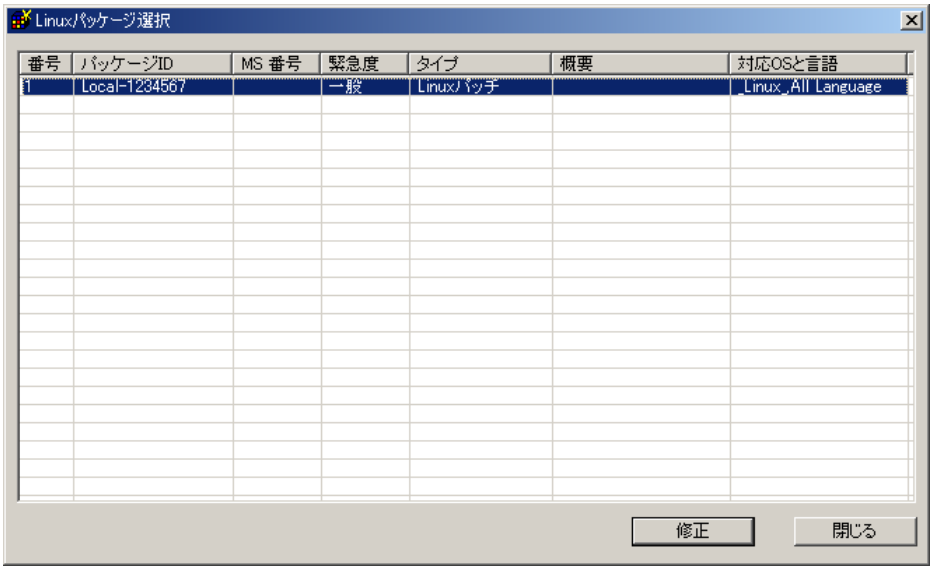
以上で Linux パッケージ作成に必要な情報の入力は完了です。
「Linux パッケージ作成」画面の「OK」ボタンをクリックして、Linux パッケージを作成してください。

ヒント

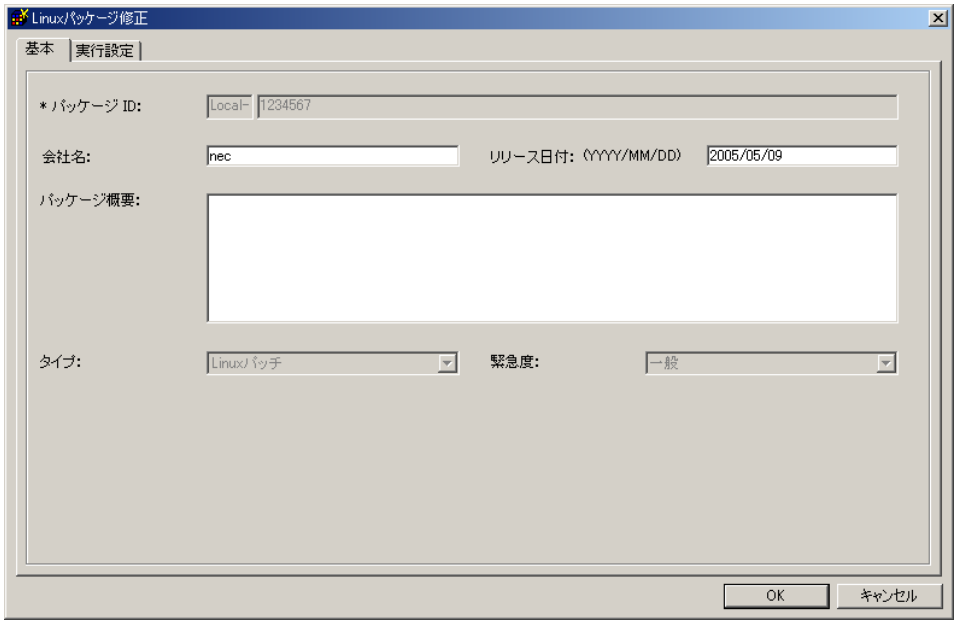
イメージビルダーでは、連続登録が可能です。続けて登録する場合は、次のパッケージの情報を入力して再度「OK」ボタンをクリックしてください。登録作業を完了する場合は、「完了」ボタンをクリックしてください。（一度「OK」ボタンをクリックした後は、「キャンセル」ボタンは「完了」ボタンになります。）

17.4.4 Linuxパッケージ修正

（1）「Linux パッケージ修正」メニュー項目を選択すると、「Linux パッケージ選択」画面が表示されます。



（2）「Linux パッケージ選択」画面から1つのパッケージ情報を選択して、「修正」ボタンをクリックすると、「Linux パッケージ修正」画面が表示されます。



「Linux パッケージ作成」画面と同様に、「Linux パッケージ修正」画面にも「基本」、「実行設定」の 2 つのタブ画面があります。 修正可能な項目については、以下のとおりです。

・「基本」タブ
「パッケージ ID」、「タイプ」及び「緊急度」以外は、修正可能です。

・「実行設定」タブ
「コピーするフォルダ」、「実行ファイル」以外は、修正可能です。

上記各タブ画面の入力方法については「Linux パッケージの作成」を参照して修正を行ってください。

17.4.5 パッケージ作成/登録の終了

「終了」メニューをクリックすると、「パッケージの登録/修正」画面が閉じます。

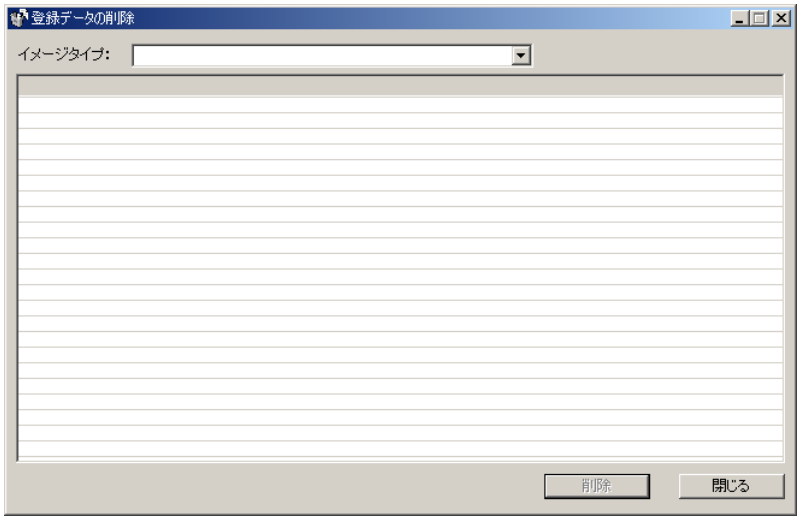
この時点で、登録したパッケージの緊急度によってクライアントに自動更新通知を発信するかを決めます。
緊急度が「最高」のパッケージを登録している場合は、パッケージの適用可のクライアントに自動更新通知を発信し、即座に適用します。

17.5　登録データの削除

■　イメージビルダーでは作成したイメージデータを削除します。以下の手順で削除します。

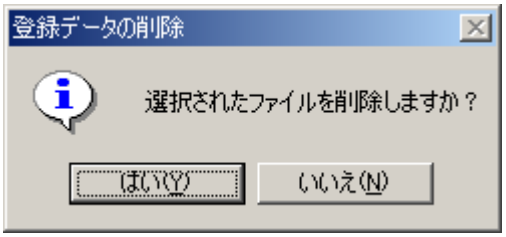
(1) イメージビルダーを使用できるコンピュータで、「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダー」を選択しイメージビルダーを起動します。

(2) 「登録データの削除」をクリックします。「登録データの削除」画面が表示されます。



- イメージタイプ
  イメージタイプを選択すると、該当するイメージリストが下の表に表示されます。

- 「削除」ボタン
  ボタンをクリックすると、以下の確認画面が表示されます。「はい」をクリックすると、イメージファイルを削除します。



その後、「削除結果確認」画面が表示されます。

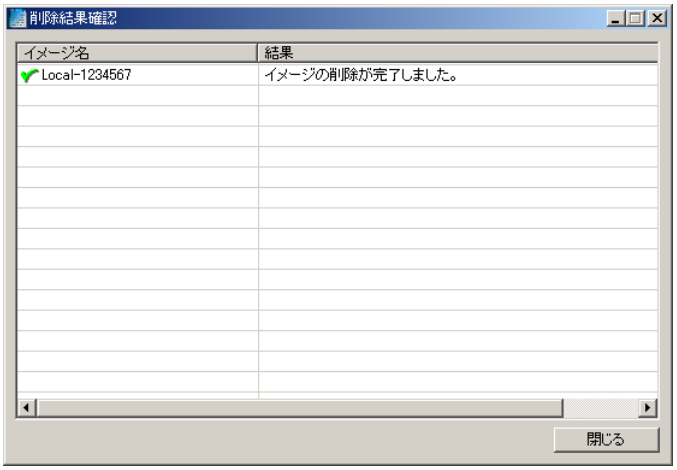
注意

- イメージビルダーのパッケージ削除機能を利用して、自動ダウンロードより登録されたパッケージを一時的に削除できます。ただし、パッケージWebサーバから当該パッケージを削除しない場合、設定した自動ダウンロード時間になると再度ダウンロードされます。
- パッケージWebサーバからパッケージを削除する場合、PackageDescriberをご使用ください。詳細は、「ユーザーズガイド PackageDescriber編」を参照してください。
- ディスク複製用のパラメータファイル、CSV ファイルは、「登録データの削除」から削除することはできません。
  Windows 用のファイルの場合、管理サーバの＜共有フォルダ＞¥Ansfile 以下のフォルダにあるファイルを手作業で削除してください。

  （例）共有フォルダが C ドライブにある場合
  C:¥Deploy¥Ansfile¥sysprep¥ XX-XX-XX-XX-XX-XX.inf
  XX-XX-XX-XX-XX-XX.bat
  C:¥Deploy¥Ansfile¥sysprep¥csv¥ XXX.csv
  C:¥Deploy¥Ansfile¥unattend¥csv¥ XXX.csv

  Linux 用のファイルの場合、ディスク複製用のパラメータファイルは、管理サーバの＜共有フォルダ＞¥Ansfile 以下のフォルダにあるファイルを、CSV ファイルは保存時に指定した場所にあるファイルを手作業で削除してください。

  （例）共有フォルダが C ドライブにある場合
  C:¥Deploy¥Ansfile¥machineinf¥XXXXXXXXXXXX.rep
  作業ディレクトリ、導入ディレクトリがデフォルトの場合
  C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥linux¥offline¥CSV¥XXX.csv
- イメージファイル名にて表示されるEFIアプリケーション(拡張子efiのファイル)を削除した場合、本編「6.4 EFIアプリケーションの登録」と同様に同時に登録されたファイル名が同じ(拡張子が異なる)ファイルも一緒に削除されます。



イメージリスト中のイメージファイルが選択された場合のみ、「削除」ボタンが有効になります。1度で複数のイメージファイルを削除できます。

- 「閉じる」ボタン
  画面を閉じます。

17.6　一括登録

■　イメージビルダー（リモートコンソール）を使用している場合選択が可能です。

■　管理サーバへ未登録のイメージファイルを一括して送信し登録します。詳細は、「ユーザーズガイド　応用編　11. イメージビルダー（リモートコンソール）」を参照してください。

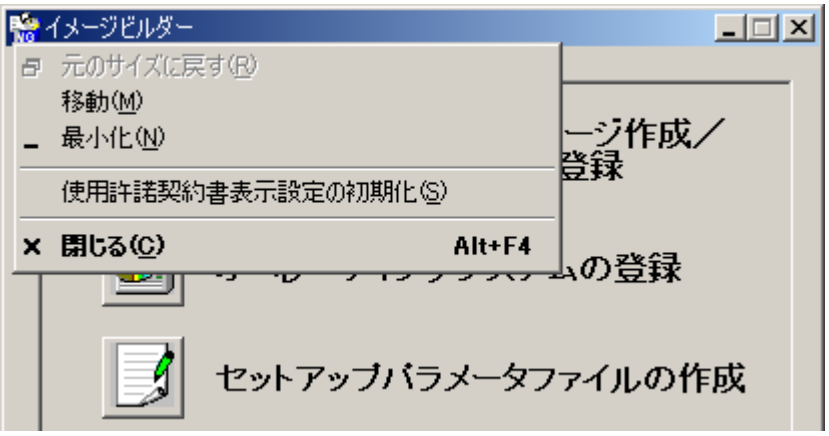
17.7　接続設定

■　イメージビルダー（リモートコンソール）を使用している場合選択が可能です。

■　イメージファイルを送信する管理サーバの IP アドレスを設定します。初回起動時はこの設定画面が最初に表示されます。詳細は、「ユーザーズガイド　応用編　11. イメージビルダー（リモートコンソール）」を参照してください。

17.8　使用許諾契約書表示設定

■　イメージファイルを登録する時に表示される使用許諾契約書の同意画面にて「次回選択時にこの画面を表示しない」にチェックを入れて「同意する」を選択すると、以後使用許諾契約書の同意画面は表示されなくなります。再び画面を表示させるようにしたい場合はシステムメニューより「使用許諾契約書表示設定の初期化(S)」を選択してください。再び全てのイメージファイル登録処理時に画面が表示されるようになります。



18　パッケージビルダ

■　パッケージビルダとは、インストール時にキー入力が必要なサービスパック/HotFix、アプリケーションからキー入力不要な実行形式のファイルを作成するツールです。

■　パッケージビルダの詳しい使用方法に関しては、「PackageBuilderManual.pdf」を参照してください。

ヒント

■　インストールを行うサービスパック/HotFix、アプリケーションにサイレントインストール用のオプションが存在する場合は、サイレントインストール用のオプションを使用することを推奨します。
■　実行ファイルはコンピュータの OS 種別ごとに作成してください。
■　実行ファイルを作成する専用のコンピュータ（パッケージビルドコンピュータ）を用意してください。パッケージビルドコンピュータは DPM でバックアップイメージを保存しておき、実行ファイルをビルドする度にリストアすることを推奨します。
■　パッケージビルドコンピュータには管理者権限を持ったユーザーでログオンしてください。

■　作成した実行ファイルをイメージビルダー、もしくは PackageDescriber から登録してください。

重要

イメージビルダー、PackageDescriber から登録を行う際に、コマンドオプションに「/An」を指定してください。指定しない場合、インストール中に入力を求められることがあります。

ヒント

実行ファイルはパッケージビルダの「パッケージ ビルダ ウィザード」→「スキャンオプション」→「一時作業ディレクトリ」で指定したディレクトリの Onefile ディレクトリ配下に作成されます。

19　パッケージ適用状況

■ 管理対象コンピュータへのパッケージ適用状況を確認する方法について説明します。
パッケージの適用状況は、パッケージ毎に確認する方法と、コンピュータ毎に確認する方法の 2 種類があります。

19.1　パッケージ適用状況(コンピューター覧)

■ パッケージ毎に適用、未適用のコンピュータを確認する方法について説明します。

(1) メインウィンドウ画面の「表示」メニューから「パッケージ一覧」を選択してください。
「パッケージ一覧」画面が表示されます。

ヒント
一覧には、パッケージ Web サーバからダウンロードしたパッケージ、またイメージビルダーで登録したサービスパック/HotFix/アプリケーションが表示されます。

各項目の説明

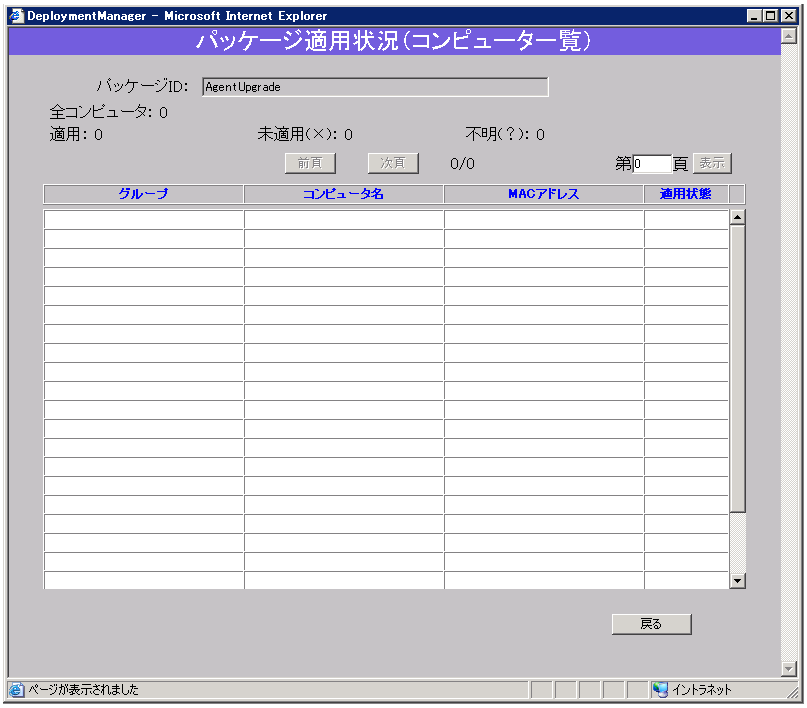
- OS コンボボックス
  管理サーバに登録された OS 名

- 言語コンボボックス
  管理サーバに登録された言語名

- タイプコンボボックス
  All Type、HotFix、サービスパック、Linux パッチ、アプリケーションが表示されます。

- 「リストを更新」ボタン
  選択した OS、言語、パッケージタイプによってパッケージをフィルタして、表に表示します。

(2) パッケージ ID 列の左側のラジオボタンをチェックし、「適用状況」ボタンをクリックしてください。
「パッケージ適用状況（コンピューター覧）」が表示されます。
パッケージ適用状況（コンピューター覧）の一覧は、「前頁」ボタン、「次頁」ボタン、「表示」ボタンにて、表示するページを移動することが可能です。



ヒント　一覧には、パッケージを未適用のコンピュータと適用状況不明のコンピュータが表示されます。

項目の説明

- パッケージ ID
  選択したパッケージの ID

- 全コンピュータ
  管理対象コンピュータの総数

- 適用
  選択したパッケージを適用しているコンピュータの数

- 未適用(×)
  選択したパッケージを適用していないコンピュータの数

- 不明(？)
  適用状況が不明（識別情報のないパッケージの適用状態は不明なため、「？」と表示します）

- 適用状態
  選択したパッケージの各管理対象コンピュータへの適用状況を表示します。ただし、パッケージの適用できない管理対象コンピュータは、表示されません。
  × ： 未適用
  ？ ： 適用状況不明（識別情報のないパッケージの適用状態は不明なため、「？」と表示します）

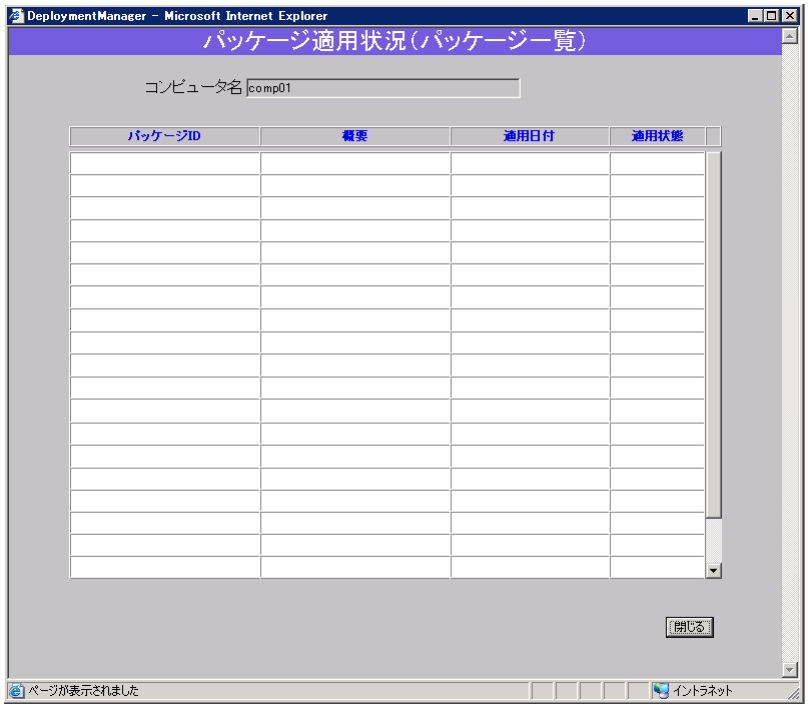
注意

Linux OSとIPFアーキテクチャ向けWindows / Linux OSは自動更新機能をサポートしていないため、LinuxAgentUpgrade、IPF_AgentUpgrade、IPF_LinuxAgentUpgradeパッケージに対する「パッケージ適用状況（コンピューター一覧）」に、コンピュータは表示されません。

19.2　パッケージ適用状況(パッケージ一覧)

■ コンピュータ毎に適用、未適用のパッケージを確認する方法について説明します。

(1) メイン画面の「コンピュータ」メニューから「パッケージ適用状況」を選択してください。
「パッケージ適用状況（パッケージ一覧）」画面が表示されます。



ヒント

管理対象コンピュータに適用できないパッケージは、一覧に表示されません。

項目の説明

- 適用状況
  選択したコンピュータへのパッケージの適用状況を表示します。
  ○：適用済み
  ×：未適用
  ？：適用状況不明

20　IPアドレスの変更

20.1　管理サーバのIPアドレス変更

■ 管理サーバ for DPM をインストールし、DPM の運用中に管理サーバ自身の IP アドレスを変更する手順について説明します。

注意

■ 管理サーバとデータベースサーバを同一マシンに構築している場合は、本編「20.2 データベースサーバのIPアドレス変更」を参照して、データベースのIPアドレスの変更を先に行ってください。
■ 手順どおりに行わなかった場合、管理サーバ for DPMが正常に動作しなくなります。

■「詳細設定」画面の「全般」タブの「IP アドレス」に「ANY」を選択している場合

(1) DPM に関する処理を終了してください。

(2) 管理サーバの IP アドレスを変更します。

(3) 管理サーバを再起動してください。

(4) 管理サーバの再起動後、Web コンソールから IP アドレスを変更した管理サーバを削除してください。

(5) 削除後、Web コンソールで変更した IP アドレスで管理サーバを追加してください。

(6) Web コンソールから IP アドレスを変更した管理サーバに登録されているすべてのコンピュータに対してシャットダウン、またはリモートアップデートのシナリオ実行を行います。

■「詳細設定」画面の「全般」タブの「IP アドレス」に ANY 以外を選択している場合

(1) DPM に関する処理を終了してください。

(2) 管理サーバの(CD-ROM)ドライブにインストール CD-ROM をセットします。

(3) 使用している OS のアーキテクチャに応じて、以下の操作を行ってください。
・IA32 アーキテクチャマシンの場合：インストール CD-ROM 内の以下のファイルを実行してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合　：¥DPM¥TOOLS¥IP¥IA32¥RegSet1.reg
EE/SE 製品の場合　　：¥TOOLS¥IP¥IA32¥RegSet1.reg

・EM64T アーキテクチャマシンの場合：「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択して、実行するプログラムの名前に「%WINDIR%¥SysWOW64¥cmd.exe」を入力て、「OK」をクリックします。コマンドプロンプトが起動するので、起動したコマンドプロンプトから以下のファイルを実行してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合　：¥DPM¥TOOLS¥IP¥AMD64¥RegSet1.reg
EE/SE 製品の場合　　：¥TOOLS¥IP¥AMD64¥RegSet1.reg

(4) レジストリの追加画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

(5) レジストリの追加完了画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。

(6) 管理サーバの IP アドレスを変更します。

(7) 管理サーバを再起動してください。

(8) 管理サーバの再起動後、Web コンソールから IP アドレスを変更した管理サーバを削除してください。

(9) 削除後、Web コンソールで変更した IP アドレスで管理サーバを追加してください。

(10)Web コンソールのツリービューから登録した管理サーバを選択後、右クリックし「アクセスモード変更」→「更新モード」をクリックします。

(11)Web コンソールの「設定」メニューから「詳細設定」をクリックします。「詳細設定」画面が表示されます。

(12)「詳細設定」画面の「全般」タブの IP アドレスから管理サーバが使用する IP アドレスを選択した後、「OK」または「適用」をクリックします。

注意

必ず「詳細設定」画面で「OK」または「適用」をクリックしてください。行わないと管理サーバが正常に動作しない場合があります。

(13)DPM に関する処理を終了してください。

(14)管理サーバの(CD-ROM)ドライブにインストール CD-ROM をセットします。

(15)使用している OS のアーキテクチャに応じて、以下の操作を行ってください。

・IA32 アーキテクチャマシンの場合：インストール CD-ROM 内の以下のファイルを実行してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合　：¥DPM¥TOOLS¥IP¥IA32¥RegSet2.reg
EE/SE 製品の場合　　：¥TOOLS¥IP¥IA32¥RegSet2.reg

・EM64T アーキテクチャマシンの場合：「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択して、実行するプログラムの名前に「%WINDIR%¥SysWOW64¥cmd.exe」を入力て、「OK」をクリックします。コマンドプロンプトが起動するので、起動したコマンドプロンプトから以下のファイルを実行してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合　：¥DPM¥TOOLS¥IP¥AMD64¥RegSet2.reg
EE/SE 製品の場合　　：¥TOOLS¥IP¥AMD64¥RegSet2.reg

(16)レジストリの追加画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

(17)レジストリの追加完了画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。

(18)Web コンソールから IP アドレスを変更した管理サーバに登録されているすべてのコンピュータに対してシャットダウン、またはリモートアップデートのシナリオ実行を行います。これにより各管理対象コンピュータに格納されている管理サーバの IP アドレスが自動的に変更されます。

以上で管理サーバの IP アドレスの変更手順は完了です。

20.2　データベースサーバのIPアドレス変更

■ データベースをインストールし、DPM の運用中にデータベースサーバの IP アドレスを変更する場合は、以下の手順に従ってください。

(1) DPM に関する処理を終了してください。

(2) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」から、「ユーザーズガイド 導入編 1.12 常駐サービスについて」の「■管理サーバ for DPM」に記載のサービスを停止します。

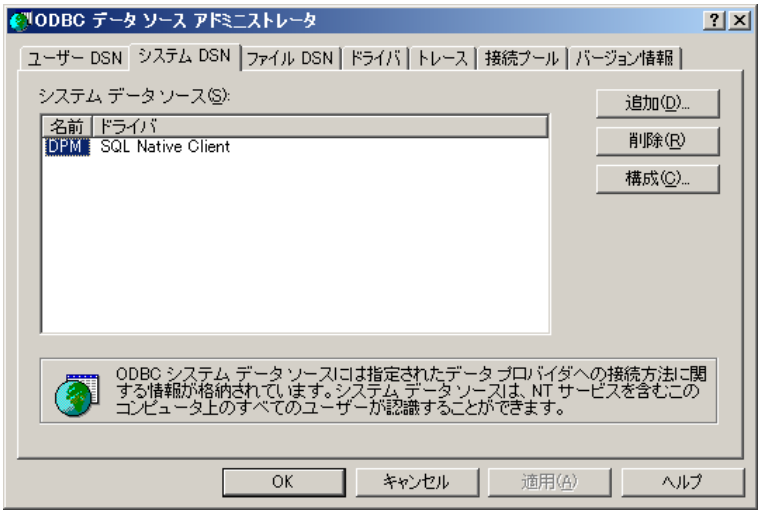
(3) 管理サーバ上で「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択し、実行するプログラムの名前に「regedit」を入力して「OK」をクリックしてください。

(4) レジストリエディタが起動されますので、使用している OS のアーキテクチャに応じて、以下のレジストリの「値のデータ」を変更するデータベースサーバの IP アドレスに変更してください。

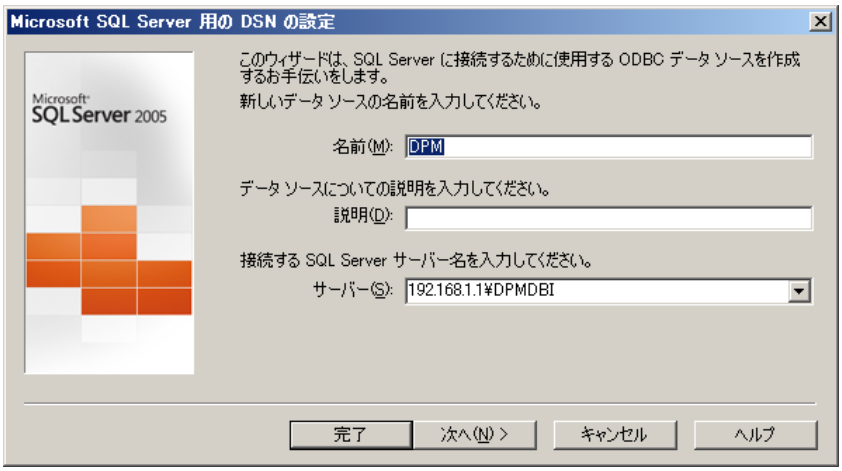
・IA32 アーキテクチャマシンの場合：
レジストリパス ：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥DeploymentManager
値の名前　　：DBSrvIPAddress
・EM64T アーキテクチャマシンの場合：
レジストリパス ：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥DeploymentManager
値の名前　　：DBSrvIPAddress

(5) 使用している OS のアーキテクチャに応じて、以下の操作を行ってください。
・IA32 アーキテクチャマシンの場合：「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「データソース（ODBC）」を選択します。
・EM64T アーキテクチャマシンの場合：「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択して、実行するプログラムの名前に「%WINDIR%¥SysWOW64¥cmd.exe」を入力て、「OK」をクリックします。コマンドプロンプトが起動するので、起動したコマンドプロンプトから「%WINDIR%¥SysWOW64¥odbcad32.exe」を実行してください。

(6) 以下の画面が表示されますので、「システム DNS」タブを選択します。
「システム データソース」の一覧から「DPM」を選択して「構成」ボタンをクリックします。



(7) 以下の画面が表示されますので、「接続する SQL Server サーバー名を入力してください。」の「サーバー」で変更するデータベースサーバを選択後、新しいデータベースサーバの IP アドレスに変更して「完了」ボタンをクリックしてください。



注意

管理サーバとデータベースサーバを同一マシンに構築している場合は、(8)の手順を行わずに本編「20.1 管理サーバのIPアドレス変更」を参照して、管理サーバのIPアドレスの変更を行ってください。

(8) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」から、手順(2)で停止したサービスを「開始」してください。

20.3 管理対象コンピュータのIPアドレス変更

■ 管理対象コンピュータの IP アドレスを変更した場合は、自動的に管理サーバに通知されますので、特に操作する必要はありません。

21　DPMのアンインストール

■ DPMの各機能に対するアンインストールについて説明します。アンインストールを行う前に、DPMに関する処理を終了させてください。また、イベントビューアが起動中の場合は、イベントビューアを終了させてください。

21.1　Webサーバ for DPMのアンインストール

■ Web サーバ for DPM のインストール時にインストールを行った JRE 6 Update 17、Tomcat 6.0.20、Web サーバ for DPM のアンインストールについて説明します。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

■ JRE 6 Update 17、Tomcat 6.0.20 を他のアプリケーションで利用しない場合には、以下の手順に従いアンインストールを行ってください。JRE 6 Update 17、Tomcat 6.0.20 のアンインストールを行わない場合は、「Web サーバ for DPM」のみアンインストールを行ってください。

■ Web サーバ for DPM のアンインストールについて説明します。

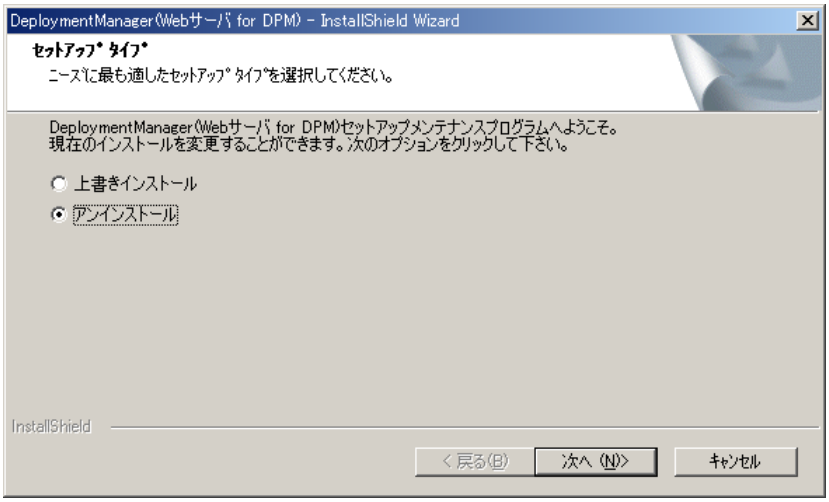
ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

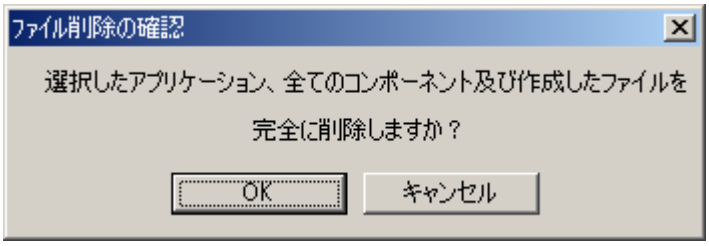
注意

■ 「プログラムの追加と削除」画面からアンインストールしないでください。正常にアンインストールできない場合があります。
■ Webサーバ for DPMのアンインストール中に、Tomcatが一時停止します。

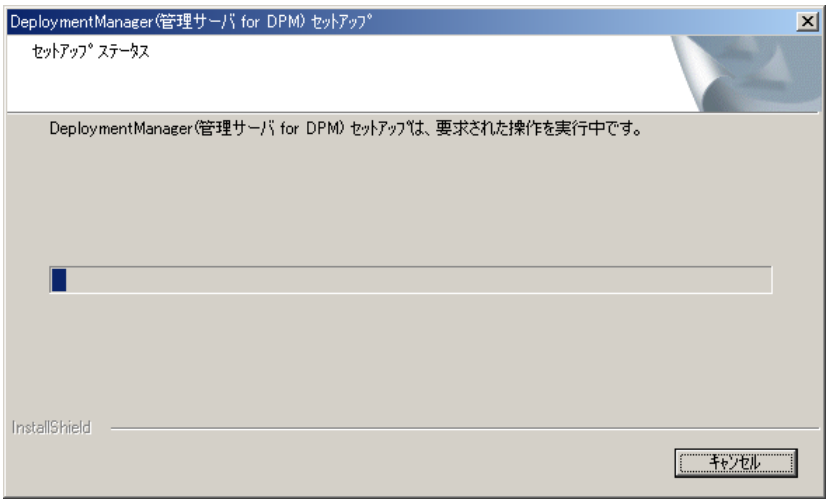
(1) Web サーバの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「Web サーバ for DPM のアンインストール」を選択します。「セットアップ タイプ」画面が表示されます。「アンインストール」にチェックを入れ「次へ」ボタンをクリックします。



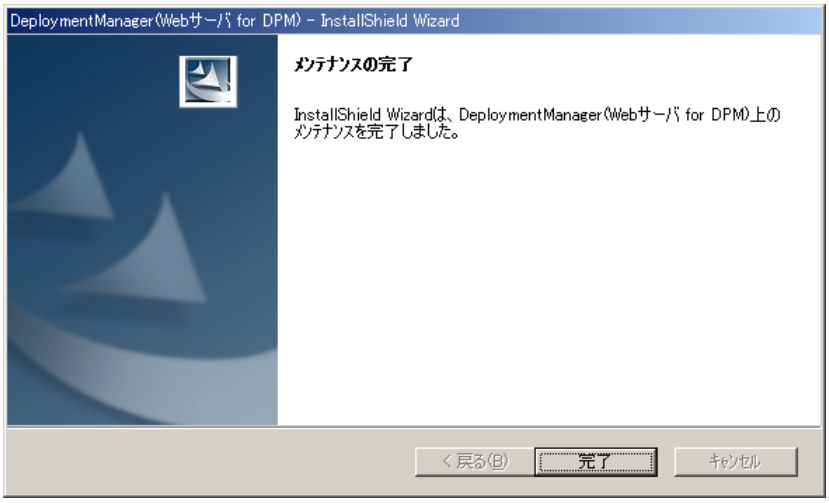
(2) 「ファイル削除の確認」画面が表示されます。「OK」ボタンをクリックします。



(3) 「セットアップステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。



(4) アンインストールが完了し、「メンテナンスの完了」画面が表示されるので、「完了」ボタンをクリックします。



■ Tomcat 6.0.20 のアンインストールについて説明します。

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。

(2) インストール CD-ROM 内の以下ファイルを実行します。

ヒント

SSC 向け製品の場合	:¥DPM¥Setup¥Tomcat¥Tomcat_Silent_Uninst.bat
EE/SE 製品の場合	:¥Setup¥Tomcat¥Tomcat_Silent_Uninst.bat

■ JRE のアンインストールについて説明します。
JRE のアンインストールを行うには、「プログラムの追加と削除」から行う方法と、インストール CD-ROM 内のファイルを実行してアンインストールする方法があります。

◆ 「プログラムの追加と削除」からアンインストールする

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」を選択しコントロールパネル画面を表示させます。

(2) コントロールパネル画面の「プログラムの追加と削除」を選択します。「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。

(3) 「プログラムの追加と削除」画面から「Java 6(TM) Update 17」を選択し、「削除」をクリックします。「プログラムの追加と削除」画面が表示されますので、「はい」をクリックします。

(4) 画面が閉じると Java6 Update 17 のアンインストールが完了です。再起動を促す画面が表示された場合は画面の指示に従ってください。

◆ インストール CD-ROM 内のファイルを実行してアンインストールする

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。

(2) インストール CD-ROM 内の以下ファイルを実行します。

ヒント

SSC 向け製品の場合	:¥DPM¥Setup¥JRE¥JRE_Silent_Uninst.bat
EE/SE 製品の場合	:¥Setup¥JRE¥JRE_Silent_Uninst.bat

21.2 管理サーバ for DPMのアンインストール

■ 管理サーバ for DPM をアンインストールする場合は、以下の手順で行ってください。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

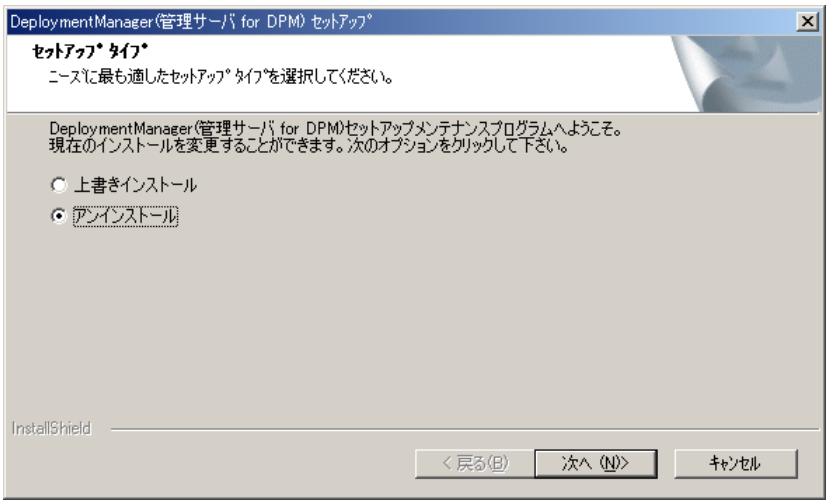
ヒント

以降は、EE/SE製品向けの手順となります。SSC向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenterインストレーションガイドも合わせて参照してください。

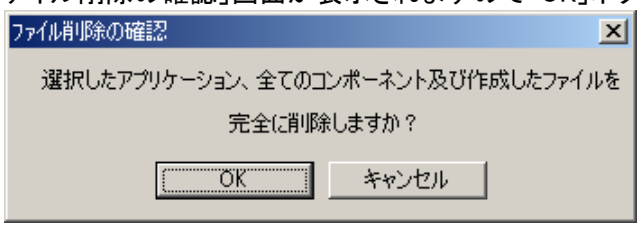
注意

- 「プログラムの追加と削除」画面からアンインストールしないでください。正常にアンインストールできない場合があります。
- データベースサーバとの通信が可能な場合のみ、データベースサーバから該当の管理サーバの情報が削除されます。

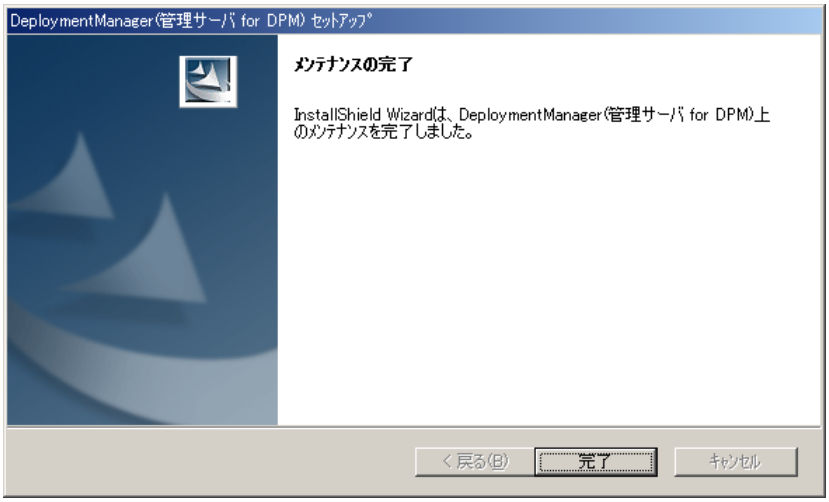
(1) 管理サーバ の「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「管理サーバ for DPM のアンインストール」を選択します。「セットアップ タイプ」画面が表示されますので、「アンインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。



(2) 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



(3) 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



■ Microsoft SQL Server Native Client のアンインストール

Microsoft SQL Server Native Client を他のアプリケーションで利用しない場合は、以下の手順に従いアンインストールを行ってください。

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」を選択しコントロールパネル画面を表示させます。

(2) コントロールパネル画面の「プログラムの追加と削除」を選択します。「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。

(3) 「プログラムの追加と削除」画面から「Microsoft SQL Server Native Client」を選択し、「削除」をクリックします。「プログラムの追加と削除」画面が表示されますので、「はい」をクリックします。

(4) 画面が閉じると Microsoft SQL Server Native Client のアンインストールが完了です。再起動を促す画面が表示された場合は画面の指示に従ってください。

21.3 データベースのアンインストール

■ データベースをアンインストールする場合は、以下の手順に沿って行ってください。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

■ データベースのアンインストールについて説明します。

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

注意

- データベースのアンインストールより前に、Microsoft .NET Framework 3.5 SP1をアンインストールしないでください。データベースが正しく動作しない場合があります。
- 「プログラムの追加と削除」画面からMicrosoft SQL Server 2005をアンインストールしないでください。正常にアンインストールできない場合があります。
- Microsoft SQL Server 2005自体は削除しない為、データベースをアンインストール完了後も、「プログラムの追加と削除」画面からMicrosoft SQL Server 2005は、削除されません。

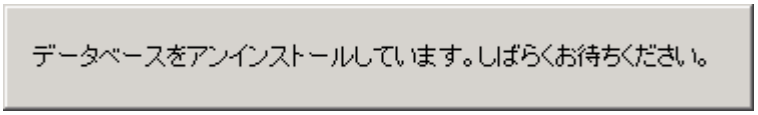
(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。

(2) インストール CD-ROM 内の以下ファイルを実行します。

ヒント

SSC 向け製品の場合 :¥DPM¥Setup¥DB¥dbadmin.exe
EE/SE 製品の場合 :¥Setup¥DB¥dbadmin.exe

(3) 以下の画面が表示され、アンインストールが開始されます。



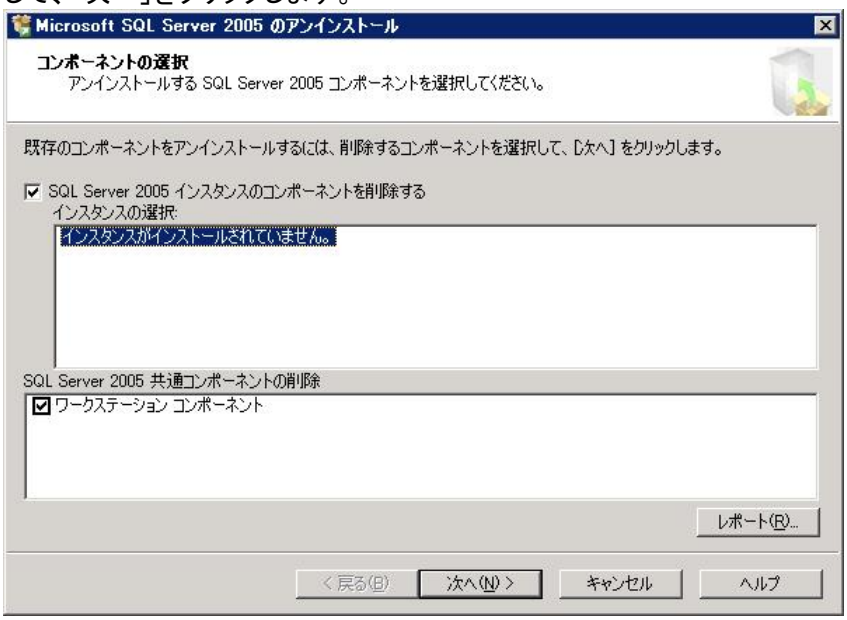
(4) 以下の画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックしてください。

■ Microsoft SQL Server 2005 のアンインストールについて説明します。

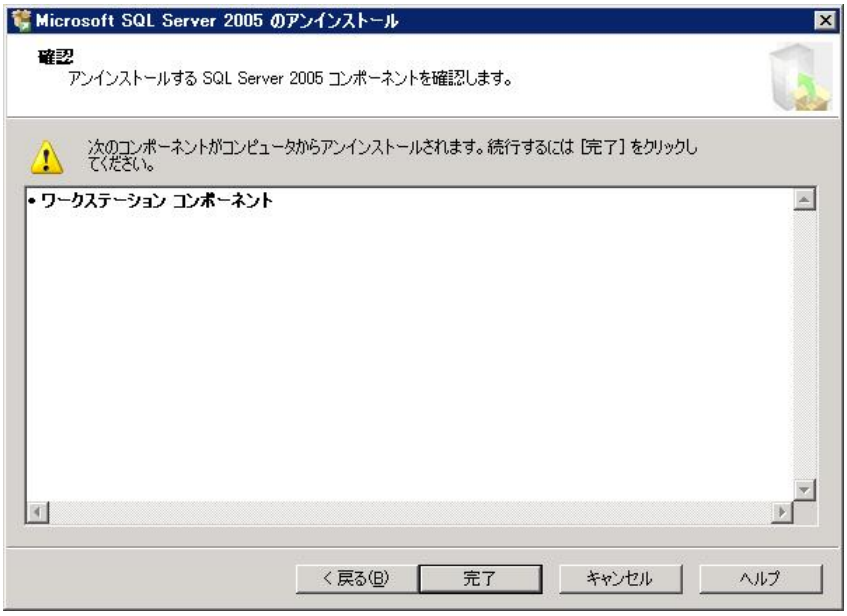
(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」を選択しコントロールパネル画面を表示させます。

(2) 「コントロールパネル」画面の「プログラムの追加と削除」を選択します。「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。

(3) 「プログラムの追加と削除」画面から「Microsoft SQL Server 2005」を選択し、「削除」をクリックします。「Microsoft SQL Server 2005 のアンインストール」画面が表示されますので、削除するコンポーネントを選択して、「次へ」をクリックします。



(4) アンイストールを行う SQL Server 2005 のコンポーネントの確認画面が表示されますので、確認後、「完了」をクリックしてください。



(5) 画面が閉じると Microsoft SQL Server 2005 のアンインストールが完了です。再起動を促す画面が表示された場合は画面の指示に従ってください。

■ Microsoft SQL Server Native Client のアンインストール
本編「21.2 管理サーバ for DPM のアンインストール」を参照してアンインストールを行ってください。

■ Microsoft SQL Server VSS Writer のアンインストール
Microsoft SQL Server Native Client のアンインストールと同様の手順となります。
Microsoft SQL Server VSS Writer を他のアプリケーションで利用しない場合は、本編「21.2 管理サーバ for DPM のアンインストール」の「■ Microsoft SQL Server Native Client のアンインストール」を参考にしてアンインストールを行ってください。

21.4 Webコンソールのアンインストール

■ Web コンソールをアンインストールする場合は、JRE のアンインストールを行います。JRE を他のアプリケーションで利用する場合には、JRE をアンインストールしないでください。アンインストールを行う場合、ローカル/リモートで接続している Web ブラウザがないことを確認し DPM に関する処理を終了させてください。

■ JRE のアンインストールについて説明します。
JRE のアンインストールを行うには、「プログラムの追加と削除」から行う方法と、インストール CD-ROM 内のファイルを実行してアンインストールする方法があります。

ヒント
以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

◆ 「プログラムの追加と削除」からアンインストールする

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」を選択しコントロールパネル画面を表示させます。

(2) コントロールパネル画面の「プログラムの追加と削除」を選択します。「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。

(3) 「プログラムの追加と削除」画面から「Java(TM) 6 Update 17」を選択し、「削除」をクリックします。「プログラムの追加と削除」画面が表示されますので、「はい」をクリックします。

(4) 画面が閉じると JRE 6 Update 17 のアンインストールが完了です。再起動を促す画面が表示された場合は画面の指示に従ってください。

◆ インストール CD-ROM 内のファイルを実行してアンインストールする

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。

(2) インストール CD-ROM 内の以下ファイルを実行します。

ヒント

SSC 向け製品の場合	:¥DPM¥Setup¥JRE¥JRE_Silent_Uninst.bat
EE/SE 製品の場合	:¥Setup¥JRE¥JRE_Silent_Uninst.bat

21.5 クライアントサービス for DPMのアンインストール

■ クライアントサービス for DPM のアンインストールについて説明します。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

21.5.1 クライアントサービス for DPMのアンインストール（Windows）

■ クライアントサービス for DPM のアンインストールを行うには、コマンドプロンプトからアンインストールする方法と、「プログラムの追加と削除」から行う方法があります。

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

注意

以下のいずれかの場合は、「◆「プログラムの追加と削除」からアンインストールする」を参照して、アンインストールを行ってください。それ以外の場合は、「◆コマンドプロンプトからアンインストールする」を参照して、アンインストールを行ってください。

・「プログラムの追加と削除」画面に「DeploymentManager」が表示されている場合
・Windows Server 2008 (Server Coreインストール)

◆ コマンドプロンプトからアンインストールする

注意

■ 以下の OS の場合は、「WINNT」の部分を「WINDOWS」に読み替えて作業をすすめてください。
・Windows Server 2008 Standard、Enterprise、Datacenter
・Windows Server 2003 Standard Edition、Enterprise Edition、Datacenter Edition
・Windows Server 2003 R2 Standard Edition、Enterprise Edition、Datacenter Edition
・ Windows XP Professional
■ EM64T アーキテクチャマシンの場合は、「system32」の部分を「SysWOW64」に読み替えて作業をすすめてください。

(1) クライアントサービス for DPM がインストールされているコンピュータに管理者権限を持ったユーザでログインします。

(2) コマンドプロンプトを起動し、以下のクライアントサービス for DPM がインストールされているフォルダに移動します。

（例）C ドライブにクライアントサービス for DPM がインストールされている場合

```
C:¥＞ cd /d %systemroot%¥system32
```

(3) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを順に実行してリモートアップデートサービスをアンインストールします。

```
rupdsvc.exe -remove
del rupdsvc.exe
del clisvc.ini
```

（例）C ドライブにクライアントサービス for DPM がインストールされている場合

```
C:¥WINNT¥system32＞rupdsvc.exe -remove
C:¥WINNT¥system32＞del rupdsvc.exe
C:¥WINNT¥system32＞del clisvc.ini
```

(4) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを順に実行してエージェントサービスをアンインストールします。

```
depagent.exe -remove
del depagent.exe
del depagent.dll
del depinfo.dll
del L4dpm.ini
del L4dpm.dll
```

(例)C ドライブにクライアントサービス for DPM がインストールされている場合

```
C:¥WINNT¥system32＞depagent.exe -remove
C:¥WINNT¥system32＞del depagent.exe
C:¥WINNT¥system32＞del depagent.dll
C:¥WINNT¥system32＞del depinfo.dll
C:¥WINNT¥system32>del L4dpm.ini
C:¥WINNT¥system32>del L4dpm.dll
```

(5) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行して自動更新状態表示ツールをアンインストールします。

```
del DPMtray.exe
```

(例)C ドライブに自動更新状態表示ツールがインストールされている場合

```
C:¥WINNT¥system32＞del DPMtray.exe
```

(6) 「スタート」メニューの「プログラム」フォルダに移動します。

(例)C ドライブに OS がインストールされている場合

```
C:¥WINNT¥system32＞cd %allusersprofile%¥スタート メニュー¥プログラム
```

(7) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行して自動更新状態表示ツールのショートカットを削除します。

(例)C ドライブに OS がインストールされている場合

```
C:¥Documents and Settings¥All Users¥スタート メニュー¥プログラム＞ rmdir /s /q
DeploymentManager
```

ヒント

自動更新状態表示ツールのショートカットが作成されていない場合に上記コマンドを実行するとエラーが表示されますが、問題ありませんので、コマンドプロンプトを終了してください。

◆「プログラムの追加と削除」からアンインストールする

(1)「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」から、「DeploymentManager」を選択し、「削除」をクリックします。

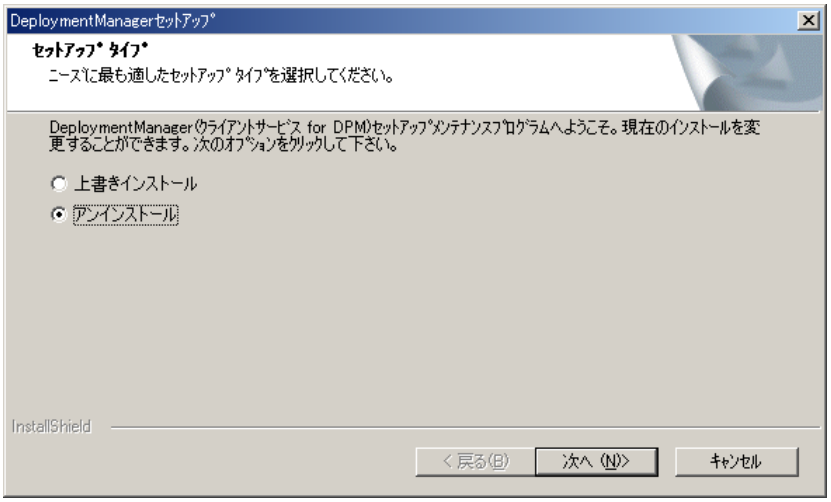
ヒント

Windows Server 2008 (Server Core インストール)の場合は、コマンドラインから、以下ファイルを実行してください。

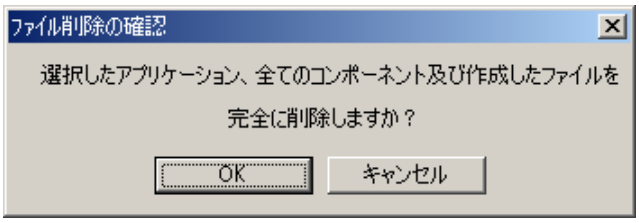
・IA32 アーキテクチャマシンの場合 ：
"%SystemDrive%¥Program Files¥InstallShield Installation Information¥{6F68AC00-5FFD-42DE-B52E-D690D3DD4278}¥setup.exe" -runfromtemp -l0x0011uninstall -removeonly

・EM64T アーキテクチャマシンの場合 ：
"%SystemDrive%¥Program Files(x86)¥InstallShield Installation Information¥{6F68AC00-5FFD-42DE-B52E-D690D3DD4278}¥setup.exe" -runfromtemp -l0x0011uninstall -removeonly

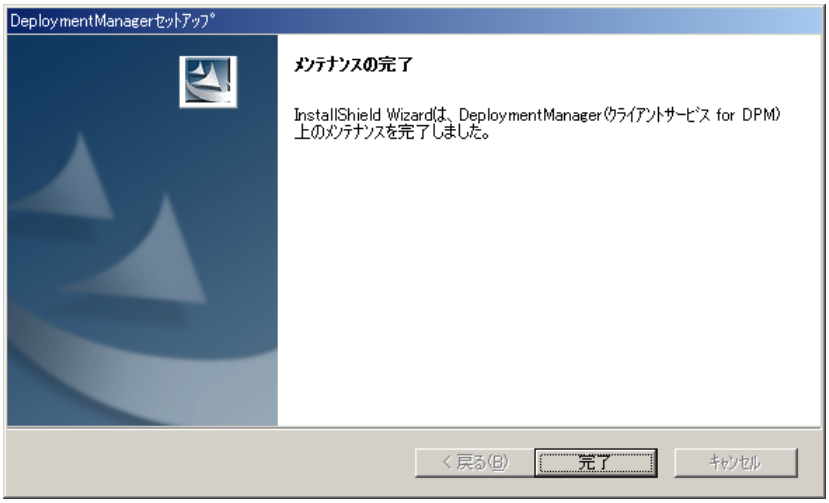
(2)「セットアップタイプ」画面が表示されますので、「アンインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。



(3)「ファイル削除の確認」画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



(4) 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



注意

アンインストール中に「キャンセル」を選択しても、ファイルが削除される可能性があります。その場合はインストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットし、「クライアントサービス for DPM」を上書きインストールしてください。その後、再度アンインストールを行ってください。

21.5.2 クライアントサービス for DPMのアンインストール(Linux)

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

注意

- Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4、SUSE Linux Enterprise 9 の場合は、"/mnt"部を"/media"に読み替えて作業をすすめてください。
- SUSE Linux Enterprise 10、11 の場合は、"/mnt/cdrom"部を"/media/CD-ROM のボリュームラベル"に読み替えて作業をすすめてください。

(1) クライアントサービス for DPM(Linux)がインストールされているコンピュータに root アカウントでログインする。

(2) インストール CD-ROM を CD-ROM ドライブにセットしてください。

(3) インストール CD-ROM をマウントしてください。
mount /mnt/cdrom

ヒント

SSC 向け製品の場合 :
cd /mnt/cdrom/DPM/Linux/クライアントのアーキテクチャ/bin/agent
EE/SE 製品の場合 :
cd /mnt/cdrom/Linux/クライアントのアーキテクチャ/bin/agent

※「*クライアントのアーキテクチャ*」フォルダのフォルダ名は以下のようになります。
IPF アーキテクチャマシンの場合 : ia64
IA32、EM64T アーキテクチャマシンの場合 : ia32

例)# cd /mnt/cdrom/DPM/Linux/ia64/bin/agent

(4) depuninst.sh を実行してください。

```
# ./depuninst.sh
```

21.6 イメージビルダー(リモートコンソール)のアンインストール

■ イメージビルダー(リモートコンソール)をアンインストールする場合は、以下の手順で行ってください。
アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

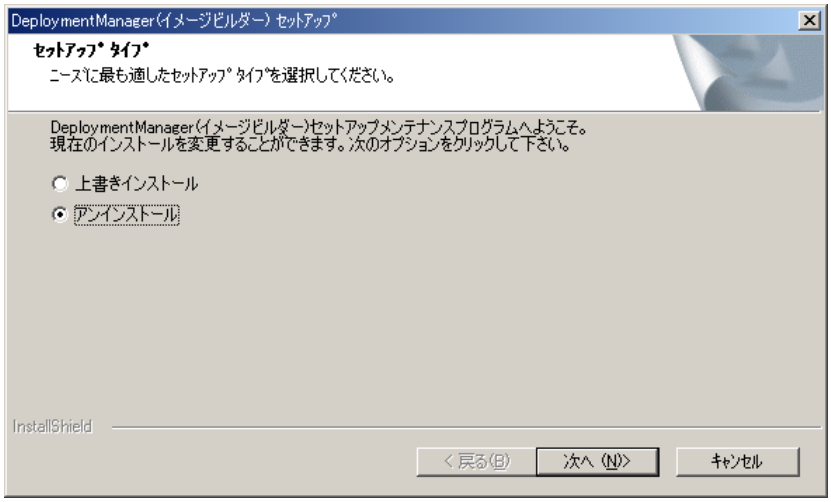
ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

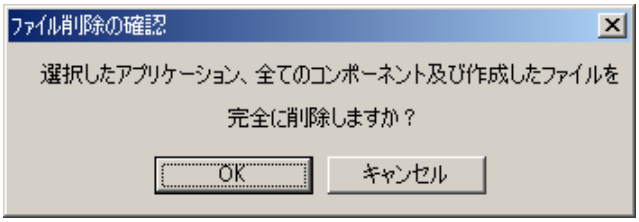
注意

「プログラムの追加と削除」画面からアンインストールしないでください。正常にアンインストールできない場合があります。

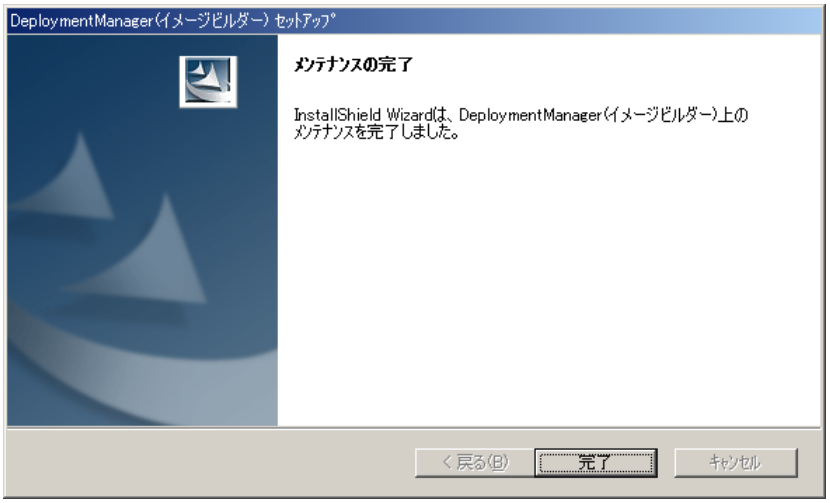
(1) イメージビルダー(リモートコンソール)をインストールしたコンピュータの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダーのアンインストール」を選択します。「セットアップ タイプ」画面が表示されますので、「アンインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。



(2) 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



(3) 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



21.7 コマンドライン for DPMのアンインストール

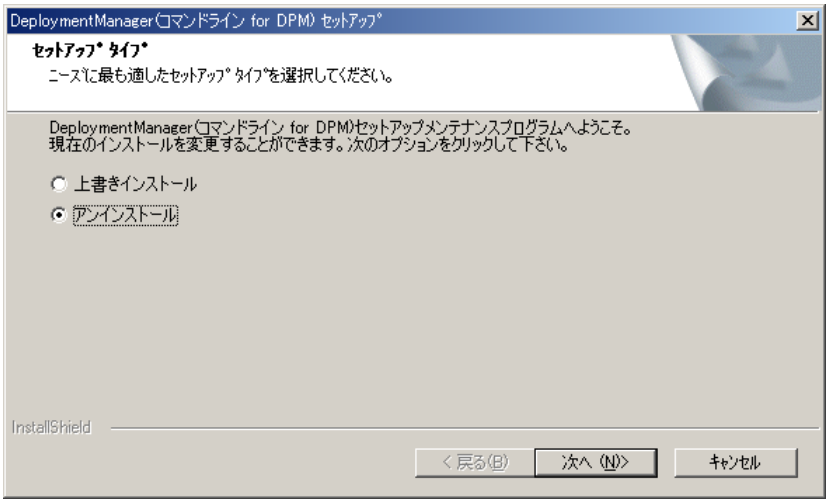
■ コマンドライン for DPM のアンインストールについて説明します。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

ヒント

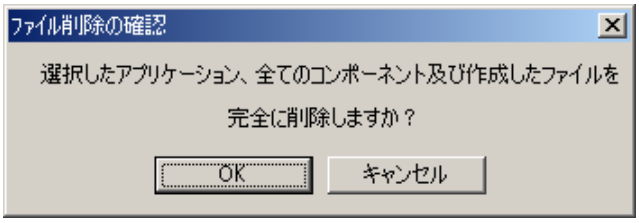
以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」から、「DeploymentManager(コマンドライン for DPM)」を選択し、「削除」をクリックします。

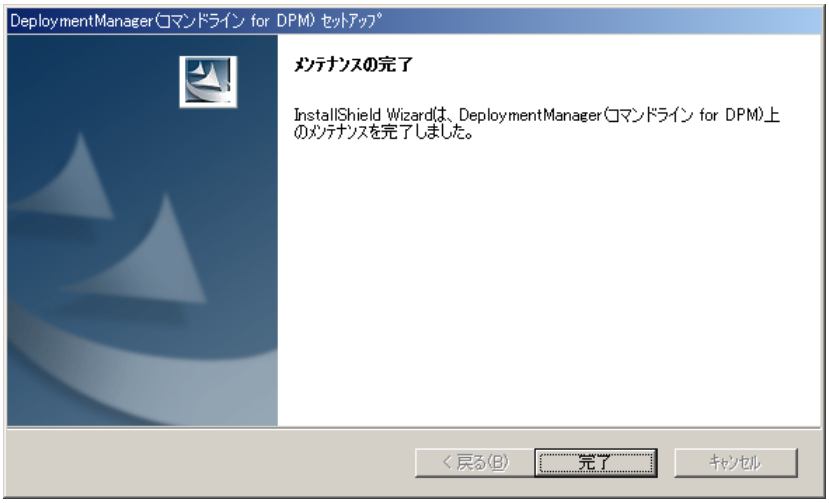
(2) 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、「アンインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。



(3) 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



(4) 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



21.8 パッケージビルダのアンインストール

■ パッケージビルダのアンインストールについて説明します。アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

(1) パッケージビルダをインストールしているコンピュータの「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」から、「LANDesk 拡張パッケージビルダ－JPN」を選択し、「変更と削除」をクリックします。

(2) アンインストール画面が表示されますので、「はい」をクリックします。

(3) アンインストールが完了したことが表示されますので、「OK」をクリックします。

(4) コンピュータから正常に削除されたことが表示されますので「OK」をクリックします。

22　DPMの上書きインストール

ヒント

■ 以下のように各製品の旧バージョンからのみ上書きインストールをサポートしています。
・旧バージョンのSE製品から、本バージョンのSE製品への上書きインストール
・旧バージョンのEE製品から、本バージョンのEE製品への上書きインストール
・旧バージョンのSSC向け製品から、本バージョンのSSC向け製品への上書きインストール
■ DPM Ver5.0 以前の VirtualPCCenter VH 版をインストール後に本バージョンの SSC 向け製品、EE 製品、SE 製品をインストールする場合は、VirtualPCCenter VH 版をアンインストール後に該当する DPM 製品をインストールしてください。
■ 上書きインストールを行う前に「ユーザーズガイド 導入編 1 DPM をインストールする前に」を参照して本バージョンのサポート対象であることを確認してください。

■ DPM の各機能に対する上書きインストールについて説明します。上書きインストールを行う前に、DPM に関する処理をすべて終了してください。イベントビューアが起動中の場合は、イベントビューアを終了させてください。

重要

DPM Ver1.0 からは上書きインストールできません。

注意

「プログラムの追加と削除」から上書きインストールはできません。
インストール CD-ROM から上書きインストールを行ってください。

22.1　Webサーバ for DPMの上書きインストール

■ Web サーバ for DPM の上書きインストールについて説明します。

■ DPM Ver4.3 以前の Web サーバ for DPM からの上書きインストール手順

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

(1) お持ちのバージョンのユーザーズガイドに記載されているアンインストール手順に従って、Web サーバ for DPM と Tomcat、及び JRE をアンインストールしてください。(JRE のアンインストールについては、省略可能です。)

(2) 「ユーザーズガイド 導入編 2.1 Web サーバ for DPM のインストール」の手順に沿って、Web サーバ for DPM をインストールしてください。

(3) 「ユーザーズガイド 導入編 2.2 データベースのインストール」の手順に沿って、データベースをインストールしてください。

(4) 本編「22.3 管理サーバ for DPM の上書きインストール」の手順に沿って、管理サーバ for DPM の上書きインストールをしてください。

(5) Web コンソールから管理サーバ for DPM を再登録してください。設定方法については、「ユーザーズガイド 導入編 4.1 管理サーバの登録」を参照してください。

■ DPM Ver5.0 以降の Web サーバ for DPM の上書きインストール手順

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

注意

- ■ インストーラ形式の実行ファイルを使用してインストールされた Tomcat に対して、インストール CD-ROM に収録されている Tomcat を上書きインストールすることはできません。インストール CD-ROM を使用して Tomcat のバージョンアップを行う場合は Tomcat をアンインストールしてからインストールしてください。
- ■ Web サーバ for DPM の上書きインストール時に、Tomcat が一時停止します。
- ■ Tomcat 6.0.20 がインストール済みの環境で、Tomcat が使用する JRE のバージョンを変更する場合は、下記のレジストリを編集後、Tomcat を再起動する必要があります。

  例） JRE 1.4.2_03 から JRE 6 Update 17 に変更する場合

  レジストリ: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Software Foundation¥Procrun 2.0¥Tomcat6¥Parameters¥Java¥Jvm

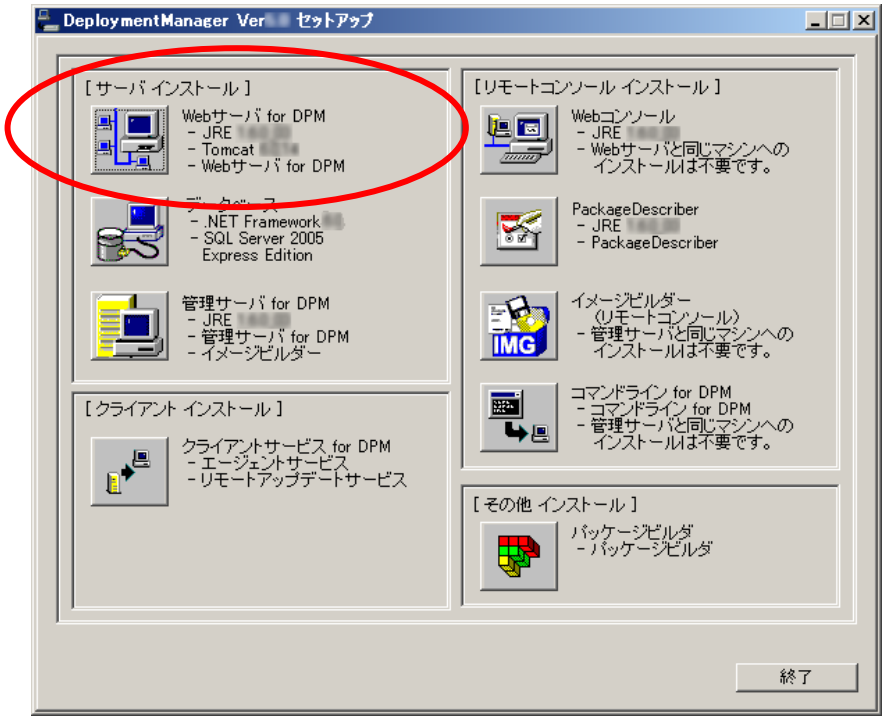
  [変更前]

  "C:¥Program Files¥Java¥j2re1.4.2_03¥bin¥client¥jvm.dll"

  [変更後]

  "C:¥Program Files¥Java¥jre6¥bin¥client¥jvm.dll"

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「Web サーバ for DPM」を選択します。



(2) 「インストール方法の選択」画面が表示されます。「JRE 6 Update 17」「Tomcat 6.0.20」「Web サーバ for DPM」のうち、上書きインストールを行いたい項目をチェックして「OK」をクリックしてください。「キャンセル」をクリックすると「DeploymentManager セットアップ」画面に戻ります。

注意 カスタムインストールを使用して JRE/Tomcat/Web サーバ for DPM を、推奨する組み合わせ以外で上書きインストールした場合、正常に動作しない可能性があります。

(3) 以降に表示されるメッセージは選択した項目により順序が異なります。(チェックをした項目内で上から順番にインストールされます。)ここでは標準上書きインストールの説明を行います。

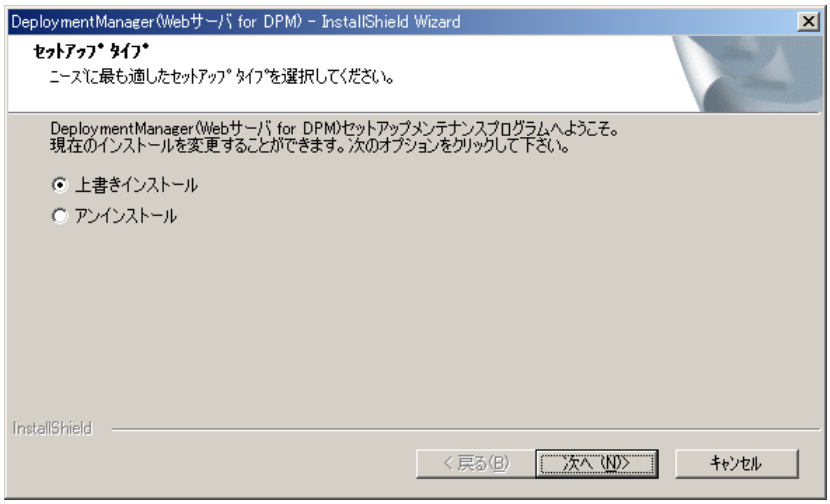
(4) 「確認」画面が表示されますので「はい」をクリックします。

(5) JRE のインストールが開始されるのでしばらくお待ちください。

(6) 続けて Tomcat のインストールが開始するので以下の画面が表示されたら、「OK」をクリックします。

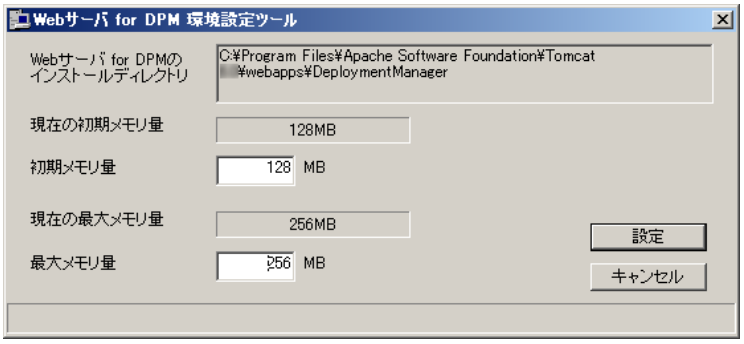
(7) Tomcat のインストールが完了すると、以下の「確認」画面が表示されるので「OK」をクリックします。

(8) Tomcat のインストールが終了すると、続いて「セットアップタイプ」画面が表示されるので、「上書きインストール」を選択して「次へ」ボタンをクリックしてください。



(9) 確認画面が表示されるので「OK」ボタンをクリックします。

(10) 自動的に処理が進み「Web サーバ for DPM 環境設定ツール」画面が表示されます。「Web サーバ for DPM」が使用するメモリの設定を行います。Web サーバが使用するメモリ量を入力して「OK」をクリックしてください。



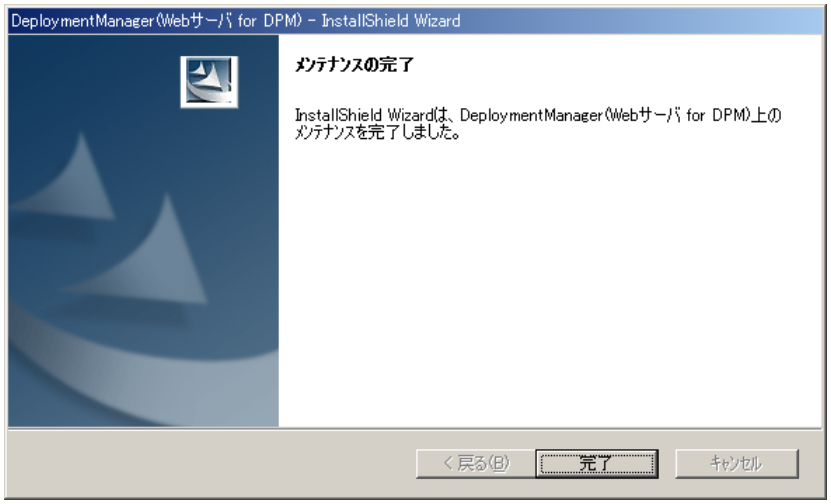
ヒント

- 使用メモリ量は、128～512 の範囲の値を設定してください。
- 使用メモリ量の設定は、Web サーバの「スタート」メニュー→「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「webconfig」から変更可能です。

(11) Webサーバサービス（Apache Tomcat）の再起動を求めるメッセージが表示されるので、「はい」をクリックします。

(12) 「Web サーバサービス(Apache Tomcat)の起動に成功しました」と表示されるので「OK」をクリックします。

(13) インストールが完了し、「InstallShield Wizard の完了」画面が表示されるので「完了」をクリックします。



ヒント　インストール完了後、「スタート」メニューに「DeploymentManager」が登録されます。

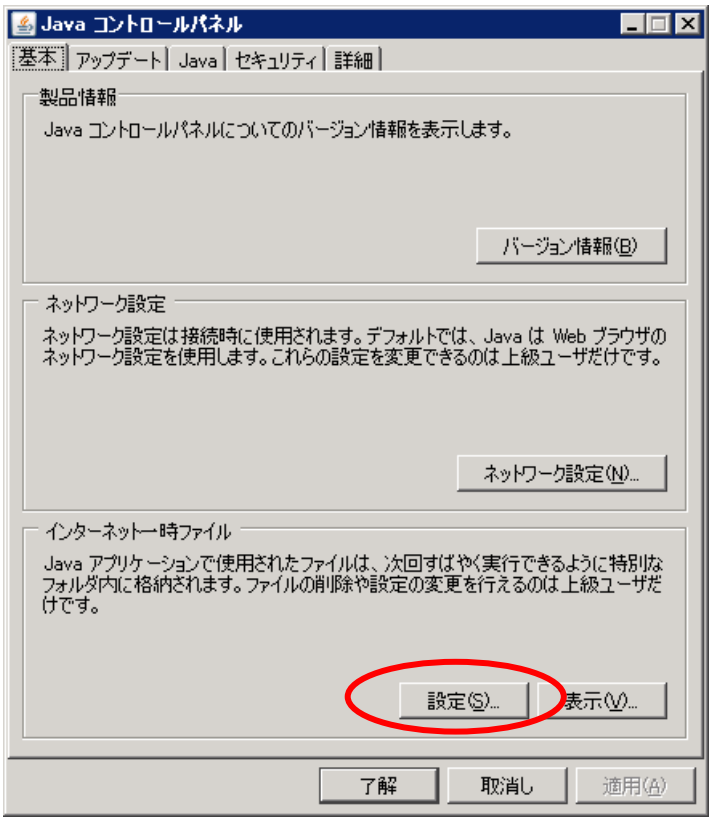
(14) インストール完了後、以下の手順にて「Java コントロールパネル」を表示します。

・IA32 アーキテクチャマシンの場合:「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「Java」を選択します。

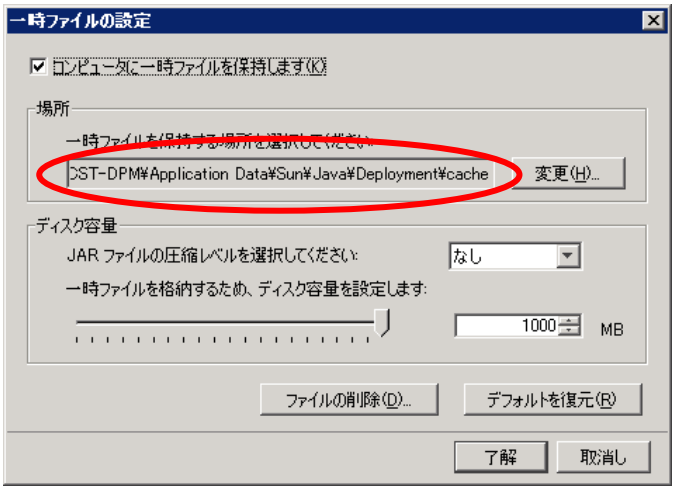
・EM64T アーキテクチャマシンの場合:<JRE インストールフォルダ>¥bin¥javacpl.exe を実行します。

(<JRE インストールフォルダ>の既定値は、「C:¥Program Files (x86)¥Java¥jre6」です。)

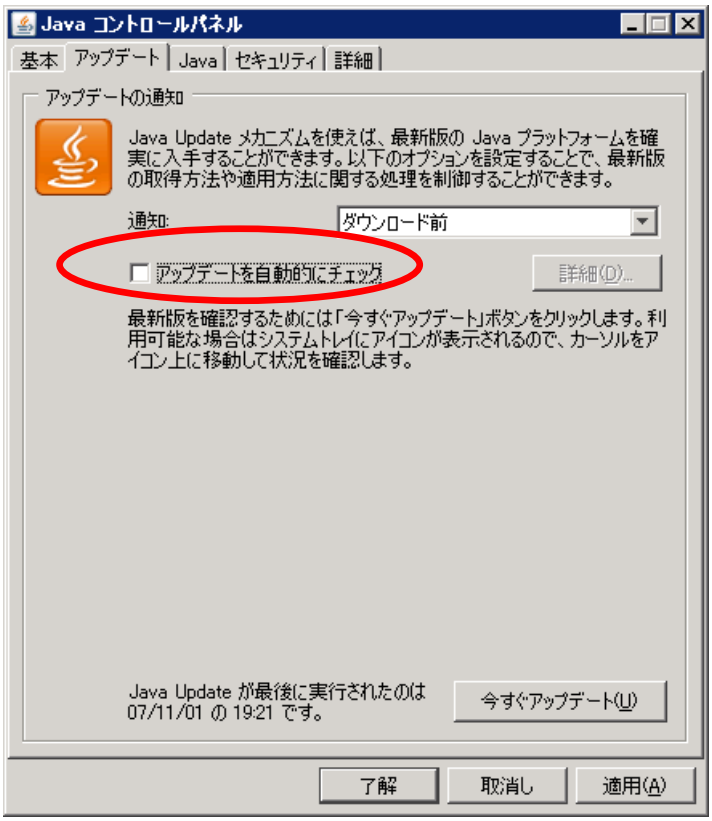
(15)「基本」タブを選択し、「インターネット一時ファイル」の「設定」ボタンをクリックします。



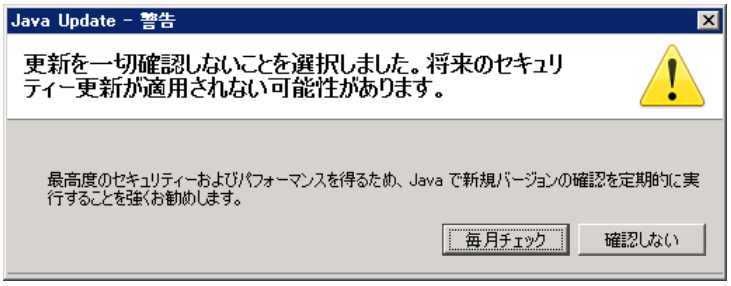
(16)「一時ファイルの設定」画面が表示されます。一時ファイルを保存する場所に記載されているフォルダパスをエクスプローラ等で開いて、配下のフォルダおよびファイルを全て削除した後に「取消し」ボタンをクリックしてください。



(17) 「Java コントロールパネル」の「アップデート」タブを選択し、「アップデートを自動的にチェック」のチェックを外し、「了解」ボタンをクリックします。

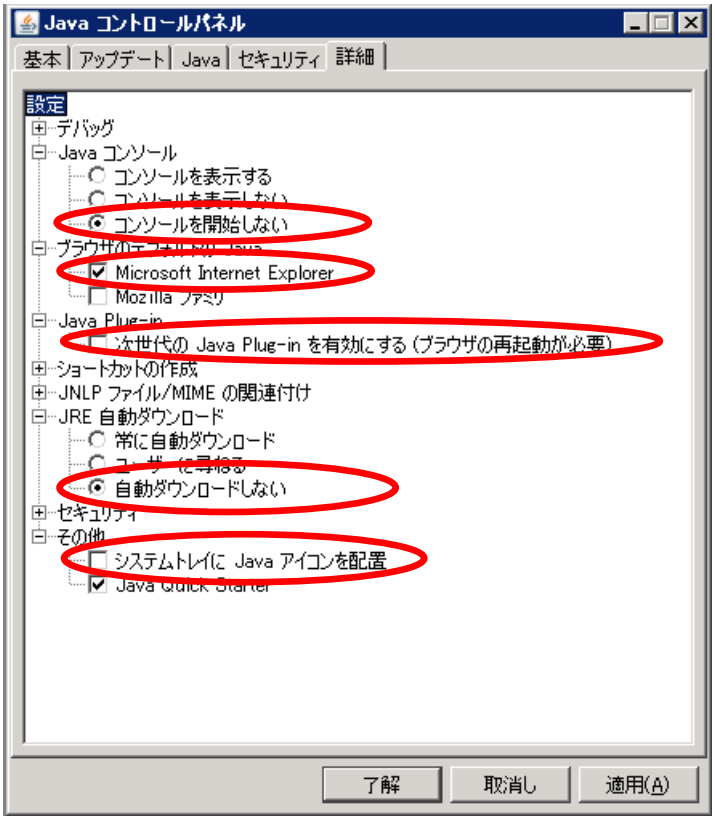


以下のように「Java Update － 警告」画面が表示された場合は、「確認しない」ボタンをクリックしてください。



(18) 「Java コントロールパネル」の「詳細」タブを選択し、以下 5 つの設定をします。

・「Java コンソール」の「コンソールを開始しない」を選択する
・「ブラウザのデフォルトの Java」の「Microsoft Internet Explorer」にチェックを入れる
・「Java Plug-in」の「次世代の Java Plug-in を有効にする（ブラウザの再起動が必要）」のチェックを外す
・「JRE 自動ダウンロード」の「自動ダウンロードしない」を選択する
・「その他」の「システムトレイに Java アイコンを配置」のチェックを外す



(19) 「了解」ボタンをクリックして「Java コントロールパネル」の画面を閉じます。

(20) 以上で Java Plug-in の設定は完了です。

以上で Web サーバ for DPM の上書きインストールは完了です。

22.2　データベースの上書きインストール

■　データベースの上書きインストール手順について説明します。

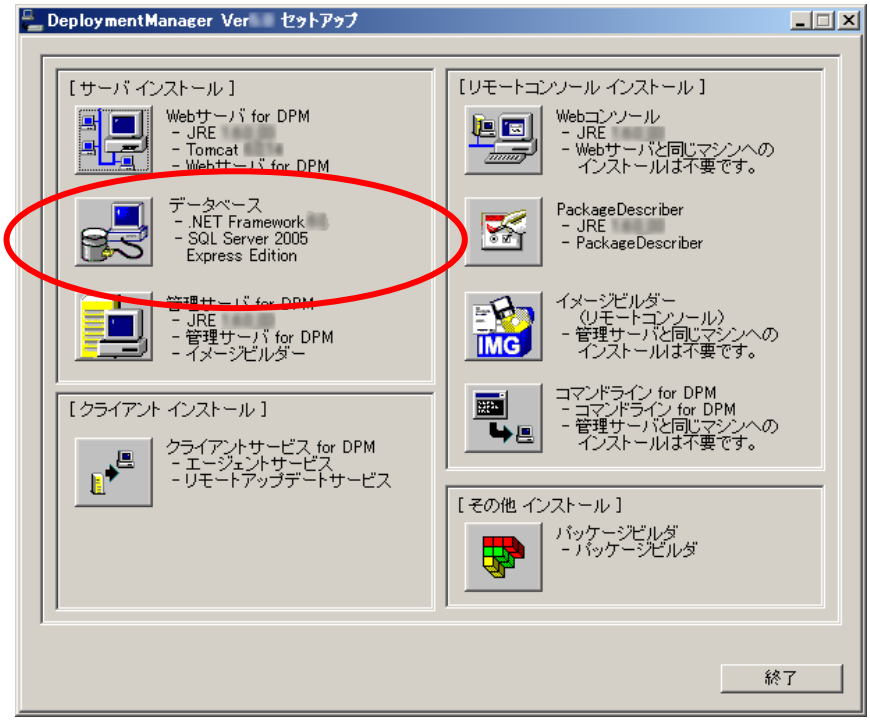
ヒント

■　旧バージョンから上書きインストールする場合は、本章の手順にて、上書きインストールを行った場合でも旧バージョンで使用していた SQL Server 2005 Express Edition Service Pack 2 を使用します。以降の手順に沿って、SQL Server 2005 Express Edition Service Pack 2 をインストールした後に SQL Server 2005 Express Edition のサービスパックを適用する場合は、製品サイト(以下)に掲載の資料を参照してください。
　製品サイト(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/)
　　→「動作環境」を選択
　　→「データベース(DPM インスタンス)への Service Pack 適用手順」

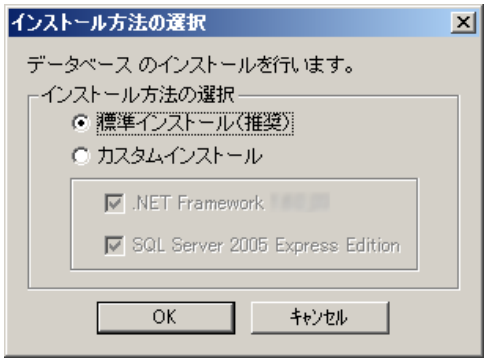
■　以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

(1) 「ユーザーズガイド 導入編 1.12 常駐サービスについて」の「■ 管理サーバ for DPM」と「■ Web サーバ for DPM」に記載のサービスを全て停止してください。

(2) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「データベース」を選択します。

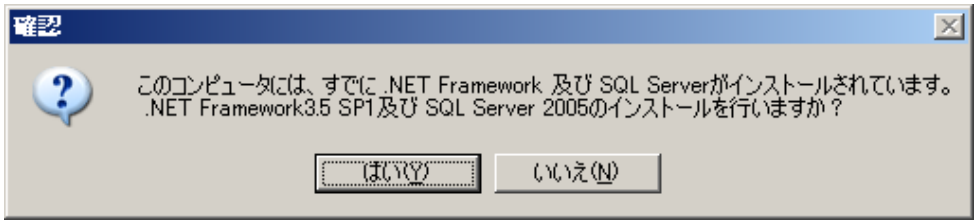


(3) 「インストール方法の選択」画面が表示されます。標準インストールを選択し「OK」をクリックしてください。
「キャンセル」をクリックすると「DeploymentManager セットアップ」画面に戻ります。

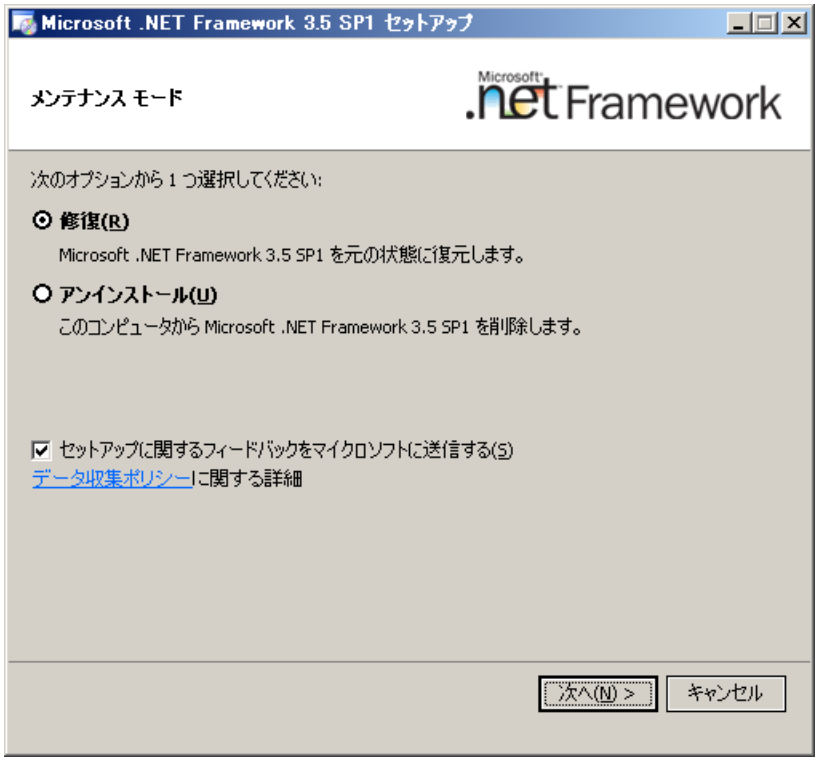


注意 Windows Server 2008 にデータベースを上書きインストールする場合は、「カスタムインストール」で「SQL Server 2005 Express Edition」のみにチェックを入れて「OK」ボタンをクリック後に(10)へ進んでください。

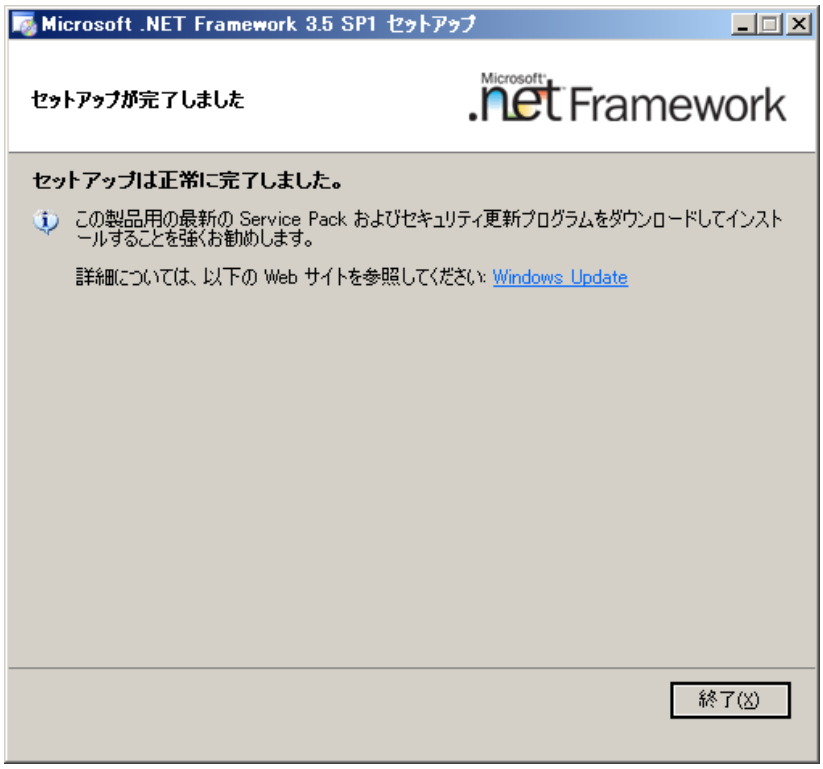
(4) 「確認」画面が表示されますので「はい」をクリックします。



(5) 以下の画面が表示されますので、「修復」を選択後、「次へ」ボタンをクリックします。
(「セットアップに関するフィードバックをマイクロソフトに送信する」チェックボックスについて、データ収集ポリシーに同意しない場合は、チェックを外してください。)



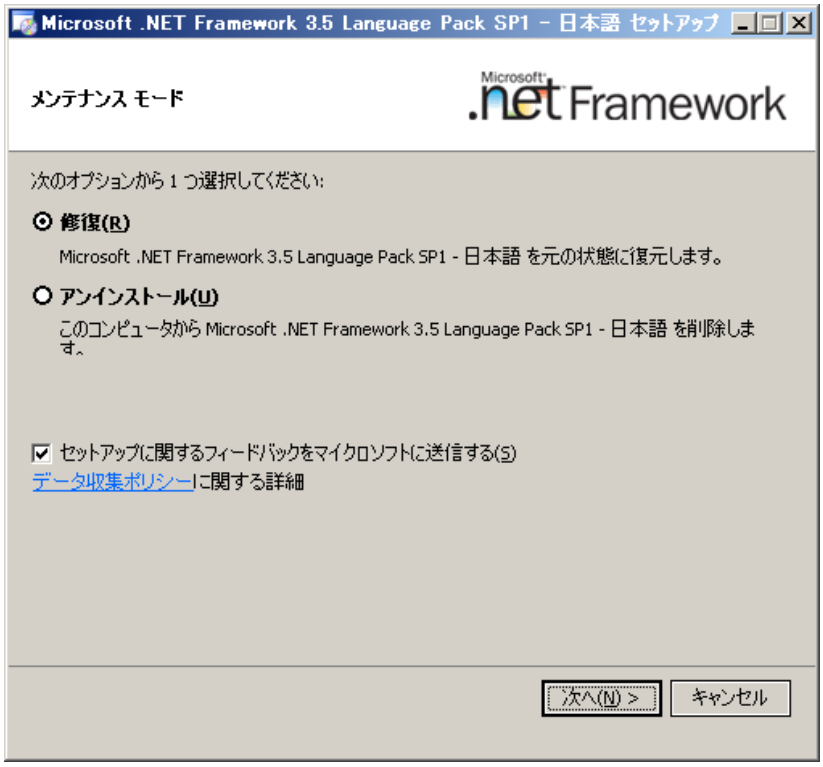
(6) インストールが開始され、インストールが完了すると、以下の画面が表示されますので、「終了」ボタンをクリックします。



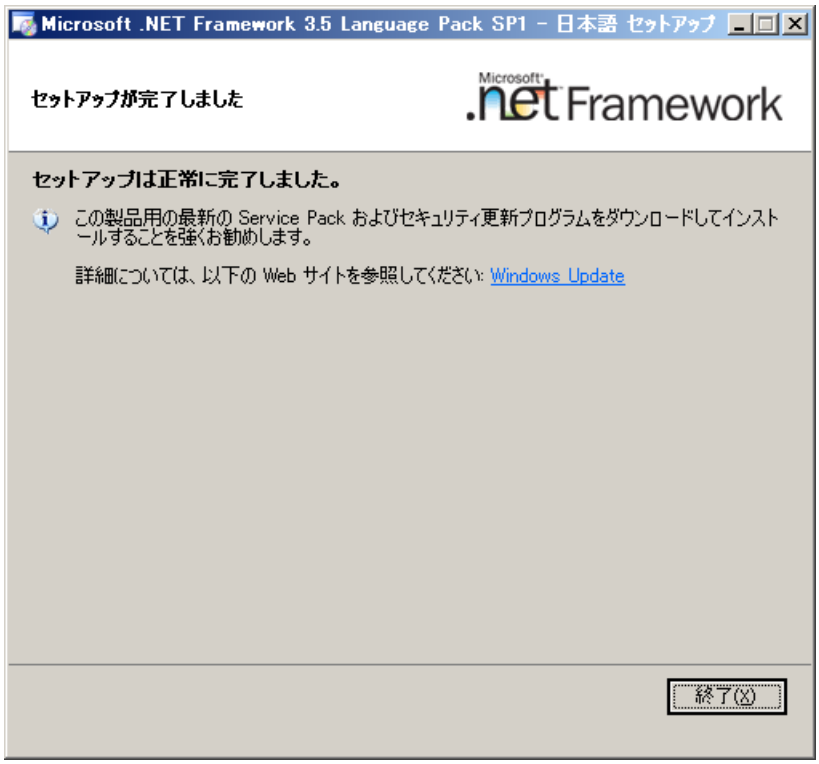
注意

「終了」ボタンをクリックした後にマシンの再起動を促す画面が表示された場合は、画面の指示に従ってマシンの再起動を行ってください。
マシンを再起動した場合は、(1)から(4)の手順を行って、(5)で「キャンセル」ボタンをクリックした後に(7)に進んでください。

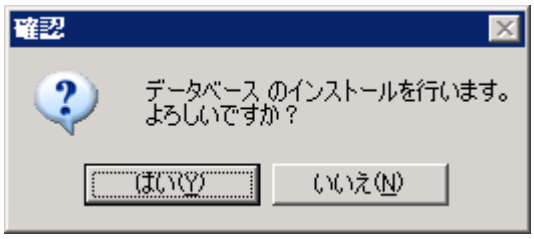
(7) Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 Japanese Language Pack の「メンテナンスモード」画面が表示されます。「修復」を選択後、「次へ」ボタンをクリックします。
(「セットアップに関するフィードバックをマイクロソフトに送信する」チェックボックスについて、データ収集ポリシーに同意しない場合は、チェックを外してください。)



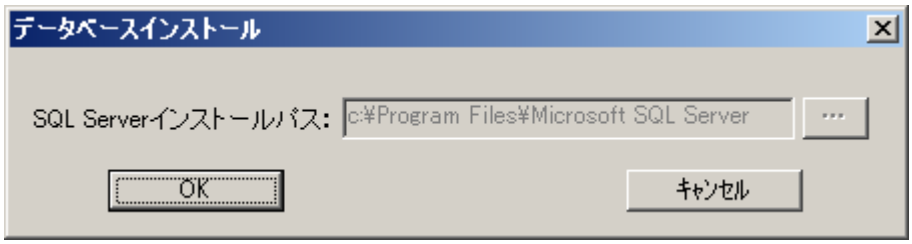
(8) インストールが開始され、インストールが完了すると、以下の画面が表示されますので、「終了」ボタンをクリックします。



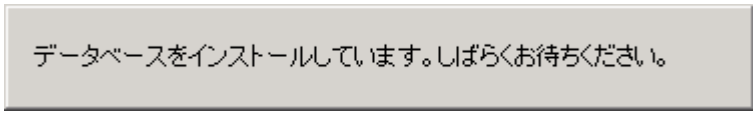
(9) .NET Framework 3.5 SP1 Japanese Language Pack のインストールが完了すると、以下の画面が表示されるので、「はい」をクリックします。



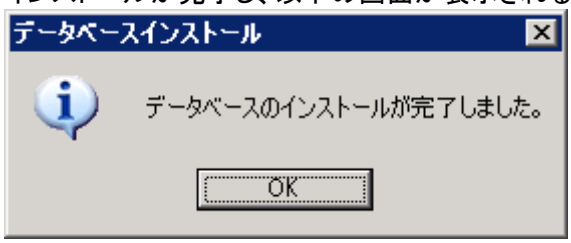
(10)続いて「データベースインストール」画画が表示されるので、インストール先のフォルダを指定して、「OK」をクリックします。



(11)以下画面が表示され、インストールが開始されるので、しばらくお待ちください。



(12)インストールが完了し、以下の画面が表示されるので、「OK」をクリックします。



(13)(1)で停止したサービスを開始してください。

以上でデータベースの上書きインストールは完了です。

ヒント

- 以下のいずれかのサービスが起動している場合は、管理サーバ for DPM に必要なポートが自動的に開放されます。(開放されるポートについては、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。)
  - ・Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)
  - ・Windows Firewall
- データベースの上書きインストールが完了した後に、SQL Server 2005 Express Edition のサービスパックを適用する場合は、製品サイト(以下)に掲載の資料を参照してください。
  製品サイト(http://www.nec.co.jp/middle/WebSAM/products/deploy_win/)
  →「動作環境」を選択
  →「データベース(DPM インスタンス)への Service Pack 適用手順」

22.3　管理サーバ for DPMの上書きインストール

■ 管理サーバ for DPM の上書きインストールについて説明します。

■ バージョンにより上書きインストールの手順が異なります。
ご使用のバージョンが DPM　Ver2.0、Ver2.1 の場合は、本編「22.3.1　DPM　Ver2.0/Ver2.1 からの上書きインストール」を、ご使用のバージョンが DPM　Ver3.0 以上の場合は、本編「22.3.2　DPM　Ver3.0 以降からの上書きインストール」を参照してください。

22.3.1　DPM Ver2.0/Ver2.1 からの上書きインストール

ヒント　本章は、EE/SE 製品向けの内容となります。

■ 管理サーバに登録されているコンピュータ情報を「コンピュータ情報インポート/エクスポート」機能を使って移行することができます。以下の手順に従って処理をすすめてください。

(1) メインウィンドウ画面から「ファイル」→「コンピュータ情報インポート/エクスポート」を選択し、登録されているコンピュータ情報をエクスポートします。

(2) メインウィンドウ画面のツリービューに登録されているグループ名をメモなどに記載します。

(3) DPM に関する処理を終了します。

(4) お持ちのバージョンのユーザーズガイドに記載されているアンインストール手順に従って、管理サーバをアンインストールしてください。

(5) 「ユーザーズガイド　導入編　2.3　管理サーバ for DPM のインストール」の手順に従って、管理サーバをインストールしてください。

(6) ライセンスキーを登録します。登録方法については「ユーザーズガイド　導入編　3.2　ライセンスキーの登録」を参照してください。

(7) (2)でメモしたグループなどを登録しなおします。グループの登録方法については「ユーザーズガイド　導入編　4.　管理サーバ　for DPM にコンピュータを登録するまで」を参照してください。

注意　登録するグループに不足または名称が違う場合は(8)でエラーとなる場合があります。

(8) メインウィンドウ画面の「管理サーバ」メニューから「コンピュータ情報インポート」から(1)でエクスポートしたコンピュータ情報をインポートします。コンピュータ情報インポートについては、「ユーザーズガイド　応用編　1.1　コンピュータ情報インポート」を参照してください。

22.3.2　DPM Ver3.0 以降からの上書きインストール

重要

EE/SE 製品について、旧バージョンからアップグレードを行う場合には、アップグレード後に本バージョン用のライセンスキーを登録する必要があります。登録しない場合は、DPM をお使いいただけません。
（SSC 向け製品については、SigmaSystemCenter インストレーションガイドを参照してください。）

■ DPM　Ver3.0 以降からの上書きインストール

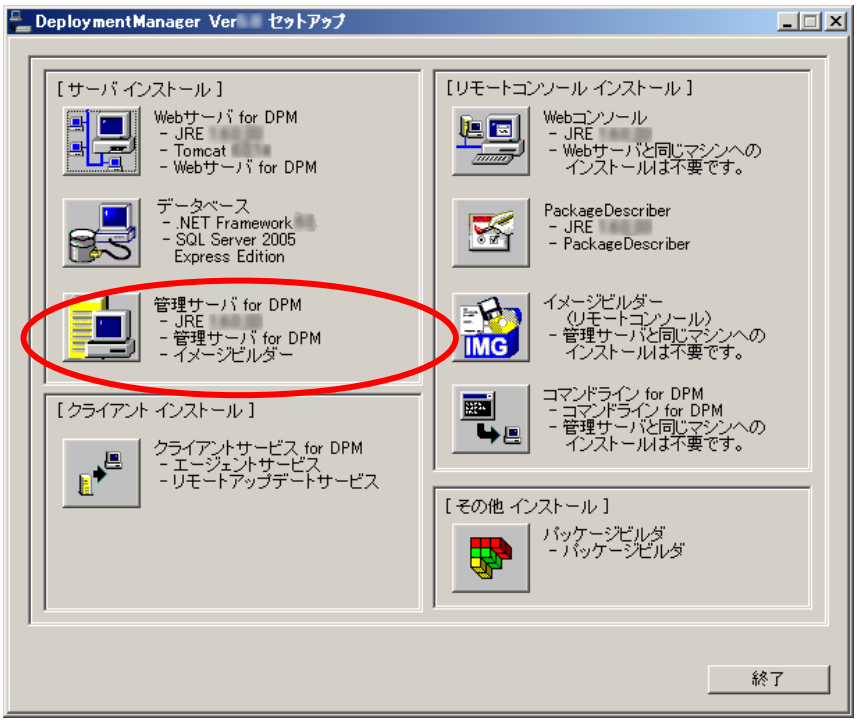
注意

- ■ DPM Ver3.8/4.0/4.1/4.2/4.3 から上書きインストールする場合は、「ユーザーズガイド 導入編 1.12 常駐サービスについて」の「■管理サーバ for DPM」に記載のサービスを全て停止してください。（サービスが停止しない場合は、Windows タスクマネージャから、該当するプロセスを終了してください。）
- ■ DPM Ver5.0 より前のバージョンから本バージョンに上書きインストールする場合は、管理サーバ for DPM の上書きインストールを行う前に必ず「ユーザーズガイド 導入編 2.2 データベースのインストール」を参照して、データベースのインストールを行ってください。

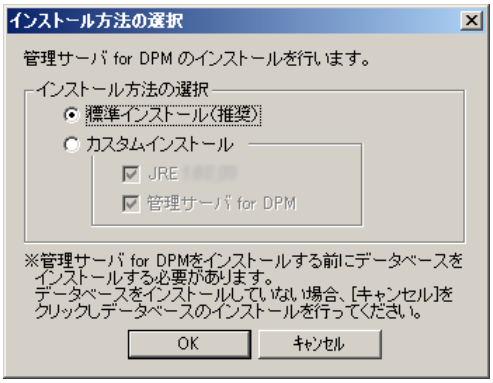
ヒント

- ■ 以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。
- ■ 本バージョンで、使用する予定のないサービスパック/HotFix/アプリケーションは事前に削除してください。
- ■ Windows Installer 3.0 以上がインストールされていることを確認してください。インストールされていない場合はインストールしてください。
  Windows Installer3.1 は以下に格納されています。
  （インストール CD-ROM）:¥dotNet Framework35 SP1¥WindowsInstaller-KB893803-v2-x86.exe

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「管理サーバ for DPM」を選択します。



(2) 「インストール方法の選択」画面が表示されます。標準インストールを選択し「OK」をクリックしてください。「キャンセル」をクリックすると「DeploymentManager セットアップ」画面に戻ります。
JRE が既にインストールされている環境であれば(Web サーバと同じコンピュータにインストールする場合など)「カスタムインストール」を選択し JRE のチェックを外して「OK」をクリックしてください。

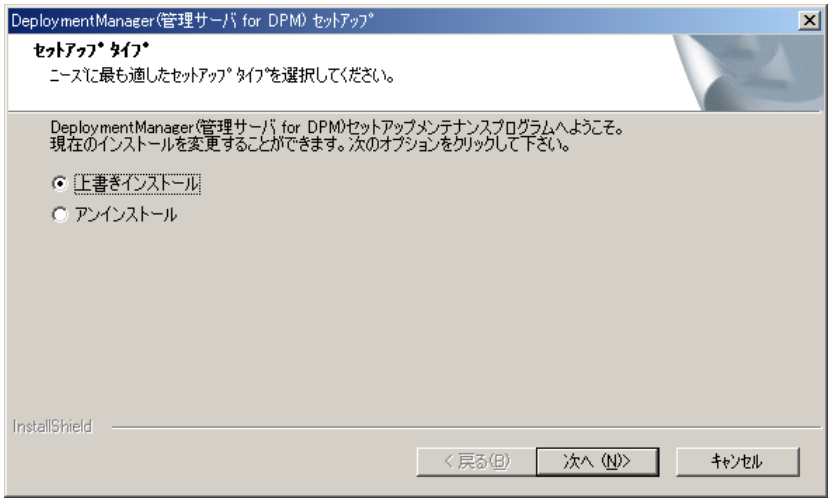


(3) 以降に表示されるメッセージは選択した項目により順序が異なります。(チェックをした項目内で上から順番にインストールされます。)ここでは標準上書きインストールの説明を行います。

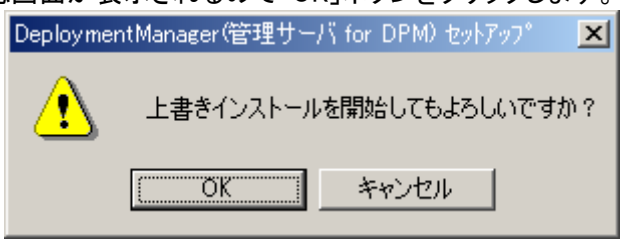
(4) 「確認」画面が表示されますので「はい」をクリックします。

(5) JRE のインストールが開始しますので、しばらくお待ちください。

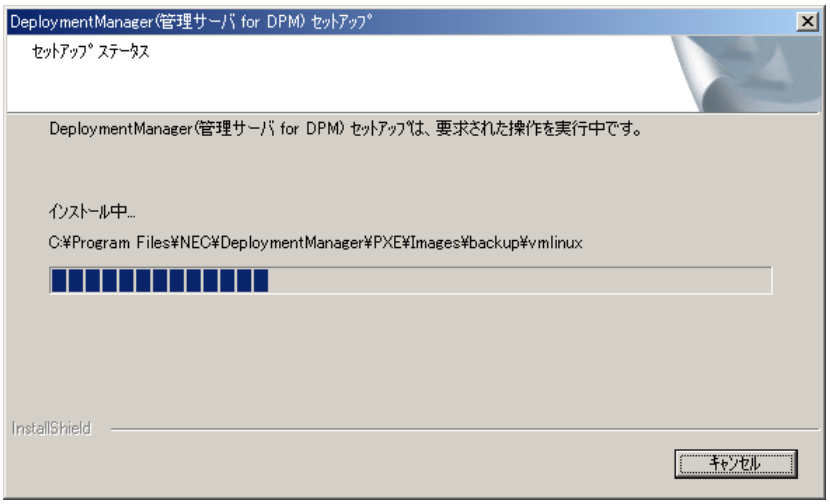
(6) 「セットアップタイプ」画面が表示されますので「上書きインストール」にチェックを入れ、「次へ」ボタンをクリックします。



(7) 確認画面が表示されるので「OK」ボタンをクリックします。



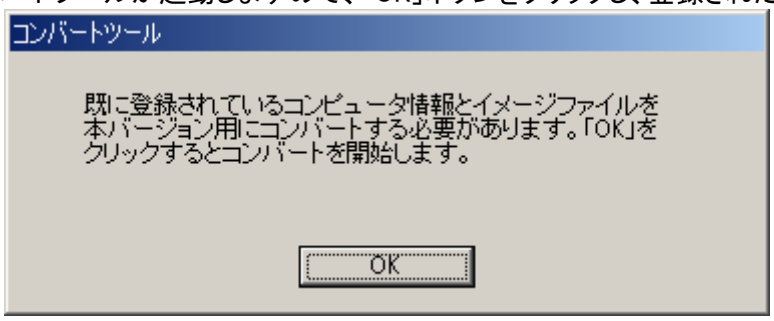
(8) 「セットアップステータス」画面が表示されインストールが開始されます。



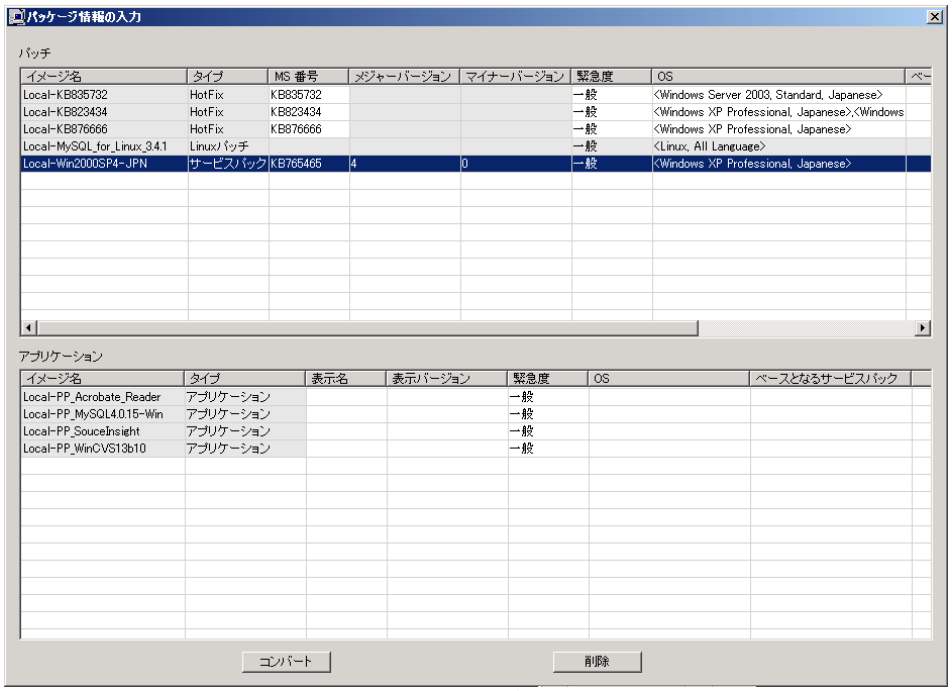
ヒント

ご使用のバージョンが DPM4.0 以降の場合は、(9)から(11)の画面が表示されません。
以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

(9) インストールの途中でコンピュータ情報とイメージファイル(サービスパック/HotFix、アプリケーション)のコンバートツールが起動しますので、「OK」ボタンをクリックし、登録されたコンピュータ情報をコンバートします。



(10)イメージをコンバートする画面が表示されます。この画面で各イメージに関する情報を入力します。



※ 背景色がグレーで表示されたフィールドは入力できません。

重要

「パッケージ情報の入力」画面において、[×]ボタン等で終了した場合には本バージョンのパッケージとして使用することができません。万が一終了した場合には、C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥UpdPack.exe を実行することによりコンバートツールを起動して、以降の設定に従って必ずコンバートを行ってください。

■ イメージ名

イメージファイルの名前を表示します。イメージ名は変更できません。

注意

- HotFix/サービスパックのイメージをコンバートする時、イメージファイル名の前に「Local-」が自動的に付けられます。イメージ名が54バイトを超える文字数を使用していた場合は54バイトまでしか表示されず、「Local-+54バイトのファイル名+001」に変更されます。
- アプリケーションのイメージを本バージョンへコンバートする時、イメージファイル名の前に「Local-PP_」が自動的に付けられます。イメージ名が51バイトを超える文字数を使用していた場合は51バイトまでしか表示されず、「Local-PP_+51バイトのファイル名+001」に変更されます。
- イメージの実行ファイル名及びパスにスペースが含まれている場合、本バージョンへ正しくコンバートできません。イメージビルダーの「登録データの削除」機能を利用してパッケージを削除後、再度登録ください。
- イメージ名に下記文字が含まれている場合、自動的に"_"に変換します。
  「¥」、「/」、「:」、「*」、「?」、「"」、「<」、「>」、「|」、「'」、スペース
  変換されたイメージ名がすでに存在する場合、コンバートツールでは変更されないため、本バージョンで再度登録してください。
- コンバート後のイメージ名は、大文字小文字が区別されません。
  変換前のイメージ名が「abc」と「ABC」などのように大文字小文字の区別なしで同じ名前であった場合、コンバートツールの表示で下にある方のイメージはコンバートされませんので、本バージョンで再登録してください。

■ タイプ

パッケージタイプを表します。タイプの変更はできません。
上の表にパッチが表示されます。パッチは三種類あります。

- サービスパック : Windows サービスパックの場合、指定します。
- HotFix : Windows のアップデートの場合、指定します。
- Linux パッチ : Linux のアップデートの場合、指定します。

下の表にアプリケーションが表示されます。イメージタイプは固定です。

- アプリケーション

■ MS 番号

Microsoft 社が発行するサービスパックや HotFix にあらかじめ付けられている MS(Q、KB)番号を入力します。31 バイト以内で入力します。省略可能です。

■ メジャーバージョン、マイナーバージョン

作成するパッケージがサービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンの入力が必要です。入力できる値は以下になります。

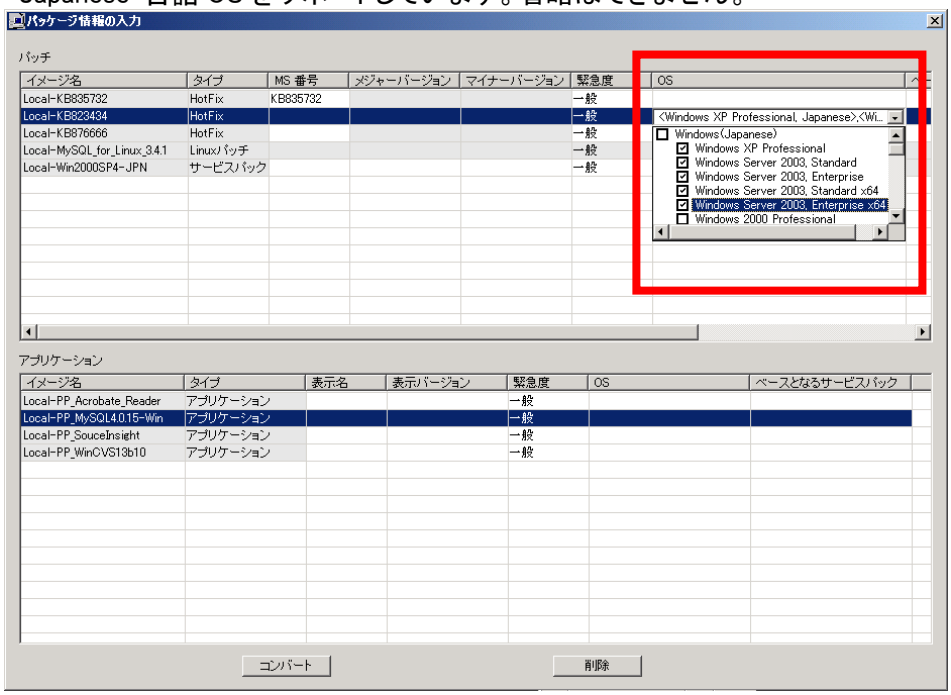
有効値:
メジャーバージョン:0～65535
マイナーバージョン:0～65535

重要

自動更新を行う場合、サービスパックの場合は「メジャーバージョンとマイナーバージョン」を、HotFix の場合は「MS 番号」を「KB」または「Q」番号を含め必ず入力してください。

■ 緊急度
作成するパッケージ情報ファイルの緊急度を選択します。デフォルトは、空白です。

■ OS
パッケージを適用する OS を選択します。デフォルトは、「All Language、All OS」です。
"Japanese"言語 OS をサポートしています。省略はできません。



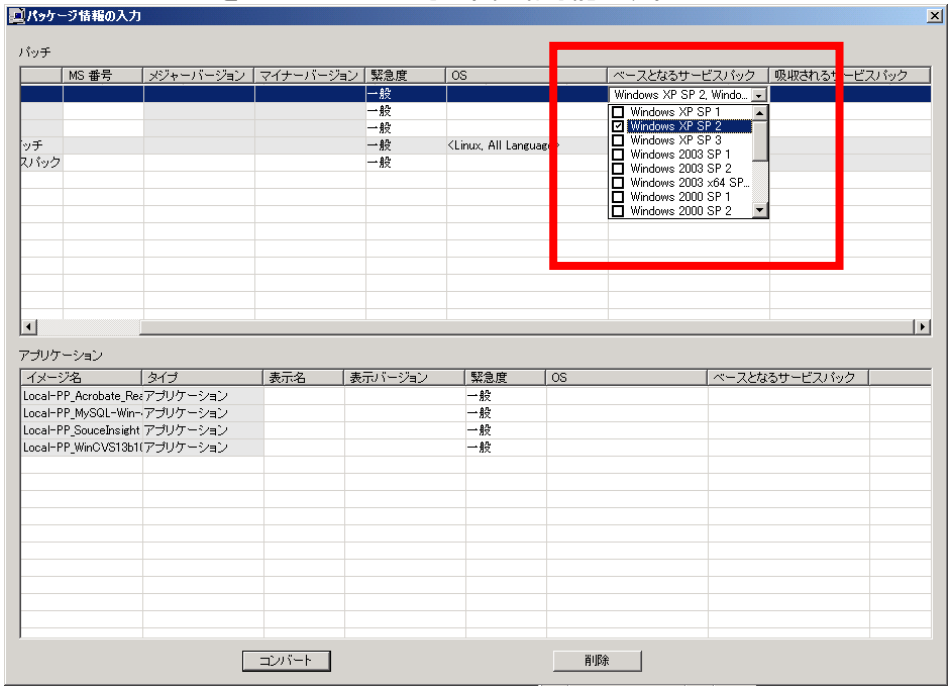
重要

■ 自動更新を行う場合は、緊急度を「最高」または「高」にしてください。
■ OS情報は、そのパッチがサポートしているOSを正しく入力してください。複数OSをサポートする場合、各OS名の左側のチェックボックスをチェックしてください。

ヒント

■ OS を選択する際は、OS 名が全部表示されるように列の幅を調整してください。

■　ベースとなるサービスパック
HotFix　やアプリケーションが適用できる前提となるサービスパックを選択します。サービスパック名左側のチェックボックスをチェックしてください。省略可能です。



■　吸収されるサービスパック
省略可能です。

例）　SP4 の適用された Windows2000 のコンピュータがある場合、「ベースとなるサービスパック」に SP4 を、「吸収されるサービスパック」に SP5 を入力しておきます。これにより【SP4 が適用されていて、SP5 は未適用のコンピュータに適用】という条件になります。

■　表示名、表示バージョン
アプリケーションが Windows にインストールされた後に、レジストリの中に保存された情報です。
省略可能です。

重要

■　アプリケーションを自動更新で適用する場合、緊急度を「高」、または「最高」に指定し、表示名、表示バージョンを正しく入力してください。表示バージョンがない場合は省略できます。表示名、表示バージョンを入力しない場合、識別情報を入力してください。表示名、表示バージョン、識別情報を入力しない場合、緊急度を「高」以上に設定しても自動更新の対象になりません。
■　OS情報は、そのアプリケーションがサポートしているOSを正しく入力してください。

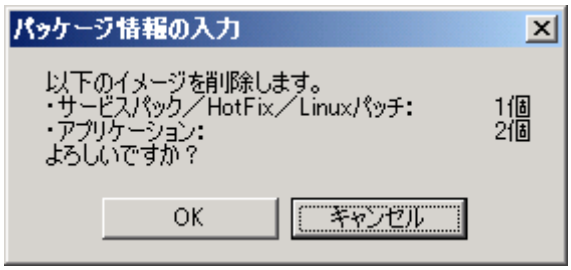
■　「コンバート」
イメージファイルのコンバートを開始します。

注意

本バージョンより前のバージョンで登録したイメージをコンバートしない場合、本バージョンでは利用できません。

■ 「削除」

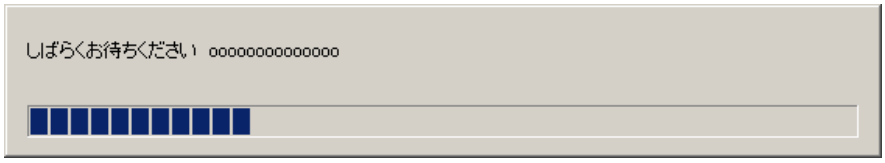
イメージを選択し、「削除」をクリックすると確認画面が表示されます。



「OK」をクリックすると、パッチとアプリケーションを削除します。
複数選択すると、まとめて削除できます。

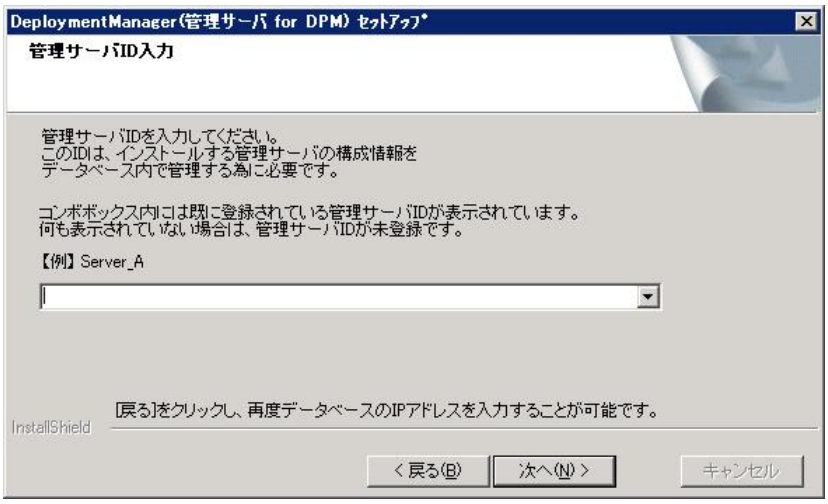
重要 シナリオに使用されているイメージは削除しないでください。シナリオファイルが不正になり、正常にシナリオ実行できなくなる可能性があります。

(11)「コンバート」をクリックし、本バージョンへコンバートします。



(12)以下の画面が表示されますので、データベースサーバの IP アドレスを入力して、「次へ」ボタンをクリックしてください。

(13)以下の画面が表示されますので、任意の ID を入力し、「次へ」ボタンをクリックします。



(14)以下の画面が表示されますので、「OK」をクリックします。

＜DPM コンバートツール＞

■ コンバートツールとは、DPM Ver3.8 より前のバージョンの DPM で作成したパラメータファイルを、本バージョンでも使用できるようにするツールです。

■ コンバートが必要な OS は、以下の OS です。

- Windows Server 2003 Standard Edition
- Windows Server 2003 Enterprise Edition
- Windows Server 2003 R2 Standard Edition
- Windows Server 2003 R2 Enterprise Edition
- Windows XP Professional

■ 旧バージョンのバックアップ CD-ROM はご利用いただけませんので、「ユーザーズガイド 応用編 付録 3.2 新バージョンのバックアップ CD-ROM の入手」を参照し、新しいバージョンのバックアップ CD-ROM を入手してください。

■ 旧バージョンのバックアップ CD-ROM の判別方法について
バックアップ CD-ROM の CD レーベルを確認してください。CD レーベルの右下に以下のような ID が記載されています。

例）＜ ID : 999-999999-999-**A** ＞

右端のアルファベットを確認し、「A」または「B」であった場合は、旧バージョンのバックアップ CD-ROM になります。

■ 新しいバックアップ CD-ROM 入手後に必要な処理について
管理サーバで以下の処理を行ってください。

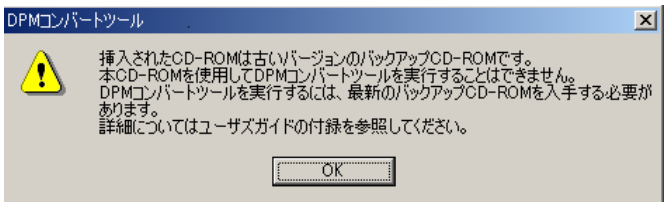
- DPM コンバートツールの実行
  （詳細は、「ユーザーズガイド 応用編 付録 3. DPM コンバートツールのご使用について」を参照してください。）
- OS の再登録

(15)「DPM コンバートツール」が起動しますので「OK」をクリックします。旧バージョンで OS のイメージを作成している場合は、画面に表示される手順に従って作業を進めてください。

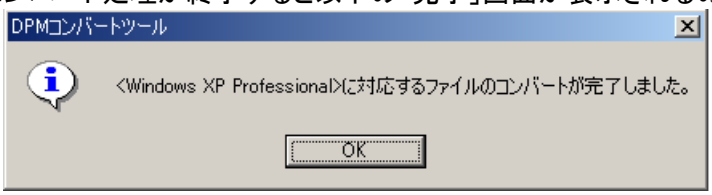
(16)ご使用のバックアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、「OK」をクリックします。
ご使用のバックアップ CD-ROM のバージョンが古い場合は、「キャンセル」をクリックし処理を終了した後に「ユーザーズガイド 応用編 付録 3.2 新バージョンのバックアップ CD-ROM の入手」を参照してください。

ヒント

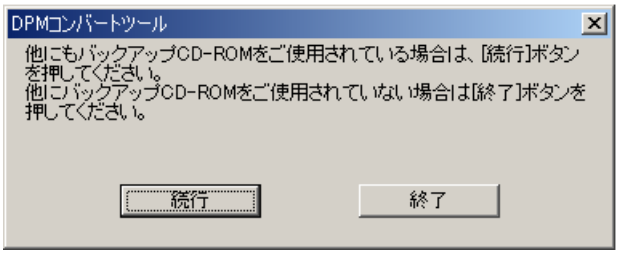
ご使用のバックアップ CD-ROM のバージョンが古い場合、以下のメッセージが表示されます。「ユーザーズガイド 応用編 付録 3.2 新バージョンのバックアップ CD-ROM の入手」を参照し、新しいバージョンのバックアップ CD-ROM を入手してください。



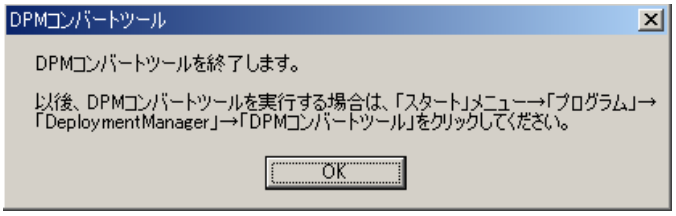
(17)コンバート処理が終了すると以下の「完了」画面が表示されるので、「OK」をクリックします。



(18)他にもバックアップ CD-ROM がある場合は、「続行」をクリックし、(17)の画面から処理を繰り返してください。
終了する場合は「終了」をクリックします。



(19)「DPM コンバートツールの終了」画面が表示されますので、「OK」をクリックします。



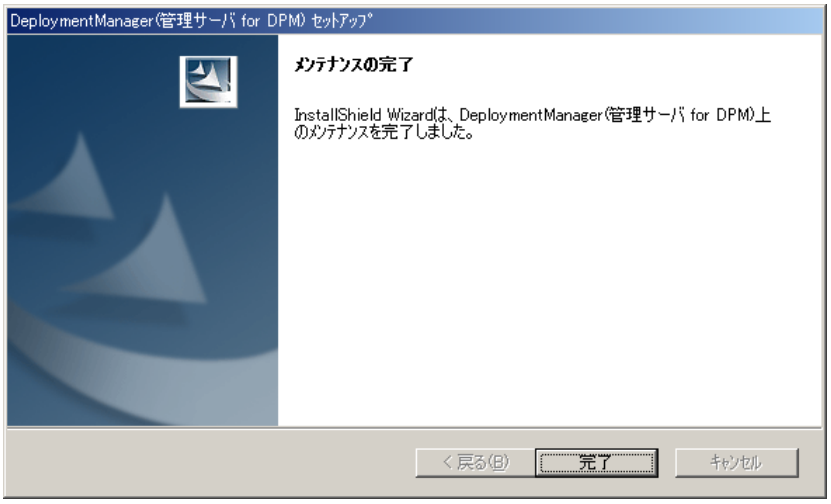
(20)バックアップ CD-ROM を取り出し、再度インストール CD-ROM を挿入してください。

注意

以下のエラーメッセージが表示された場合、インストール CD-ROM をドライブ E: に挿入し、[再実行]してください。

(21)以下の画面が表示されますので、「OK」をクリックします。

(22)「メンテナンスの完了」画面が表示されますので「完了」をクリックします。



(23)インストール完了後、Java Plug-in の設定を行います。本編「22.1 Web サーバ for DPM の上書きインストール」の「■ DPM Ver5.0 以降の Web サーバ for DPM の上書きインストール手順」(14)から(20)を参照して設定を行ってください。

ヒント

以下のいずれかのサービスが起動している場合は、管理サーバ for DPM に必要なポートが自動的に開放されます。(開放されるポートについては、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。)

・Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)
・Windows Firewall

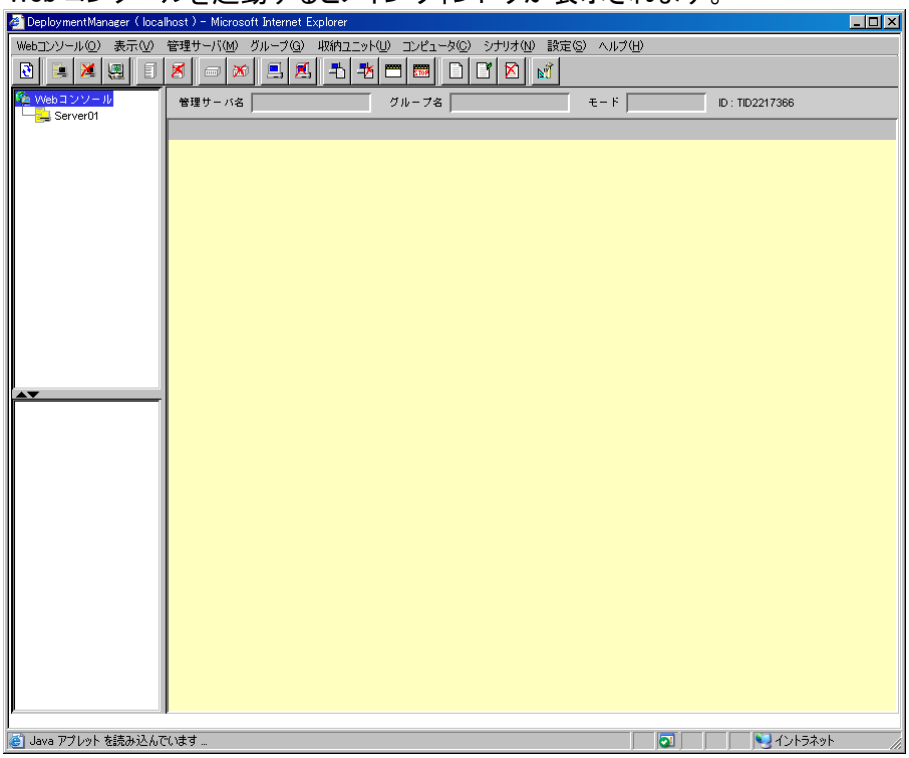
以上で管理サーバ for DPM の上書きインストールは完了です。

重要

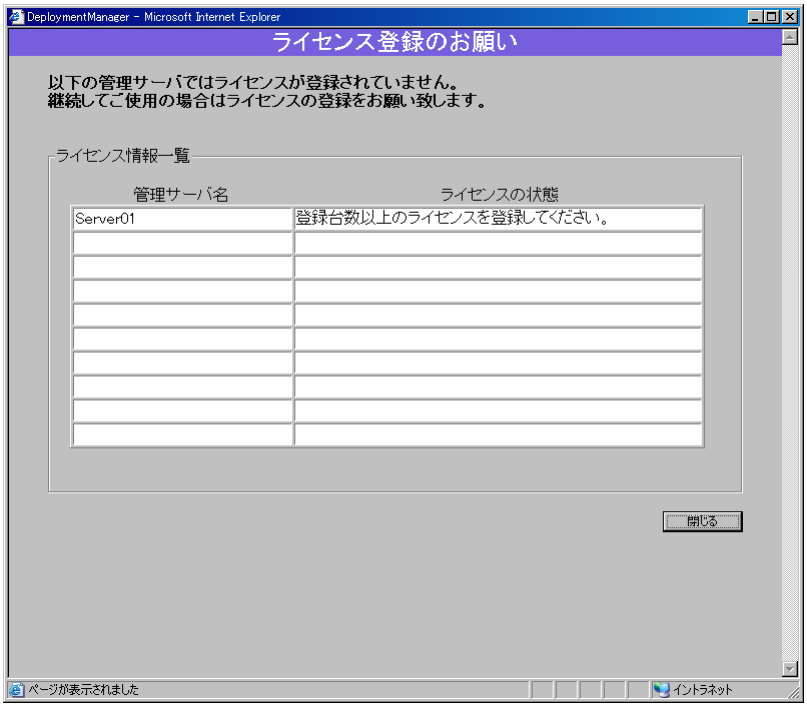
EE/SE 製品について、旧バージョンからアップグレードを行う場合には、アップグレード後に本バージョン用のライセンスキーを登録する必要があります。登録しない場合は、DPM をお使いいただけません。
（SSC 向け製品については、SigmaSystemCenter インストレーションガイドを参照してください。）

アップグレード後には以下の手順で、ライセンスキーを追加してください。

(1) Web コンソールを起動するとメインウィンドウが表示されます。



(2)続けて「ライセンス登録のお願い」画面が表示されるので、表示内容を確認後、[閉じる]ボタンをクリックします。



(3)ツリービューで管理サーバを選択し、右クリックメニュー「ライセンス登録」を選択すると、「ライセンスキー登録情報」画面が表示されます。前バージョンで登録したライセンスキーはライセンス名称が「0License」と表示されます。

(4)本バージョン用のライセンスキーを追加します。前バージョンで登録したライセンスキーは削除してください。削除しない場合でも動作には問題ありません。ライセンスキーの追加と削除については、本編「14. ライセンスキー」を参照してください。

22.4 Webコンソールの上書きインストール

■ Web コンソールの上書きインストールについて説明します。

■ DPM Ver2.0/Ver2.1 からの上書きインストール

DPM Ver2.0/Ver2.1 には Web サーバの機能が存在しません。新規インストールのみになります。

重要

Web コンソールをインストールしたコンピュータに他のバージョンの JRE を上書きインストールすると、インストールした JRE のバージョンによっては画面表示が不正となり、Web コンソールとして使用することができなくなる場合があります。
その場合は再度 Web コンソールの上書きインストールを行ってください。

注意

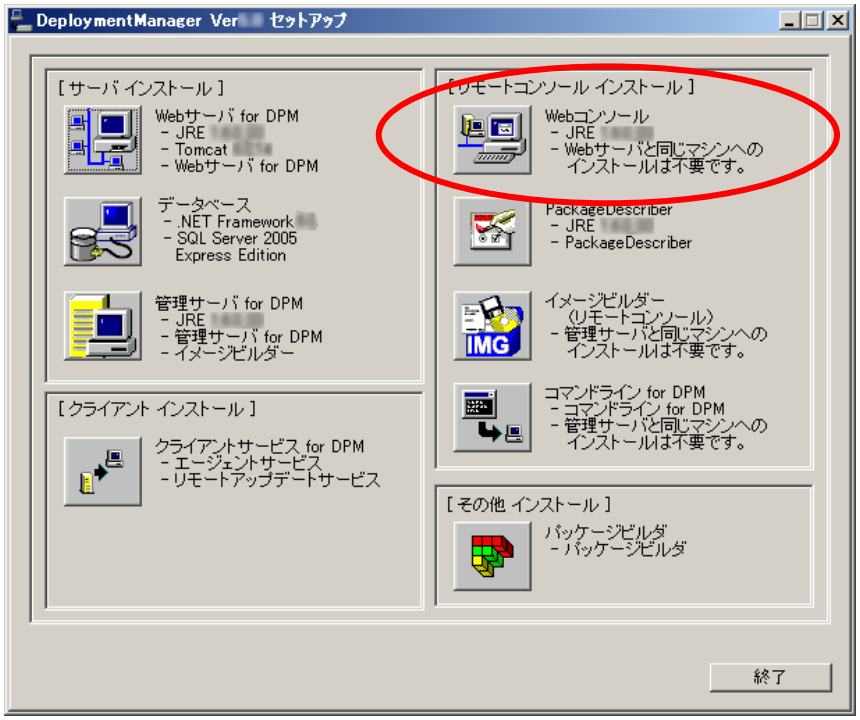
DPM Ver2.0/Ver2.1 からの上書きインストールは、EE/SE 製品向けの内容となります。

■ インストーラの「Web コンソール」から上書きインストールを行う手順について説明します。

ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「Web コンソール」を選択します。



注意

Windows Vista で UAC を有効に設定している環境に Web コンソールを上書きインストールする場合は、必ず以下の手順を行ってください。

(1)上記の「DeploymentManager セットアップ」画面で、「終了」ボタンをクリックします。

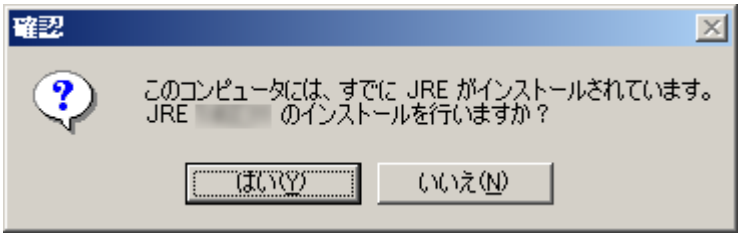
(2)エクスプローラなどから以下ファイルを右クリックして、「管理者として実行」を選択します。

・SSC 向け製品の場合 :(インストール CD-ROM):¥DPM¥Launch.exe

・EE/SE 製品の場合 :(インストール CD-ROM):¥Launch.exe

(3)再度「DeploymentManagerセットアップ」画面が起動しますので、「Webコンソール」を選択します。

(2) 「確認」画面が表示されますので「はい」ボタンをクリックしてください。



(3) 自動的に処理がすすみ「完了」画面が表示されたら「完了」ボタンをクリックします。

(4) JRE 6 Update 17 のインストール完了後、Java Plug-in の設定を行います。本編「22.1 Web サーバ for DPM の上書きインストール」の「■ DPM Ver5.0 以降の Web サーバ for DPM の上書きインストール手順」(14)から(20)を参照して設定を行ってください。

■ インストール CD-ROM 内のファイルを直接実行する上書きインストール手順について説明します。

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。インストーラが起動しますが、「終了」をクリックして画面を閉じてください。

(2) エクスプローラなどからインストール CD-ROM 内の以下のファイルを実行してください。

ヒント

SSC 向け製品の場合 :¥DPM¥Setup¥JRE¥jre-6u17-windows-i586.exe
EE/SE 製品の場合 :¥Setup¥JRE¥jre-6u17-windows-i586.exe

(3) JRE 6 Update 17 のインストーラが起動し、「保守開始」画面が表示されるので、前述のインストーラからの手順を参照して上書きインストールを行ってください。

以上で Web コンソールの上書きインストールは完了です。

22.5 クライアントサービス for DPMの上書きインストール

■ クライアントサービス for DPM の上書きインストールについて説明します。

ヒント

SSC 向け製品の場合、下記表を参照してご使用の BSC/ESC に含まれる DPM のバージョンに読み替えてください。

お使いいただいている DPM のバージョンにより、上書きインストールの方法が異なります。

DPM のバージョン	上書きインストール方法
1.0	自動アップグレードをサポートしていません。 「ユーザーズガイド 導入編 2.5 クライアントサービス for DPM のインストール」よりクライアントサービス for DPM をインストールしてください。
2.0、2.1	自動アップグレードをサポートしていません。 本編「22.5.2 シナリオによるクライアントサービス for DPM のアップグレード」よりクライアントサービス for DPM のアップグレード用のシナリオを実行してください。 また、本編「22.5.3 クライアントサービス for DPM の上書きインストール(IA32/EM64T 専用)」よりインストール CD-ROM からインストールすることも可能です。
3.0、3.1、3.8、4.0、4.1、4.2、4.3、5.0、5.1、5.2	自動アップグレードをサポートしています。詳細は、本編「22.5.1 クライアントサービス for DPM の自動アップグレード」をご覧ください。 また、本編「22.5.2 シナリオによるクライアントサービス for DPM アップグレード」、「22.5.3 クライアントサービス for DPM の上書きインストール(IA32/EM64T 専用)」よりアップグレードすることが可能です。

注意

DPM Ver4.0 より前のバージョンからアップグレードする場合は、アップグレード前に以下を行ってください。

・クライアントサービス for DPM(IA32/EM64T/IPF 版 Windows)

(1)以下のレジストリの「値のデータ」を「5000 (10 進)」に変更してください。

キー名:HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥depagent¥Parameters

名前 :DepCommTimeOut

(2)「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」から、DeploymentManager Agent Service を再起動してください。

・クライアントサービス for DPM(Linux)

(1)クライアントサービス for DPM をインストールしているコンピュータに、root アカウントでログオンします。

(2)以下のファイルをテキストエディタ等で開きます。

また、以下ファイルは、事前にバックアップを取っておくことを推奨します。

/usr/nec/dpm/agent/etc/server.inf

(3)「DepCommTimeOut」を「5000」に変更してください。

例)

[変更前]

DepCommTimeOut=1000

[変更後]

DepCommTimeOut=5000

(4)以下コマンドを実行してください。

service depagt restart

22.5.1 クライアントサービス for DPMの自動アップグレード

■ クライアントサービスfor DPMの自動アップグレードとは

すでにDPM Ver3.0以降のクライアントサービス for DPMがインストールされている場合、管理対象コンピュータ1台ずつに対して、本バージョンのクライアントサービス for DPMを再インストールすることは、非常に手間のかかる作業になります。

本バージョンでは、すでにDPM Ver 3.0以降のクライアントサービス for DPMがインストールされている場合、本バージョンへ自動的にアップグレードする機能をサポートしています。

自動アップグレードは、クライアントサービス for DPMをインストールしたコンピュータが起動するタイミングで実施されます。コンピュータの起動時にクライアントサービス for DPMが開始され、管理サーバと通信を行います。この際、クライアントサービス for DPMのバージョンが、管理サーバと異なっていた場合、自動アップグレードが実行されます。

重要

- アップグレードを行わない場合、サービスパック/HotFix、アプリケーションなどのシナリオが正常に動作できない場合があります。必ず管理サーバと同じバージョンにアップグレードしてください。
- Web コンソールの「設定」メニュー→「詳細設定」→「全般」タブで、「クライアントサービス for DPM を用いた運用を行う」にチェックを入れている場合は、クライアントサービス for DPM の自動アップグレードは実行されません。
- クライアントサービス for DPM 自動アップグレードが実行されると、DPM は内部的に持っている「System_AgentUpgrade_Unicast」、「System_LinuxAgentUpgrade_Unicast」または「System_WinCEAgentUpgrade_Unicast」シナリオを自動的に割り当てます。そのため別のシナリオが事前に割り当てられていた場合にはそのシナリオは解除されます。
  また自動アップグレード用のシナリオは実行後も割り当たったままの状態になりますので、解除されたシナリオがスケジュールを指定したシナリオなどで自動アップグレード後も必要な場合には再度シナリオ割り当てを行ってください。
  なお自動アップグレード用のシナリオを手動で実行することはできません。
- Linux クライアントにクライアントサービス for DPM の自動アップグレードが実行された場合、シナリオ開始から約 2 分間は別のシナリオを実行させないでください。

注意

- ご使用のクライアントサービス for DPMのバージョンが2.0、2.1の場合、自動アップグレードに失敗し、シナリオ実行一覧に以下のログが出力されますので、クライアントサービス for DPMのアップグレード用のシナリオを実行してください。
  ［種類］ ⇒ エラー発生
  ［シナリオ名］ ⇒ System_AgentUpgrade_Unicast.snr
- クライアントコンピュータ電源OFFからのシナリオ実行でコンピュータが起動された場合、自動アップグレードは行われません。
- 自動アップグレードは、「シナリオ実行」として扱いますので、「シナリオ実行一覧」へ実行結果が出力されます。
- 自動アップグレードは「シナリオ実行」として扱いますので、シナリオ中断は可能になりますが、実行時間が短いため、自動アップグレードの中断はできません。
- 自動アップグレード実行後のクライアントサービス for DPMの再起動は数十秒後に行われます。その間に他のシナリオを実行した場合は、シナリオ実行エラーになる場合があります。
- この手順はDPM Ver3.0以降のクライアントサービス for DPMを本バージョンへアップグレードする手順です。クライアントサービス for DPMがインストールされていない管理対象コンピュータに対し、新規にインストールすることはできません。
- 管理対象コンピュータのイベントログに以下のログが出力される場合がありますが、動作に問題はありません。
  DepAgent:Accept error code=10004
- 自動アップグレード中は、「シナリオ実行進行状況」画面を表示することはできません。
- 管理サーバのイベントログに以下のログが出力される場合があります。
  depssvc: Agent Upgrade Error MAC : Sts = (MACアドレス)
  これは何らかの原因により、表示されたターゲットに対するクライアントサービス for DPM の自動アップグレードが失敗したことを意味しています。
  このログが出力された場合はクライアントサービス for DPMのアップグレード用のシナリオを実行してください。

ヒント

■ 下記のように表示されれば、クライアントサービス for DPM のアップグレードは、成功です。

・Windows IA32 版の場合・・・「プログラムの追加と削除」の「DeploymentManager」の「システム情報」の Version が、「5.2.x.x」と表示。

・Windows IPF 版の場合・・・システムフォルダ¥DepAgent.exe のファイルプロパティの「バージョン情報」タブのファイルバージョンが、「5.2.x.x」と表示。

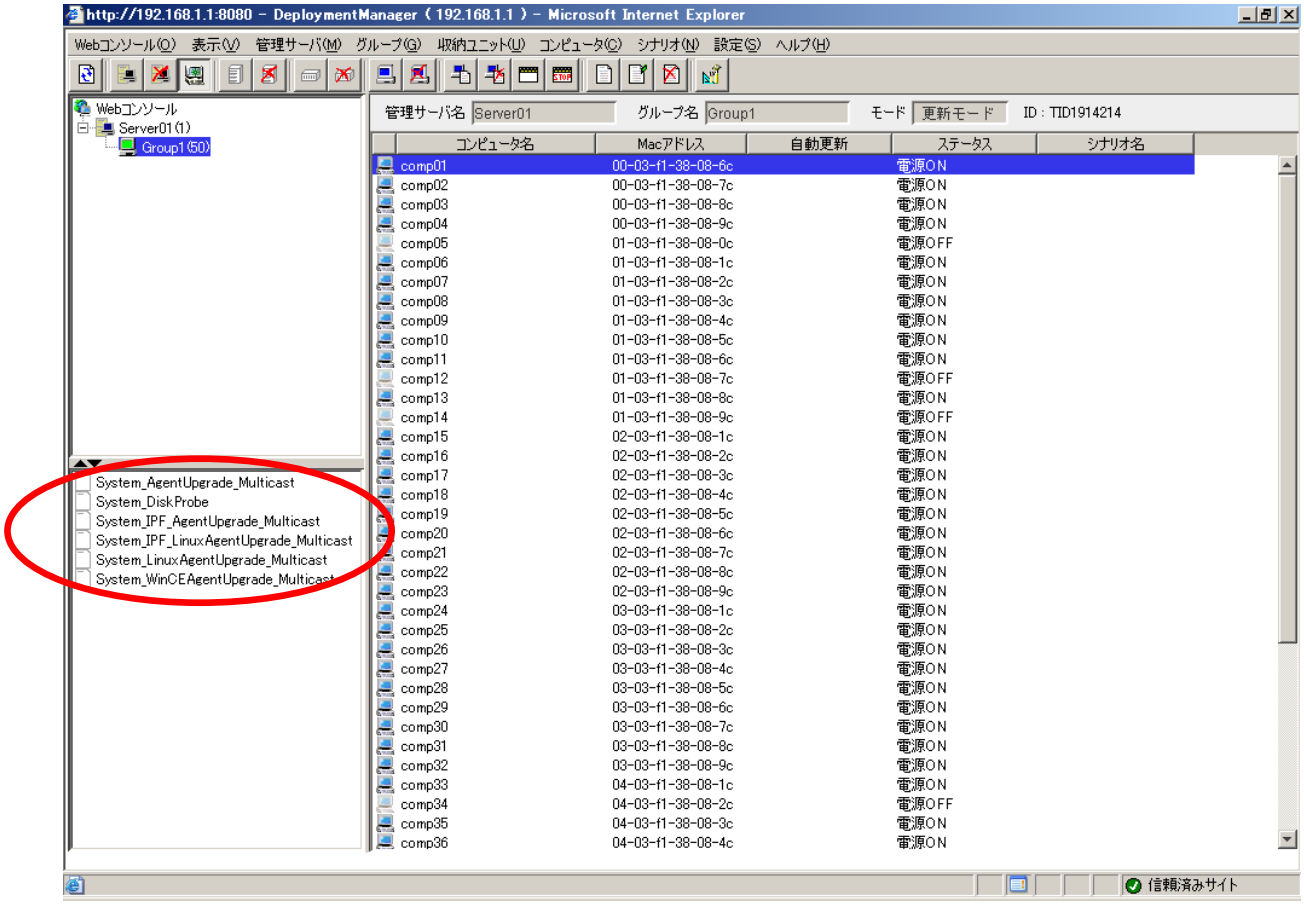
■ 以下のいずれかのサービスが起動している場合は、クライアントサービス for DPM に必要なポートが自動的に開放されます。（開放されるポートについては、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。）

・Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)

・Windows Firewall

22.5.2　シナリオによるクライアントサービス for DPMのアップグレード

■ シナリオによるクライアントサービス for DPM のアップグレードとは、
クライアントサービス for DPM の自動アップグレードとは別に、DPM Ver2.0 以降のクライアントサービス for DPM をアップグレードするシナリオをあらかじめ登録しています。このシナリオを実行することでクライアントサービス for DPM をアップグレードすることができます。



※ System_AgentUpgrade_Multicast は、Windows（IA32）用アップグレードシナリオです。
System_LinuxAgentUpgrade_Multicast は、Linux(IA32)用アップグレードシナリオです。
System_IPF_AgentUpgrade_Multicast は、(IPF) Windows 用アップグレードシナリオです。
System_IPF_LinuxAgentUpgrade_Multicast は、(IPF) Linux 用アップグレードシナリオです。
System_WinCEAgentUpgrade_Multicast は、（ARMv4i）NEC US110 用アップグレードシナリオです。
System_DiskProbe は、ディスク構成チェック用シナリオです。

注意

■ ご使用の環境にあわせて、「最大ターゲット数」、「最大待ち時間」を変更してお使いください。また、上記以外の項目を変更した場合、クライアントモジュールのアップグレードが行われない場合がありますのでご注意ください。特に実行タイミングの指定は必ず「配信後すぐに実行」で行ってください。

■ クライアントモジュールのアップグレードは、アップグレードのシナリオが完了した後に行われます。通常この処理には数十秒程度かかりますので、この間は別のシナリオを実行しないでください。

22.5.3　クライアントサービス for DPMの上書きインストール（IA32/EM64T専用）

■ クライアントサービス for DPM の上書きインストール（IA32/EM64T 専用）について説明します。
本章では、クライアントサービス for DPM（Windows）の上書きインストール方法について説明します。クライアントサービス for DPM(Linux)の上書きインストールは、新規インストールの場合と同じです。「ユーザーズガイド 導入編 2.5.3 クライアントサービス for DPM（Linux）」を参照してください。

ヒント
以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

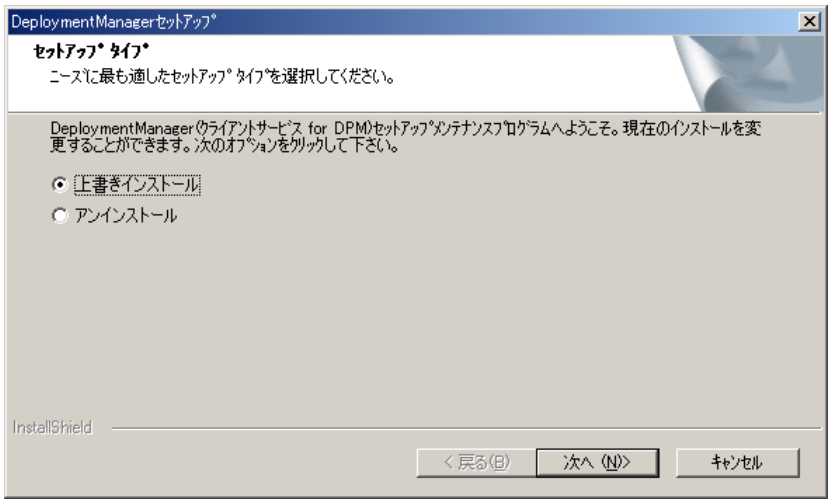
(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。
インストーラが起動した場合は、「終了」をクリックして画面を閉じてください。

(2) エクスプローラなどからインストール CD-ROM 内の以下のファイルを実行してください。

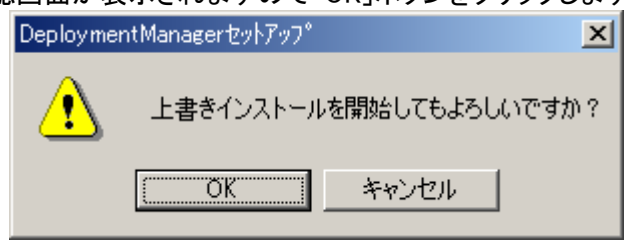
ヒント

SSC 向け製品の場合	:¥DPM¥TOOLS¥SERVICES¥IA32¥setup.exe
EE/SE 製品の場合	:¥TOOLS¥SERVICES¥IA32¥setup.exe

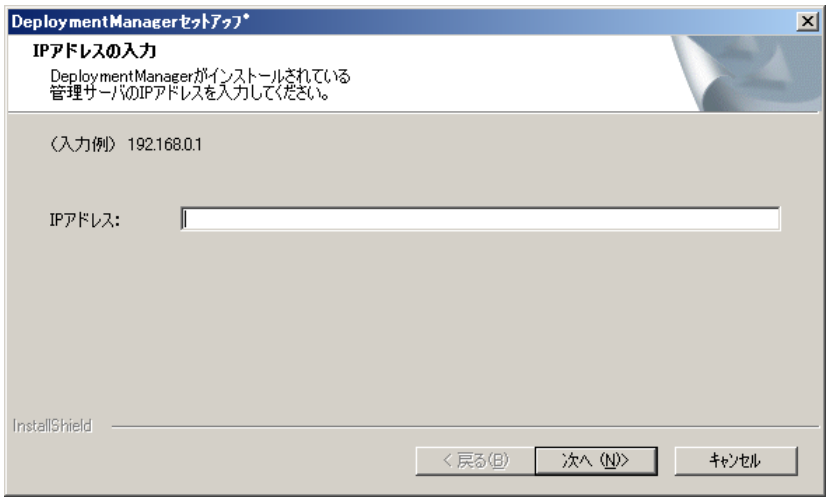
(3) 「セットアップタイプ」画面が表示されますので「上書きインストール」にチェックを入れて「次へ」をクリックします。



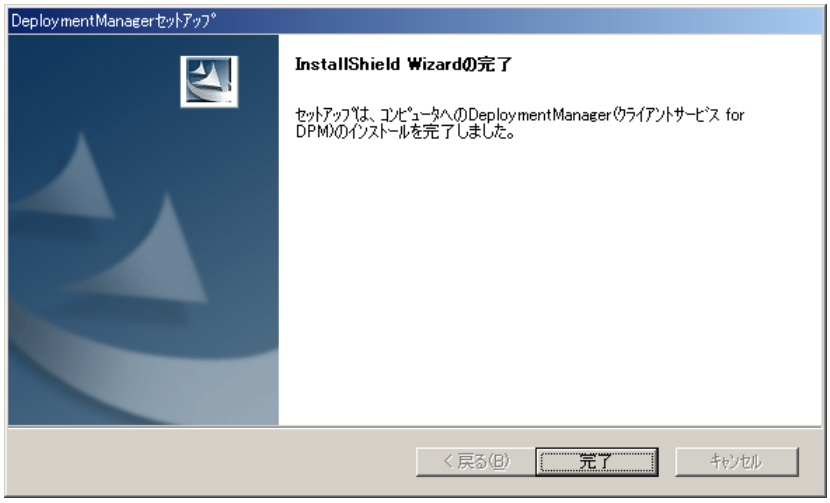
(4) 確認画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



(5) 「IP アドレス入力」画面が表示されるので DPM がインストールされた管理サーバの IP アドレスを入力して「次へ」をクリックします。



(6) 上書きインストールが開始され、「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」をクリックします。



注意

- インストール中の画面表示は OS によって多少違いがあります。
- 「プログラムの追加と削除」にはアプリケーションがインストールされているフォルダの容量が表示されます。クライアントサービス for DPM はシステムフォルダ配下にインストールされるため実際の容量より大きく表示されます。

ヒント

■ インストール CD-ROM 内の以下のフォルダ配下をコンピュータにコピーして setup.exe を実行し、クライアントサービス for DPM のインストールを行うことが可能です。
・SSC 向け製品の場合 :¥DPM¥TOOLS¥SERVICES¥IA32 フォルダ
・EE/SE 製品の場合 :¥TOOLS¥SERVICES¥IA32 フォルダ

■ 「管理サーバ IP アドレス」の入力や、インストール中のキー操作が一切不要なサイレントインストールを実行するには、「ユーザーズガイド 応用編 16.サイレントインストール」を参照してください。
以下のサービスが起動している場合は、クライアントサービス for DPM に必要なポートが自動的に開放されます。
(開放されるポートについては、「ユーザーズガイド 導入編 1.11 ネットワーク環境の設定について」を参照してください。)
・Windows Server 2003 の場合:Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)
・Windows Server 2008 の場合:Windows Firewall

以上で、クライアントサービス for DPM(IA32)の上書きインストールは完了です。

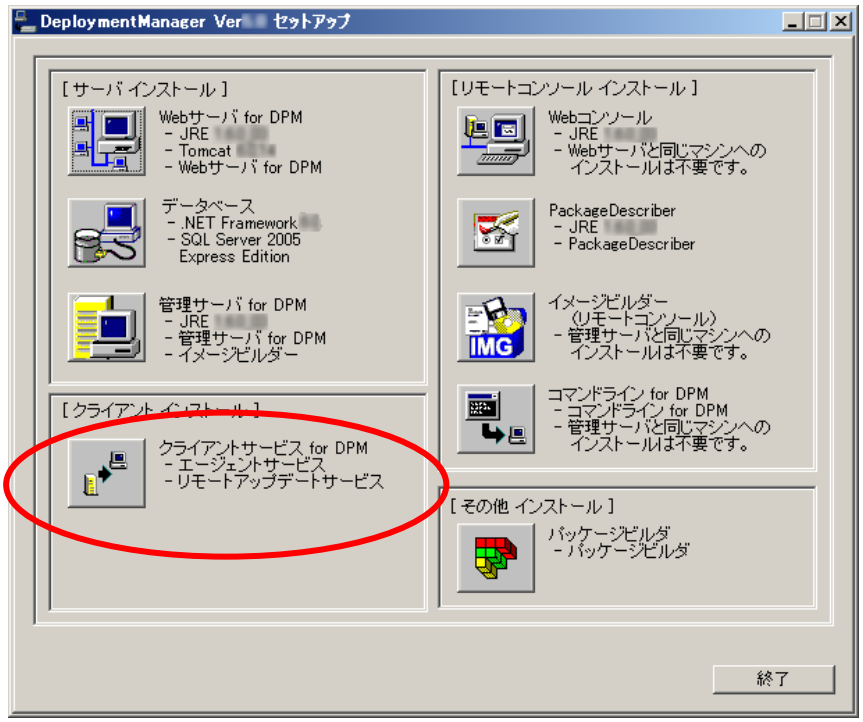
22.5.4 クライアントサービス for DPMの上書きインストール(IPF専用)

■ クライアントサービス for DPM(IPF)のインストール手順について説明します。
本章では、クライアントサービス for DPM(Windows)の上書きインストール方法について説明します。クライアントサービス for DPM(Linux)の上書きインストールは、新規インストールの場合と同じです。「ユーザーズガイド 導入編 2.5.3 クライアントサービス for DPM(Linux)」を参照してください。

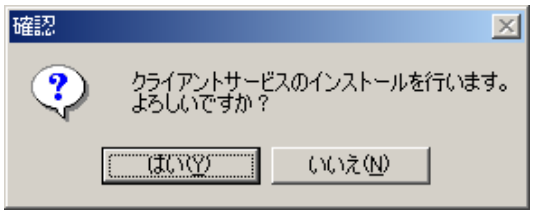
ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

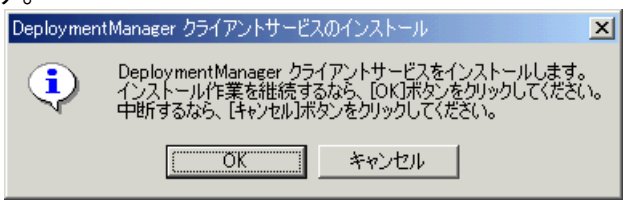
(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「クライアントサービス for DPM」を選択します。



(2) 「確認」画面が表示されますので「はい」ボタンをクリックします。

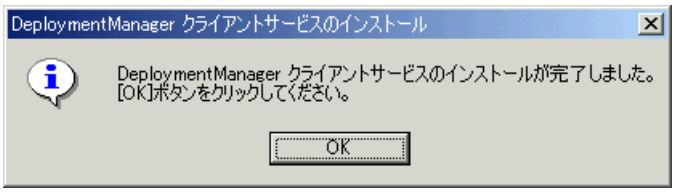


(3) 「DeploymentManager クライアントサービスのインストール」画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



(4) 以下の画面が表示されますので、DPM がインストールされた管理サーバの IP アドレスを入力し、「OK」ボタンをクリックします。

(5) インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



以上でクライアントサービス for DPM（IPF）の上書きインストールは完了です。

22.5.5 クライアントサービス for DPMの上書きインストール（NEC US110 専用）

■ NEC US110 は、DPM のインストーラによる上書きインストールはできません。上書きインストールが必要な場合は、クライアントサービス for DPM の自動アップグレード機能にて自動的に上書きされます。

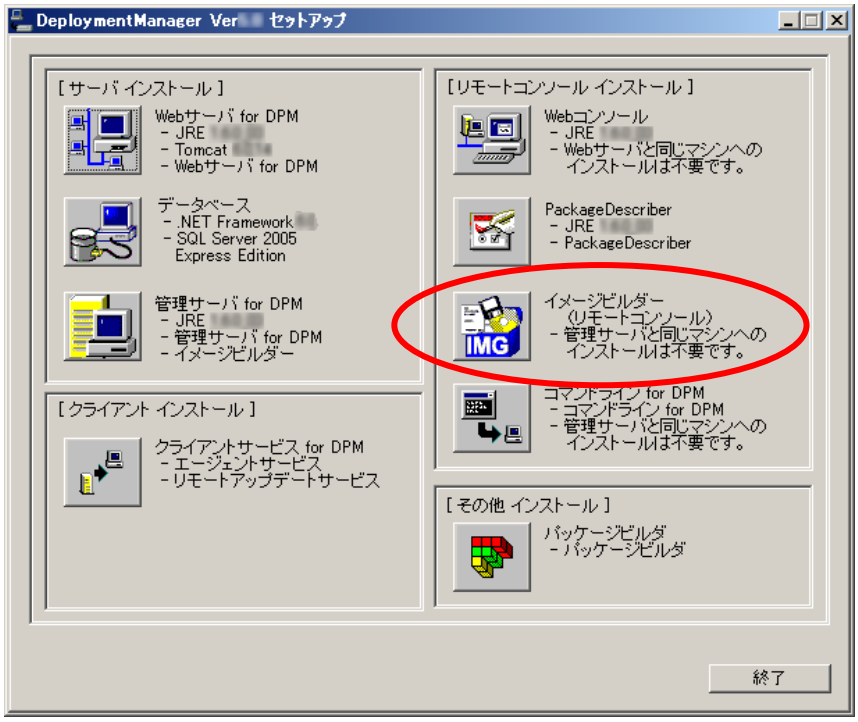
22.6　イメージビルダー（リモートコンソール）の上書きインストール

■　イメージビルダー（リモートコンソール）の上書きインストールについて説明します。

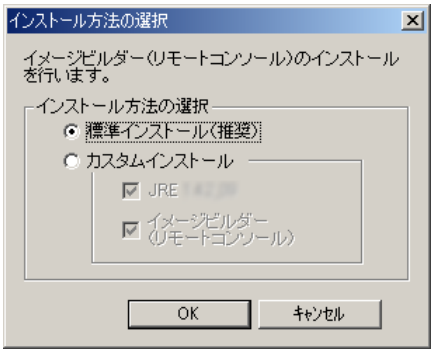
ヒント

以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

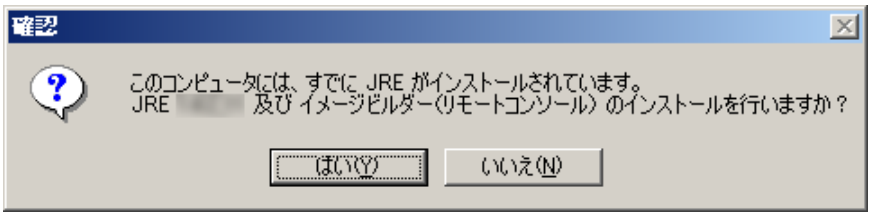
(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「イメージビルダー」を選択します。



(2) 「インストール方法の選択」画面が表示されます。標準インストールを選択し「OK」ボタンをクリックしてください。「キャンセル」ボタンをクリックすると「DeploymentManager セットアップ」画面に戻ります。
JRE が既にインストールされている環境であれば（Web サーバと同じコンピュータにインストールする場合など）「カスタムインストール」を選択し JRE のチェックを外して「OK」ボタンをクリックしてください。ここでは標準上書きインストールについて説明します。

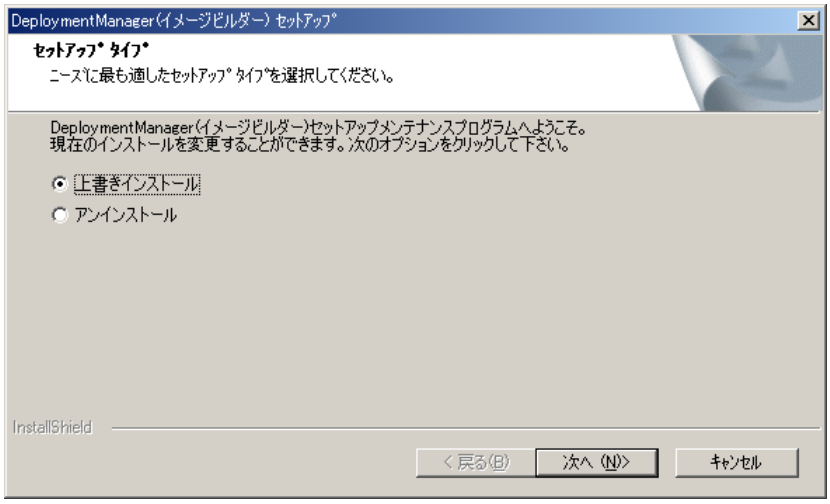


(3) 「確認」画面が表示されますので「はい」ボタンをクリックします。

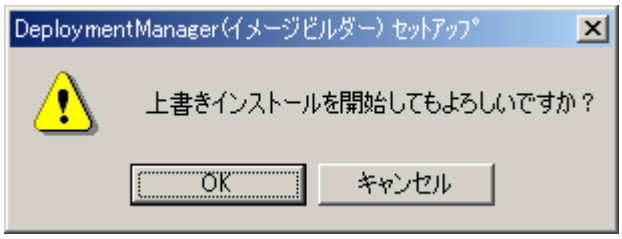


(4) JRE のインストールが開始しますので、しばらくお待ちください。

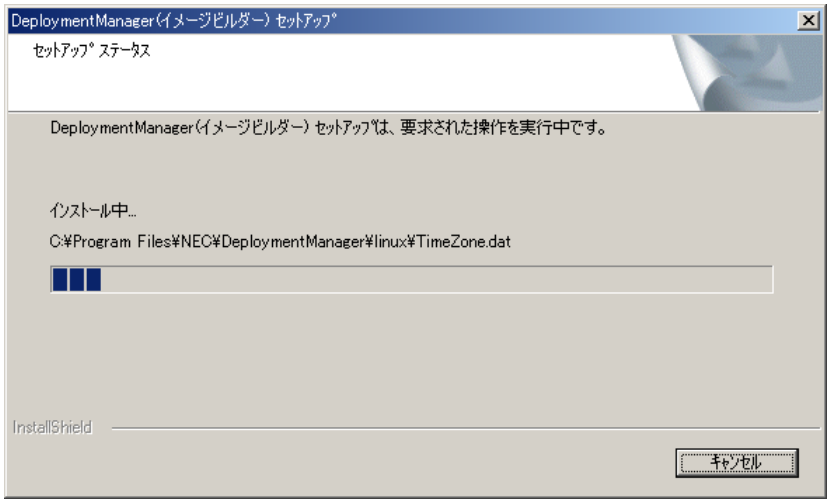
(5) 「セットアップ タイプ」画面が表示されますので「上書きインストール」にチェックを入れ「次へ」ボタンをクリックします。



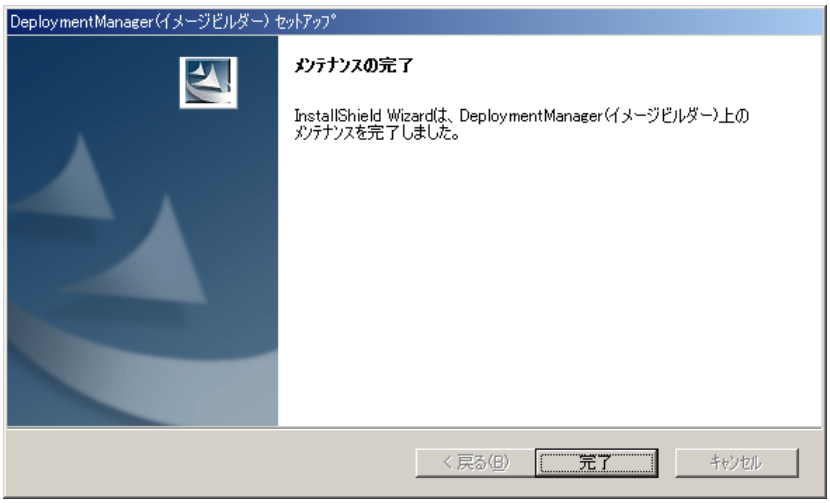
(6) 確認画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。



(7) 上書きインストールが開始されます。



(8) 「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



(9) インストール完了後、Java Plug-in の設定を行います。本編「22.1 Web サーバ for DPM の上書きインストール」の「■ DPM Ver5.0 以降の Web サーバ for DPM の上書きインストール手順」(14)から(20)を参照して設定を行ってください。

以上で「イメージビルダー(リモートコンソール)」の上書きインストールは完了です。

22.7 コマンドライン for DPMの上書きインストール

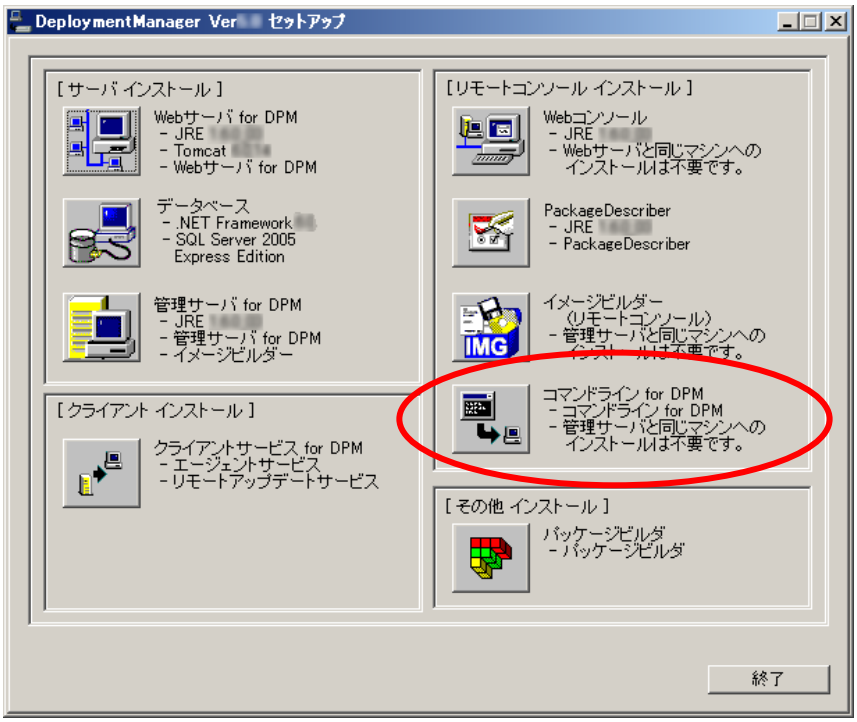
■ コマンドライン for DPM の上書きインストールについて説明します。

ヒント

■ 以降は、EE/SE 製品向けの手順となります。SSC 向け製品については、一部手順が異なりますので、SigmaSystemCenter インストレーションガイドも合わせて参照してください。

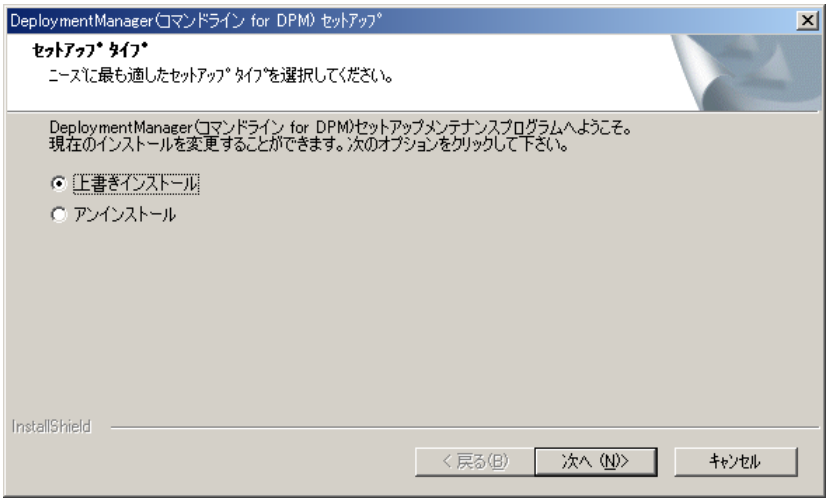
■ Windows Installer 3.0 以上がインストールされていることを確認してください。インストールされていない場合はインストールしてください。
Windows Installer3.1 は以下に格納されています。
(インストール CD-ROM):¥dotNet Framework35 SP1¥WindowsInstaller-KB893803-v2-x86.exe

(1) インストール CD-ROM を(CD-ROM)ドライブにセットします。「DeploymentManager セットアップ」画面が起動しますので「コマンドライン for DPM」を選択します。



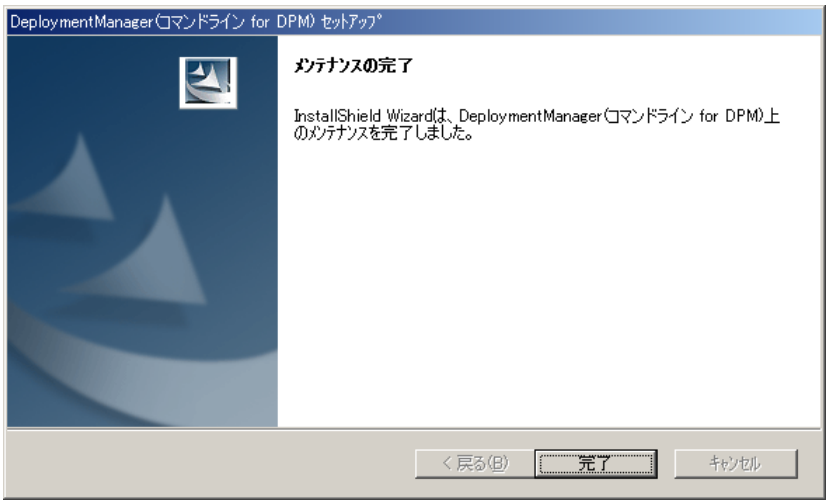
(2) 「確認」画面が表示されますので「はい」ボタンをクリックします。

(3) 「セットアップタイプ」画面が表示されますので「上書きインストール」にチェックを入れて「次へ」ボタンをクリックします。



(4) 確認画面が表示されますので「OK」ボタンをクリックします。

(5) 上書きインストールが開始され、「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



以上で「コマンドライン for DPM」の上書きインストールは完了です。

22.8 パッケージビルダの上書きインストール

■ パッケージビルダは、旧バージョンに同梱されていたものと同じため上書きインストールする必要はありません。